

長  
谷  
津  
遺  
跡

長 谷 津 遺 跡

(一)宇田磯部停車場線安中工区社会資本総合整備  
(市街地整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

(一)宇田磯部停車場線安中工区社会資本総合整備  
(市街地整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一三

群  
馬  
県  
安  
中  
土  
木  
事  
務  
所  
財  
団  
法  
人  
群  
馬  
県  
埋  
蔵  
文  
化  
財  
調  
査  
事  
業  
団



2012

群 馬 県 安 中 土 木 事 務 所  
財 団 法 人 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団

# 長谷津遺跡

(一)宇田磯部停車場線安中工区社会資本総合整備  
(市街地整備)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

群馬県安中土木事務所  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 序

本書は、県道宇田磯部停車場線改築事業を進めるにあたり、埋蔵文化財保護を目的として発掘調査が行われた安中市の長谷津遺跡の調査報告書です。

長谷津遺跡の発掘調査は、群馬県安中土木事務所の委託を受け、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が平成21年度に実施したものです。長谷津遺跡はJ R 磯部駅や磯部温泉街を間近に見下ろす台地上にあり、縄文時代から古墳時代にかけての多数の遺構と遺物が発見されました。特に弥生時代の集落跡は遺物も豊富で、県内最古クラスとされる銅鏡や装着紐の痕跡が残る板状鉄斧などは、今後の弥生文化研究に新たな知見を提供するものとして注目されます。この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の歴史教材として学校教育や社会教育に役立てていただくことを望んでやみません。

発掘調査から本書刊行に至るまで、群馬県県土整備部および安中土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、安中市教育委員会をはじめとする関係機関、および地元の皆さまから多大なご協力を賜りました。ここに心より感謝の意を表し、序といたします。

平成24年3月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 須田 栄 一



## 例 言

- 1 本書は、平成20年度地方道路交付金事業(一般県道宇田磯部停車場線)および平成21年度地方特定道路整備事業(一般県道宇田磯部停車場線)に伴い発掘調査され、平成22年度一般県道宇田磯部停車場線安中工区社会資本総合整備(市街地整備)事業に伴い整理事業が実施された長谷津遺跡の調査報告書である。
- 2 長谷津遺跡は群馬県安中市西上磯部長谷津731、732、735-1、736-1、739、740-2・3、754-1、755-1・2、756-1、757-1、758-1、759、761-1、763-1、764-1、765-1、773-1774、775、776、777-1、783-1に所在する。
- 3 事業主体 群馬県西部県民局安中土木事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間  
平成20年度地方道路交付金事業(繰越)  
平成21年(2009年)4月1日～平成21年(2009年)10月31日  
平成21年度地方特定道路整備事業  
平成21年(2009年)11月1日～平成21年(2009年)12月31日
- 6 整理期間 平成23年(2011年)4月1日～平成24年(2012年)3月31日
- 7 発掘調査体制は次のとおりである。  
発掘調査担当 高井佳弘(主幹兼専門員)、綿貫昭(調査研究員)、井川達雄(上席専門員)  
掘削請負 株式会社シン技術コンサル  
地上測量委託 株式会社測設、空中写真撮影委託 技研測量設計株式会社
- 8 整理事業体制は次の通りである。  
整理担当 飯田陽一(上席専門員)、岩崎泰一(上席専門員)  
保存処理 関邦一(係長(総括)) 遺物写真撮影 佐藤元彦(係長(総括))
- 9 本書作成の担当者は次のとおりである。  
編集 飯田陽一、岩崎泰一  
執筆 本文 大木紳一郎(第Ⅱ章11-2、第Ⅳ章1) 関邦一(第Ⅲ章5・6) 左記以外 飯田陽一  
遺物観察表 石器 岩崎泰一、縄文土器 橋本淳(主任調査研究員)、弥生土器 大木紳一郎(上席専門員) 資料  
2課長) 橋本淳、土師器・金属器 神谷佳明(上席専門員)が担当した。
- 10 本遺跡出土の連弧文鏡については梅沢重昭氏(前群馬大学教授)および田尻義了氏(九州大学埋蔵文化財調査室)の、弥生土器については柿沼恵介氏のご教示を受けた。また出土石製品の石材同定は、飯島静男氏(群馬地質研究会)にお願いした。
- 11 発掘調査および報告書作成には、群馬県教育委員会、安中市教育委員会からご指導を頂いた。
- 12 発掘調査資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

# 凡 例

- 1 本報告書における座標値は世界測地系IX系による。
- 2 挿図中に示す方位記号は座標上の北を示している。なお、真北方向角は0° 34' 44"である。
- 3 本文および一覧表の方位表記については、例としてN-45° Eとあるのは座標北より45度東側に振れていることを示している。
- 4 グリッドおよび座標値の表記方法については本文8頁に記した。

竪穴住居挿図中のピット計測表の「長×短×深」は「長径×短径×床面からの深さ」を意味する。

住居の面積は、1/30打ち出し図上で住居壁下端ラインをデジタルプランメーターで3回計測した数値の平均値である。壁溝のない住居では床面積と一致し、壁溝のある住居では床面に壁溝部分を加えた面積となっている。

- 5 遺構番号については、発掘調査時の名称を原則として踏襲した。このため、調査段階での欠番に加え、整理作業段階での削除などが重なって欠番を生じている。
- 6 遺構および遺物図の縮率はそれぞれの挿図中のスケールに示した。同一ページ内の遺物実測図で異なる縮率の図が混在する場合は、遺物番号に縮率を(分数)で加えて表示した。
- 7 遺構図の縮率は下記の基準を原則とした。

竪穴住居1：60、同竈・炉等の詳細図1：30、同掘り方図と遺物出土状態図1：100

掘立柱建物・ピット・土坑1：40 方形周溝墓1：100 同溝断面図1：50

- 8 遺構図に使用した記号・トーンは次のとおりである。

●：土器・土製品 ▲：石器・石製品 ■：金属製品

 焼土  ローム土・粘土  炭化物混入土  攪乱

- 9 遺物図の縮率は下記の基準を原則とした。

古墳時代の土器1：3 手づくね土器1：2 縄文土器・弥生土器1：4(破片は1：3)

鐵・玉類など小型石製品1：1 紡輪等の小型石製品1：2 石斧・石鎌等の中型石製品1：3 砥石・台石等の大型石製品1：4～1：6

遺物写真は図の縮率に沿うようにしたが、大型の古墳時代土器は1：4にしたものが多い。

- 10 遺物図に使用した記号・トーンは次のとおりである。

● 繊維土器  赤彩  黒色処理  煤付着  燻  剥落部分

- 11 石器類の実測図について、石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。その他の斜位定規線は線条痕の走行を示す。石皿については、使用部の摩耗および再生状態(再敲打)を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。台石については、打痕・摩耗痕を含む礫面の状態を表現するため、必要に応じて拓本を使用した。
- 12 本文中にある火山噴出物の標記は以下のとおりである。

As-A：浅間山A軽石 1783年(天明3年) As-B：浅間山B軽石 1108年(天仁元年)

As-C：浅間山C軽石 4世紀初頭 As-YP：浅間山板鼻バミス 1.3万年前頃(土層説明表記ではYPと略す)

- 13 遺物観察表は巻末に一括して掲載した。観察表中の略語は以下のとおりである。

口→口径 底→底径 頸→頸部外径 胴→胴部最大径 高→器高 長→長さ 厚→厚さ 重→重さ

また、復元値には数値にアンダーバーを記した。

# 目次

序	⑥その他の土坑・・・・・・・・・・	268
例言	9 溝・・・・・・・・・・	273
凡例	10 その他の遺構	
目次	(1) 集石・・・・・・・・・・	277
第1章 発掘調査と遺跡の概要	(2) 道・・・・・・・・・・	278
1 発掘調査に至る経過・・・・・・・・・・	(3) 尾状溝状不明遺構・・・・・・・・・・	279
2 整理業務に至る経過・・・・・・・・・・	11 遺構外の遺物	
3 遺跡の立地と周辺の遺跡	(1) 縄文土器・・・・・・・・・・	280
(1) 遺跡の立地・・・・・・・・・・	(2) 弥生土器・・・・・・・・・・	286
3	12 旧石器時代の試掘調査	291
(2) 周辺の遺跡・・・・・・・・・・	(1) トレンチの設定・・・・・・・・・・	292
4	(2) 土層の記録・・・・・・・・・・	292
発掘調査の方法と経過	付編 住居柱間計測値・・・・・・・・・・	293
(1) 遺跡の呼称と調査区の設定・・・・・・・・	第3章 分析・同定	
8	1 分析・同定の目的・・・・・・・・・・	294
(2) グリッドの設定・表示と呼称・・・・・・・・	2 長谷津遺跡の土層層状	
8	長谷津遺跡における植物珪酸体分析・・・・・・・・	295
(3) 調査の方法・・・・・・・・・・	3 長谷津遺跡から出土した炭化種実・・・・・・・・	301
8	4 長谷津遺跡の繊維遺物について・・・・・・・・	305
(4) 基本土層・・・・・・・・・・	5 23号住居出土鉄斧付着木質について・・・・・・・・	308
9	6 長谷津遺跡出土炭化材について・・・・・・・・	308
第2章 発掘調査の記録	第4章 調査成果と整理のまとめ	
1 長谷津遺跡の特徴と遺構の概要	1 長谷津遺跡の後期弥生土器について・・・・・・・・	311
(1) 遺構の特徴・・・・・・・・・・	2 石製紡輪・・・・・・・・・・	318
10	3 44号住居出土の小形仿製鏡・・・・・・・・・・	320
(2) 遺構の概要・・・・・・・・・・	4 弥生時代後期の竪穴住居について・・・・・・・・	321
10	(1) 規模と形状・・・・・・・・・・	321
2 竪穴住居	(2) 五平(状)柱・・・・・・・・・・	321
(1) 概要・・・・・・・・・・	(3) 尾状溝・・・・・・・・・・	322
11	遺物観察表	
(2) 縄文時代の竪穴住居・・・・・・・・・・	1 縄文時代の住居出土土器・・・・・・・・・・	323
11	2 弥生時代中期の住居出土土器・・・・・・・・・・	327
(3) 弥生時代中期の竪穴住居・・・・・・・・・・	3 弥生時代後期の住居出土土器・・・・・・・・・・	330
27	4 古墳時代前期の住居出土土器・・・・・・・・・・	356
(4) 弥生時代後期の竪穴住居・・・・・・・・・・	5 古墳時代後期の住居出土土器・・・・・・・・・・	358
43	6 その他の遺構出土土器・・・・・・・・・・	363
(5) 古墳時代前期の竪穴住居・・・・・・・・・・	7 縄文時代の遺構外遺物・・・・・・・・・・	365
198	8 弥生時代中期の遺構外遺物・・・・・・・・・・	370
(6) 古墳時代後期の竪穴住居・・・・・・・・・・	引用・参考文献一覧・・・・・・・・・・	375
210	写真図版	
3 掘立柱建物・・・・・・・・・・	報告書抄録	
236	奥付	
4 ビット・・・・・・・・・・	付図 長谷津遺跡全体図	
239		
5 方形周溝墓・・・・・・・・・・		
248		
6 礫床墓・・・・・・・・・・		
251		
7 壺棺墓・・・・・・・・・・		
255		
8 土坑		
(1) 概要・・・・・・・・・・		
258		
(2) 埋没土・・・・・・・・・・		
258		
(3) 土坑の説明・・・・・・・・・・		
258		
①墓坑状の遺構・・・・・・・・・・		
258		
②プラスチック状土坑・・・・・・・・・・		
258		
③方形土坑(竪穴状)・・・・・・・・・・		
258		
④超長方形土坑・・・・・・・・・・		
258		
⑤円形土坑(大型・中型)・・・・・・・・・・		
258		
⑥小型円形土坑・・・・・・・・・・		
268		
⑦小型長方形・楕円形土坑・・・・・・・・		
268		

# 挿 図 目 次

第1図	長谷津遺跡の位置	1
第2図	調査区概念図	2
第3図	長谷津遺跡周辺の地形	3
第4図	長谷津遺跡周辺の遺跡	5
第5図	グリッド概念図	8
第6図	27号住居(1)	12
第7図	27号住居(2)	13
第8図	27号住居出土遺物	14
第9図	39号住居	15
第10図	39号住居出土遺物	16
第11図	49号住居(1)	17
第12図	49号住居(2)	18
第13図	49号住居出土遺物(1)	19
第14図	49号住居出土遺物(2)	20
第15図	49号住居出土遺物(3)	21
第16図	49号住居出土遺物(4)	22
第17図	68号住居	23
第18図	68号住居出土遺物	24
第19図	80号住居	25
第20図	80号住居出土遺物	26
第21図	弥生時代中期集落の分布	27
第22図	19号住居および出土遺物(1)	28
第23図	19号住居出土遺物(2)	29
第24図	24号住居	30
第25図	24号住居出土遺物	31
第26図	28号住居および出土遺物	32
第27図	32号住居および出土遺物	33
第28図	34号住居	34
第29図	34号住居出土遺物	35
第30図	36号住居および出土遺物	36
第31図	37号住居および出土遺物	37
第32図	38号住居および出土遺物	38
第33図	46号住居	39
第34図	46号住居出土遺物	40
第35図	67号住居	41
第36図	67号住居出土遺物	42
第37図	弥生時代後期集落の分布	43
第38図	1号住居(1)	44
第39図	1号住居(2)および出土遺物	45
第40図	2号住居(1)	46
第41図	2号住居(2)および出土遺物	47
第42図	3号住居(1)	48
第43図	3号住居(2)および出土遺物(1)	49
第44図	3号住居出土遺物(2)	50
第45図	3号住居出土遺物(3)	51
第46図	4号住居	52
第47図	4号住居出土遺物(1)	53
第48図	4号住居出土遺物(2)	54
第49図	5号住居	55
第50図	5号住居出土遺物	56
第51図	6号住居および出土遺物	57
第52図	7号住居(1)	58
第53図	7号住居(2)	59
第54図	7号住居(3)	60
第55図	7号住居出土遺物(1)	61
第56図	7号住居出土遺物(2)	62
第57図	8号住居(1)	63
第58図	8号住居(2)	64
第59図	8号住居出土遺物(1)	65
第60図	8号住居出土遺物(2)	66
第61図	9号住居	67
第62図	9号住居出土遺物	68
第63図	10号住居(1)	69
第64図	10号住居(2)	70
第65図	10号住居出土遺物(1)	71
第66図	10号住居出土遺物(2)	72
第67図	11号住居(1)	73
第68図	11号住居(2)	74
第69図	11号住居出土遺物	75
第70図	12号住居(1)	76
第71図	12号住居(2)および出土遺物	77
第72図	13号住居	78
第73図	13号住居出土遺物	79
第74図	14号住居(1)	80
第75図	14号住居(2)	81
第76図	14号住居(3)および出土遺物(1)	82
第77図	14号住居出土遺物(2)	83
第78図	15号住居(1)	84
第79図	15号住居(2)	85
第80図	15号住居(3)	86
第81図	15号住居(4)	87
第82図	15号住居出土遺物(1)	88
第83図	15号住居出土遺物(2)	89
第84図	15号住居出土遺物(3)	90
第85図	15号住居出土遺物(4)	91
第86図	16号住居	93
第87図	16号住居出土遺物(1)	94
第88図	16号住居出土遺物(2)	95
第89図	16号住居出土遺物(3)	96
第90図	17号住居(1)	97
第91図	17号住居出土遺物	98
第92図	17号住居(2)	99
第93図	18号住居(1)	100
第94図	18号住居(2)	101



第95図	18号住居(3)および出土遺物(1)	102	第145図	45号住居出土遺物(5)	154
第96図	18号住居出土遺物(2)	103	第146図	45号住居出土遺物(6)	155
第97図	20号住居	104	第147図	45号住居出土遺物(7)	156
第98図	20号住居出土遺物	105	第148図	47号住居	157
第99図	21号住居(1)	106	第149図	47号住居出土遺物	158
第100図	21号住居(2)	107	第150図	48号住居	159
第101図	21号住居出土遺物	108	第151図	50号住居	160
第102図	22号住居(1)	109	第152図	50号住居出土遺物	161
第103図	22号住居(2)	110	第153図	55号住居(1)	162
第104図	22号住居(3)	111	第154図	55号住居(2)および出土遺物	163
第105図	22号住居出土遺物(1)	112	第155図	56号住居(1)	164
第106図	22号住居出土遺物(2)	113	第156図	56号住居(2)および出土遺物	165
第107図	22号住居出土遺物(3)	114	第157図	57号住居(1)	167
第108図	23号住居(1)	115	第158図	57号住居(2)	168
第109図	23号住居(2)	116	第159図	57号住居出土遺物(1)	169
第110図	23号住居(3)および出土遺物(1)	117	第160図	57号住居出土遺物(2)	170
第111図	23号住居出土遺物(2)	118	第161図	60号住居(1)	171
第112図	25号住居および出土遺物	119	第162図	60号住居(2)	172
第113図	26号住居(1)	120	第163図	60号住居出土遺物	173
第114図	26号住居(2)および出土遺物	121	第164図	61号住居および出土遺物	174
第115図	29号住居および出土遺物	122	第165図	63号住居(1)	175
第116図	30号住居	123	第166図	63号住居(2)	176
第117図	30号住居出土遺物	124	第167図	63号住居(3)および出土遺物(1)	177
第118図	31号住居	125	第168図	63号住居出土遺物(2)	178
第119図	31号住居出土遺物	126	第169図	66号住居(1)	179
第120図	33号住居および出土遺物	127	第170図	66号住居(2)	180
第121図	35号住居(1)	128	第171図	66号住居出土遺物(1)	181
第122図	35号住居(2)	129	第172図	66号住居出土遺物(2)	182
第123図	35号住居(3)および出土遺物(1)	130	第173図	69号住居および出土遺物	183
第124図	35号住居出土遺物(2)	131	第174図	70号住居	184
第125図	40号住居	133	第175図	70号住居出土遺物	185
第126図	41号住居	134	第176図	73号住居(1)	186
第127図	42号住居	135	第177図	73号住居(2)および出土遺物	187
第128図	42号住居出土遺物	136	第178図	76号住居(1)	188
第129図	43号住居(1)	137	第179図	76号住居(2)および出土遺物(1)	189
第130図	43号住居(2)	138	第180図	76号住居出土遺物(2)	190
第131図	43号住居出土遺物(1)	139	第181図	76号住居出土遺物(3)	191
第132図	43号住居出土遺物(2)	140	第182図	81号住居	192
第133図	44号住居(1)	141	第183図	82号住居	192
第134図	44号住居(2)	142	第184図	84号住居	193
第135図	44号住居出土遺物(1)	143	第185図	85号住居	195
第136図	44号住居出土遺物(2)	144	第186図	85号住居出土遺物	196
第137図	45号住居(1)	146	第187図	86号住居および出土遺物	196
第138図	45号住居(2)	147	第188図	87号住居	197
第139図	45号住居(3)	148	第189図	古墳時代前期集落の分布	198
第140図	45号住居(4)	149	第190図	59号住居および出土遺物	199
第141図	45号住居出土遺物(1)	150	第191図	65号住居	200
第142図	45号住居出土遺物(2)	151	第192図	65号住居出土遺物	201
第143図	45号住居出土遺物(3)	152	第193図	71号住居(1)	202
第144図	45号住居出土遺物(4)	153	第194図	71号住居(2)および出土遺物	203

第195図	72号住居および出土遺物	204	第243図	1号礎床墓	252
第196図	75号住居および出土遺物	205	第244図	2号礎床墓	253
第197図	77号住居および出土遺物	206	第245図	3号礎床墓	254
第198図	79号住居および出土遺物	207	第246図	壺棺墓(9号土坑)	255
第199図	83号住居	208	第247図	壺棺墓(58・59号土坑)	256
第200図	83号住居出土遺物	209	第248図	壺棺墓出土遺物	257
第201図	古墳時代後期集落の分布	210	第249図	土坑(1)	259
第202図	51号住居	210	第250図	土坑(2)	260
第203図	51号住居竈および出土遺物	211	第251図	土坑(3)	261
第204図	52号住居および出土遺物	212	第252図	土坑(4)	262
第205図	53号住居	213	第253図	土坑(5)	263
第206図	53号住居竈および出土遺物(1)	214	第254図	土坑(6)	264
第207図	53号住居出土遺物(2)	215	第255図	土坑(7)	265
第208図	53号住居出土遺物(3)	216	第256図	土坑(8)	266
第209図	54号住居	218	第257図	土坑(9)	267
第210図	54号住居出土遺物	219	第258図	土坑出土遺物(1)	268
第211図	58号住居	220	第259図	土坑出土遺物(2)	269
第212図	58号住居竈および出土遺物	221	第260図	3・4号溝	274
第213図	62号住居	222	第261図	9号溝	275
第214図	62号住居竈および出土遺物(1)	223	第262図	10号溝	276
第215図	62号住居出土遺物(2)	224	第263図	10号溝出土遺物	277
第216図	62号住居出土遺物(3)	225	第264図	集石	277
第217図	64号住居	226	第265図	道	278
第218図	64号住居竈および出土遺物(1)	227	第266図	尾状溝状不明遺構	279
第219図	64号住居出土遺物(2)	228	第267図	遺構外の縄文土器(1)	281
第220図	64号住居出土遺物(3)	229	第268図	遺構外の縄文土器(2)	282
第221図	74号住居	230	第269図	遺構外の縄文土器(3)	283
第222図	74号住居出土遺物(1)	231	第270図	遺構外の縄文土器(4)	284
第223図	74号住居出土遺物(2)	232	第271図	遺構外の縄文土器(5)	285
第224図	78号住居	233	第272図	遺構外の弥生土器(1)	286
第225図	78号住居出土遺物(1)	234	第273図	遺構外の弥生土器(2)	287
第226図	78号住居出土遺物(2)	235	第274図	遺構外の弥生土器(3)	288
第227図	1号掘立柱建物	236	第275図	遺構外の弥生土器(4)	289
第228図	2号掘立柱建物	237	第276図	遺構外の弥生土器(5)	290
第229図	3号掘立柱建物	238	第277図	旧石器時代試掘トレンチ配置図	291
第230図	ビット配置図	239	第278図	旧石器時代試掘トレンチ土層柱状図	292
第231図	ビット(1)	240	第279図	Aトレンチの土層柱状図	297
第232図	ビット(2)	241	第280図	Eトレンチの土層柱状図	297
第233図	ビット(3)	242	第281図	I7トレンチの土層柱状図	297
第234図	ビット(4)	243	第282図	Aトレンチにおける植物珪酸体分析結果	300
第235図	ビット(5)	244	第283図	鉄斧に付着した繊維のFT-IRスペクトル	306
第236図	ビット(6)	245	第284図	植物繊維(大麻)のFT-IRスペクトル	306
第237図	ビット出土遺物	247	第285図	絹繊維のFT-IRスペクトル	306
第238図	1号方形周溝墓(1)	248	第286図	後期弥生土器の器種構成	313
第239図	1号方形周溝墓(2)および出土遺物	249	第287図	富岡聖壺の組成	314
第240図	2号方形周溝墓(1)	250	第288図	V-3期古段階の甕2種	316
第241図	2号方形周溝墓(2)および出土遺物	251	第289図	紡輪出土の弥生時代後期住居	318
第242図	礎床墓の配置	251	第290図	石製紡輪未製品と製作工程	319
			第291図	小形仿製鏡拓影と復元文様	320

# 表 目 次

※ 個別遺構のピットや溝等の施設一覧はこの項に含まない

第1表 周辺道跡一覧・・・・・・・・・・・・・	6	第6表 炭化材樹種名・・・・・・・・・・・・・	309-310
第2表 ビット一覧・・・・・・・・・・・・・	245-247	第7表 遺構別樹種構成・・・・・・・・・・・・・	310
第3表 土坑一覧・・・・・・・・・・・・・	270-272	第8表 長谷津道跡出土石製紡輪一覧・・・・・・・・	318
第4表 植物珪酸体分析結果・・・・・・・・・・	299	第9表 弥生時代後期の主な住居外形計測一覧・・	321
第5表 長谷津道跡から出土した 種実の同定結果・・・・・・・・・・・・・	302	第10表 尾丈溝一覧・・・・・・・・・・・・・	322

## 本文中写真目次

### 分析原稿内挿入写真

写真1 鉄斧・・・・・・・・・・・・・	305	写真7 超音波洗浄後の表面(×500)・・・・・・・・	306
写真2 繊維遺物・・・・・・・・・・・・・	305	写真8 断面(×500)・・・・・・・・・・・・・	306
写真3 分析用試料・・・・・・・・・・・・・	305	写真9 断面(×2000)・・・・・・・・・・・・・	306
写真4 未処理(×20)・・・・・・・・・・・・・	305	写真10 大麻繊維横断面(×500)・・・・・・・・	307
写真5 超音波洗浄後(×20)・・・・・・・・・・	305	写真11 芋麻繊維横断面(×500)・・・・・・・・	307
写真6 超音波洗浄前の表面(×1000)・・	306	写真12 亜麻繊維横断面(×500)・・・・・・・・	307

## 写真図版目次

<b>PL. 1 上空から眺めた長谷津道跡</b>		2 36号住居炉全景(東から)
1 道跡遠景(西から)		3 36号住居P5内遺物出土状態(東から)
2 道跡遠景(東から)		4 37号住居全景(北東から)
<b>PL. 2 縄文時代の竪穴住居</b>		5 37号住居炉土層断面(東から)
1 27号住居全景(南から)		6 38号住居全景(北西から)
2 27号住居埋設炉(東から)		7 46号住居全景(東から)
3 39号住居全景(北東から)		8 46号住居土層断面(南から)
4 49号住居全景(南から)		<b>PL. 5 弥生時代中期の竪穴住居(3)</b>
5 49号住居炉土層断面(南から)		1 46号住居炉土層断面(南から)
6 68号住居全景(南から)		2 46号住居遺物出土状態(東から)
7 80号住居全景(南東から)		3 67号住居全景(南西から)
8 80号住居土層断面(南から)		4 67号住居土層断面(南東から)
<b>PL. 3 弥生時代中期の竪穴住居(1)</b>		5 67号住居掘り方全景(南西から)
1 19号住居土層断面(南から)		6 67号住居炉土層断面(南東から)
2 19号住居P5内全景(東から)		7 67号住居埋設土器確認状態(南西から)
3 24号住居全景(南から)		8 67号住居埋設土器出土状態(南西から)
4 24号住居炉(東から)		<b>PL. 6 弥生時代後期の竪穴住居(1)</b>
5 28号住居全景(南から)		1 1号住居全景(南から)
6 32号住居全景(南から)		2 1号住居土層断面(東から)
7 34号住居全景(南から)		3 1号住居炉土層断面(西から)
8 34号住居遺物出土状態(南から)		4 1号住居遺物出土状態(東から)
<b>PL. 4 弥生時代中期の竪穴住居(2)</b>		5 2号住居全景(南から)
1 36号住居全景(東から)		6 2号住居土層断面(東から)

- 7 2号住居が1土層断面(東から)
- 8 2号住居P6(右)・P7(左)全景(南から)
- PL.7 弥生時代後期の竪穴住居(2)**
- 1 3号住居全景(西から)
- 2 3号住居土層断面(南から)
- 3 3号住居が断面(南から)
- 4 3号住居入口付近(西から)
- 5 3号住居遺物出土状態(西から)
- 6 3号住居遺物出土状態(南東から)
- 7 4号住居全景(東から)
- 8 4号住居土層断面(東から)
- PL.8 弥生時代後期の竪穴住居(3)**
- 1 4号住居が1確認状態(南から)
- 2 4号住居遺物出土状態全景(東から)
- 3 4号住居P5内遺物出土状態(東から)
- 4 5号住居全景(南から)
- 5 5号住居土層断面(東から)
- 6 5号住居が土層断面(南から)
- 7 5号住居遺物出土状態(南から)
- 8 6号住居全景(南から)
- PL.9 弥生時代後期の竪穴住居(4)**
- 1 7号住居全景(南から)
- 2 7号住居掘り方(南から)
- 3 7号住居土層断面(東から)
- 4 7号住居が1土層断面(東から)
- 5 7号住居が2土層断面(南から)
- 6 7号住居入口ピット(南から)
- 7 8(右)・12(左)号住居(上方が北)
- PL.10 弥生時代後期の竪穴住居(5)**
- 1 8号住居全景(南東から)
- 2 8号住居土層断面(南東から)
- 3 8(左)・12(右奥)号住居全景(北西から)
- 4 8号住居尾状溝(北西から)
- 5 8号住居トンネル状施設(南東から)
- 6 8号住居が土層断面(南西から)
- 7 9号住居全景(南から)
- 8 9号住居土層断面(西から)
- PL.11 弥生時代後期の竪穴住居(6)**
- 1 10号住居全景(南から)
- 2 10号住居土層断面(東から)
- 3 10号住居尾状溝(西から)
- 4 10号住居尾状溝(南から)
- 5 10号住居西側壁柱穴(南から)
- 6 10号住居遺物出土状態(南から)
- 7 11号住居全景(南から)
- 8 11号住居土層断面(南から)
- PL.12 弥生時代後期の竪穴住居(7)**
- 1 11号住居が土層断面(東から)
- 2 11号住居南東隅遺物出土状態(北から)
- 3 12号住居全景(南から)
- 4 12号住居尾状溝(北から)
- 5 12号住居尾状溝トンネル入口(南から)
- 6 12号住居が土層断面(東から)
- 7 13号住居全景(南東から)
- 8 13号住居土層断面(東から)
- PL.13 弥生時代後期の竪穴住居(8)**
- 1 14(上)・15(下)号住居(上方が西)
- 2 14・15号住居全景(南から)
- 3 14号住居全景(南から)
- 4 14号住居尾状溝入口(北から)
- 5 14号住居が1土層断面(東から)
- 6 14号住居遺物出土状態(西から)
- 7 14号住居掘り方掘削具痕(西から)
- PL.14 弥生時代後期の竪穴住居(9)**
- 1 15号住居全景(南から)
- 2 15号住居土層断面(南から)
- 3 15号住居尾状溝(東から)
- 4 15号住居が1土層断面(西から)
- 5 15号住居が2土層断面(南から)
- 6 15号住居が3土層断面(南から)
- 7 15号住居遺物出土状態(南から)
- 8 15号住居入口ピット(南から)
- PL.15 弥生時代後期の竪穴住居(10)**
- 1 16号住居全景(西から)
- 2 16号住居土層断面(南から)
- 3 16号住居が土層断面(南東から)
- 4 16号住居遺物出土状態(南から)
- 5 17号住居全景(西から)
- 6 17号住居土層断面(南から)
- 7 17号住居が土層断面(南から)
- 8 17号住居遺物出土状態(南から)
- PL.16 弥生時代後期の竪穴住居(11)**
- 1 18号住居全景(南から)
- 2 18号住居土層断面(南から)
- 3 18号住居が1土層断面(東から)
- 4 18号住居が2土層断面(南から)
- 5 18号住居尾状溝(南西から)
- 6 18号住居尾状溝基部土層断面(南西から)
- 7 18号住居入口付近(南から)
- 8 18号溝尾状溝土層断面(南から)
- PL.17 弥生時代後期の竪穴住居(12)**
- 1 20号住居全景(東から)
- 2 20号住居土層断面(南西から)
- 3 20号住居が土層断面(南から)
- 4 20号住居入口付近(東から)
- 5 21号住居全景(南から)
- 6 21号住居土層断面(東から)
- 7 21号住居尾状溝(北東から)

- 8 21号住居が土層断面(東から)
- PL.18 弥生時代後期の竪穴住居(13)**
- 1 22号住居全景(南西から)
- 2 22号住居土層断面(南から)
- 3 22号住居が1土層断面(東から)
- 4 22号住居が2土層断面(南西から)
- 5 22号住居側から見た尾状溝(西から)
- 6 22号住居入口ピット(南から)
- 7 23号住居全景(南から)
- 8 23号住居土層断面(南から)
- PL.19 弥生時代後期の竪穴住居(14)**
- 1 23号住居が1土層断面(東から)
- 2 23号住居が2土層断面(南から)
- 3 23号住居炭化材出土状態(南から)
- 4 23号住居炭化材出土状態(南から)
- 5 23号住居入口ピット(南から)
- 6 25号住居全景(西から)
- 7 25号住居土層断面(南から)
- 8 25号住居が土層断面(南から)
- PL.20 弥生時代後期の竪穴住居(15)**
- 1 26号住居全景(北東から)
- 2 26号住居土層断面(北東から)
- 3 26号住居が1土層断面(南東から)
- 4 26号住居入口付近(北東から)
- 5 29号住居全景(西から)
- 6 29号住居土層断面(南から)
- 7 29号住居掘り方全景(東から)
- 8 29号住居が土層断面(南から)
- PL.21 弥生時代後期の竪穴住居(16)**
- 1 30号住居全景(東から)
- 2 30号住居が1土層断面(南から)
- 3 31号住居全景(南から)
- 4 31号住居土層断面(南から)
- 5 31号住居掘り方(南から)
- 6 31号住居が土層断面(東から)
- 7 33号住居全景(南から)
- 8 33号住居土層断面(東から)
- PL.22 弥生時代後期の竪穴住居(17)**
- 1 35号住居全景(西から)
- 2 35号住居土層断面(南東から)
- 3 35号住居が1土層断面(南から)
- 4 35号住居が2土層断面(東から)
- 5 35号住居遺物出土状態(南から)
- 6 40号住居全景(南東から)
- 7 40号住居掘り方(東から)
- 8 41号住居全景(東から)
- PL.23 弥生時代後期の竪穴住居(18)**
- 1 42号住居全景(南から)
- 2 42号住居が土層断面(東から)
- 3 42号住居炭化材出土状態(東から)
- 4 42号住居P3土層断面(南から)
- 5 43号住居全景(南から)
- 6 43号住居土層断面(東から)
- 7 43号住居掘り方(南から)
- 8 43号住居が1土層断面(東から)
- PL.24 弥生時代後期の竪穴住居(19)**
- 1 43号住居西壁下遺物出土状態(南から)
- 2 43号住居東壁下遺物出土状態(西から)
- 3 44号住居全景(東から)
- 4 44号住居土層断面(東から)
- 5 44号住居掘り方(東から)
- 6 44号住居が2全景(東から)
- 7 45号住居全景(南から)
- 8 45号住居土層断面(西から)
- PL.25 弥生時代後期の竪穴住居(20)**
- 1 45号住居掘り方(南から)
- 2 45号住居が1土層断面(東から)
- 3 45号住居が2土層断面(南から)
- 4 45号住居入口ピット(南から)
- 5 45号住居P4上面遺物出土状態(南から)
- 6 45号住居P5内遺物出土状態(南から)
- 7 47号住居全景(東から)
- 8 47号住居が及び出土遺物(東から)
- PL.26 弥生時代後期の竪穴住居(21)**
- 1 48号住居全景(南から)
- 2 48号住居土層断面(東から)
- 3 50号住居全景(東から)
- 4 50号住居土層断面および出土遺物(南から)
- 5 55号住居全景(東から)
- 6 55号住居が1土層断面(南から)
- 7 55号住居張り出し部土層断面(南から)
- 8 55号住居張り出し部と遺物(北から)
- PL.27 弥生時代後期の竪穴住居(22)**
- 1 56号住居全景(南東から)
- 2 56号住居土層断面(東から)
- 3 56号住居が土層断面(南西から)
- 4 57号住居全景(南から)
- 5 57号住居土層断面(南から)
- 6 57号住居入口ピット(南から)
- 7 60号住居全景(南から)
- 8 60号住居土層断面(南から)
- PL.28 弥生時代後期の竪穴住居(23)**
- 1 60号住居が土層断面(東から)
- 2 60号住居入口ピット(南から)
- 3 61号住居掘り方(南から)
- 4 63号住居全景(南から)
- 5 63号住居が1土層断面(東から)
- 6 63号住居遺物出土状態(南から)

- 7 66号住居全景(南から)
- 8 66号住居土層断面(東から)
- PL.29 弥生時代後期の竪穴住居(24)**
- 1 66号住居炉1 全景(東から)
- 2 66号住居遺物出土状態(西から)
- 3 69号住居全景(東から)
- 4 69号住居土層断面(南から)
- 5 69号住居炉1 土層断面(南から)
- 6 69号住居遺物出土状態(南東から)
- 7 70号住居全景(東から)
- 8 70号住居土層断面(北から)
- PL.30 弥生時代後期の竪穴住居(25)**
- 1 70号住居炉1 土層断面(南東から)
- 2 70号住居遺物出土状態(南から)
- 3 73号住居全景(東から)
- 4 73号住居土層断面(南東から)
- 5 76号住居全景(南から)
- 6 76号住居土層断面(東から)
- 7 76号住居炉1 土層断面(東から)
- 8 76号住居遺物出土状態(東から)
- PL.31 弥生時代後期の竪穴住居(26)**
- 1 81号住居全景(北から)
- 2 81号住居土層断面(西から)
- 3 82号住居全景(南から)
- 4 82号住居土層断面(東から)
- 5 84号住居全景(東から)
- 6 84号住居土層断面(南から)
- 7 84号住居入口ピット(南東から)
- 8 85号住居全景(東から)
- PL.32 弥生時代後期の竪穴住居(27)**
- 古墳時代前期の竪穴住居(1)**
- 1 85号住居炉1 土層断面(南から)
- 2 85号住居遺物出土状態(南西から)
- 3 86号住居全景(南から)
- 4 87号住居全景(東から)
- 5 59号住居全景(南から)
- 6 59号住居炉土層断面(南から)
- 7 65号住居全景(南から)
- 8 65号住居土層断面(南から)
- PL.33 古墳時代前期の竪穴住居(2)**
- 1 71号住居全景(南から)
- 2 71号住居土層断面(西から)
- 3 72号住居全景(南から)
- 4 72号住居土層断面(南から)
- 5 75号住居全景(南から)
- 6 75号住居土層断面(東から)
- 7 77号住居全景(南から)
- 8 83号住居全景(南から)
- PL.34 古墳時代後期の竪穴住居(1)**
- 1 51号住居全景(南から)
- 2 51号住居竪穴全景(南から)
- 3 51号住居竪穴掘り方(南から)
- 4 52号住居全景(南から)
- 5 53号住居全景(南から)
- 6 53号住居竪穴全景(南から)
- 7 53号住居竪穴内遺物(北から)
- 8 53号住居遺物出土状態(南から)
- PL.35 古墳時代後期の竪穴住居(2)**
- 1 54号住居全景(西から)
- 2 54号住居土層断面(西から)
- 3 54号住居竪穴全景(西から)
- 4 54号住居掘り方(西から)
- 5 58号住居全景(南から)
- 6 58号住居床下土坑土層断面(西から)
- 7 62号住居全景(東から)
- 8 62号住居竪穴全景(南から)
- PL.36 古墳時代後期の竪穴住居(3)**
- 1 64号住居全景(南から)
- 2 64号住居竪穴全景(南から)
- 3 74号住居全景(南から)
- 4 74号住居土層断面(南から)
- 5 78号住居全景(南西から)
- 6 78号住居竪穴全景1(南西から)
- 7 78号住居竪穴全景2(南西から)
- 8 78号住居遺物出土状態(南から)
- PL.37 掘立柱建物**
- 1 1号掘立柱建物全景(南から)
- 2 1号掘立柱建物P1土層断面(東から)
- 3 2号掘立柱建物全景(北から)
- 4 2号掘立柱建物P1土層断面(東から)
- 5 3号掘立柱建物全景(東から)
- 6 3号掘立柱建物全景(西から)
- 7 3号掘立柱建物P2土層断面(南から)
- 8 3号掘立柱建物P5土層断面(南から)
- PL.38 ピット(1)**
- 1 1号ピット土層断面(南西から)
- 2 2号ピット土層断面(南西から)
- 3 4(右)・5(左)号ピット土層断面(南から)
- 4 7号ピット土層断面(南西から)
- 5 9号ピット全景(南から)
- 6 13号ピット全景(南から)
- 7 15号ピット全景(南から)
- 8 16号ピット全景(南から)
- 9 18号ピット全景(南から)
- 10 20(左)・21(右)号ピット全景(南から)
- 11 22号ピット全景(南から)
- 12 25号ピット全景(南から)
- 13 28号ピット全景(南から)

- 14 30(左)・31(右)号ビット全景(南東から)
- 15 36号ビット全景(南から)
- PL.39 ビット(2)**
- 1 37号ビット全景(南から)
- 2 40(左)・41(右)号ビット全景(南から)
- 3 44号ビット全景(南西から)
- 4 45号ビット全景(南から)
- 5 46号ビット全景(南から)
- 6 48号ビット全景(南から)
- 7 50号ビット全景(南から)
- 8 51号ビット全景(南から)
- 9 52号ビット全景(南から)
- 10 54号ビット全景(南から)
- 11 56号ビット全景(南から)
- 12 60号ビット全景(南から)
- 13 63号ビット全景(南から)
- 14 64号ビット全景(南から)
- 15 65号ビット全景(南から)
- PL.40 ビット(3)**
- 1 66号ビット全景(南から)
- 2 68号ビット全景(南から)
- 3 69号ビット全景(南西から)
- 4 70号ビット全景(南西から)
- 5 71号ビット全景(南から)
- 6 72号ビット全景(南から)
- 7 75号ビット全景(南から)
- 8 76号ビット全景(南から)
- 9 78号ビット全景(南東から)
- 10 81号ビット全景(南から)
- 11 85号ビット全景(東から)
- 12 90号ビット全景(南から)
- 13 91号ビット全景(南から)
- 14 92号ビット全景(南から)
- 15 93号ビット全景(南から)
- PL.41 ビット(4)**
- 1 96号ビット全景(南東から)
- 2 97号ビット全景(南から)
- 3 98号ビット全景(南から)
- 4 102号ビット全景(南から)
- 5 104号ビット全景(南から)
- 6 108(左)・109(右)号ビット全景(南から)
- 7 110号ビット全景(南から)
- 8 118号ビット全景(南から)
- 9 125号ビット全景(南から)
- 10 132号ビット全景(南から)
- 11 134号ビット全景(南から)
- 12 135号ビット全景(南から)
- 13 136号ビット全景(南から)
- 14 137号ビット全景(南から)
- 15 140号ビット全景(南から)
- PL.42 1号方形周溝墓**
- 1 1号方形周溝墓全景(上方が北)
- 2 1号方形周溝墓土層断面A 1(西から)
- 3 1号方形周溝墓土層断面B 1(南から)
- 4 1号方形周溝墓北側溝(西から)
- 5 1号方形周溝墓遺物出土状態(東から)
- PL.43 2号方形周溝墓**
- 1 2号方形周溝墓全景(上方が西)
- 2 2号方形周溝墓全景(南から)
- 3 2号方形周溝墓土層断面B 2(南から)
- 4 2号方形周溝墓南側溝(東から)
- 5 2号方形周溝墓北側溝(西から)
- PL.44 礎床墓(1)**
- 1 礎床墓群全景(西から：手前が3号礎床墓)
- 2 2号(左)・1号(右)礎床墓(南西から)
- 3 1号礎床墓全景(南から)
- 4 1号礎床墓土層断面(南から)
- 5 1号礎床墓掘り方(南から)
- 6 1号礎床墓西側土層断面(南から)
- 7 1号礎床墓東側土層断面(南から)
- PL.45 礎床墓(2)**
- 1 2号礎床墓上面全景(東から)
- 2 2号礎床墓全景(東から)
- 3 2号礎床墓土層断面(南から)
- 4 2号礎床墓掘り方(南から)
- 5 3号礎床墓全景(南から)
- 6 3号礎床墓全景(西から)
- 7 3号礎床墓土層断面(南から)
- 8 3号礎床墓掘り方(南から)
- PL.46 壙棺墓**
- 1 9号土坑全景(西から)
- 2 9号土坑土層断面(西から)
- 3 9号土坑遺物出土状態(北西から)
- 4 58号土坑全景(西から)
- 5 58号土坑土層断面(西から)
- 6 59号土坑全景(東から)
- 7 59号土坑土層断面(南から)
- 8 59号土坑遺物出土状態(北西から)
- PL.47 土坑1(墓坑状・フラスコ状・壺状土坑)**
- 1 1号方形周溝墓内土坑全景(東から)
- 2 22号土坑全景(南から)
- 3 23号土坑全景(南から)
- 4 6号土坑全景(南から)
- 5 6号土坑土層断面(南から)
- 6 62号土坑全景(西から)
- 7 62号土坑土層断面(東から)
- 8 71号土坑全景(東から)
- 9 71号土坑土層断面(南から)

- 10 1号土坑全景(東から)
- 11 1号土坑遺物出土状態(東から)
- 12 8号土坑全景(南から)
- 13 18号土坑全景(南から)
- 14 45号土坑全景(東から)
- 15 48号土坑全景(西から)
- PL. 48 上坑2(堅穴状・超長方形・大型円形・中型円形土坑)**
- 1 52号土坑全景(南から)
- 2 52号土坑遺物出土状態(南東から)
- 3 68号土坑全景(南から)
- 4 2号土坑全景(東から)
- 5 21号土坑全景(東から)
- 6 43号土坑全景(南から)
- 7 67号土坑全景(南から)
- 8 42号土坑全景(東から)
- 9 51号土坑全景(南から)
- 10 11号土坑全景(南から)
- 11 13号土坑全景(南から)
- 12 13号土坑土層断面(南から)
- 13 14号土坑全景(東から)
- 14 33号土坑全景(南から)
- 15 36号土坑全景(南から)
- PL. 49 上坑3(中型円形・小型円形土坑)**
- 1 39号土坑全景(南から)
- 2 46号土坑全景(南から)
- 3 49号土坑全景(南から)
- 4 50号土坑全景(南から)
- 5 53号土坑全景(南から)
- 6 54号土坑全景(南から)
- 7 63号土坑全景(南から)
- 8 4号土坑全景(南から)
- 9 7号土坑全景(南から)
- 10 15号土坑全景(東から)
- 11 26号土坑全景(南から)
- 12 27号土坑平面(南から)
- 13 27号土坑礎出土状態(東から)
- 14 30号土坑全景(南から)
- 15 32号土坑全景(南から)
- PL. 50 上坑4(小型円形・小型長方形・楕円形土坑)**
- 1 41号土坑全景(南から)
- 2 56号土坑全景(東から)
- 3 56号土坑土層断面(東から)
- 4 60号土坑全景(東から)
- 5 65号土坑全景(東から)
- 6 65号土坑遺物出土状態(南から)
- 7 70号土坑土層断面(北東から)
- 8 10号土坑全景(南から)
- 9 12号土坑全景(南から)
- 10 31号土坑全景(南から)
- 11 38号土坑全景(北西から)
- 12 40号土坑全景(西から)
- 13 44号土坑全景(東から)
- 14 47号土坑全景(南東から)
- 15 64号土坑全景(南から)
- PL. 51 上坑5(楕円形・その他の上坑)**
- 1 66号土坑全景(東から)
- 2 66号土坑土層断面(東から)
- 3 3号土坑全景(東から)
- 4 3号土坑土層断面(東から)
- 5 3号土坑逆茂木(東から)
- 6 16号土坑全景(南東から)
- 7 28号土坑全景(南から)
- 8 29号土坑全景(西から)
- 9 34号土坑全景(北東から)
- 10 55号土坑全景(南から)
- 11 61号土坑全景(南から)
- 12 69号土坑全景(南から)
- 13 69号土坑土層断面(西から)
- 14 72号土坑全景(東から)
- 15 73号土坑全景(東から)
- PL. 52 溝**
- 1 3号溝全景(南から)
- 2 3号溝土層断面(南から)
- 3 4号溝全景(南から)
- 4 4号溝土層断面(南から)
- 5 9号溝東側全景(西から)
- 6 10号溝全景(東から)
- 7 10号溝全景(西から)
- 8 10号溝土層断面(西から)
- PL. 53 その他の遺構**
- 1 集石全景(北から)
- 2 道全景(西から)
- 3 道全景(東から)
- 4 道土層断面(東から)
- 5 尾状溝状不明遺構全景(南から)
- 6 尾状溝状不明遺構・土坑部分全景(南東から)
- 7 尾状溝状不明遺構・土坑部分土層断面(南から)
- 8 尾状溝状不明遺構・2号溝部分全景(東から)
- PL. 54 縄文時代の住居出土遺物(1)**
- 27・39・49号住居
- PL. 55 縄文時代の住居出土遺物(2)**
- 49号住居
- PL. 56 縄文時代の住居出土遺物(3)**
- 49号住居
- PL. 57 縄文時代の住居出土遺物(4)**
- 68・80号住居
- PL. 58 弥生時代中期の住居出土遺物(1)**
- 19・24・28・32・34・36・37号住居



- PL. 59 弥生時代中期の住居出土遺物(2)  
38・46・67号住居  
弥生時代後期の住居出土遺物(1)  
1号住居
- PL. 60 弥生時代後期の住居出土遺物(2)  
1・2・3号住居
- PL. 61 弥生時代後期の住居出土遺物(3)  
3号住居
- PL. 62 弥生時代後期の住居出土遺物(4)  
4号住居
- PL. 63 弥生時代後期の住居出土遺物(5)  
4・6・7号住居
- PL. 64 弥生時代後期の住居出土遺物(6)  
7・8号住居
- PL. 65 弥生時代後期の住居出土遺物(7)  
8・9・10号住居
- PL. 66 弥生時代後期の住居出土遺物(8)  
10・11・12・13号住居
- PL. 67 弥生時代後期の住居出土遺物(9)  
14・15号住居
- PL. 68 弥生時代後期の住居出土遺物(10)  
15号住居
- PL. 69 弥生時代後期の住居出土遺物(11)  
15・16号住居
- PL. 70 弥生時代後期の住居出土遺物(12)  
16号住居
- PL. 71 弥生時代後期の住居出土遺物(13)  
17・18号住居
- PL. 72 弥生時代後期の住居出土遺物(14)  
18・20・21・22号住居
- PL. 73 弥生時代後期の住居出土遺物(15)  
22号住居
- PL. 74 弥生時代後期の住居出土遺物(16)  
23・25号住居
- PL. 75 弥生時代後期の住居出土遺物(17)  
25・26・29・30・31号住居
- PL. 76 弥生時代後期の住居出土遺物(18)  
33・35・43号住居
- PL. 77 弥生時代後期の住居出土遺物(19)  
43・44号住居
- PL. 78 弥生時代後期の住居出土遺物(20)  
45号住居
- PL. 79 弥生時代後期の住居出土遺物(21)  
45号住居
- PL. 80 弥生時代後期の住居出土遺物(22)  
45号住居
- PL. 81 弥生時代後期の住居出土遺物(23)  
45号住居
- PL. 82 弥生時代後期の住居出土遺物(24)  
45・47・50・55号住居
- PL. 83 弥生時代後期の住居出土遺物(25)  
55・56・57号住居
- PL. 84 弥生時代後期の住居出土遺物(26)  
57・60号住居
- PL. 85 弥生時代後期の住居出土遺物(27)  
61・63号住居
- PL. 86 弥生時代後期の住居出土遺物(28)  
66号住居
- PL. 87 弥生時代後期の住居出土遺物(29)  
66・69・70号住居
- PL. 88 弥生時代後期の住居出土遺物(30)  
73・76号住居
- PL. 89 弥生時代後期の住居出土遺物(31)  
76・85・86号住居
- PL. 90 古墳時代前期の住居出土遺物(1)  
59・65・71号住居
- PL. 91 古墳時代前期の住居出土遺物(2)  
72・75・77・83号住居
- PL. 92 古墳時代後期の住居出土遺物(1)  
51・52・53号住居
- PL. 93 古墳時代後期の住居出土遺物(2)  
53号住居
- PL. 94 古墳時代後期の住居出土遺物(3)  
54・58・62号住居
- PL. 95 古墳時代後期の住居出土遺物(4)  
62・64号住居
- PL. 96 古墳時代後期の住居出土遺物(5)  
64号住居
- PL. 97 古墳時代後期の住居出土遺物(6)  
74・78号住居
- PL. 98 古墳時代後期の住居出土遺物(7)  
78号住居
- 方形周溝墓出土遺物  
1号方形周溝  
壺棺墓出土遺物  
9号土坑
- PL. 99 壺棺墓出土遺物  
58・59号土坑  
土坑出土遺物  
1・2・7・30・43・44・51・52・54・66・68号土坑
- PL. 100 遺構外出土縄文土器(1)
- PL. 101 遺構外出土縄文土器(2)
- PL. 102 遺構外出土縄文土器(3)  
遺構外出土弥生土器
- PL. 103 植物珪酸体の顕微鏡写真
- PL. 104 長谷津遺跡から出土した炭化種実



## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

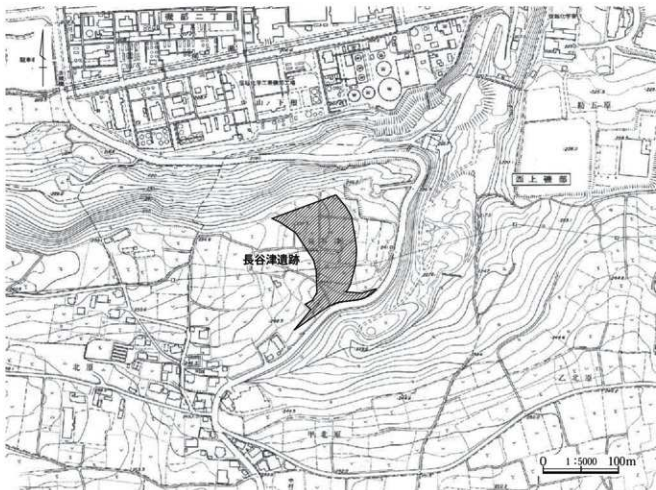
### 1 発掘調査に至る経緯

一般県道宇田・磯部停車場線は、群馬県西部の安中市磯部から南へ向かい、同市中野谷を経由して横野台地を縦断し、高田川を渡って旧妙義町(現富岡市)宇田に至る幹線道路である。この道路は県道194号線と呼ばれ、県道47号線一の宮妙義線と県道48号線下仁田安中倉測線を結んでいる。現道は幅員が狭く線形も悪いため交通の支障となっており、これを解消するため安中市磯部から旧妙義町境界まで延長2300mのバイパス建設事業が策定された。事業は平成7年から開始されているが、平成20年度から24年度の事業として磯部側600m部分の工事が計画された。碓氷川右岸の下位段丘から崖線を斜行して越え横野台地上に至る屈曲の大きな現道を、崖線付近をオ

ープンカットして屈曲の少ないバイパスを建設する計画である。この計画路線が横野台地北縁部にある安中市遺跡番号No388(旧市台帳No78)の縄文時代から平安時代にかけての集落遺跡として登録されていた長谷津遺跡を横切ることとなった(第1図)。

工事計画に伴い群馬県教育委員会文化財保護課が平成20年11月10日から12日にかけて試掘調査を行い、弥生時代を中心とする縄文時代から古墳時代までの大規模な集落遺跡が存在することを確認した。

平成21年3月18日、群馬県教育委員会文化財保護課による調整を元に財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団あての依頼を受け、平成21年3月31日、平成20年度地方道路交付金事業の繰越し事業として安中土木事務所長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で発掘調査委託契約が締結され、同年4月1日より9月末まで



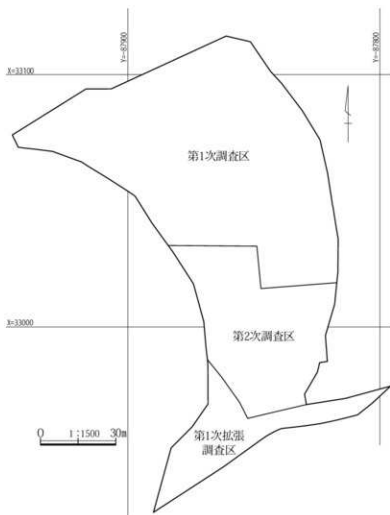
第1図 長谷津遺跡の位置(安中市都市計画図 No.47 1:2500 昭和60年発行を編集)

## 第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1次調査区として遺跡地北半部分7650㎡の発掘調査を行うこととなった(以下、第2図参照)。その後平成21年9月1日に遺跡地南側の第1次拡張調査区1270㎡分の追加調査を実施する契約変更を行った。

遺跡地南半の第2次調査区2550㎡については、第1区同様に群馬県教育委員会文化財保護課による調整を元に平成21年度地方特定道路整備事業として平成21年9月25日に安中土木事務所長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で発掘調査委託契約が締結され、同年11月1日から12月31日まで、第1次調査区の調査班担当がそのまま継続して調査することとなった。

実際の調査にあたって記録類は事業ごとに分けて管理したが、遺構番号などに調査区名称は用いず調査着手順に通し番号を付け、整理作業でもこの番号を踏襲した。第1次拡張調査区にあたる調査区南端の住居番号が離れているのはこのためである。



第2図 調査区概念図

## 2 整理事業に至る経緯

長谷津遺跡の出土遺物の水洗・注記および調査記録類の基本整理等は発掘調査を行なった平成21年度中に調査事務所にて完了し、これらは群馬県埋蔵文化財調査センターに保管されていた。

整理事業は発掘調査の終了した翌々年度の平成23年度に実施することとなった。一般県道宇田磯部停車場線安中工区社会資本総合整備(市街地整備)事業に伴う埋蔵文化財の整理業務として、安中土木事務所長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で委託契約を締結した。同年4月1日から1年間の期間で発掘調査報告書刊行までを完了させる単年度の事業である。

長谷津遺跡からは弥生土器を主体とする多量の出土遺物があった。報告書の年度内刊行を実現するため、必要とする人員配置を図り、作業方法も効率的に実施するよう努めた。

### 3 遺跡の立地と周辺の遺跡

#### (1) 遺跡の立地(第3図)

長谷津遺跡のある群馬県安中市は、関東平野の北西隅・群馬県西部に位置する。東側・北側を高崎市、南側を富岡市、西側を長野県軽井沢町と接している。市のほぼ中央部に碓氷峠付近を源とする延長37.6km、流域面積291km<sup>2</sup>の利根川水系一級河川の碓氷川が西から東へと流れ、烏川に合流している。

碓氷川は遺跡付近の流域では磯部面と呼ばれる下位段丘を形成している。下位段丘の北側は原市・安中台地と呼ばれる中位段丘面である。下位段丘の南側は横野台地または東横野丘陵と呼ばれる第三紀層を基盤とする広い上位段丘面である。台地上には所々に湧水があり、この

周囲に縄文時代前期までの小規模な集落が出現する。この湧水を源とした浸食により生まれた猫沢川のような小河川による開析谷が谷地田として利用されたようで、台地上の開析谷沿いには弥生時代から古墳時代にかけての集落が点在する。

横野台地北側の屋線下には豊富な伏流水や小河川から流下する水を集めた柳瀬川が碓氷川に平行するように東流している。周辺の水田は現在でも『磯部田圃』と呼ばれるが、耕作のための水利として古くから利用されてきたことが想定できる。

横野台地は、南縁近くの台地上で富岡市との市境があり、台地南側の屋線下は鑛川の作る下位段丘面となっている。屋線付近には妙義山を源とする鑛川支流の高田川が東流している。

長谷津遺跡は磯部面を北に見下ろす横野台地の北隅に位置している。遺跡周辺の台地は南北幅が2km近い最も



第3図 長谷津遺跡周辺の地形(国土地理院1:25000地形図「松井田」平成6年8月1日発行を使用)

幅広い部分にあたる。遺跡北側は横野台地と磯部面を両す急峻な崖線に接し、崖下との比高差は42m前後である。南側は無名小河川の形成した東へ低くなる緩やかな谷地形で、この小河川が遺跡東側で北側へ曲がり、南側よりやや深い谷地形となって磯部面へ繋がる。西側を除く三方が谷に面しており、遺跡地は防御機能を意識した集落適地と捉えることも可能であろう(第1図参照)。崖線付近に立つと西側に浅間山・妙義山、北側に榛名山、東側に赤城山を一望し、碓氷川と下位段丘面を見下ろし、対岸の原市・安中台地の眺望にも優れている。

調査地点は第1次調査区と呼んだ北側では東へ低い緩やかな斜面で標高は252～250mである。第2次調査区と呼んだ南側では南へ低い緩やかな斜面で南側ではやや傾斜がきつくなり、標高は250～243mである。北東隅が最も高く、南隅が最も低くなっている。調査前の遺跡地は主に畑地であった。

## (2) 周辺の遺跡(第4図、第1表)

ここでは長谷津遺跡で調査された縄文時代から古墳時代にかけての集落・墳墓等を理解するために、この時代を中心とした周辺の歴史的環境について述べてみたい。表中遺跡Noの2～12は原市・安中台地上、13～16は磯部面上、17～43は横野台地上の遺跡である。44以降は鑄川・高田川流域の遺跡である。またアルファベットで示したのは古墳群である。参考文献は375頁に記した。

**【縄文時代】** 本遺跡では縄文時代前期後葉の集落を調査し、中期前葉の遺物を採取しているが、横野台地上では周辺にも該期の遺跡の分布が多数見られる。前期の集落は加賀塚遺跡(26)・向原遺跡(30)・天神原遺跡(33)・道前久保遺跡(38)などがあるが規模は比較的小さい。唯一中野谷松原遺跡(32)が前期中葉から後葉にかけての大集落である。中期に入り集落数がやや増加するが、集落規模の比較的小さな遺跡が主体となることに差はない。天神原遺跡(33)では前期から後期にかけての大集落が展開し、後期まで続いている。横野台地を離れると碓氷川対岸の原市・安中台地では該期の遺跡が少ない。丹生湖周辺に前期集落が多く、上丹生赤子Ⅰ・Ⅱ遺跡(51)のように前期から後期まで続く遺跡もある。

**【弥生時代】** 縄文時代に引き続き、弥生時代も遺跡の分布は比較的濃密である。横野台地上の集落では、前期末

から始まり中期中心に広がる注連引原遺跡(35)は西毛地区を代表する該期集落で、猫沢川右岸の横野台地南縁付近に集落が展開する。台地北側では本遺跡東2.3kmにある荒神平・吹上遺跡(36)がある。中期後半から後期にかけて展開する集落で、磯部面を見下ろす本遺跡と類似した占地在注目される。中期では上入見遺跡(19)の再葬墓が古くから注目されている。

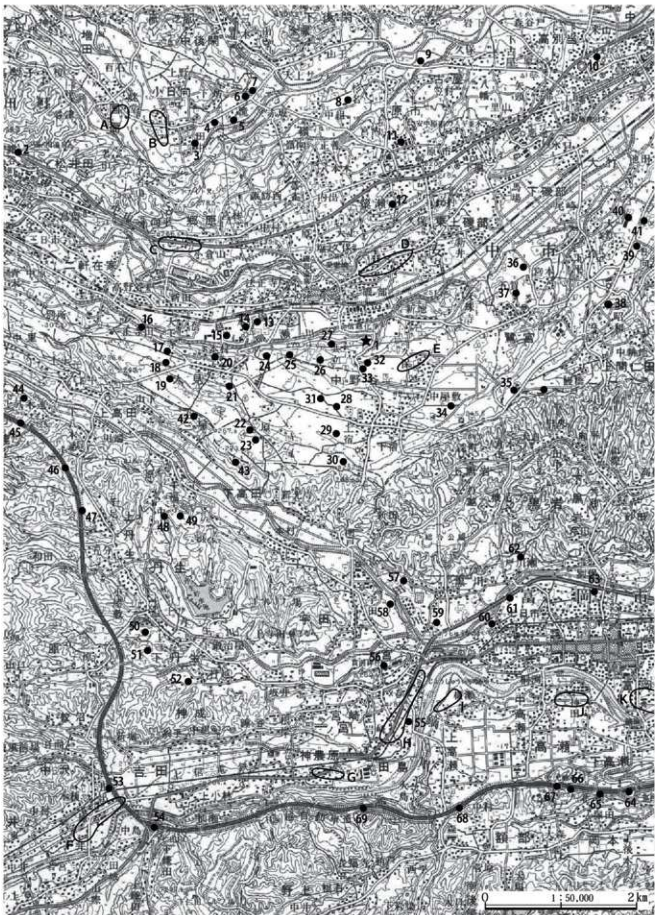
横野台地上のその他の弥生時代後期集落には中期から続く中野谷原遺跡(25)、後期になって出現する入見谷津遺跡(20)・上北原遺跡(24)など台地北側に集落が増加するようだ。

横野台地以外の後期集落としては原市・安中台地上小日向地区に集落が増える。特に小日向瀧遺跡(5)の住居から出土した板状の柱根らしい柱材が注目される。30cmの幅に対し厚さ13cmのクリ材で、本遺跡をはじめ多数の該期住居柱穴が細長い形状をしているが、柱材に板状材を使用する証左として重要な資料である。鑄川流域では右岸の台地上にある中高瀬観音山遺跡(67)が著名である。北側に崖線がある占地や尾状溝を持つ住居群など本遺跡と類似点が多い。また、富岡市北西地域の丹生湖周辺でも下丹生Ⅰ上遺跡(50)や上丹生赤子Ⅰ・Ⅱ遺跡(51)など多数の遺跡が調査され、上丹生屋敷山遺跡(48)のように環濠を持つ集落も存在する。富岡市南西地域の南蛇井増光寺遺跡(53)や高田川域の阿曾岡・権現堂遺跡(57)など該期大集落があり、この一帯には拠点的な弥生時代後期の集落が多数見られる。

**【古墳時代】** 横野台地上で本遺跡同様に弥生時代の集落が古墳時代前期まで継続して営まれる遺跡には、中期以後も続く諏訪ノ木遺跡(40)があり、古墳時代前期で途切れる集落には入見坂ノ上遺跡(17)があるが、これらのような例は少ない。中期に入って集落が出現し、後期の集落となる加賀塚遺跡(26)の例や、弥生時代の集落が一旦途切れ、後期に入って再び現れる入見谷津遺跡(20)・中野谷原遺跡(25)等が目立つ。

原市・安中台地では小日向地区で後期になると集落が増え、鑄川・高田川流域では上丹生赤子Ⅰ・Ⅱ遺跡(51)・南蛇井増光寺遺跡(53)等弥生時代後期と古墳時代後期の集落が重複する例が目立つ。

墳墓では本遺跡西側400mの崖線直上に磯部3号墳(27)があり、本遺跡付近まで古墳群が続く可能性がある。



第4図 長谷津遺跡周辺の遺跡(国土地理院1:50000地形図「富岡」平成7年4月1日発行を使用)

第1章 発掘調査と遺跡の概要

本遺跡北側の下位段丘面に磯部古墳群(D)・東側の中野谷古墳群(E)など周辺に古墳群は多い。また対岸に碓氷川流域最大規模の前方後円墳築瀨二子塚古墳(12A)がある。銅川右岸の北山茶臼山西古墳からは方格規矩鏡を出土している。

【奈良・平安時代】 律令期の町域は後名類聚抄記載の碓氷郡磯部郷にあたる地域と考えられる。

奈良・平安時代の集落は『評』刻書のある須恵器を出土した植松・地尻遺跡(10)、工人集落と思われる嶺・下原Ⅱ遺跡(8)、万年通宝の他に金属製品を多数出土している愛宕山遺跡(2)など原市・安中台地上に注目される遺跡が多い。

磯部面での水田は、人見正寺田遺跡(16)の調査で1108(天仁元)年の浅間山噴火に伴う軽石：浅間B軽石下

水田が確認できる。七日市六反田遺跡(61)など銅川流域の遺跡の他に、第4図の範囲北側に外れてしまうが原市・安中台地北側の九十九川流域では糸里地割に沿った浅間B軽石下水田が多数調査されている。磯部面での調査例は少ない。

江戸時代の中山道が原市・安中台地上にあることから、古代の東山道驛路もこの付近にあったと考えられている。近年、安中市・富岡市により横野台地では土地改良事業に伴う丁寧な調査が続けられ、人見枝谷津遺跡(22)・向原遺跡(30)・下高田原遺跡(42)など横野台地上の本遺跡西側・南側では広大な牧が経営されていたことが解明されつつあるが、人見東向原遺跡(23)などから牧に先行する直線道路跡も確認され東山道から分かれる伝路が想定されている。

第1表 周辺遺跡一覧

No	項目 遺跡名	遺跡の概要 その他の遺構・遺物										参考文献		
		縄文		弥生		古墳		奈・平		その他				
		早	中	後	飛	集	集	集	集	生	生			
1	長谷津遺跡	○	●			○	○	○	○					本報告の遺跡。
2	愛宕山遺跡					○						○		32
3	小日向田中遺跡					○				○				30
4	小日向心町田遺跡			※										配石遺構。
5	小日向龍遺跡					○								弥生時代後期住居柱穴より30×13cmの炭化材。
6	小日向遠地谷戸遺跡					○	○	○						30,35
7	小日向遠丸遺跡							○						30
8	嶺・下原遺跡											○	※	小鍛冶工人集落の可能性。
9	榎木畑遺跡											○		8
10	植松・地尻遺跡		●											大型壺立柱建物群。『評』刻書須恵器蓋。
11	清水遺跡			○									○	中世上野の焼成遺構。
12A	築瀨二子塚古墳									※				本遺跡対岸の碓氷川流域最大規模の前方後円墳。
12B	築瀨首塚古墳							○						※二子塚西に隣接する円墳。墳丘利用の中世墳墓。
13	西裏遺跡													24
14	松井田工業団地遺跡		●											E区 古代磯部の中心部と推定される遺跡群。
15	松井田工業団地遺跡													B・D区他
16	人見正寺田遺跡								※				○	方形周溝類は時期不詳。A s - B下水田。
17	人見坂ノ上遺跡			○				○						
18	人見西原遺跡			○				○						
19	上人見遺跡					※								弥生時代中期の再葬墓。
20	人見谷津遺跡							○						
21	人見東原・Ⅱ遺跡													
22	人見枝谷津遺跡			○				○	○					古代牧との関連が想定される溝遺構
23	人見東向原遺跡												○	古代の道路遺構。
24	上北原遺跡													
25	中野谷原遺跡			●										19
26	加賀塚遺跡		○	○	○			○	○	○				26,31
27	磯部3号墳													直径20mの円墳。石製製造品等出土。
28	砂押遺跡			○										縄文時代層状の集落。
29	大道南遺跡			○										18,19
30	向原遺跡			○									○	古代牧に伴う溝。
31	中島遺跡			○				○					○	古代牧に伴う溝。
32	中野谷松原遺跡			○				○						12,13
33	天神原遺跡			○	○	○	○							環状列石。
34	中原遺跡			○		●							○	古代牧に伴う溝と土橋。
35	注連引原・Ⅱ遺跡			○									○	弥生時代前期末からの集落で周辺最古の弥生期集落。
36	荒神平・吹上遺跡			○									○	10



## 3 遺跡の立地と周辺の遺跡

No	項目 遺跡名	縄文				弥生		古墳			奈・平		その他	遺跡の概要 その他の遺構・遺物	参考文献
		早	前	中	後	前	後	前	中	後	生	産			
39	蔵畑遺跡														21
40	諏訪ノ木遺跡														23
41	下原・養神遺跡														22
42	下高田原遺跡Ⅳ												※	古代牧に伴う溝。	39
43	下高田上原遺跡												※	古代牧に伴う溝。	39
44	八木連西久保遺跡													銅片出土。	
45	八木連野沢遺跡														67
46	八木連常畑遺跡														67
47	上丹生千足遺跡														40
48	上丹生屋敷山遺跡													弥生時代後期の環壕集落。	40
49	上丹生早道場遺跡														40
50	下丹生藤ノ上遺跡														40
51	上丹生赤子Ⅰ・Ⅱ遺跡														40
52	下丹生前畑遺跡														40
53	南蛇井増光寺遺跡													縄文時代中期・弥生時代後期・古墳時代後期など広汎な時期で地域を代表する大集落。	44, 59, 61, 62, 64 ~ 66
54	下鎌田遺跡													縄文時代には他に膨大な土坑群。	68
55	一ノ宮本宮・郷上遺跡Ⅱ												※	古墳時代前期。※玉造り工房跡。	41, 49, 50
56	貫前神社													※ 上野国一ノ宮。	
57	阿曾岡・権現堂遺跡													高田川流域の弥生時代後期～古墳時代前期および古墳時代後期拠点集落。	43
58	東八木遺跡														43
59	黒川小塚遺跡													前方後方墳ほか。	48, 53
60	七日市観音前遺跡													弥生時代中期前半の上器群。	42
61	七日市六反田遺跡												※	A s - B 下水田。	54
62	黒川御籠堂遺跡														45
63	七日市小沢西遺跡														52
64	内匠日影岡地遺跡														60
65	下高瀬上之原遺跡												※	※墳輪郭。	63
66	下高瀬寺山遺跡														65
67	中高瀬観音山遺跡													弥生時代後期大集落。尾状溝を持つ住居あり。	64
68	北山茶臼山西古墳												※	※前方後方墳。仿製方格規矩籠、仿製四眼籠出土。	57
69	野上堀之入遺跡												※	※灰窯。	58
A	国衛古墳群														
B	小日向古墳群														
C	郷原古墳群														
D	磯部古墳群														
E	中野谷古墳群														
F	南蛇井古墳群													吉田3号墳など。	46
G	神農原古墳群														
H	一ノ宮古墳群													前方後円墳ほか。	
I	横瀬古墳群														
J	横瀬古墳群													高瀬24号墳ほか。	47
K	芝宮古墳群													富岡68号墳など。	51

縄文・弥生の項で●は掘穴住居の確認はないが、土坑等の確認や多量の遺物出土のあるものを表す。○は大規模な遺構の確認のあったことを示し、集落であれば掘穴住居では大よそ30軒以上の調査である。※は備考欄に説明を加えている。\*はその他若干の痕跡が見られたことを表す。参考文献は375頁に記した。

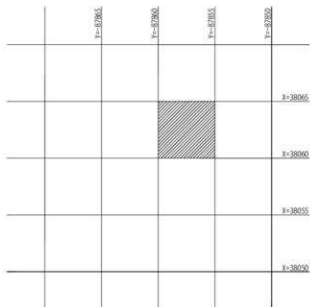
## 4 調査の方法と経過

### (1) 遺跡の呼称と調査区の設定

長谷津遺跡の調査対象地は、平成3年に安中市教育委員会が発行した『安中市の遺跡』に登録されている周知の包蔵地の一部であった(旧市台帳No78)。

平成20年11月10日から12日にかけて群馬県教育委員会により試掘調査が行なわれ、縄文時代から古墳時代にかけての集落があることを確認し調整の後、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行うこととなった。従来、当事業団では遺跡の名称について大字と小字名を組み合わせて遺跡名を設定しているが、本遺跡では安中市で登録されていた当該小字名に由来する呼称『長谷津遺跡』を継承した。

本遺跡調査対象地は途中で道路や水路など調査区内を画す施設がなかったが、調査契約に沿って調査区を北側より第1区・第2区・第1区拡張区を設定し(第2図参照)、事務的管理を行った。しかし遺構番号は調査区に係わらず連続して付けたもので、本報告でも調査地区の名称は付記せず、個別遺構番号のみで呼称している。



第5図 グリッド概念図

### (2) グリッドの設定・表示と呼称(第5図)

調査における座標表示には国土座標IX系(新国土座標系=世界測地系)を用いた。遺跡内の地点呼称はこのX・Y座標による下3桁の数字をもって表わした。これに基づき方眼グリッドを設定し個別遺構掘削前の遺物取り上げや遺構記録に備えた。第5図に例示するようにX=38,060、Y=-87,855の座標値を060-855と表示し、この位置の北側と西側へ広がる5m四方を060-855グリッドと呼称した。

報告書内挿図の座標表示もこの呼称方法によるが、縮率1/60以下の個別遺構図には1m単位の座標値を用いた061-856のような表示が含まれ、加えてビットなど1/40以下の小縮率図には10cm単位の表示で061.1-856.1のような表示を行った場所もある。

報告書本文や表における各遺構の位置呼称には上記呼称に準じて1m単位でX=051、Y=-851のような座標値を用いたグリッド呼称を行っている。

### (3) 調査の方法と経過

予想される主体的遺構が竪穴住居であったこと、試掘で遺構確認面上の覆土が浅く遺物包含層がほとんど見られなかったことから、調査はルーム面上まで機械により土砂を除去し、その後ジョレンによって遺構確認を行うという手順をとった。4月の調査開始とともに、バックホーにより第1区調査範囲の北側より表土を掘削し、廃土を第2区へ運んだ。4月22日より住居・方形周溝墓・土坑・ビット等の掘削に着手している。

遺構の調査では竪穴住居は住居壁に直交する2本のセクションベルトを残すことを原則として掘り進めた。床面までの調査終了後、床下にもこのベルトを残して掘り方調査を行った。方形周溝墓では四方の溝にそれぞれ土層記録用のベルトを残した。土坑やビットの調査では半截して土層断面を記録したのち、全体を掘り下げた。また焼失住居が確認されたが、炭化材はサンプルを採取し、樹種同定に備えた。また、窆内等の埋没土もサンプルとして採取し、一部水洗を行って炭化種実の存在を確認し種実同定作業を委託した。

遺構の測量は、断面図は調査に従事した作業員が手実測し、平面図は委託した測量業者が電子平板により実測

した。等高線は10cm間隔で記入した。手実測図面類は委託測量者によりデジタル化を行った。遺構写真は調査担当者がデジタル写真と6×7版アナログ写真を併用して撮影した。

6月には弥生時代後期の尾状溝をもつ住居の存在が明らかになり、遺跡の重要性を把握し当事業団の弥生時代研究部会員への現場視察を要請した。これを元に第1区弥生時代面の集落・方形周溝墓や壙棺墓を中心に現地説明会を計画し、7月18日(土)に開催した。その際には駐車場の確保などで信越化学株式会社安中工場をはじめとする地元各位からの多大な協力を得た。

8月4日にラジコンヘリを使った調査区北側の全景撮影を行い、その後中断していた各住居の掘り方調査を再開した。

ローム上面での遺構調査終了した地点から、8月19日以降第277図のような配置のグリッドを設定して旧石器時代の調査を行ったが、遺物の発見はできなかった。

9月には第1区の調査と併行して第1区拡張区の試掘を行い、中央から東側で古墳時代住居を確認し表土掘削後に掘り下げた。ただし全体に地山上面は削られている部分が多く、特に傾斜のきつい西側では遺構が存在しないことを確認し、トレンチ調査後の拡張は行わなかった。11月には廃土と第2次調査区掘削土を重機により北側へうって返しを行い、残り地点の調査を行った。第2区では古墳時代前期・後期の住居が多く、集落の性格は第1区と同様ではなかった。住居掘り下げ手順は第1区同様2本のセクションベルトを残し、これに沿った掘り方調査まで行った。10号溝は古墳周溝であることを想定し、主体部痕跡の発見に努めたが確認できなかった。第2区ローム上面の遺構調査終了後、この地点でも旧石器時代のグリッド調査を12月22日まで継続したが、遺物は発見できなかった。

遺物等の搬出やプレハブ事務所の解体等、12月内に撤収作業を終了させた。調査の終了と前後して出土遺物の水洗・注記業務を委託した。

#### (4) 基本土層

長谷津遺跡では遺構確認面覆土がごく浅かったため、ローム上面に関しては遺跡内での独自柱状図は用意せず、安中市教育委員会が横野台地上の遺跡調査で使用する以下のような基本土層を援用した。

- I a層：黒色土層、As-Aの混土層。
- I b層：灰白色軽石層、As-Aの純層。
- II a層：黒色土層、As-Bの混土層。粘性土。
- II b層：灰褐色軽石層、As-Bの純層。
- III層：黒色土層。粘性土。

このうち長谷津遺跡の遺構確認面上の覆土はほとんど現在の耕作土であるI a層で、層厚は20～30cmであった。I b層・II b層の鍵層は遺構埋没土内で一部確認できたのみである。弥生時代・古墳時代の遺構はIII層下で確認できるが、本遺跡にはIII層土は遺構内表層を除きほとんど見られなかった。

IV層以下の基本土層は旧石器時代の試掘調査時に測量した柱状図(第278図)による。ここでは火山灰分析を委託して、土層記録の正確性確保に努めた(本文295頁)。

## 第Ⅱ章 発掘調査の記録

### 1 長谷津遺跡の特徴と遺構の概要

#### (1) 遺跡の特徴

長谷津遺跡は碓氷川上位段丘である横野台地の北縁にあり、北側に碓氷川下位段丘である磯部面に至る高低差40mを超える急峻な崖線に接している。遺跡南側は西側から続く浅い開析谷に接し、この開析谷は調査地点の南東側で北方へ屈曲し、深度を増しながら磯部面に達している。遺跡は西側から続く舌状の台地上面を覆うように位置している。安中市遺跡地図(文献3)では東西幅約280mの規模で長谷津遺跡の範囲が想定されているが、そのうち東隅の一部を除く東側60m前後の範囲が今回調査された部分にあたる。南北の範囲は北側崖線前の集落・墓域の限界、および南側谷地形に至る傾斜変換点を含む全容が把握できたと考えている。

開析谷には湧水があり、集落の用水はここで確保できよう。調査前の開析谷に水田は見られなかったが、調査区南東側付近で谷下部の平坦面が幅15m前後あり、弥生時代以降、谷地水田として利用されていたと思われる。

調査区を囲うように谷に沿った道は横野台地と磯部面を繋ぐルートとして古くから使われていたと想定される。

#### (2) 遺構の概要

長谷津遺跡の調査では縄文時代前期、弥生時代中期後半から後期、古墳時代前期と後期および江戸時代の居住域と墓域を中心に多様な遺構が確認できた。遺跡全体の遺構配置については付図を参照されたい。

縄文時代の住居は5軒で調査区全体に散在している。いずれも縄文時代前期後葉の住居で、出土遺物は黒浜・有尾・諸磯aの時期に集中している。土坑では3基が断面プラスコ状と呼ばれる貯蔵か状の施設と考えられるが壁面は崩落した部分が多く、あまり明瞭ではない。

弥生時代中期後半の住居は10軒を調査したが浅く不明瞭な住居が多く、明瞭ではない。調査できた範囲ではX=060、Y=-860付近を中心に、半径30mほどの環状に分布している。調査区中央東側の弥生時代後期住居埋没

土内に弥生時代中期の遺物が多量に混入する例が多く、集落が東側に広がっていた可能性もある。

弥生時代後期の住居は55軒を想定した。住居全体の過半を占める。ただし住居と設定するには疑問の残る遺構や、時期不明の遺構も含まれる。また、該期住居間の重複は少ないが、建て替えの痕跡が残る住居は多い。

住居の規模は一律でなく、計測値では長軸長が12mから3m以下のものまであり、尾状溝の付くもの、張り出し部を有すものなど形状も多様である。

住居は調査区の南隅、X=990ライン付近以南と北隅崖線付近を除いた全域に広がっている。ただし尾状溝の付くものは弥生時代中期の集落付近にあり、小型で住居長軸方向を東西に持つものは中央西寄りに多いなど、住居形態によって分布に差が見られる。

この時期の壺棺墓である土坑を3基調査したが、北側の9号土坑は集落の北隅のさらに北側に、南側の58・59号土坑は集落の南隅付近に位置し、集落内を避けて分布している。その他北側9号土坑周辺では、時期は明確でないが該期の施設と考えた礫床墓3基等を調査した。

古墳時代前期の住居は8軒で調査区の中央西寄りから南側に分布している。水田可耕地である遺跡南側の開析谷に接した位置である。古墳時代の集落から離れた調査区北寄りに方形周溝墓が2基ある。2号方形周溝墓は時期が明瞭ではないが、1号方形周溝墓では溝内で該期遺物を確認している。

古墳時代後期の住居は9軒で、古墳時代前期集落同様調査区の南側に分布している。一辺5mを超えるやや大型住居と一辺4.3m以下の中型・小型住居に分かれそうである。調査区中央西寄りにある10号溝は古墳周溝の一部となる可能性がある。埴輪等の遺物や主体部痕跡など直接古墳を想定する資料は得られなかったが、上面に1108年降下の浅間山崩落源テラスA-Bがあり古墳周溝と考えたい。埴丘が想定される部分に古墳時代前期の住居があるが、古墳時代後期の住居は周辺に見られない。

その他にAs-B降下以降と確認できた土坑や1783年のAs-A降下以前と確認できた道・溝等を調査しているが、大半の土坑やピットは時期決定の資料が得られていない。

## 2 竪穴住居

### (1) 概要

本遺跡では調査範囲のほぼ全域から縄文時代から古墳時代後期まで87軒の竪穴住居を調査した。

調査範囲の北側は崖線に接しており、集落の北側を捉えている。東側は比較的深い谷地形に近く、とくに北東側は傾斜がきつくなり始めており、集落の縁辺付近まで調査できたと考えられる。南側は浅い谷地形だが調査区境付近では傾斜がきつくなっており、集落の縁辺をほぼ確認できたようだ。西側へは緩やかに高くなる台地が続き、集落もこのまま西側へ続くはずである。

87軒の竪穴住居の中には1軒の住居として扱っているが複数の住居重複の可能性があるもの、反対に複数の住居として扱っているが1軒の住居の建て替えである可能性のあるもの、住居とするには問題のあるものも含まれている。

時代ごとの住居軒数は縄文時代前期5軒、弥生時代中期後半10軒、弥生時代後期55軒、古墳時代前期8軒、古墳時代後期9軒である。竪穴住居については縄文時代中期から弥生時代中期前半にかけて長い断絶があり、次いで古墳時代中期にも短い断絶がある。奈良時代以降の遺物はほとんど見られず、古墳時代後期以降、周辺には古代集落の痕跡は見られなくなる。

### (2) 縄文時代の竪穴住居

本遺跡から採取された縄文土器は草創期から後期まで見られるが、縄文時代の住居と確認できた遺構は5軒でいずれも前期である。調査区全体に散在するが、やや南側に偏って分布している。すべての住居が後出する住居と重複し、49・80号住居以外の3軒は残存状態がきわめて悪い。この他に住居と同時期と思われる土坑も3基確認できる。

本遺跡からは縄文時代前期後半の土器に次いで、中期初頭五領ヶ台式土器が多数採取されており、周辺に該期の集落が存在する可能性がある。

#### 27号住居(第6～8図 PL 2-1・2, 54 遺物観察表323頁)

調査した縄文時代の遺構の中で最も西側にある住居で、南側は26号住居に床面を広範囲に削られている。建て替えもしくは重複する2軒の住居である。後出する長軸南北方向の27A号住居(A住居)、先出する正方形に近い27B号住居(B住居)と呼称した。

**位置:** X=043~048, Y=-877~884グリッドにある。

**規模形状:** A住居は長軸4.85m、短軸は南側4.15mで、北辺が南辺より80cm短い台形を呈している。B住居は長軸4.85m、短軸4.75mで、東辺と西辺を結ぶ軸がわずかに長い正方形に近い形状である。

**埋没上・壁:** 東側の断面調査では両住居の重複を明確にできなかったが、南側・西側の断面よりA住居が後出すると判断した。壁高は最も深い部分がA住居の北辺で35cm前後、B住居の西辺で40cm前後を測る。

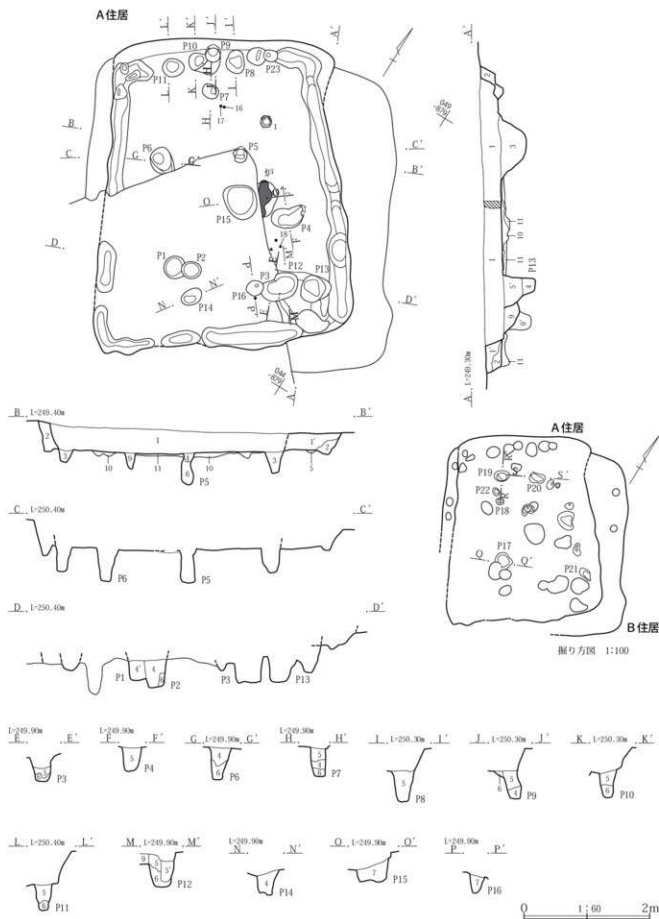
**方位:** A住居N-31° W。

**面積:** A住居17.46㎡。 B住居19㎡前後か。

**床面:** A・B両住居で床面の高さはあまり変わらない。A住居は中央がやや窪む傾向があり、壁際より3~8cm低くなっていた。B住居単独の床面として確認できる北・東辺では5cm前後の凹凸があるが傾斜はなく、A住居の壁際床面とほぼ同レベルにある。A住居の床下のみ貼床状の固くしまった浅い黒褐色土層(10層)が見られるが、A住居構築時にB住居の床面を新たに削ったものか、B住居に伴う掘り方なのか判断できなかった。

**壁溝:** A住居では北辺下以外で深い壁溝がっている。床面からの深さは東辺32~40cm、西辺11~37cm、東辺では部分的に推定50cm前後に達する地点もある。B住居では26号住居と重複する南西隅付近では痕跡が残存しないが、浅い壁溝が南辺以外に廻っている。深さは東辺で5~10cm、北辺で2~9cm、西辺で4~13cmを測る。

**ピット:** A・B各住居が重複する部分で多数のピットを確認しているが、A住居の貼床層を切っていてA住居に伴うことが確認できるP5・6・12の3基以外、帰属は不明確である。P11・6・1または2が6本主柱構造の西側を構成し、P8・3が東側に対応する主柱穴と考えられる。P14・16は南側主柱穴の建て替えの可能性がある。壁柱穴がA住居P8~11・23とB住居P24・26・27があるが、住居北側に偏って見られる。平面図上にある番号を付けなかったその他のピットは、深さ10cm以下の



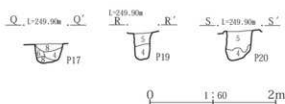
第6図 27号住居(1)

## (2) 縄文時代の竪穴住居



## 27号住居土層説明

- 1 黒期10YR3/2 A住居埋没土。砂、ローム粘を含む。しまり良い。1'はB住居埋没土だが、1層との明確な分類ができなかった。
  - 2 灰黄期10YR4/2 B住居下層埋没土。砂、ローム粘、ロームブロックを含む。しまり良い。
  - 3 黒期10YR3/2 A住居埋没埋没土。ローム粘を多く含む。しまり良い。
  - 4 ぶい黄期10YR4/3 ローム土を多く含む。砂、黒褐色土を含む。4'は灰化物が混じる。
  - 5 黒期10YR2/3 砂、ローム粘、白色輝石を含む。5'は下層にローム土が混じる。
  - 6 ぶい黄期10YR5/4 ローム土主体。砂、黒褐色土を含む。
  - 7 暗黒10YR3/4 砂、ローム土が混じる。しまり悪い。
  - 8 暗10YR4/6 砂、ロームブロック、白色輝石を含む。
  - 9 暗黒10YR3/4 砂、ローム粘の混入が多い。9'は混入物少なく、黒色味をおびる。
  - 10 黒期10YR3/2 凝り方埋没土。砂を含む。固くしまっている。
  - 11 暗灰10YR4/1 砂、ローム粘を多く含む。しまり悪い。
- ※ P27は7層。



## 27A号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	38×(30)×31	主か
2	32×26×44	主か
3	61×42×41	主
4	48×30×42	
5	22×22×45	
6	(42)×34×52	主
7	28×22×48	
8	48×29×51	主
9	22×22×44	壁
10	(26)×22×40	壁
11	37×30×43	主
12	-×-×39	P3の掘り替えか

No	長径×短径×深さ	種類
13	42×38×49	
14	36×23×40	主か
15	60×52×37	
16	28×23×37	主か
17	(48)×(46)×(26)	
18	(22)×(18)×(27)	
19	(41)×(29)×(29)	
20	(42)×(22)×(50)	
21	(32)×(20)×(30)	
22	(22)×(17)×(32)	
23	22×19×31	壁

## 27B号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
24	19×16×56	壁
25	47×35×50	
26	23×18×28	壁
27	19×14×30	壁

第7図 27号住居(2)

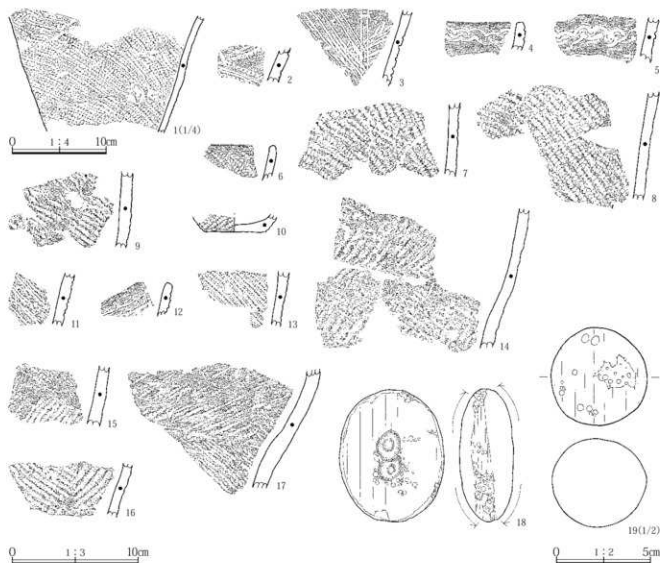
不明瞭な窪みである。

**か:** A号住居に伴うと思われる地床<sup>か</sup>が住居中央東寄りで見られる。西側半分を後出する26号住居に削られているが、<sup>か</sup>の規模は径55cm、深さ3cmを測り、底面は被熱により赤変硬化していた。<sup>か</sup>の位置はB住居のほぼ中央にあたり、<sup>か</sup>がB住居からA住居へ継続して使われていた可能性もあろう。

**その他:** 弥生時代後期の26号住居に先出している。

**遺物:** 出土地点を確認できたのはA住居のみで、B住居に確実に伴う遺物はない。1は底部を欠くが、<sup>か</sup>の北西

側90cmの位置に床を若干掘り込んで正位に置かれ、埋設土器のような状態で出土した。焼土や被熱面は確認できず、<sup>か</sup>体土器ではないと考える。16がP7東脇の床上9cmの高さで出土した。2・8・13が壁溝内から出土しているが、詳細な溝位置についての記録がなく、A・Bどちらの住居壁溝に伴うものか判別できなかった。石器は12点を確認し、このうち2点を図示した。凹石18が住居南東寄りの床直上で、研磨具19がP9内で出土している。**所見:** 出土遺物の大多数が縄文時代前期黒浜式である。住居形状もこの時期の遺構として問題ない。



第8図 27号住居出土遺物

**39号住居** (第9・10図 PL 2-3、54 遺物観察表323頁)

浅い住居が方形周溝墓や他の住居に大きく壊され、きわめて分かりにくくなっている。

**位置**：X=072~077、Y=-842~848グリッドにある。27号住居の北東側へ30m以上離れた位置にある。

**規模形状**：直線的な南東辺が確認でき、方形プランの住居が想定される。南東辺は長さが4.8m以上あり、南東辺から北西辺までの軸長は、確認できているピットがすべて本住居に伴うものであれば4.6m以上となる。

**埋没土・壁**：部分的に観察できた埋没土は暗灰黄色土で焼土や炭化物の混入のない不明瞭な土だった。唯一確認できた南東壁は最も深い部分でも壁高は5cmしかない。

**方位**：N-40° W前後か。

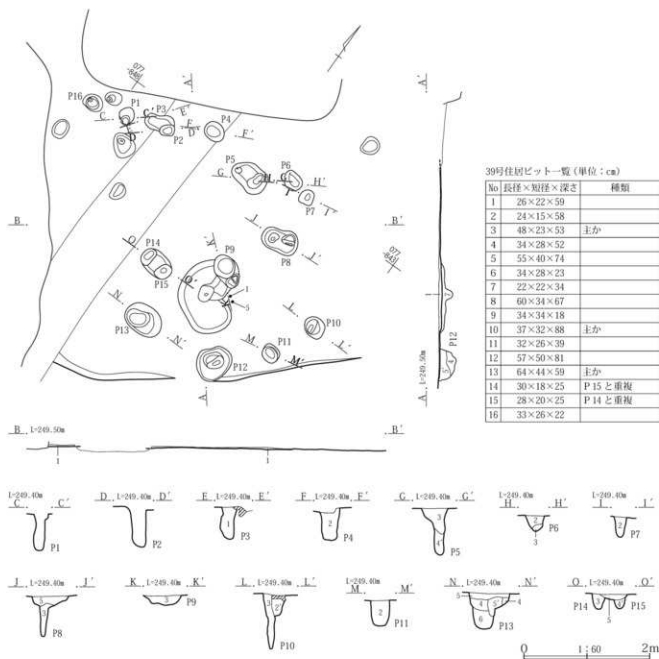
**床面**：焼土・灰等の散布や強い踏み固めのない不明瞭な

床面である。地山の傾斜に沿って北側へ低く緩やかに傾斜し、南側隅付近と5cmの比高差を生じている。浅い掘り方が部分的に見られ、住居埋没土と差のない暗灰黄色土が埋め戻されている。

**ピット**：主柱穴として遜色ない深さ50cm以上のピットにはP 2~5・8・10・12・13がある。このうちP 3・10・13などが6本主柱を構成すると考えられる。P 5・8・9など重複するピットも多く、建て替えのあった可能性が高い。小規模なピットがこれ以外にも多数あるが、深さ10cm以下の不明瞭な窪みにはピット番号は付けなかった。本住居に確実に伴う施設か不明である。

**か**：明確なかは確認できない。南東壁寄りP 9南側に床面からの深さ3cm前後の不整形をした窪みがあるが、焼土等の混入はなくかとは考えにくい。住居西側は試掘調





## 39号住居土層説明

- 1 期灰層2.5M/2 わずかに残った住居床面上埋没土。3P、ローム粒を散見する。しまり良い。
- 2 黒層101R3/1 3P、ローム粒を含む。しまり良い。2'はローム粒の混入が多い。
- 3 灰黄層101R4/2 3P、ローム粒を含む。
- 4 に近い黄層101R5/3 3P、ローム粒を多く含む。4'は混入物やや少ない。

- 5 期灰101R4/1 やや砂質土。混入物の少ないしまりやや強い層。5'はローム粒の混入がやや多い。
- 6 に近い黄層101R5/4ローム土主体。灰褐色土ブロックを含む。
- 7 期灰層2.5M/2 層の埋没土。3P、ローム粒を含む。

第9図 39号住居

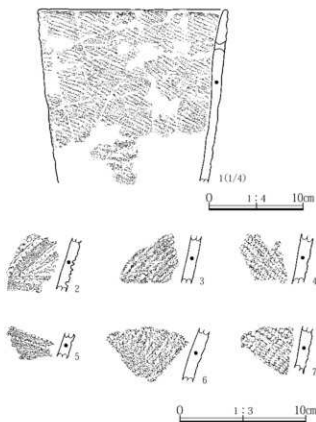
査時の重機によるトレンチによって床面を2~5cm削っている。掘り込みのごく浅い、被熱面もほとんどないがであればここで失った可能性もある。

**その他:** 2号方形周溝墓・弥生時代後期の5号住居に先出する。壁溝・壁柱穴は確認できない。

**遺物:** 図示できた土器は7点のみで、1は南東壁寄りの

窪み脇床上3cmの高さから出土した破片が周辺の破片と接合した。本住居に確実に伴う遺物と考えた。それ以外はすべて小破片で、5は1の脇から出土し、他は出土位置の記録のない破片である。石器類の出土はなかった。

**所見:** 出土土器の大多数が縄文時代前期黒浜式で、この時期の住居と考えられる。



第10図 39号住居出土遺物

**49号住居** (第11~16図 Pl. 2・4・5, 54~56 遺物観察表323頁)

南東隅が調査区域外となり、全容を明らかにできていない。壁溝が南・北側と東側南半で二重になっており、長軸方向を中心に拡張していることが分かる。拡張後の外側をA住居、拡張前の内側をB住居と呼称した。

**位置**：X=014~024、Y=-817~825グリッドにある。

**規模形状**：A住居は長軸9.4m、B住居は長軸7.2mで、短軸は両住居が共有する北側で6.6m前後を測る。A・B住居どちらも残存する部分では各隅が直角に近く、各辺は直線的で、唯一湾曲する東辺も壁の崩落が原因のようで、本来は直線的な壁であったと思われる。整美な長方形を呈していたと想定される。

**埋没土・壁**：西壁際の一部に人為的埋戻しのような不自然な埋没土層が観察できるが、全体では自然堆積の様相を示している。壁は東辺の北側を除いて直線的に立ち上がる部分が多い。全体に深度のある住居で壁高は浅い南辺で50cm前後、他辺では70cm以上を測る。

**方位**：N-18°W。

**面積**：A住居52㎡前後。 B住居38㎡前後。

**床面**：南側へ低く傾斜していて、B住居で北隅と南隅で10cm前後、A住居の北壁直下と南壁直下では18cm前後の

比高差がある。掘り方はなく、ローム掘り下げ面をそのまま床としている。

**壁溝**：A・B両住居とも調査範囲では全周している。南・北両壁下で外側へ拡張していることが分かる。南辺のみ外側の壁溝が壁直下から20cm以上離れており、さらにもう1回の拡張があった可能性もある。東壁南側で壁溝は二重になっているが、この部分での新旧を把握する断面観察を持たない。住居は拡張する方向で作り替えているので、外側を後出する壁溝と考えたい。壁溝の床面からの深さは一律ではないが40cmを超える部分が多く、B住居の南北両溝には50cmを超える個所もある。

**ピット**：6本主柱(P1~6)の住居である。P1は土坑状の窪みと重複しているが、両施設の先後関係を確認する断面観察を持たない。P6には数次の掘り替え痕跡が残る。南・北壁溝内には壁柱穴があり、きわめて深いものが多いが、壁溝自体が深いのであまり目立たない。壁溝内には他にも多数の小ピットがあるが、壁溝底面からの深さ10cm以下の不明瞭な窪みにはピット番号を付けなかったが、壁柱穴の可能性もある。

**か**：北側の主柱穴間(P2・P3間)にある。長軸102cm、短軸66cm、深さ6cmの不整形円形を呈す。かは1基のみでA・B両住居ともこのかを使ったと考えられるが、B住居の場合、壁際からの距離は70cm前後しかない。か南側に枕石の可能性のある23cm×15cmの扁平な河床礫が据えられており、弥生時代後期の住居に似た形態である。

**その他**：古墳時代後期の51号住居に先出する。

**遺物**：出土遺物は本遺跡縄文時代の住居では際立って豊富だった。土器は72点を図示した。器形が復元できるまで接合できた土器は1~4が有尾式、5~13が黒浜式に、破片は14~40が有尾式、41~72が黒浜式にあたる。

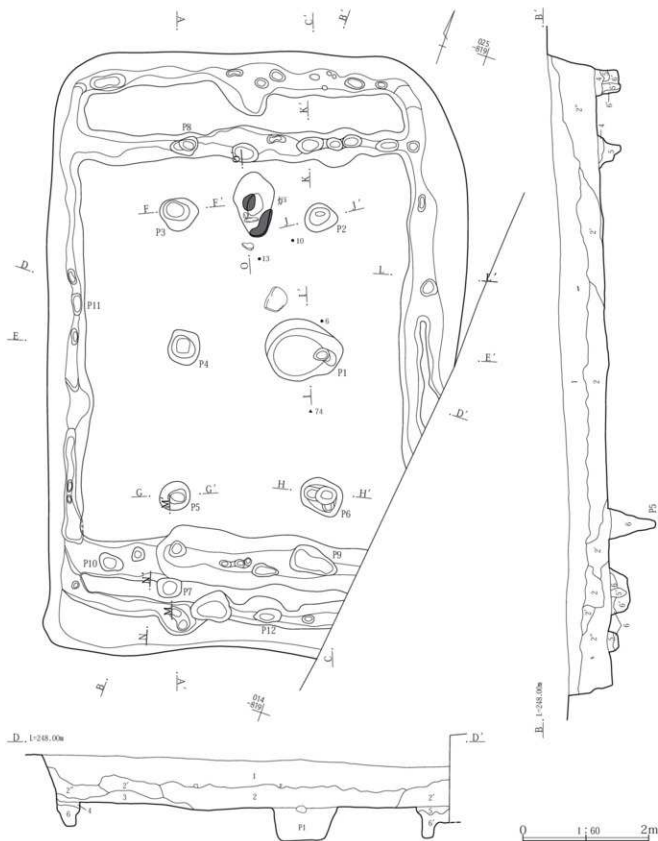
10・13が埴輪南側の床直上から出土した本住居に確実に伴う遺物である。61は埋没土内の破片が住居埋没土破片と接合している。42・55はA住居に伴う壁溝内の出土である。他は埋没土内の出土であるが、これらも接合資料が多かった。2~4は同一個体で、この他にも27~29や35・36および43~46がそれぞれ同一個体と思われる破片である。図示した以外に約1100点の破片が出土した。

石器も剥片・石核など出土数がきわめて多く65点を確認し、このうち13点を図示した。石鏝74が住居中央南寄りの床12cmの高さから、凹石83がA住居北側の壁溝内

から出土している。他は埋没土内の出土であった。

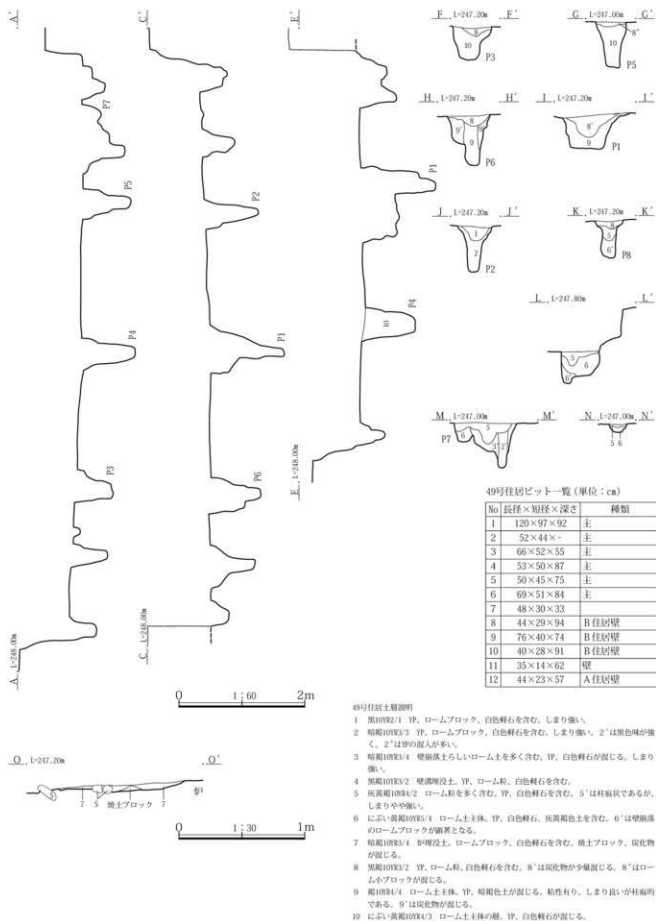
所見：出土遺物は縄文時代前期の有尾式から黒浜式にか

けての土器だが、特にA住居に該当する土器は黒浜期に集中している。



第11図 49号住居(1)

第2章 発掘調査の記録

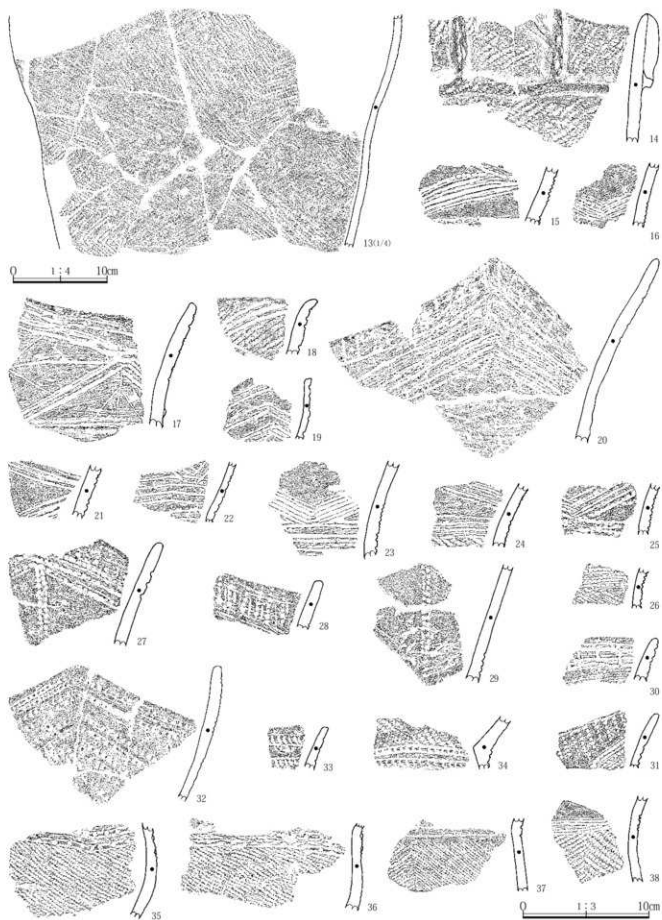


第12図 49号住居(2)

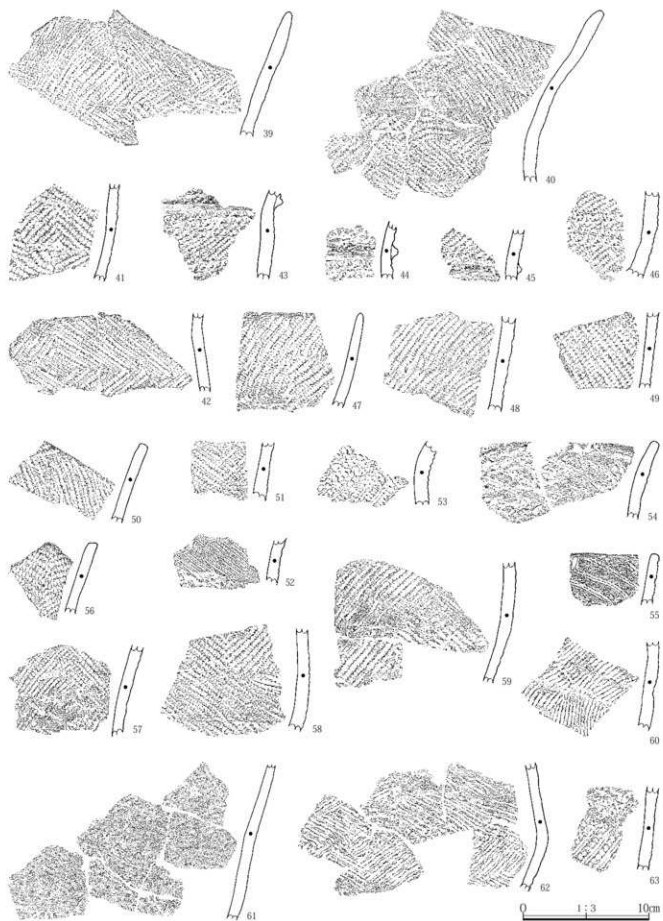
(2) 縄文時代の竪穴住居



第13図 49号住居出土遺物(1)

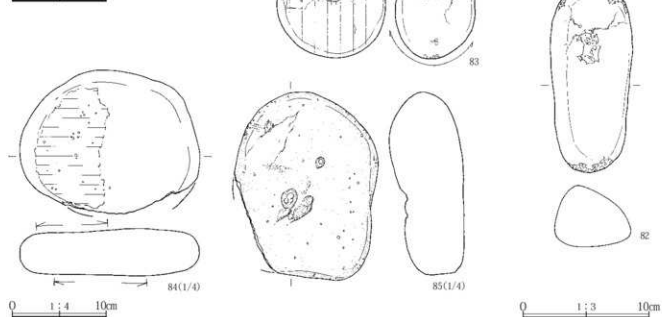
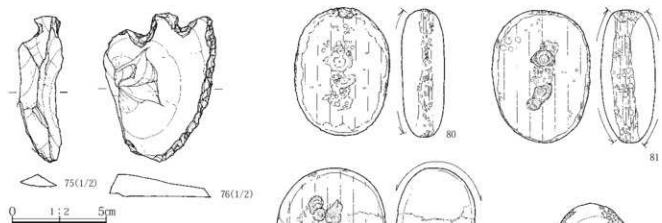
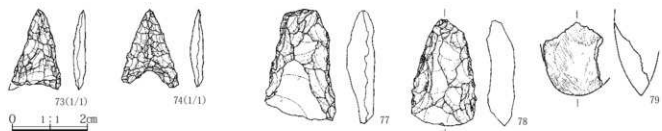
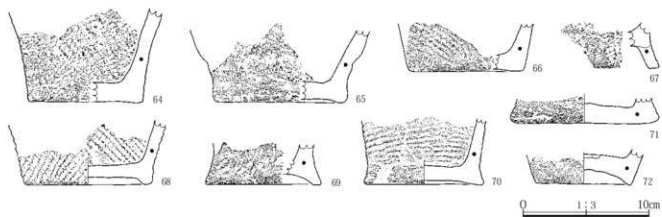


第14図 49号住居出土遺物(2)



第15図 49号住居出土遺物(3)

第二章 発掘調査の記録



第16図 49号住居出土物(4)



## 68号住居(第17・18回 PL 2-6、57 遺物観察表325頁)

浅い住居であり、後出する住居や土坑に壊され、分かりにくくなっている。

**位置**：X=999～004、Y=-822～825グリッドで、49号住居の南側約8mの位置にある。

**規模形状**：径4.5m前後の円形を呈すが、壁崩落で不整形になった。基本形態隅丸方形の住居と想定される。本遺跡の縄文時代住居では唯一例となる。

**埋没土・壁**：黒褐色土の単層で、焼土や炭化物粒を含む。埋没過程は不明である。壁高は5cm前後で、最も深い北側でも10cmしかない。

**面積**：16㎡前後か。

**床面**：地山傾斜に沿って南へ低く傾斜しており、南東側壁下と北側壁下では20cm近い比高差がある。住居南半は床面を失っている。掘り方はなく、ルーム掘り下り面をそのまま床としている。

**ピット**：P 4の他にP 1・2のどちらかが含まれる4本主柱配置が想定される。P 3～5が壁際に廻る壁柱穴的

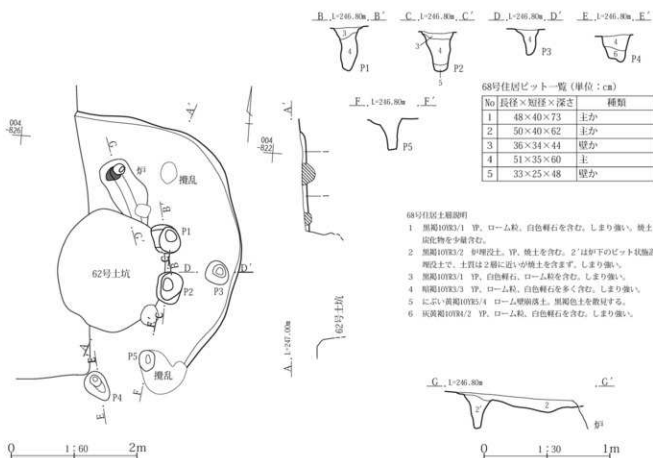
な位置にあるが、残存状態の良い北側へ繋がっていない。P 1・2は主柱穴的で深度もあるが、対になる施設は不明である。

**か**：住居北側にある。土坑状の長細い掘り込みがあり北側の底面が被熱し、この部分が地床かと思われる。土坑状の掘り込みは長軸1m前後、短軸51cmの隅丸長方形を呈しているが、長軸線は住居中央から離れている。

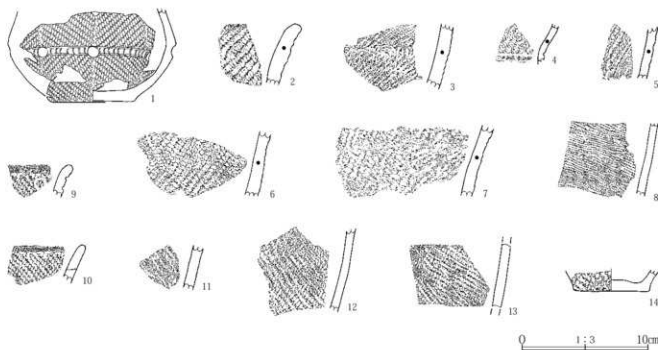
**その他**：古墳時代後期の53号住居と62号土坑に先出する。壁溝は見られない。

**遺物**：出土遺物は少なく、接合する破片も極めて少なかった。唯一諸磯a式の浅鉢1が器形を復元できた。後出する62号土坑埋没土中から本住居と同時代の遺物の出土が多く、これらを一括してここで扱った。3・6・8～10・12があたる。破片の時期は2～7が黒浜式、8～14が諸磯a式である。図示できる石器の出土はなかった。

**所見**：出土遺物は諸磯a式と黒浜式があり、住居の時期は後出する諸磯a期と考えられる。



第17回 68号住居



第18図 68号住居出土遺物

**80号住居** (第19・20図 Pl. 2-7・8、57 遺物観察表326頁)

**位置**：X=996~001、Y=831~837グリッドにあり、68号住居の4m西側に隣接している。

**規模形状**：長軸は南側で5.2m、短軸4.5mで、北辺が南辺より約80cm短い台形を呈している。27B号住居に近似した規模形状の住居になりそうである。

**埋没土・壁**：炭化物粒や焼土の混入のほとんどない、住居らしくない埋没土である。壁高は全体に30cm以上あり、最も深い東・南辺で67cmを測る。

**方位**：N-58°W。

**面積**：19.07㎡。

**床面**：地山の傾斜に沿って南側へ低く傾斜し、北隅と南隅では20cm前後の比高差がある。掘り方はなく、ローム掘り下げ面をそのまま床としている。

**ピット**：P4・5・7・10が4本支柱構造と考えられる。北西壁下に3本(P1~3)、南東壁下に4本(P12~15)の壁柱穴が規則的に並ぶ。これらは深さ16~34cmの深度の少ない施設である。

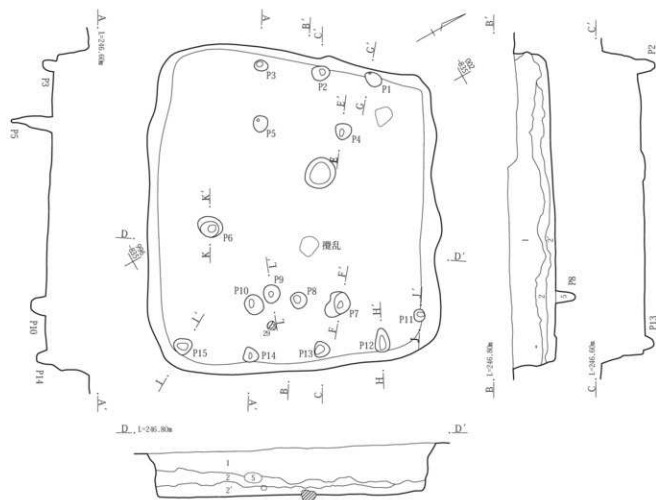
**か**：住居中央北西寄りに径51×45cmの不整形円形を呈した深さ6cmの窪みがあり、炉の痕跡と想定されるが、被熱痕や焼土等は観察できない。

**その他**：弥生時代後期の57号住居・古墳時代前期の69号住居に先出する。壁溝はない。

**遺物**：縄文時代では49号住居に次ぐ数の土器が出土したが、器形を復元できたものは少ない。29点を図示した。1~3は埋没土出土破片が器形を想定できるまで接合復元できた。1・2が諸磯a式、3が黒浜式にあたる。29は住居東寄りの床上40cmの高さから出土している。図示した破片はすべて埋没土内の出土で4・6~10が有尾式、11~18が黒浜式、19~29が諸磯a式にあたる。石器類の出土はきわめて少なく、図示に耐えるものはなかった。図示した以外に130点の破片が出土した。

**所見**：有尾・黒浜・諸磯a式の土器が混在し、本住居に確実に伴うと認定できる土器がない。復元できる破片は諸磯a式に集中しており、最も新しいこの時期の住居と考えられる。

## (2) 縄文時代の竪穴住居



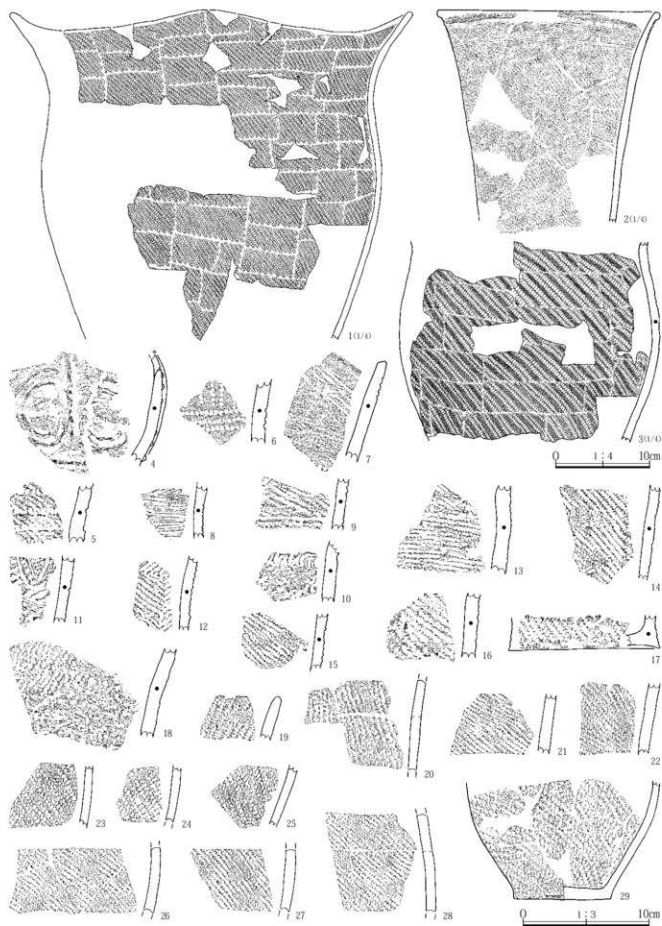
## 80号住居土層説明

- 1 黒褐色10R3/2 Y, 白色輝石, ローム砂を含む, しまり強い。
  - 2 黒褐色10R3/4 Y, 白色輝石, ローム砂を含む, しまり強い。2'は黒褐色やや強く, 2層に比べややしまり弱く。
  - 3 黒褐色10R4/6 汚れたようなローム土主体, Yを少量含む。3'は白色輝石の混入がやや多い。
  - 4 に近い黒褐色10R4/3 ローム土主体, Yを含む。
  - 5 黒褐色10R3/4 Y, ローム砂, 褐色ローム土が散在。
- # P 1 - 3 - 5 - 15は3層, P 2 - 6は5層, P 7は3'層, P11は4層。

## 80号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長さ×短径×深さ	種類
1	30×22×29	壁
2	28×24×30	壁
3	21×16×22	壁
4	26×26×19	土か
5	26×22×67	土か
6	42×32×27	
7	44×36×18	土か
8	26×25×34	
9	29×26×16	
10	32×31×22	土か
11	20×18×14	
12	48×22×14	壁
13	24×24×18	壁
14	24×22×14	壁
15	30×26×20	壁

第19図 80号住居



第20図 80号住居出土遺物

## (3) 弥生時代中期の竪穴住居

本遺跡の集落の大半を占める弥生時代住居は、中期後半から出現している。該期の住居と確認できた遺構は10軒で弥生時代全体の住居中15パーセントにあたる。集落が確認できた範囲は調査区北側に集中していて、全体では環状の分布となる可能性がある。この分布は弥生時代後期集落の内、尾状溝を伴う住居の分布に近似している。ただし弥生時代中期土器片が混入する住居の範囲は調査区南側まで広がり、浅いため痕跡が残らなかった住居や後世遺構にそっくり削られた住居が存在した可能性はある。

該期住居間の重複はないが、比較的浅いうえ、弥生時代後期の住居や古墳時代前半の方形周溝墓によって壊されていて全体に残存状態は悪い。また出土遺物も少なく、時期決定の資料に乏しい住居も多いが、弥生時代後期の住居が細長い平面プランで、炉の位置は主柱穴が開う方形区画の外に置かれるのに対し、弥生時代中期の住居プランは正方形に近く、長方形の住居でも炉は住居中央付近に置かれ遺構形状に明らかな差が見られる。



第21図 弥生時代中期集落の分布

## 19号住居(第22・23図 PL. 3-1・2, 58 遺物観察表327頁)

浅いうえ後出する2号方形周溝墓などに壊され残存状態はきわめて悪いが、南東隅と西辺および北辺のごく一部より全容を推測することができる。

**位置:** 確認できる範囲で X = 072~078, Y = -854~-859にある。

**規模形状:** 長軸5.5m、短軸5.2m前後の方形を呈すと思われる。

**埋没土・壁:** 残存する埋没土はわずかだが、黒色味を帯びた明瞭な単層だった。壁高は最も深い東辺で7cm、浅い西辺では2cm前後だった。

**方位:** N-12° E。

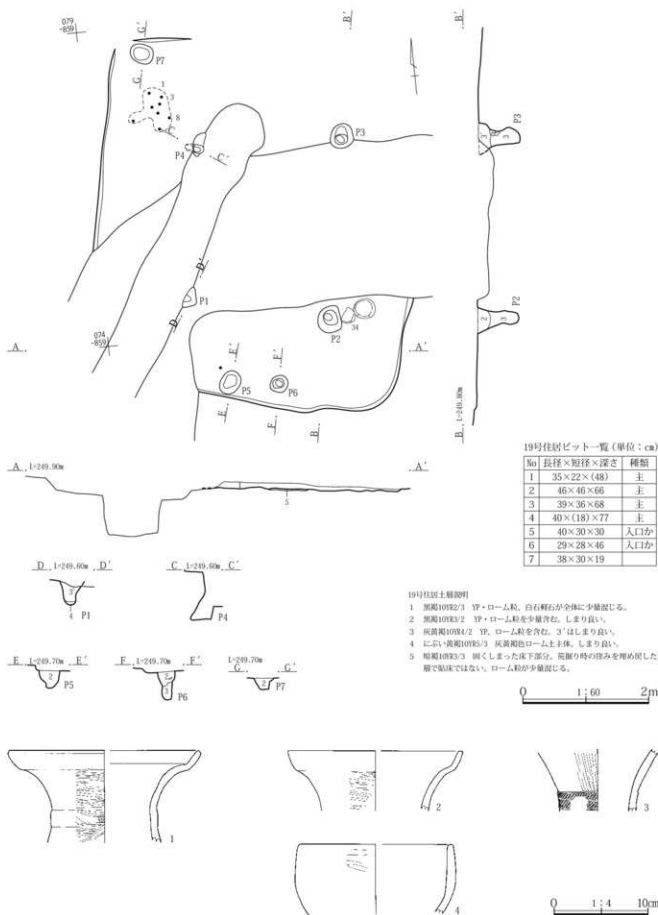
**床面:** 調査できた範囲では水平に近い床で、壁際が1~3cm高くなっていて。掘り方はないようで、住居掘削時の窺みを埋め戻した踏み固め面が見られるが、貼床は確認できない。

**ピット:** P 1~4 は主柱穴と考えられるが、配置は台形状に歪んでいる。特にP 4 は開口部を住居中央に向けて傾き、他ピットと異なる。南壁直下のP 5・6 は配置が歪むが入口ピットと考えられる。2本対になる入口ピットは弥生時代後期の住居では多数見られるが、弥生時代中期の住居では本住居と67号住居の2例のみである。

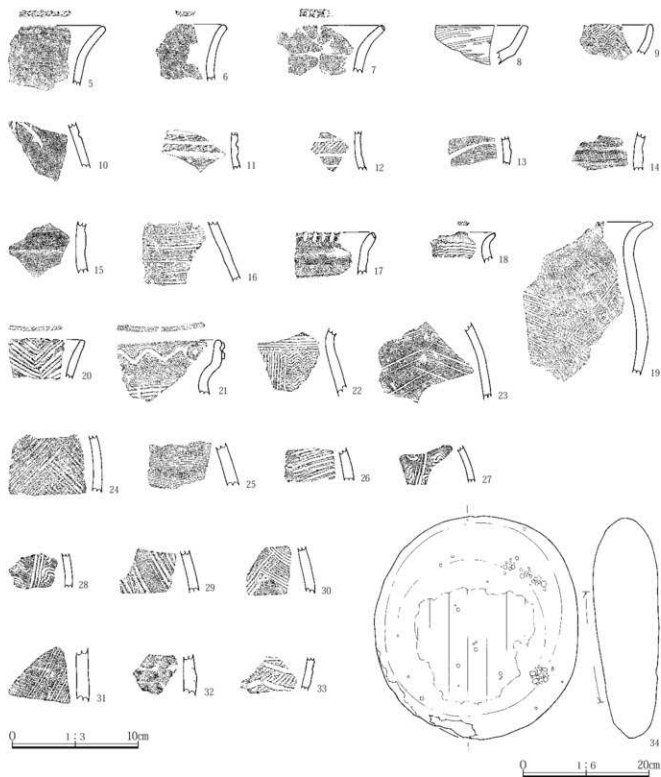
**その他:** 18号住居尾状溝と2号方形周溝墓に先出する。残存部分に壁溝は見えない。炉は想定される住居中央部分が大きく削られ確認できない。

**遺物:** 本住居に後出する弥生時代後期18号住居尾状溝埋没土内に本住居と同時期の土器片が見られたため、これらを併せて掲載した。本住居内出土の土器では北西隅付近の床直上に散乱していた破片から壺1・3、8を図示した。他に埋没土内の壺2、鉢4、壺6・9・13、甕22・23がある。18号住居尾状溝内からは壺5・14、甕17・19が出土し、それ以外は18号住居内の遺物である。大型の砥石34はP 2東脇床直上に据えられるように並んで出土した礫の内の1点である。

**所見:** 時期を決定する確実な遺物を持たないが、出土破片は弥生時代中期後半を中心とし、この時期の住居とするのに問題はない。



第22図 19号住居および出土遺物(1)



第23図 19号住居出土遺物(2)

**24号住居** (第24・25図 PL. 3-3・4, 58 遺物観察表327頁)

浅いうえ東西両側に大きく擾乱を受け、残存状態はきわめて悪い。北辺西側付近以外確実な壁面を把握できていないが、P6や南辺の一部に見られた床掘削時の窪みらしい土質変換点部分を元に、南辺が北辺に平行する

ことを前提に床範囲を推測した。

**位置：**X=050~056、Y=-882~-886にあり、弥生時代中期の住居では最も西側に位置する。

**規模形状：**南北軸5.05mを測り、柱穴の配置から正方形に近い形状が推測される。

**埋没土・壁**：残存する埋没土はわずかで黒色味を帯びた明瞭な層だった。壁高は最深7cmを測る。

**方位**：N-22° E。(北辺に垂直方向)

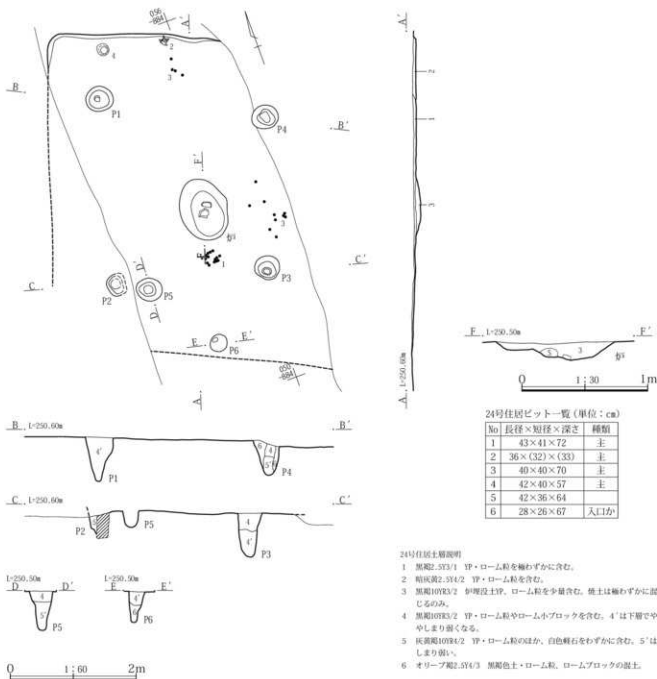
**床面**：調査できた範囲では東へ低く傾斜しており、西側と3~5cmの比高差がある。掘り方はない。

**ピット**：4主柱穴(P1~4)を想定したが、規則的な配置にはない。P2・3が南辺に沿った配置にあれば、住居プランは台形に歪んだ形状になる。P1も北西隅側に逸れている。P4のみ土層断面に柱痕が観察できる。P

5・6は主柱穴と変わらぬ深度があり、この内P6は入口ピットを想定した。

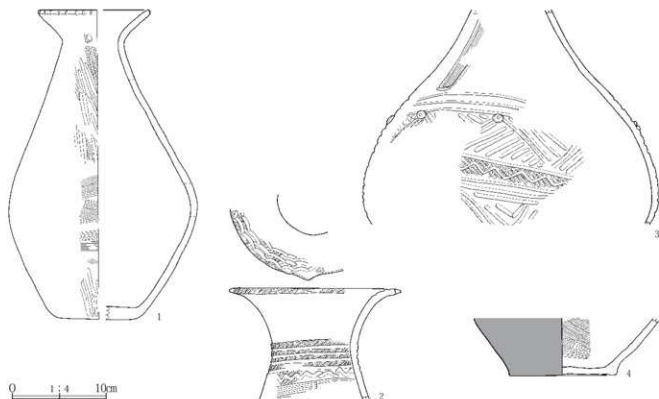
**か**：住居中央より南に寄った位置にある。径102×78cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。か内に焼土・灰等の堆積は少なく、被熱の痕跡も弱い。底面中央付近に礫2点が据えられるようにして出土したが、弥生時代後期住居に見られる枕石とは異なる。

**その他**：残存部分に壁溝は見えない。



第24図 24号住居





第25図 24号住居出土遺物

**遺物**：図示できた土器はすべて床直上の出土で、本住居に確実に伴う遺物である。唯一完形近くまで復元できた壺1は右側でまともまで潰れるようにして、壺2・4は北壁直下で大破片のまま出土した。壺3のみ北壁直下と右側側に離れて潰れるようにして出土した多数の土器片が接合した資料である。

**所見**：出土遺物より弥生時代中期後半の住居である。

#### 28号住居 (第26図 PL. 3-5, 58 遺物観察表328頁)

北側以外確実な壁面を把握できていないが、主柱穴配置から、南辺と南側主柱穴の間隔が北側壁・主柱穴の間隔と近似するという前提で南側の壁位置を想定した。

**位置**：想定範囲はX=035~041、Y=-876~881にある。24号住居南側9mの、確認できた弥生時代中期集落の南西隅に位置する。

**規模形状**：短軸(東西軸)4.35m、推定長軸5.3mの長方形が推定される。残存範囲では隅は直角に近く、北辺は直線的で整美な形状である。

**埋没土・壁**：床上埋没土の記録を欠く。壁高は北・東辺で5cm前後を測る。

**方位**：N-8° W。(北辺に垂直方向)

**床面**：南東側へ低く傾斜しており、P3周辺の床面は北西隅付近より8cm前後低くなっている。掘り方はない。

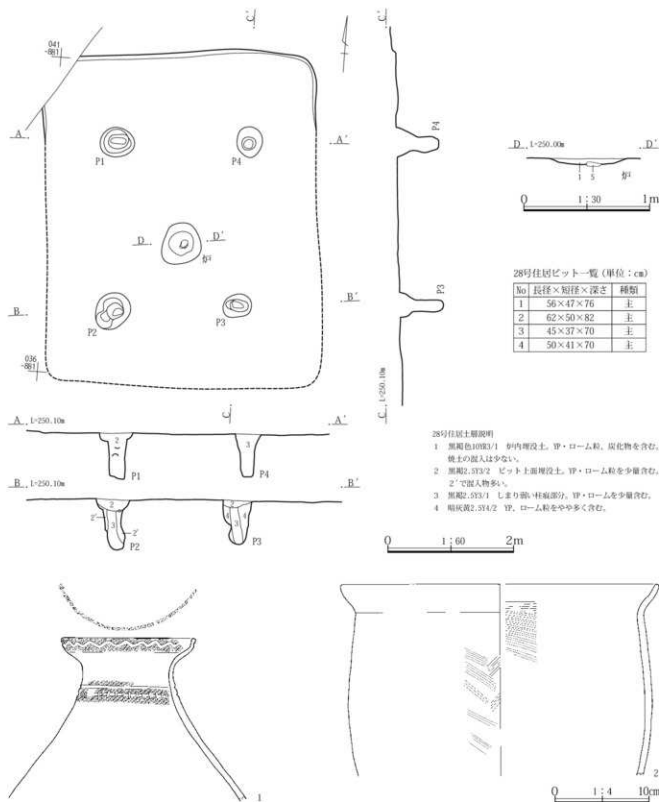
**ピット**：4主柱穴(P1~4)のみの確認である。P1・3は下端が住居長軸方向に対し垂直にやや細長くなり、弥生時代後期の住居主柱穴に多い傾向が本住居にも見られる。

**炉**：住居中央やや南寄りにある。径66×64cmの不整円形で深さは4cmを測る。焼土の混入は少なく、底面の被熱痕も見られない。底面中央に平坦な割石が食い込むように据えられ、この石には被熱痕が見られる。

**その他**：弥生時代後期の26号住居に先出する。壁溝・貯蔵穴等の施設は確認できない。

**遺物**：壺1は埋没土とP1内出土破片が接合し、壺2は埋没土の多数の小破片が接合した。

**所見**：長方形プランの可能性があるが、壺1が柱穴内から出土し、炉が住居中央に置かれることより弥生時代中期後半の住居と推定した。



第26図 28号住居および出土遺物

**32号住居** (第27図 PL. 3-6, 58 遺物観察表328頁)

**位置**: X=056~062, Y=-838~-844にある。

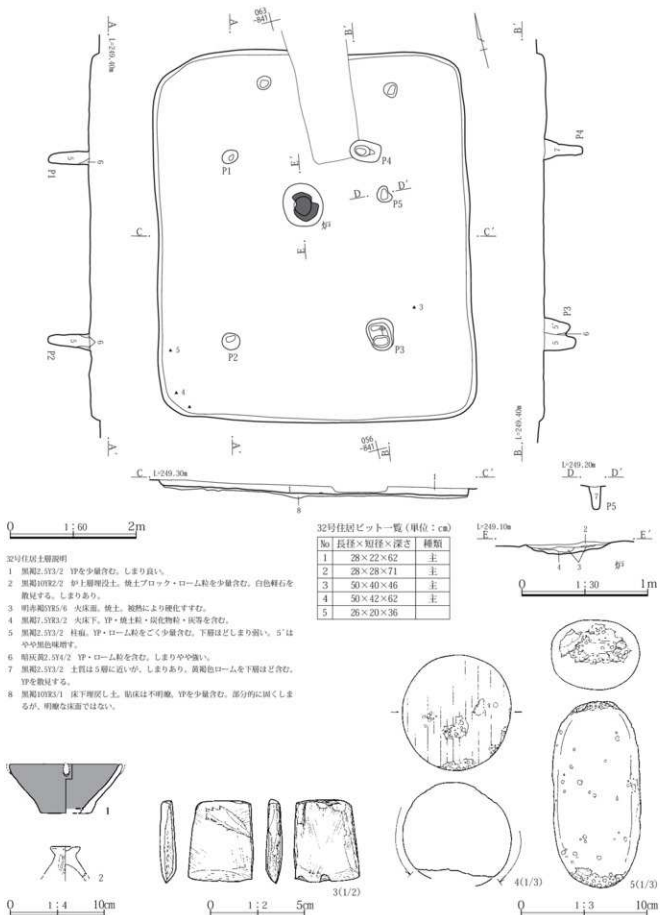
**規模形状**: 長軸5.95m、短軸5.0mの長方形を呈す。西壁両側の丸みが強く、やや不整である。

**埋設土・壁**: 埋設土は単層土で埋設経過は想定できない。

壁高は最も深い南辺で12cmを測る。

**方位**: N-14° E. **面積**: 27.26㎡

**床面**: 細かな凹凸のある床面で踏み固めはあまり強くない。地山傾斜に沿って東側が低く、西側と15cm前後の比高差がある。全体に深さ5cm前後の掘り方があり、ロー



第27図 32号住居および出土遺物

ムス混入の少ない土で埋め戻している。

**ピット**：4 主柱穴(P 1～4)はやや南側に寄った配置である。P 1・2 は開口部径が著しく小さい。P 5 は性格不明のピットだが、主柱穴に次ぐ深さがある。北壁下にも不明ピットがあり、西寄りが深さ 9 cm、東寄りが深さ 15 cm の不明瞭な窪みであった。

**か**：住居中央北寄りにある。径 70×64 cm の楕円形を呈し、深さは 9 cm を測る。灰層が下層、焼土層が中層付近にあり、長期の使用が想定される。

**その他**：時期不明の 1 号掘立柱建物に先出する。壁溝・貯蔵穴等は見られない。

**遺物**：図示できた土器 2 点は埋没土内の出土であるが、磨製石斧 3 は東壁下、磨石 4・敲石 5 は南西隅壁直下の床直上で出土している。

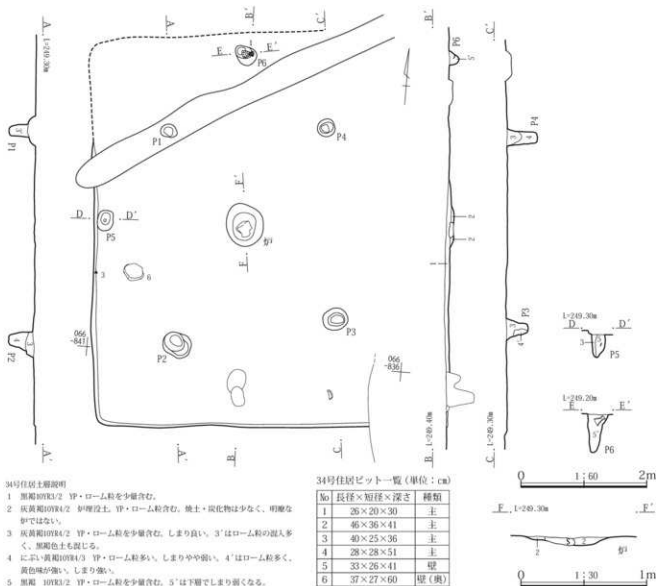
**所見**：遺物は明瞭さを欠くが、4 主柱穴でかが住居中央付近にあり、弥生時代中期後半の特徴を備えている。

**34号住居** (第28・29図 PL. 3-7・8、58 遺物観察表328頁)

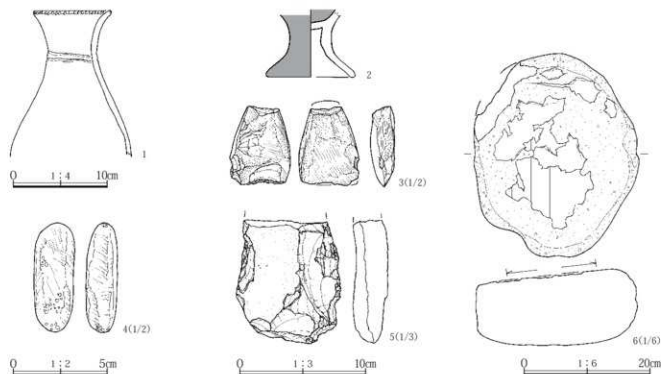
東側へ低い緩やかな傾斜面にあつて、住居北東側の壁の大部分が把握できない。

**位置**：X=064～070、Y=-836～-841にある。調査区東側の弥生時代中期の住居が南北方向に並ぶ部分の北東隅に位置している。

**規模形状**：想定される南北軸長 6.3 m、東辺を西側と同様な主柱穴からの距離に復元すると東西軸長 4.7 m の長方形となり、弥生時代中期後半の住居としては最大規模となる。残存する隅は丸みが少なく、壁も直線的で、整美な形状が想定される。



第28図 34号住居



第29図 34号住居出土遺物

**埋没土・壁**：埋没土は単層土で埋没経過は想定できない。

浅い住居で壁高は最も深い西辺で8cmである。

**方位**：N-4°W。

**床面**：細かな凹凸があり、調査できた範囲では住居中央が壁際より3~8cm窪んでいる。掘り方は見られない。

**ピット**：4主柱穴(P1~4)があるが、P3が北側へ偏り、台形気味の配置になっている。各ピットは32号住居同様開口部が狭い。また、住居規模に比して深度に乏しい。西壁中央直下にP5、想定される北壁直下に本住居内で最も深いP6がある。P5は壁柱穴的な配置にあるが入口ピットとしても矛盾ない。

**か**：住居中央にある。径68×60cmの楕円形を呈し、深さは7cmを測る。焼土の混入や底面の被熱痕は少なく、不明瞭である。底面中央に平坦で被熱痕が確認できる径25cmの割石が据えられている。

**その他**：9号溝に先出する。壁溝は見えない。

**遺物**：壺1がP6内床下17cmの深さから出土している。磨製石斧3は西辺の壁に密着するように床上4cmの高さから、台石6は西壁下の床直上から出土している。

**所見**：出土土器は少ないが、出土土器やかの位置から弥生時代中期の住居として問題ない。

### 36号住居(第30図 PL. 4-1~3, 58 遺物観察表328)

東側へ低い緩やかな傾斜面にある浅い住居で重複も多く、壁が確認できたのは西辺のみであるが、4主柱穴の位置から大よその住居形状を推定した。

**位置**：X=079~083、Y=-874~878にある。弥生時代中期の住居中、最も北側に位置する。

**規模形状**：西壁から主柱穴の距離を元に、主柱穴配置の歪みを加えて住居形状を想定した。東西軸長4.9m前後、南北軸長4.4m前後と推測される。東西に長い長方形住居は弥生時代中期後半の集落では唯一例となる。

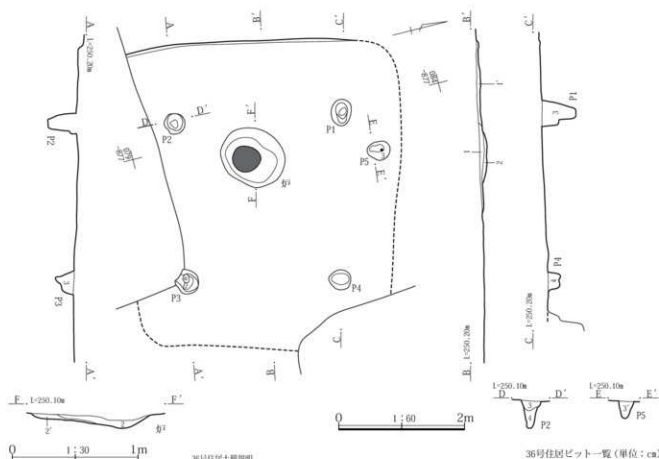
**埋没土・壁**：床上埋没土はわずかで、壁高は唯一残る西辺で最大でも4cmしかない。

**方位**：N-76°W。 **面積**：(推定復元)20.2㎡前後。

**床面**：細かな凹凸の多い床で東側へ低く傾斜し、床面が残る東限のが東側周辺と西壁直下で5cm前後の比高差がある。掘り方は見られない。

**ピット**：4主柱穴(P1~4)を確認したが東側のP3・4は深度に乏しい。北壁下西寄りと想定されるP5は東側主柱穴と同規模な性格不明施設である。

**か**：住居中央の西寄りにある。径113×88cmで住居短軸の南北方向に長い楕円形を呈す。弥生時代中期後半住居のがでは最大規模だが、深さは8cmしかない。焼土混入は比較的少なく、か底面に礫は見られない。

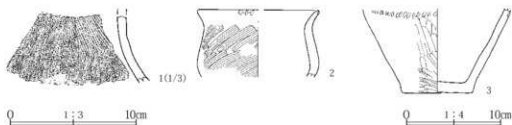


36号住居土層説明

- 1 第2.512/1 VP・ローム粒を数見する。1'は炭入物が多少見える。
- 2 灰黄褐色34/2 砂埋没土。VP・白色軽石を少量含む。2'は粘土粒を含む。4'下層としてはごく少ない。
- 3 第2.513/1 VP・ローム粒を少量含む。3'はローム小ブロックが混じる。
- 4 第2.514/2 ローム土・ローム粒を多く含む。VPは少ない。

36号住居ピット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	42×32×57	土
2	32×32×47	土
3	(35)×27×30	土
4	38×32×22	土
5	35×30×31	



第30図 36号住居および出土遺物

**その他:**弥生時代後期の3・7号住居に先出する。壁溝・貯蔵穴等は見えない。

**遺物:**裏底部3がP5内床下21cmの深さから出土した。P5が本住居に伴う施設と断定できず、この遺物が本住居に確実に伴うと決められない。

**所見:**時期決定の遺物に乏しいが4号主柱穴の内側にががあり、弥生時代中期後半の住居と考えたい。

**37号住居**(第31図 PL. 4-4・5, 58 遺物観察表328頁)

北東側へ低い傾斜面にあり、壁が確認できたのは住居

南半部分のみである。主柱穴が明確でないため住居形状も明確にできていない。

**位置:** X=073~078, Y=-868~-873にある。36号住居南東側2mに隣接している。

**規模形状:** P2・5を主柱穴と想定し、南辺の規模を併せて住居形状を想定した。長軸4.7m、短軸4.15m前後の長方形住居が推測される。残存する東辺からやや膨張り気味に歪んだ形状となる可能性がある。

**埋没土・壁:**壁高は最も深い南西辺で10cmを測る。

**方位:** N-34° E。 **面積:** (推定復元)18.6m<sup>2</sup>前後。

## (3) 弥生時代中期の竪穴住居

**床面**：確認できた範囲では緩やかな凹凸のある床面が北側へ低く傾斜し、床面が残る北限のが北東側周辺と南西隅壁下で5cm前後の比高差がある。掘り方は見られない。

**ピット**：5本のピットを調査したが、柱穴と断定できる配置・規模の施設は見られない。P2・5に深度があり、4主柱穴の北東側を構成するような配置にある。P1はこれらに対応する配置にあるが、深度が足りない。

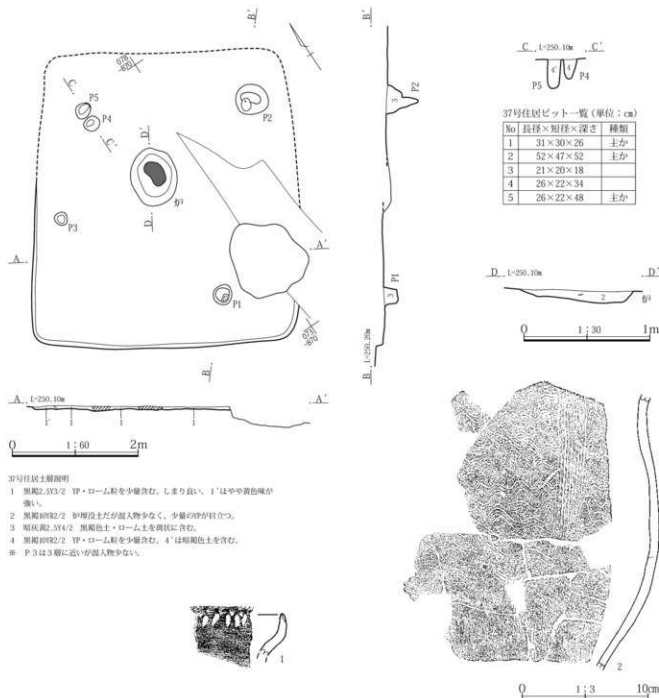
**か**：想定した住居プランの中央北東寄りにある。径89×

75cmの楕円形を呈し、深さ11cmを測る。焼土の混入は少ないが底面中央付近に被熱痕が見られた。

**その他**：時期不明の34号土坑に先出する。壁溝・貯蔵穴等は見えない。

**遺物**：遺物は少なく埋没土内の糞破片2点を図示したのみである。糞2は多数の破片が接合した。

**所見**：時期決定の遺物に乏しいが、住居中央付近と推定できるがの位置より弥生時代中期後半の住居と考えたい。



第31図 37号住居および出土遺物

38号住居(第32図 PL. 4-5, 59 遺物観察表328頁)

後出する17号住居に住居北側の大半を削られ、一部しか残存しない。浅い住居であるが地山は東側へ低い緩やかな傾斜面で、本住居北西隅部分が後出遺構北側に位置するなら把握できたはずである。後出遺構の範囲内に本住居北辺が含まれていると考えたい。

**位置:** 確認できた範囲は X = 062 ~ 064, Y = -871 ~ -876にある。37号住居の南側8 m前後に位置する。

**規模形状:** 東西軸長4.2 mが計測できる。該期の他の住居と比べると住居短軸に近い大きさとなる。確認範囲では西辺がかなり開き気味になる。南北軸長は残存2.2 mだが4.8 m近くまで広がる可能性がある。

**埋設土・壁:** 人為的な埋戻しの痕跡は見えない。壁高は最も深い南辺で12 cm、他でも10 cm前後を測る。

**方位:** N - 68° W。 **面積:** (残存部分) 5.52 m<sup>2</sup>

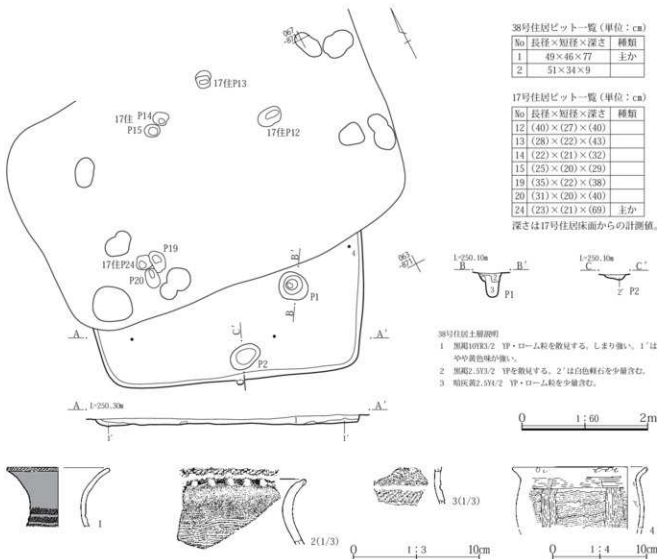
**床面:** 東側へ低く傾斜していて、西壁直下と6 cm前後の比高差がある。

**ピット:** P 1 は主柱穴となる可能性のある配置にある。重複する17号住居床下調査時に確認したピットの内、P 1 と共に主柱穴配置を構成する可能性のある施設を併せて図示した。P 20 は主柱穴に相応しい深度がある。P 12 ~ 15 が本住居に伴う施設であれば、壁寄りの変則的な主柱穴配置となり、特に P 13 は壁外柱穴となる。

**その他:** 弥生時代後期の17号住居に先出する。調査できた範囲には炉・壁溝等は見えない。

**遺物:** 浅い住居の狭い範囲内から出土した4点を図示できた。裏4が東壁直下周辺の床直上から出土した破片が接合した。本住居の時期推定資料となる。

**所見:** 出土遺物より弥生時代中期後半の住居である。



第32図 38号住居および出土遺物



46号住居(第33・34図 PL. 4-7・8, 5-1・2, 59 遺物観察表329頁)

位置: X=047~051, Y=839~843にある。北側の32号住居からは5m離れている。

規模形状: 東西軸長4.3m、南北軸長4.2mの方形を呈し、北辺が南辺より40cm短く台形状に歪んでいる。壁面にも細かな歪みが多い。

埋没土・壁: 壁高は最も深い北辺で35cm、浅い南辺でも15cmを測り弥生時代中期の住居では最も深い。

方位: N-2° E。 面積: 15.48㎡

床面: 細かな凹凸のある床面で南東側へ低く傾斜し、北西隅と15cmの比高差がある。掘り方は見られない。

ピット: 4主柱穴(P1~4)が確認できるが、南側のP

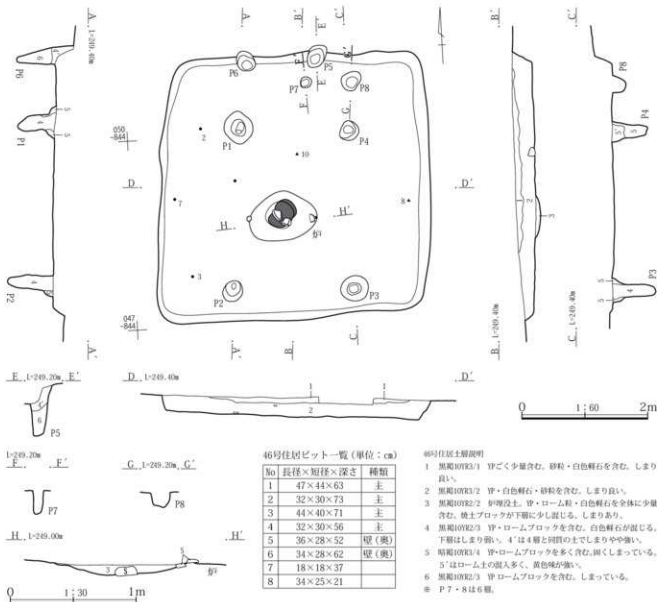
2・3が壁際に著しく寄っている。北壁上端まではみ出して穿たれている壁柱穴5・6は主柱穴と変わらない深度がある該期の他住居に例のない施設である。主柱穴とそれ以外のピットでは埋没土が異なっている。

か: 住居中央北寄りにある。径108×78cmの楕円形を呈す比較的大型の施設で、深さ15cmを測る。焼土の混入はあまり多くない。底面中央に割れ石が据えられている。

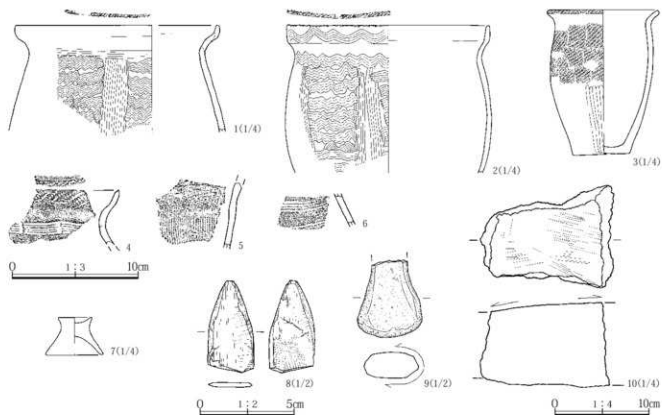
その他: 壁溝は見られない。

遺物: 裏2はP1西脇、蓋7は西壁直下の床直上で出土する本住居に確実に伴う遺物である。石器では砥石10が住居中央北寄りの床直上で出土している。

所見: 出土遺物および住居形状から弥生時代中期後半の住居である。



第33図 46号住居



第34図 46号住居出土遺物

**67号住居**(第35・36図 PL. 5-3~8, 59 遺物観察表329頁)

後出する60号住居に南隅を削られているが、大よその住居形状は想定できる。

**位置**：X=033~038、Y=845~851にある。弥生時代中期後半の集落の中では最も南に位置し、北側に隣接する46号住居とは約10m離れている。

**規模形状**：長軸4.85m、短軸4.4mの長方形を呈す。各隅は丸みをおび、北西・南西辺は胴張り気味で整美さにやや欠ける。

**埋設土・壁**：東側壁際のみ底面直上に黄色味をおびた埋設土が見られる。壁高は最も深い北側周辺で11cm、浅い南側では5cm前後を測る。

**方位**：N-37° E。 **面積**：(復元)19.10㎡。

**床面**：細かな凹凸のある床で、東側へ低く傾斜しており、西隅と10cm前後の比高差がある。掘り方は浅く、壁際で部分的に長方形土坑状にやや深い部分があった。

**壁溝**：床面段階では不明瞭であったが、床下調査で北西と南西の壁下に壁溝状の窪みが確認された。北西側は幅最大18cmを測るが、深さ2cm前後の不明瞭な施設だった。これに対し南西側は幅最大20cm、深さ最大8cmの比較的中明瞭な施設である。

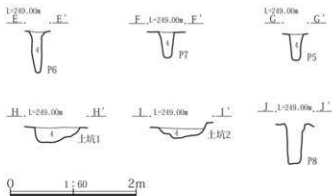
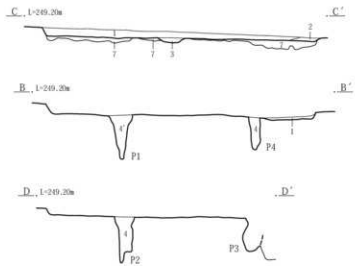
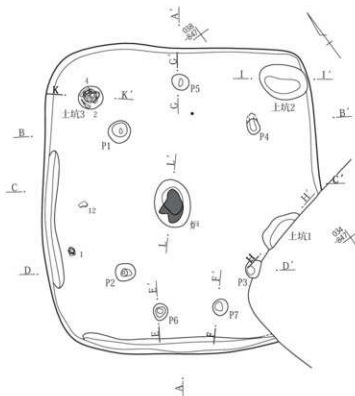
**ピット**：4主柱穴(P1~4)は小規模である。弥生後期住居と似た柱穴配置で入口ピットの位置にP6・7がある。住居の規模に比して両ピットの間隔が95cmと広い。また北東壁寄りにP5があり、弥生時代後期の主炉のある住居であれば炉奥ピットの位置にあたる。

**炉**：住居中央やや西寄りにある。径75×56cmの楕円形を呈し、深さ8cmを測る。焼土の混入は少ないが、底面は被熱し赤変している。

**土器埋設土坑(土坑3)**：北隅で確認された床面調査時に把握できなかった施設である。径40×37cm、深さ32cmを測りピットと同規模だが、完形の甕が正位で底面から4cm浮いた状態で据えられている。埋設土は土質・しまりなどが柱穴や他の土坑と異なっている。本遺跡には類例のない施設である。

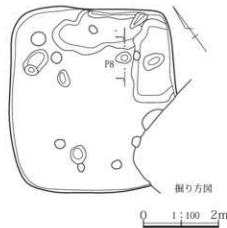
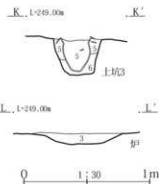
**その他**：弥生時代後期の60号住居に先出する。東側に2個所の住居内土坑がある。土坑1は南東壁下にあり長軸74cmの楕円形が想定される。大半を後出遺構に壊されているが残存部分で深さ21cmを測る。土坑2は東隅にあり、径87×56cmの不整楕円形を呈し深さ18cmを測る。柱穴と近似した埋設土で上面に踏み固めがなく、住居廃絶時に開口していたと想定される。

## (3) 弥生時代中期の竪穴住居



67号住居ピット一覧 (単位:cm)

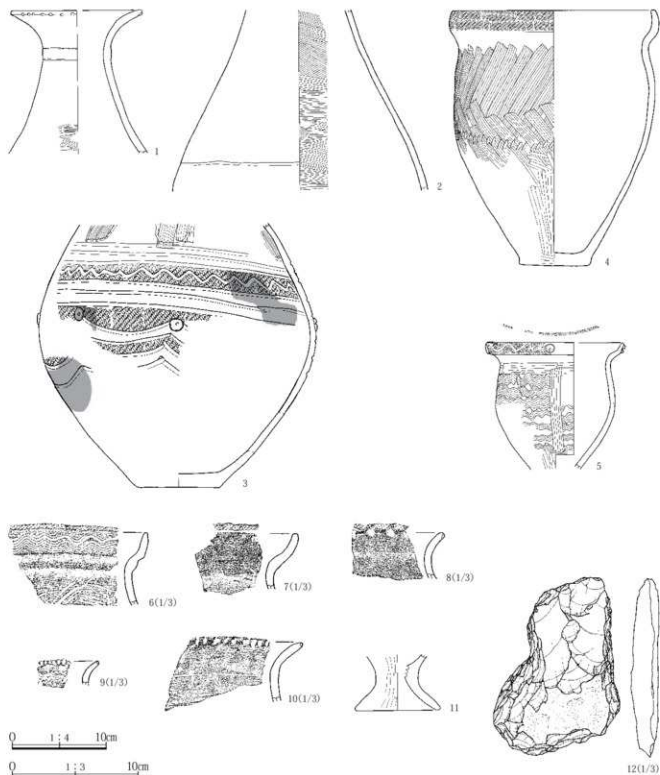
No	長径×短径×深さ	種類
1	36×36×71	柱
2	31×28×74	柱
3	30×26×54	柱
4	24×18×52	柱
5	28×24×45	
6	28×26×68	
7	26×26×42	
8	(43)×(31)×(64)	



## 67号住居土層説明

- 黒期10832/2 IP・白色軽石を少量含む。しまり良い。
- にふい黄期10841/3 IP・白色軽石・ロームを含む。しまり良い。2'は焼土が混じる。
- 黒期10832/3 砂埋没土としては焼土の混入がきわめて少ない。ローム粒・白色軽石・炭化物等を散見する。しまり良い。
- 黒期1082/3 柱穴・土坑の埋没土。IP・ロームブロックを少し含む。白色軽石が混じる。しまり良い。4'は炭化物が混じる。
- 黒期10831/1 土坑3上層埋没土。IP・ローム粒を含む。しまりやや弱い。土層内外の土に差はない。
- にふい黄期10835/3 土坑3下層埋没土。IP・ローム粒を多く含む。しまりやや弱い。
- 暗期10833/3 掘り方埋没土。IP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。しまり強い。

第35図 67号住居



第36図 67号住居出土遺物

**遺物**：土坑3内に裏4が据えられ、この土器周辺には壺2が土坑内上層に散乱するようにして出土した。壺1は北西壁下南寄りの床上3cmから潰れるようにして出土した。壺3や裏5など多数の埋没土破片が接合した資料も多い。浅い住居であり、埋没土内遺物でも床面に近い出土位置であることからこれらを本住居に確実に伴う資料

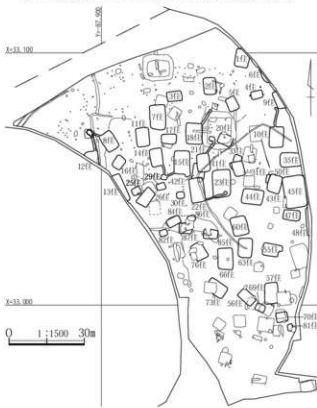
と考えたい。石器は少なく図示できたのは北西壁下中央の床上8cmから出土した石鎌12のみである。

**所見**：出土遺物および住居形状から弥生時代中期後半の住居である。土坑3内の遺物も住居内出土遺物と時期に差はなく、土坑3は住居に伴う施設である。

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

弥生時代後期の住居は55軒で本遺跡内住居全体の過半を占めている。分布は調査区南隅と崖線に近い北隅を除いたほぼ全域に広がっているが、遺跡内で確認した全住居の中では北側にやや偏る傾向がある。形状はほとんどが長方形であり、尾状溝のある8軒の住居や張り出し施設のある2軒の住居はいずれも該期である。規模はまちまちで、遺跡内で最大規模の住居から、最小規模の不明瞭な住居まで含まれる。時期が不明瞭な住居にはこの項で扱ったものがある。

住居軒数は多いが、住居間の重複は極めて少ない。



第37図 弥生時代後期集落の分布

#### 1号住居 (第38・39図 PL. 6-1~4, 59・60遺物観察表330FD)

調査区北東隅の北側へ向かって低くなる傾斜面に、他の住居から少し離れた位置で確認した。住居の北東隅付近が調査区域外となり完掘できていない。

**位置:** X=094~101, Y=-841~847グリッドにある。

**規模形状:**長軸7.05m,短軸5.6mの長方形を呈している。北辺がやや広い逆台形状に歪むと思われる。

**埋没土・壁:**埋没土は下層に多量のローム土が見られる。壁の崩落はあまりないので、この部分は人為的な埋戻しの可能性がある。全体に締まりは強い。壁はほぼ

直線的に立ち上がり、最も深い南壁で89cmを測る。

**方位:** N-10° E。 **面積:** 残存(29.64)㎡

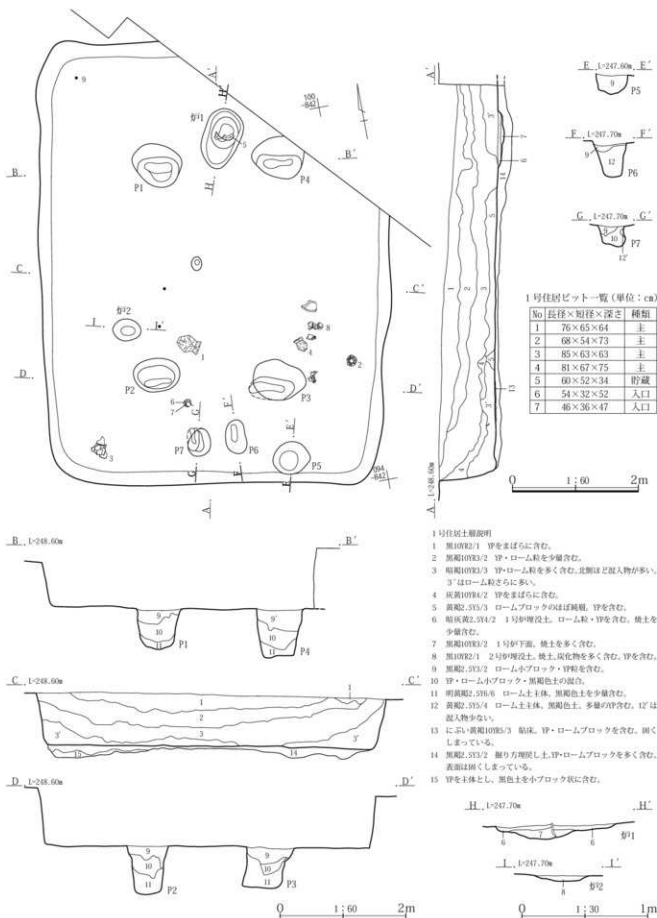
**床面:**地山は北側が南壁直上より30cm以上低くなる傾斜面であるが、床面はほぼ水平である。ローム土主体の貼床を一部で施し、固く締まっている。掘り方は住居中央付近ではごく浅く、広い土坑状の掘り込みが主に住居縁部側に見られる。掘り方底面はAs-YP層内にあり、この部分に掘り残したAs-YPを除去しないまま掘削土を埋戻し、上面に層厚1cmの貼床を施している。本遺跡弥生時代後期の大型住居に多く見られる床面である。

**ピット:**4主柱穴(P1~4)の他に、南壁際に入口施設のピット2本(P6・7)と貯蔵穴と思われるP5を調査した。主柱穴の平面形状は4本とも東西に長く、特に底面付近は著しく細長い。底径はP2で43×6cm, P4で47×7cmなど、おおよそ7:1前後の長径:短径比となっている。柱間に板状の削材を使った様子が窺えよう。いずれも60cm以上の深さがある。断面に柱痕は確認できない。入口ピットは南辺にやや捻じれるような歪んだ配置になっている。主柱穴と直交するように南北に細長い。開口部が南壁へ向かうようにやや傾斜し、南壁に梯子を掛けた様相が残っている。柱痕は認められない。P5は南壁際に穿たれた平面円形のピットで、7基のピット中最も浅い。底面は鍋底状で丸みがある。

**炉:**P1-P4間に炉1、P2の北側に炉2を確認している。どちらも焼土の堆積はあまり多くなく、炉面の被熱による赤変硬化も弱い。主炉となる炉1には枕石が据えられていないが、中央付近に甕の破片を立てて据えてあった。規模は長径93cm,短径58cmの楕円形で、床面からの深さは10cmで北側が深くなっている。炉2は長径46cm,短径35cmで炉1より一回り小さい。掘り方調査時に炉2のやや東側に被熱による赤変部分があり、炉2に先出す長径58cm,短径48cmの炉3が確認されている。

**その他:**壁溝の痕跡は掘り方を含めて確認できない。

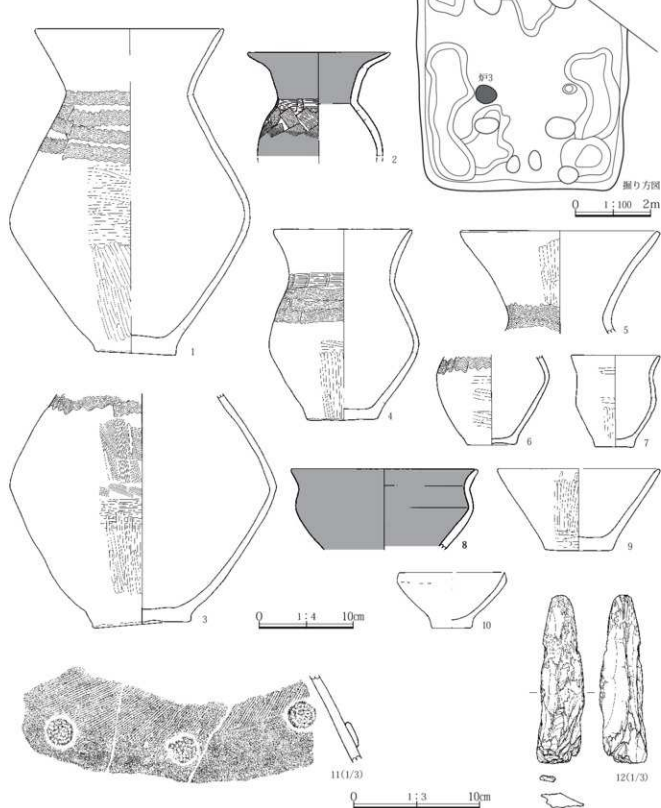
**遺物:**住居内南側に偏る出土傾向がある。土器11点と石製品1点を図示した。東壁際の壺2は上半のみだが床面に正位で置かれていた。壺5は炉1内出土の口縁片である。甕6・小型甕7は床から6cm浮いた状態であったが壁に近い入口ピット付近出土であり、これら4点を本住居に伴う土器と考えたい。甕1・4は完形だが、高杯8と同じく住居中央付近の廃棄されたローム土上に相当



第38図 1号住居(1)

する高さの出土である。壺3と鉢9は壁際だが床面より30cmの高さの出土である。他の土器と石製品12は埋没土内の遺物である。

所見：弥生時代後期中段階。



第39図 1号住居(2)および出土遺物

2号住居(第40・41図 PL. 6-5~8, 60 遺物観察表330頁)

位置: X=083~090, Y=-854~859グリッドにある。

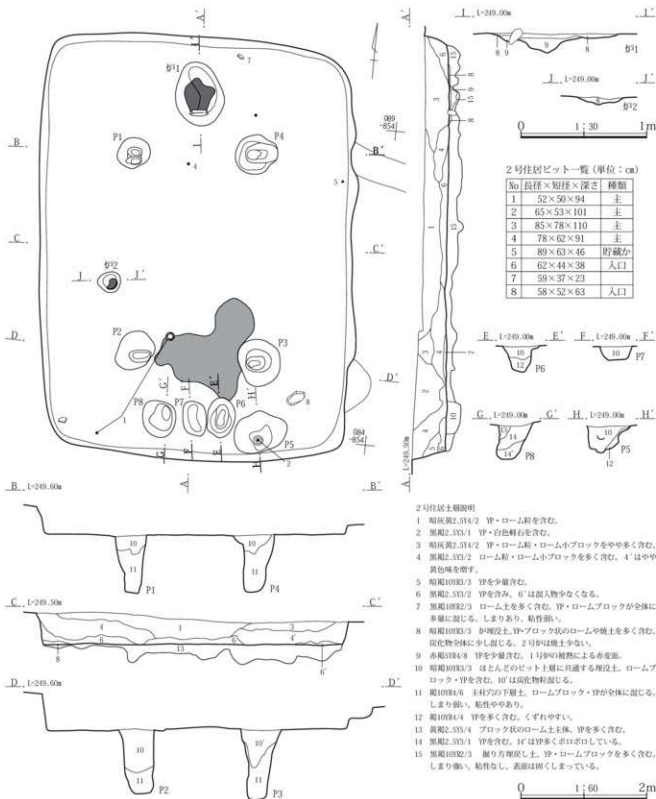
規模形状: 長軸6.75m、短軸5.0mの長方形を呈し、北東隅が鈍角に開くため平行四辺形気味に歪んでいる。

埋没土・壁: 埋没土は全体に締りあり土質も似ている。

ローム土の混入が多く、下半では人為的な埋戻しを行った可能性がある。壁高は最も深い南壁で49cmを測る。

方位: N-6° W。 面積: 29.86㎡

床面: 北側へ低く傾斜していて、南壁直下と10cmの比高差がある。南側支柱穴間を中心にローム土が多量に散



第40図 2号住居(1)



ている。調査時の所見では住居廃絶に伴う抜柱作業時の廃土と想定している。掘り方はAs-YP層を掘り込み、北側・東側の地山の低い側をさらに深めに掘る傾向があった。埋戻し土内にAs-YPの混入が多い。

**ピット**：4 主柱穴(P 1～4)および入口と思われる南側壁寄りに3本のピット(P 6～8)がある。主柱穴は90cm以上の深さがある。上面形状は円形に近いが、底面は住居長軸に垂直な東西方向に長い長円形を呈している。P 1は底部に2個所の柱痕があり、断面に明瞭な柱痕が認められる。入口ピットは配置よりP 6・8が相当すると考えられる。主柱穴底面の軸方向とは直交する南北に細長い長円形を呈し、南壁に梯子を掛けたような傾斜となる。またP 8には柱を固定したようなローム土が断面で観察できる。P 7は平面形状が両脇の入口ピットと類似する浅い性格不明の施設である。南壁に接しているP 5

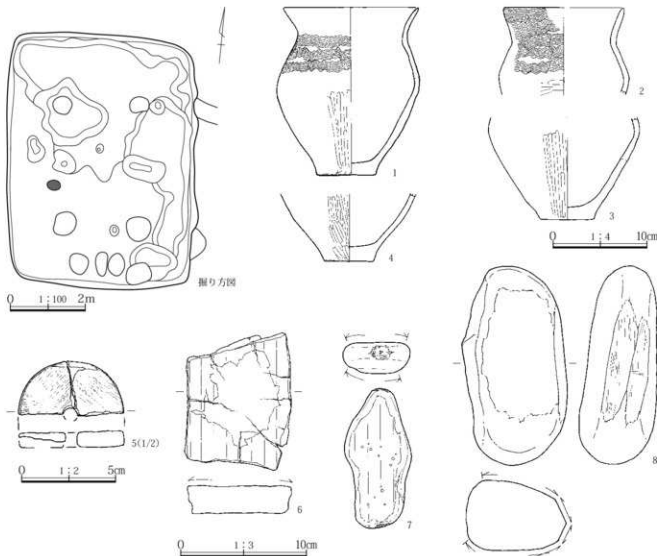
は形状が不整で底部も狭いが配置より貯蔵穴と考える。

**炉**：北壁下中央付近に炉1、P 2の北側に小規模な炉2を確認した。炉1は径102×77cmの南北に長い卵形を呈し、長さ30cmの枕石を南寄りに据えている。使用面での深さは5cmで平面規模に比して浅い。炉2はP 2の北側70cmにある。長軸は東西方向で36cm、短軸32cmで円形に近い。深さ6cmで枕石はない。

**その他**：5号土坑に繋がる2号溝に先出している。4号土坑とも重複している。壁溝は確認できない。

**遺物**：8点の遺物を図示した。糞1はP 2脇床上4cm、糞2はP 5内の床下25cmの高さからの出土で本住居に確実に伴う遺物である。糞4は炉1付近での出土だが床上15cmの高さ、糞3は埋没土内の出土である。石器類は7・8が床直上で出土した。

**所見**：弥生時代後期新段階。



第41図 2号住居(2)および出土遺物

3号住居(第42~45図 PL.7-1~6,60-61 遺物観察表330ED)

位置: X=080~084, Y=-867~874グリッドで、東西方向を長軸とする住居中、4号住居と並んで最も北側にある。

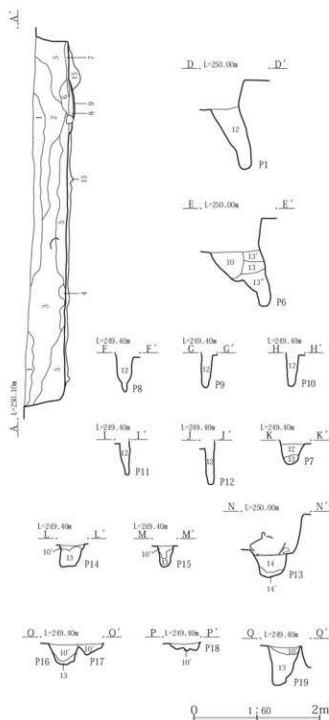
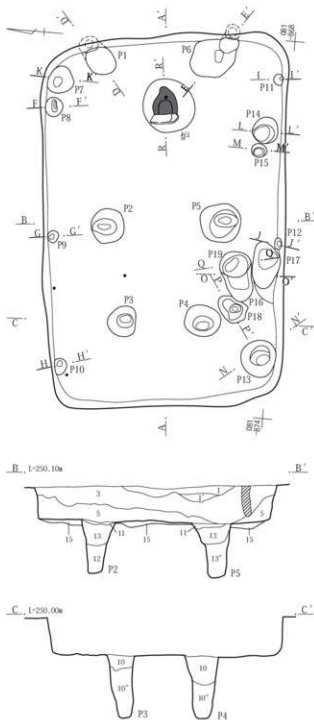
規模形状: 本遺跡での調査例では長軸東西方向の住居に一边8.5mを超す大型住居はない。本住居の中では標準的な規模で、長軸5.85m、短軸3.85mの長方形を呈している。北東隅が鈍角に開き、東辺が西辺より30cm長

く、台形気味にやや歪んでいる。

埋没土・壁: 底面付近にローム土やAs-YPを含む不自然な堆積が見られるが、全体では自然堆積と考えたい。壁は垂直に近い立ち上がりを示す部分が多い。壁高は53~59cmで比較的一定している。

方位: N-82° E. 面積: 20.14㎡

床面: 地山の傾斜に沿って東側へ低く傾斜しており、西壁直下と10cmの比高差がある。掘り方はごく浅く、住居



第42図 3号住居(1)

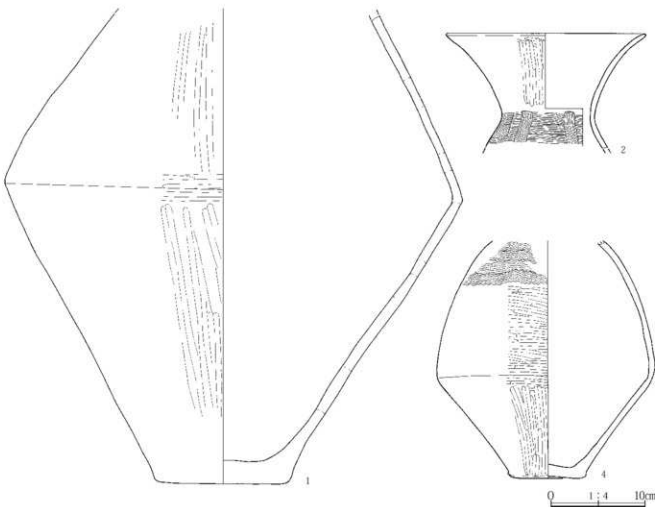
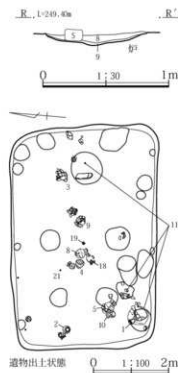
3号住居土層説明

- 1 黒期10R3/1 Y・ローム粒を含む。しまり良い。1'は暗褐色土を薄状に含む
- 2 暗灰黄2.5/4/2 ローム粒・ロームブロック・Yを含む。しまり良い。
- 3 暗期10R3/3 ローム粒・ローム小ブロック・Y、炭化物を含む。しまり良い。
- 4 ローム土・Y・暗灰黄土2.5/4/2の混土。しまりやや弱い。
- 5 黒期2.5/3/1 ローム粒・Yを少量含む。しまり良く弱い。
- 6 黒期2.5/3/4 ローム粒・ローム小ブロック・Yを多く含む。しまりやや弱い。
- 7 黒2.5/2/1 ローム粒・Yを含む。固くしまっている。
- 8 暗期10R3/4 Y・ロームブロックを全体に含む。焼土ブロック、炭化物表層に多く入る。
- 9 焼土主体の土。Y・炭化物、暗褐色土を含み、固くしまっている。
- 10 黒期10R2/3 ビット上面の埋没土。ロームブロック・Yを全体に含む。10'は炭化物多い。10''はしまり弱い。
- 11 黒期10R2/2 中央付近のビット上面に見られる踏み固められた層。Y・ロームブロックを全体に含む。
- 12 暗期10R3/3 壁柱穴に顕著に見られる。ロームブロック・Yを多く含みしまり弱いため崩れやすい。
- 13 黒10R4/4 ビットの中・下層に見られる。Y多く含み崩れやすい。13'はローム粒多い。13''は粘性強い。
- 14 黒期10R2/3 P13にのみ見られる。Y・ロームブロックを下層に多く含む。炭化物少量混入。しまり弱い。14'は炭化物少ない。
- 15 暗期10R3/3 ローム土・Y・ロームブロックの混土。しまり良く上面は強く踏み固められている。

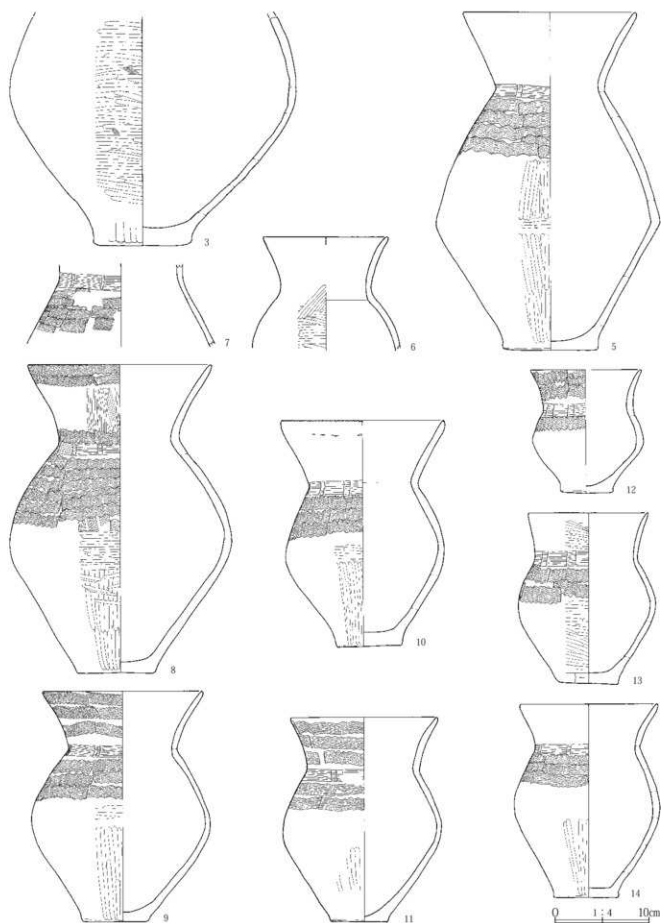
3号住居ビット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	50×42×99	主(壁)
2	56×53×85	主
3	50×44×101	主
4	57×50×100	主
5	63×62×85	主
6	82×62×49	主(壁)
7	42×40×35	
8	30×28×58	壁
9	18×18×51	壁
10	26×20×51	壁
11	18×16×50	壁
12	20×11×47	壁
13	58×56×48	貯蔵か
14	43×40×36	
15	25×22×35	
16	(40)×43×31	
17	75×43×33	
18	50×38×25	
19	50×43×63	

(4) 弥生時代後期の竪穴住居

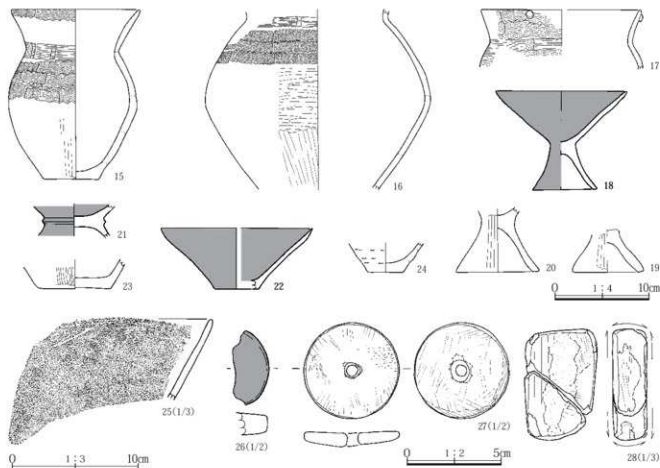


第43図 3号住居(2)および出土遺物(1)



第44図 3号住居出土遺物(2)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



第45図 3号住居出土遺物(3)

掘り下げ時の小さな窪みを埋め戻す程度で、上面は踏み固められている。埋戻し土にAs-YPの混入は少ない。

**ピット**：変則的な主柱穴(P1~6)の他、13本のピットを調査した。主柱穴の内P1~6は東壁直下にあるが壁外へオーバーハングするように掘り込まれている。また、中央にあるP2・5は上面に踏み固めが認められ、住居廃絶時には埋められていた柱穴と考えられる。この2基のピットの下端が特に長円形を呈している。P8~12は対にはならないが南北両壁直下にある壁柱穴である。南東隅にあるP13は配置・規模から貯蔵穴の可能性もある。北東隅のP7はP13のほぼ対角線上に穿たれているが、規模は小さく対にはならない。炉と反対側の西壁下では入口ピットを想定して精査したが確認できなかった。南壁下にあるP14~P19の中に入口ピットになる施設が含まれる可能性もあろう。なお、P16は下層出土土器片が炉や西壁下出土破片と接合しており、住居廃絶後も開口していたことが分かる。

**炉**：東壁下から50cm離れた位置にある。上面は径85×83cmのほぼ円形を呈し、西寄りに長さ45cmの枕石を据え

ている。埋没土内には焼土や炭化物が多く、底面も被熱による赤変硬化が顕著であった。

**その他**：弥生時代中期の36号住居に後出する。

**遺物**：甕類を中心に土器類出土の多い住居で、住居内のほぼ全域に散るようにして出土した土器類26点と石製品2点を図示した。西壁下の壺2・甕5や住居中央付近の甕9が床直上の出土である。また甕10は甕5の上に重なるようにして出土した。P13上の壺1は、上方は床上36cmの高さまで達していたが下側はP13内に多少食い込むような状態であった。これらを本住居に確実に伴う遺物と考えたい。炉北脇の壺3は床上12cmの高さ、壺4、甕8、台付甕19・20は住居中央の床上10~20cmの高さまでまとまって出土している。甕11は炉脇から西壁下およびP13・18内の離れた場所で出土した多数の破片が接合している。その他にも甕12~15など完形近くまで復元できた土器は多いが、いずれも埋没土内の破片より接合復元した遺物である。鉢・高杯の他、土製紡輪破片26や完形の石製紡輪27・砥石28なども埋没土内出土である。

**所見**：弥生時代後期古段階。

4号住居(第46~48図 PL. 7-7・8、8-1~3、62・63

遺物観察表331頁)

位置: X=081~085、Y=-835~840グリッドで、東西方向を長軸とする3号住居の東側27mに位置する。

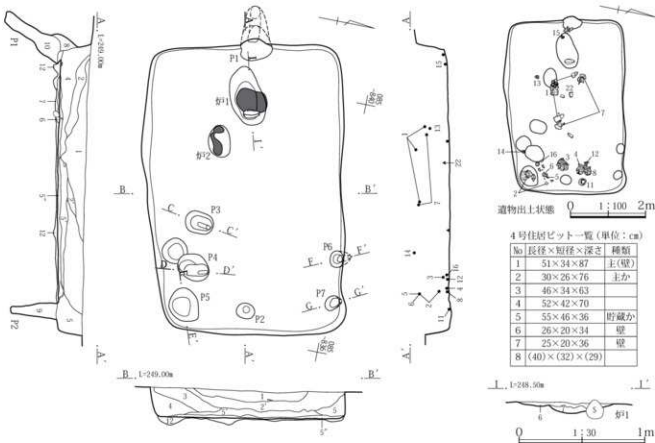
規模形状: 長軸4.6m、短軸3.2mの東西に長い長方形を呈している。南辺は湾曲し、整った形状ではない。西辺が東辺より30cm長く、台形気味にやや歪んでいる。

埋没土・壁: 自然堆積の埋没と考えられるが、底面やや上の位置に踏み固められた層がある。壁はほぼ直線的に立ち上がっている。壁高は深い南・西側で50cmを測る。

方位: N-77° E。 面積: 12.81㎡

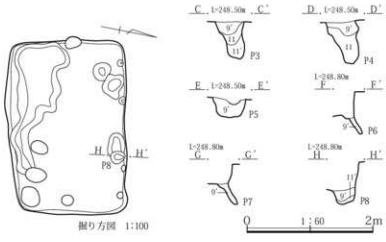
床面: ほぼ水平で、中央付近が壁際より2~4cmほど低くなっている。掘り方は地山の高い南西側ほど深めであるが、全体に浅く、住居掘削時の窪みを埋め戻すような状態である。

ピット: 変則的な配置である。深さからP1・P2の2本が支柱穴になると思われるが、P1は壁際であり、開口部が住居中央側へ向かって大きく傾いて穿たれている。P5は貯蔵穴の可能性があろう。P3・4は住居長軸方向に斜行して並んでいる。両方とも底面が南北に細



4号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	51×34×87	主(壁)
2	30×26×76	土か
3	46×34×63	
4	52×42×70	
5	55×46×36	貯蔵穴
6	26×20×34	壁
7	25×20×36	壁
8	(40)×(32)×(29)	



- 4号住居土層説明
- 1 黒層2.53/2 YP・ローム粒を含む。
  - 2 黒層2.53/2 YP・ローム粒、ローム小ブロックを含む。2'炭化物粒散見する。
  - 3 相戻層2.54/2 YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。
  - 4 オリーブ層2.574/3 YP・ローム粒・ロームブロックを多く含む。
  - 5 黒層2.53/2 YP・ローム粒少量含む。5'以下でローム粒の量は減る。5'は踏み固められてしまっている。
  - 6 黒層10/R2/3 H1・ロームブロック・炭化物を全体に含む。黄土少し含む。しまり強い。
  - 7 赤層2.53R/8 H2下層の境上。YPを含む。しまりあり。粘性なし。
  - 8 相戻層2.54/2 ローム粒・YPを含む。
  - 9 黒層10/R2/3 H1・ローム粒が全体に少量散見し、しまり強い。9'は侵入物多い。
  - 10 黒層2.53/2 ローム小ブロック・YPを多く含む。
  - 11 相戻層10/R3/4 YP・ロームブロックを多く含む。くずれやすい。11'でYPの量さらに多い。
  - 12 黒層10/R2/3 掘り方埋没土。YP・ローム粒・ロームブロックを多く含む。粘性なし。表面は特に固くしまっている。

第46図 4号住居

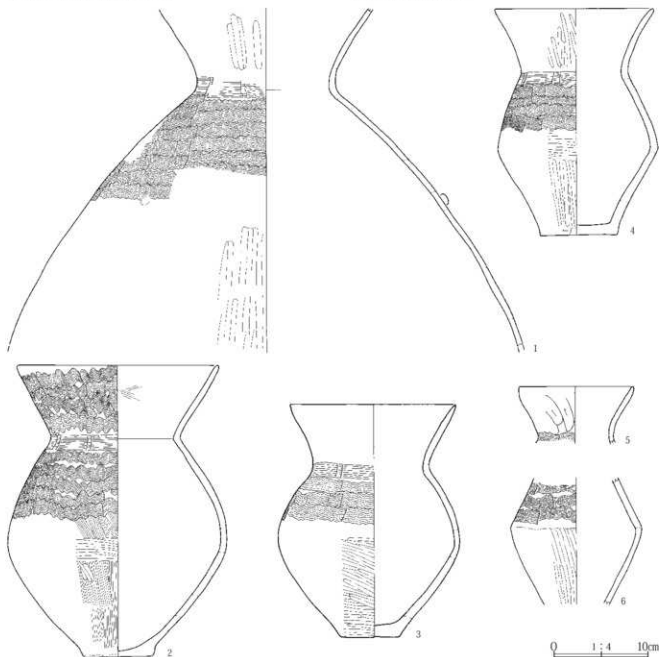
長く、住居中央に向かって若干傾いて穿たれている。P 6・7は北辺東側の壁際に並び、壁柱穴や人口ピットのような配置にあるが、P 1同様下側が外方へ向かって大きく傾いている。北辺西側には掘り方調査時に壁柱穴のようなピットを確認しているが、どちらも深さ10cm未満の小規模な窪みである。

**竪**：西壁から30cm離れた位置に竪1があり、その南東側に竪2がある。竪1は長さ96cm、幅54cmの楕円形で、東寄りに長さ27cmの枕石を据えている。竪2は深さ2cmだが、底面の赤変硬化面は明瞭である。

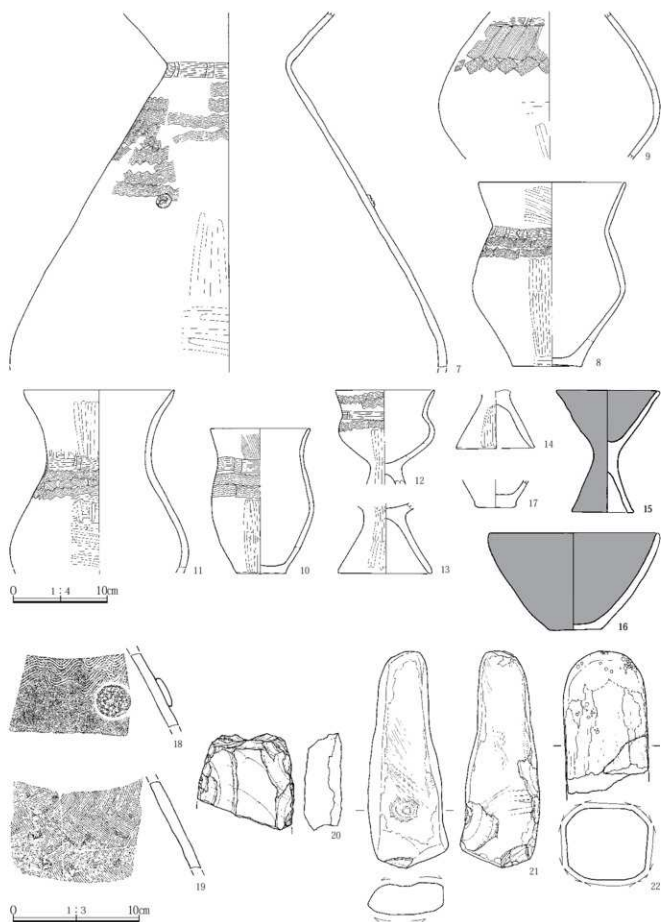
**その他**：壁溝は確認できない。

**遺物**：出土遺物は多く、特に床直上の遺物が豊富である。土器19点、石器類3点を図示した。高杯15は竪1西際床直上の遺物である。4・8・11・12の甕類4点は東壁寄りの住居床直上で一括出土した。甕3は床上4cm、甕2は床上9cmの高さだが、東壁寄りの出土で、これらの土器を本住居に確実に伴う遺物と考えたい。壺1・7、台付甕13は住居中央付近の床上20～35cmに散っていた破片が接合した遺物である。壺5・甕6・台付甕14は壁際だが、床上30cm以上の高さからの出土である。石器類のうち砥石22が住居中央付近の床直上出土である。

**所見**：弥生時代後期。



第47図 4号住居出土遺物(1)



第48図 4号住居出土遺物(2)



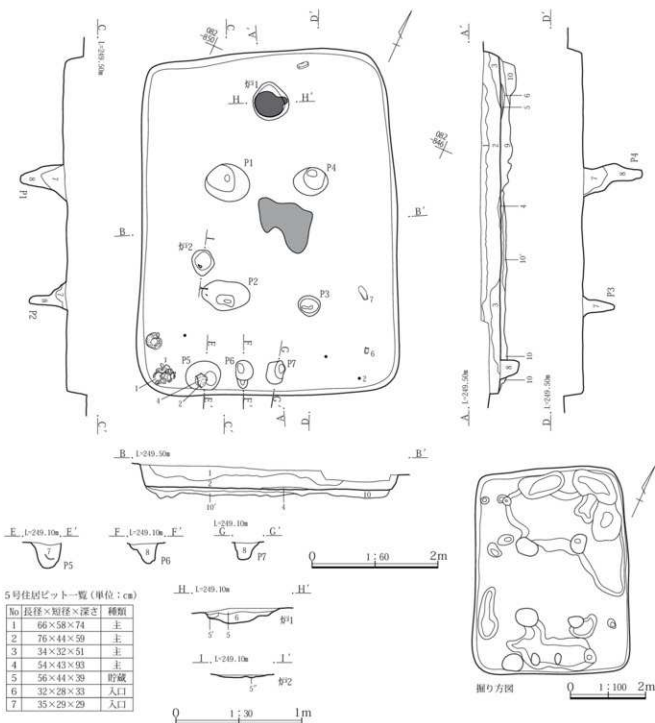
## 5号住居(第49・50図 PL. 8-4~7, 63 遺物観察表332⑥)

位置: X=076~082, Y=-845~850グリッドにある。

規模形状: 長軸5.5mの長方形を呈している。短軸は北側で3.85m、南側は4.15mで台形状に歪んでいる。

埋没上・壁: 住居中央付近にローム土がまとまって見られる以外はレンズ状の堆積で自然埋没が想定できる。壁高は最も深い西壁で37cmを測る。

方位: N-25° W。 面積: 20.12㎡



第49図 5号住居

**床面**：東側へ低く緩やかに傾斜しており、西側より4～7cm低くなっている。住居中央のローム土は2号住居同様の抜柱作業時の残土と考えられる。明瞭な貼床は見えず、床面の踏み固めはあまり強くない。掘り方は不規則で、壁直下では見られない部分もある。それ以外では10cm以上の深さがあり、地山の低い北側で深くなっている。

**ピット**：4主柱穴(P1～4)は深さが不揃いで、住居南側に偏った位置にあり、竈のある北側に広い空間をつくっている。南側のP2・3は底面がやや細長くなっているが、北側の2本はほぼ円形を呈している。P6・7はやや浅めだが瓦置より入口ピットと思われる。南辺中央よりやや西側に偏った位置にある。P5はP6西側壁際に穿たれた貯蔵穴の可能性のある施設である。

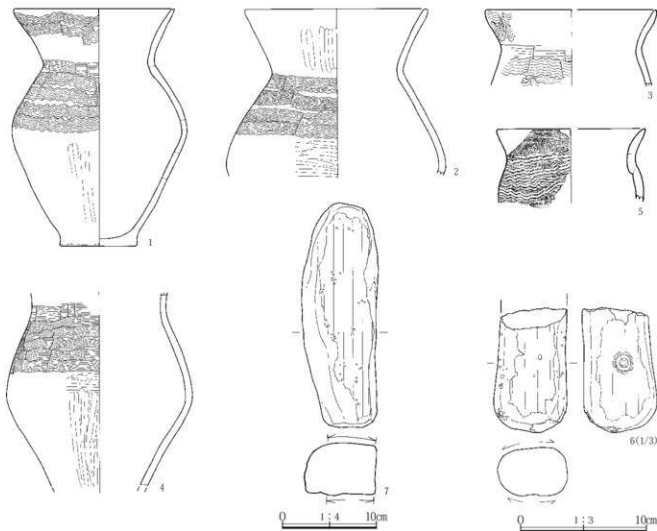
**竈**：北壁から40cmの位置に竈1、P2の北西脇に竈2がある。竈1は長径62cm、短径56cmの円形に近い形状で、

埋没土には焼土が顕著だった。深さは7cmで焼土下には被熱による硬化面がある。竈2は一回り小型で、深さ3cmで焼土の堆積も少ないやや不明瞭な施設である。どちらの竈も枕石は据えられていない。

**その他**：縄文時代前期の39号住居に後出し、21号土坑と重複している。壁溝は確認できない。

**遺物**：出土遺物は住居南側に偏って出土した。土器5点と石製品2点を図示した。土器は甕類のみである。完形に復元できた1は北西隅付近の床直上で、周辺には別個体破片の出土もあった。4はP5内床下27cmの出土遺物である。2は床上15cm前後の高さであるが南壁際に散る遺物が接合したもので、これらを本住居に確実に伴う遺物と考えたい。3・5は埋没土内の遺物である。石製品6・7は2点とも砥石で東壁下南寄りの床直上出土遺物である。

**所見**：弥生時代後期古段階。



第50図 5号住居出土遺物

## 6号住居(第51図 PL. 8-8、63 遺物観察表332)

調査区北東隅で住居南隅部分を確認し、可能な限り調査範囲を広げて西壁の規模を把握した住居である。

位置：X=088~093、Y=-833~837グリッドにある。

規模形状：東辺6.45mの南北方向に長い長方形を呈すと思われる。

埋没土・壁：全体に炭化物の混入が多い。2層はローム土の多い不揃いの埋没土で、人為的埋戻しの可能性があ

るが、中層以上は黒色味の強い類似した埋没土である。壁高は最大で79cmを測る。方位：N-33°W。

床面：調査範囲では北側へ低く若干傾斜するようだ。掘り方は調査できた範囲では10cm以上の深さがある。

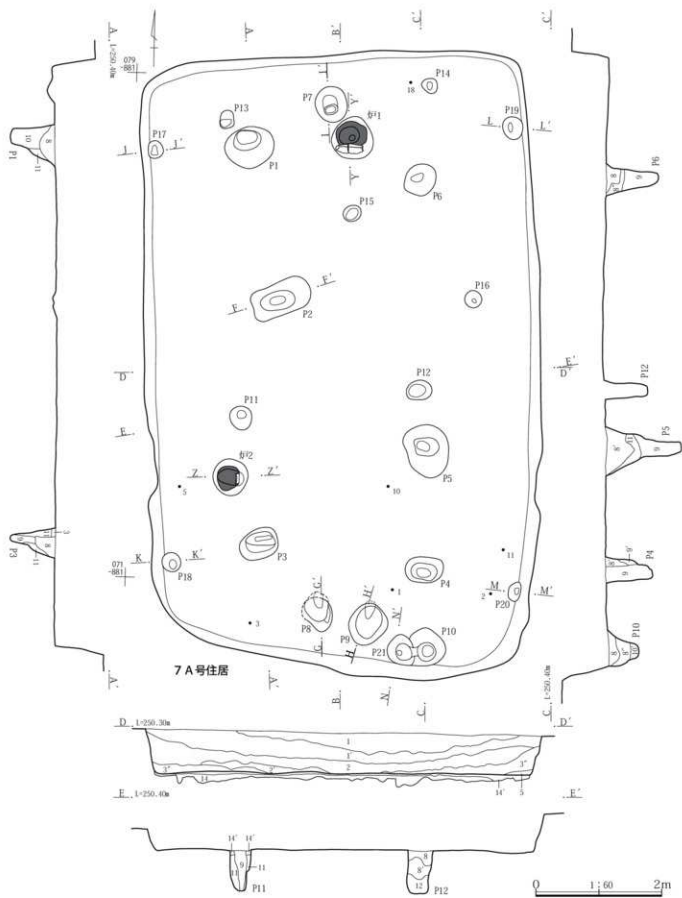
その他：ピット・炉・壁溝・貯蔵穴等の施設は調査区域外になる。壁柱穴のない住居であることが確認できる。

遺物：出土遺物は少なく、図示できたのは土器4点、石製品2点である。糞1は南東隅付近のオーバーハング気味の壁際床直上で出土した完形の糞で、すぐ脇の床直上から出土した6の砥石と伴に確実に本住居に伴う遺物である。他は埋没土中の出土である。

所見：弥生時代後期中段階。南側に隣接する9号住居と同規模で近似した軸方向の住居である。

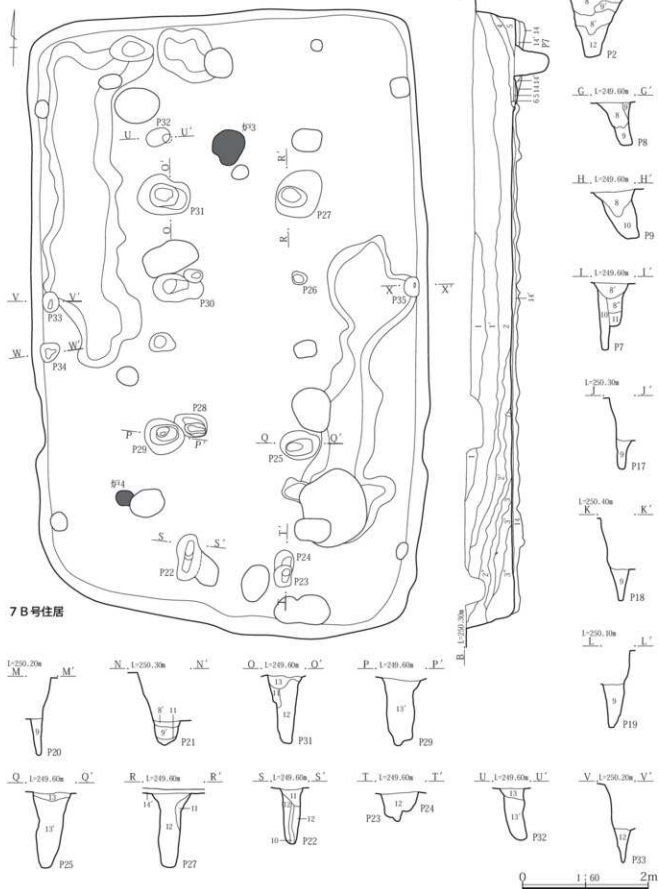


第51図 6号住居および出土遺物



第52図 7号住居(1)

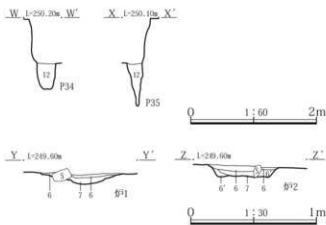
(4) 弥生時代後期の竪穴住居



7B号住居

第53図 7号住居(2)

## 第二章 発掘調査の記録



7号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類	No	長径×短径×深さ	種類
1	80×66×71	主	18	30×30×50	壁
2	94×30×105		19	36×32×69	壁
3	64×46×69	主	20	31×20×57	壁
4	60×42×75	主	21	52×(42)×58	
5	85×66×122		22	72×28×89	入口(B)
6	52×48×84	主	23・24	(57)×(27)×(46)	入口(B)
7	56×50×107	伊奥か	25	(63)×(45)×(129)	主(B)
8	(48)×42×72	入口	26	(24)×(20)×(35)	
9	64×55×80	入口	27	(80)×(68)×(130)	主(B)
10	60×(48)×5	貯蔵か	28	(56)×(38)×(45)	
11	38×36×65		29	(62)×(55)×(15)	主(B)
12	40×30×69		30	(30)×(22)×(38)	
13	29×22×30		31	(81)×(56)×(113)	主(B)
14	22×22×28		32	(40)×(38)×(70)	
15	28×25×22		33	(32)×(26)×(63)	壁(B)
16	28×28×25		34	(34)×(30)×(52)	壁(B)
17	39×24×47	壁	35	(32)×(24)×(81)	壁(B)

第54図 7号住居(3)

薄い貼床を挟んで2期の柱穴と炉が確認できる。住居プランに拡幅や建て替えの痕跡は見られず主柱穴間の重複もないが、後出する住居を7号住居、先出する住居を7号住居とした。

**位置:** X=069~079、Y=874~880グリッドにある。

**規模形状:** 長軸側は東辺9.95m、西辺9.05mで南東隅が鈍角に開く台形状に歪んでいる。短軸は6.2mを測る。

**埋設土・壁:** ローム土の混入の多い埋設土であるが、壁際から規則的に埋設しており自然堆積と想定される。壁高は最も深い南壁で78cmを測る。

**方位:** N-4° W。 **面積:** 54.32㎡

**床面:** 強く踏み固められている。緩やかな凹凸のある床面で、全体では東へ低くわずかに傾斜し、西隅と3cmほどの比高差がある。ローム土を多量に含んだ薄い貼床がほぼ全体で観察できる。A・B両住居の床面はほぼ共有するようで、確認できる床面は大半の部分で1面で、B住居の柱穴や炉の上面および周辺の窪み付近にのみ新たな層厚7cm前後の貼床が加えられている。掘り方は全体

### 7号住居土層説明

- 1 オリーブ層2.5Y(3) YP・ローム粒を含む。やや固くしまる。1'ではさらに固くしまる。
- 2 黒色2.5Y(2) YP・ローム粒を含む。上部部に炭化物不純物等に混じり固くしまる。2'はロームブロック混じり。2''は混入物少ない。
- 3 灰褐色2.5Y(2) YPを少量含む。固くしまっている。3'は黒色土を混入し含む。3''ではYPをやや多く含むロームブロックは少ない。
- 4 灰褐色2.5Y(2) ローム粒を多く含む。YPを含む。固くしまっている。
- 5 黒色土2.5Y(2) YPを少量含む。固くしまっている。
- 6 灰褐色10YR(3) 砂土層埋設土。ロームブロック・YPが全体に混じり。炭化物、焼土を少量含む。6'は焼土の混入少ない。
- 7 赤褐色5YR(4) 焼土を多量に含む。YPが混入する。
- 8 黒色10YR(2) ビット土層埋設土。ローム粒・YPが全体に混じり。8'はロームブロックが混入する。8''はローム粒の混入が多い。
- 9 黒色10YR(2) ローム粒・YPをやや多く含む。しまり強い柱面部分。9'は土質は9期に近いがしまりあり。柱面とは想定できない。
- 10 オリーブ層2.5Y(3) YPを多く含む。ローム粒・黒色土を含む。しまり強い柱面部分。10'は柱面らしくない位置だが土質同。
- 11 赤い・黄褐色10YR(3) YP・ローム粒等を不均等にやや多く含む。
- 12 黒色10YR(2) YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。ボソボソとしてしまり強く、くずれやすい。
- 13 赤い・黄褐色10YR(4) YP・ローム粒等を全体にやや多く含む。ボソボソしている。13'はしまりやや強く。
- 14 黒色10YR(2) YP・ローム粒・ロームブロックを多く含む。しまり強い。14'は粘土層部分で特に固くしまっている。

※ P2811層、P30421層

に10cm前後の深さがあり、西辺北寄りと東辺南寄りにやや深い部分がAs-YP層まで溝状に掘り込まれている。

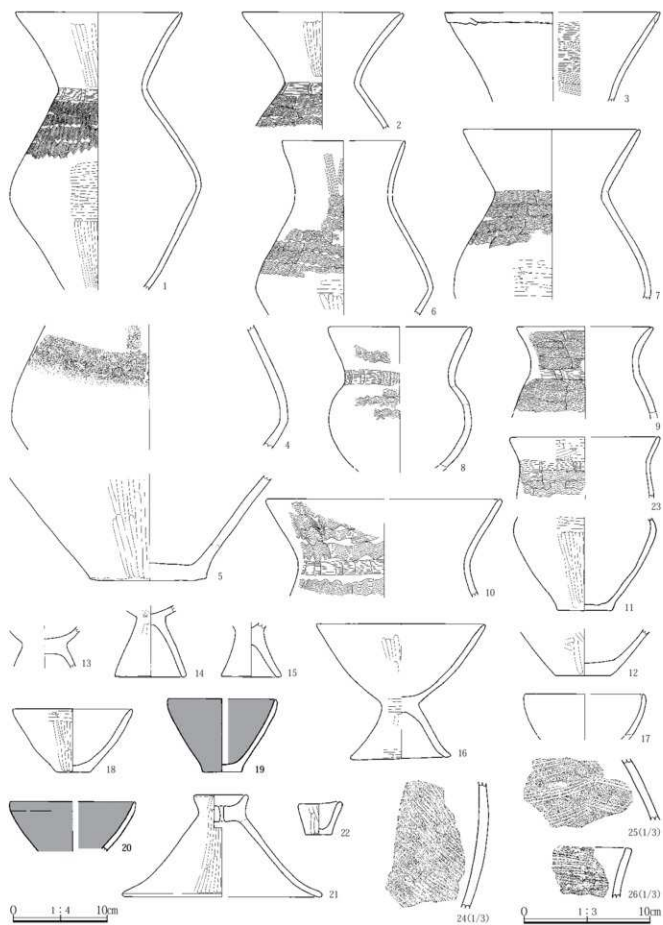
**ピット:** 35本のピットを調査した。A住居の主柱穴は不規則でP1~6の6本の他、P11・12も可能性がある。主柱穴の可能性が高いのは外側の4本(P1・3・4・6)で、住居南辺に沿うように平行四辺形状に歪んだ配置となっている。内側の柱穴では特にP2が東側へ逸れている。P1~4は底面の形状が東西に細長い。壁柱穴の4本(P17~20)は規則的配置となっている。P8・9は入り口施設で住居南壁に梯子を掛けたように傾いている。P7は伊奥ピットで柱痕も認められるが、炉にほとんど接するほど間近に穿たれている。

P31・29・25・27はB住居の4主柱穴と考えられ、規則的な配置となっている。またP22~24はこれに伴う入口ピットと考えたが、2本のピットの間隔は159cmで本遺跡の中では際立って広い。B住居入口ピットにはA住居で見られる傾きはない。P33~35は壁柱穴で東西壁の中央付近のみで見られる。A住居の壁柱穴のうちB住居と共有する施設が存在した可能性もあろう。

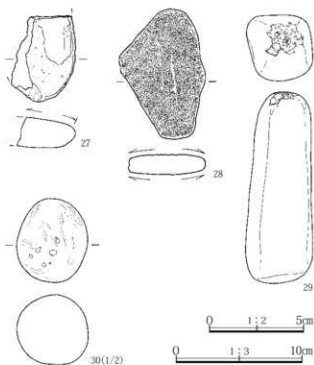
本住居にはP3・4・11・22など断面に柱痕が観察できるピットも多い。

**炉:** P1・P6間に炉1、P3・P11間に炉2がある。炉1は径69×68cm、炉2は径58×56cmでどちらもほぼ円形

(4) 弥生時代後期の竪穴住居



第55図 7号住居出土遺物(1)



第56図 7号住居出土遺物(2)

を呈し、深さ10cm前後で住居中央寄りに枕石を据えている。#3・4がB住居に伴う施設と思われる。被熱により赤変硬化した底面で、掘り込みはほとんどない。B住居に伴う2基の#4は、ともにA住居への柱穴移動に伴って北側へ移された可能性がある。

**その他**：弥生時代中期の36号住居に後出する。

**遺物**：遺物は住居南側での出土が多かった。完形近くまで復元できた個体は少ないが、土器26点と石器4点を図示した。3の壺口縁が南壁直下、鉢18が北壁直下の床直上からの出土である。壺5は西壁下南寄りの床上11cm、甕11は東壁下南寄りの床上17cm浮いた状態の出土であるが、壁際であることを加味しこれらの遺物を本住居に確実に伴う遺物と考えたい。本住居はピット内から出土する土器が、住居埋没土破片と接合する例が目立った。P1から甕6、P2から甕7、P10から高杯16・鉢19、P21から台付甕13・蓋21がこれにあたる。壺1はP4際だが床上45cmの高さの破片が主体で、甕10は床上11cmの高さの住居中央付近出土である。その他の土器は埋没土内の破片を接合したものである。この中で、甕9は東側に隣接する18号住居埋没土内破片と接合している。石器はピット内出土が2点あり、敲石29がP21、研磨具30がP5埋没土内の出土である。

**所見**：弥生時代後期古段階。

**8号住居**(第57～60図 PL. 9-7、10-1～6、64・65遺物観察表333頁)

住居内の北西辺西隅にトンネルを設け、尾状溝を持つ住居である。

**位置**：X=060～069、Y=-883～900グリッドにある。尾状溝は068-905グリッドにある深さ120cmの土坑状施設まで続く。

**規模形状**：長軸7.6m、短軸5.35mの長方形を呈している。北西辺西寄りには尾状溝の入口付近に段差がある。この段差上側の壁で計測しても南西辺は北東辺より30cm短く、段差下側の壁ではさらに40cm以上短くなっている。全体では台形状に歪んでいる。

**埋没土・壁**：ローム土の混入のやや多い埋没土で、床面に置かれたローム土5層以外はレンズ状堆積の見られる自然堆積である。尾状溝入口の北西辺西隅以外では直線的な壁で、北西辺や南西辺では90cmを越す壁高がある。

**方位**：N-35° W。 **面積**：35.08㎡(尾状溝を除く)

**床面**：住居中央付近がやや深くなっていて、北西や南東両壁下から5～9cmの比高差がある。#2やP16周辺壁際の床直上に、2・5号住居同様ローム土が多量に見られる。ほぼ全体に黒褐色土を踏み固めた貼床が見られる。掘り方は全体に深く、As-YP層まで掘り込んでいる。掘削時に残ったAs-YP粒はほとんど除去せずにそのまま踏み固められている部分がある。

**ピット**：4主柱穴(P1～4)、入口ピット(P5・6)はほぼ規則的配置上にある。主柱穴の底面は、若干細長い形状のようだ。東壁際から3本一組の柱列状施設が対に並ぶP7～9とP10～12が特徴的なピットで本遺跡には他に見られない。柱列の間隔は1.6m前後を測る。入口ピットは梯子を壁に掛けるように開口部が外側へ開いて傾斜している。P16は南東壁に接して穿たれた貯蔵穴であろう。P14は壁際のか奥のピットで住居中央側が広く開口し、抜柱痕の可能性はある。

**#**：P1～P4間の北寄りに#1、P2の北西側に#2がある。どちらも#内の住居中央寄りに細長い枕石を据えている。#1は径74×72cmのほぼ円形で深さ16cmを測る。#2が96×56cmの楕円形を呈し深さは9cmである。脇#にあたる#2が主#の#1より規模が大きい。

**その他**：18号土坑に後出する。壁溝は見られない。

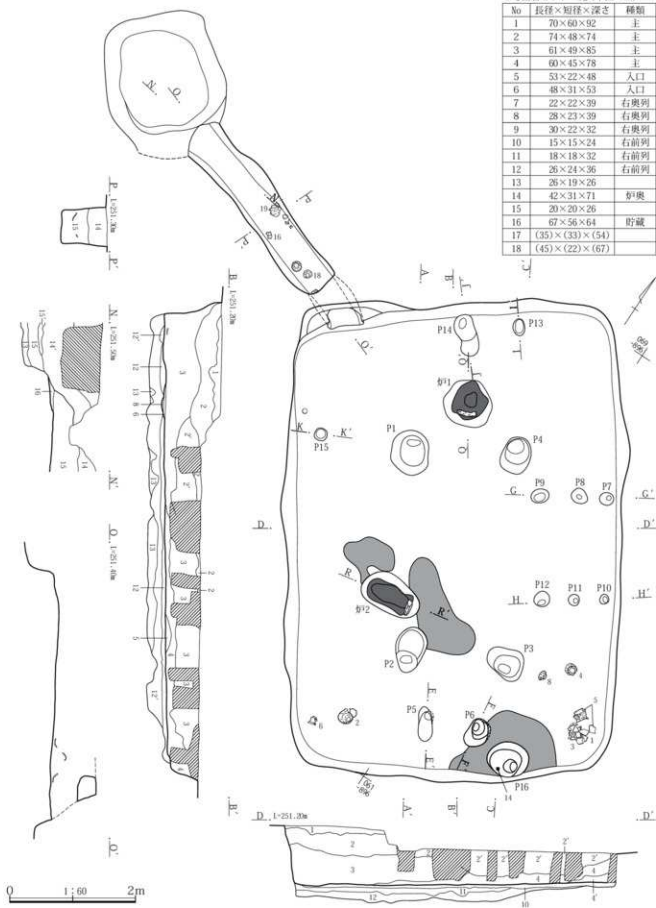
**尾状溝**：北西辺西隅に床からの高さ25cmほどのテラス状



## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

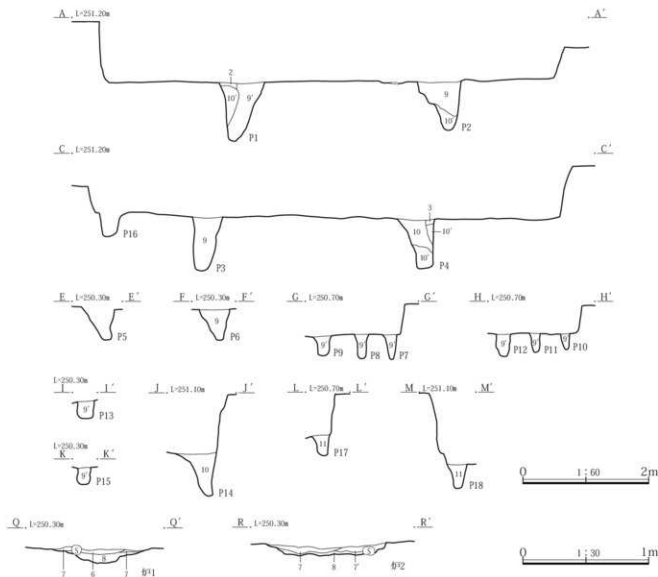
8号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	70×60×92	主
2	74×48×74	主
3	61×49×85	主
4	60×45×78	主
5	53×22×48	入口
6	48×31×53	入口
7	22×22×39	右奥列
8	28×23×39	右奥列
9	30×22×32	右奥列
10	15×15×24	右前列
11	18×18×32	右前列
12	26×24×36	右前列
13	26×19×26	
14	42×31×71	伊奥
15	20×20×26	
16	67×56×64	貯蔵
17	(35)×(33)×(54)	
18	(45)×(22)×(67)	



第57図 8号住居(1)

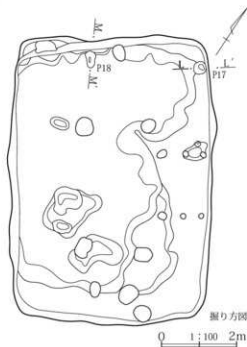
第二章 発掘調査の記録



8号住居土層説明

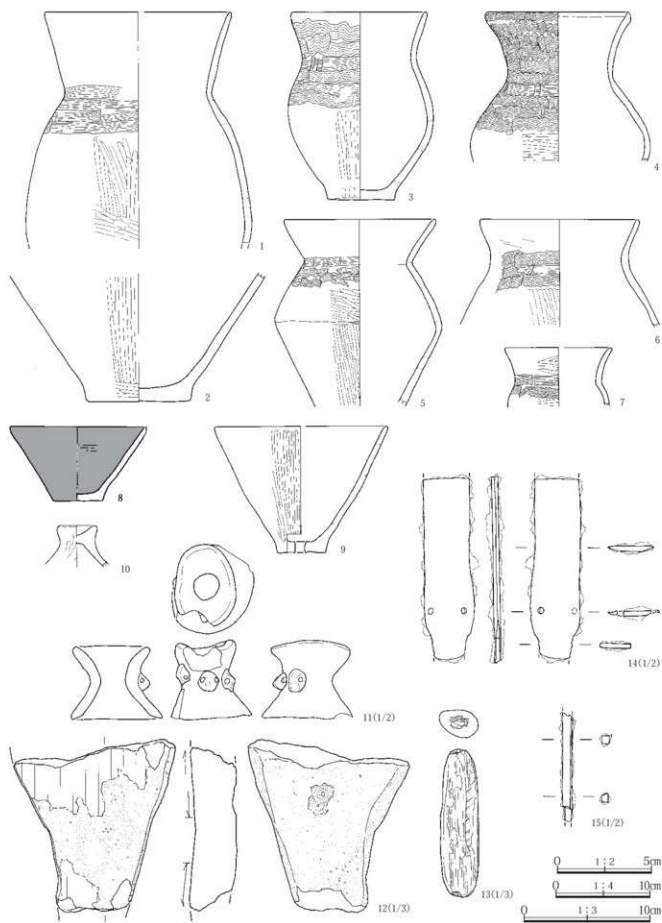
- 1 黒灰2.573/1 Ⅱ・白色軽石を含む。
  - 2 黒灰2.574/2 Ⅱを含む。炭化物をまばらに含む。2'では炭化物稍減り、黒色土・ローム粒の混入多くなる。
  - 3 オリーブ層2.574/3 Ⅱ・ロームブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを含む。しまり強い。
  - 4 黒灰2.573/2 Ⅱ・ローム粒を含む。良くしまり強い。4'は土質は変わらない。黒色味強い。
  - 5 ⅡP2じりのローム土土体。農具柄の塊土か。
  - 6 にぶい層7.575/3 Ⅱ・塊土を含む。
  - 7 黒7.572/1 Ⅱ・塊土を含む。2'はローム小ブロック混じる。
  - 8 赤褐色土576/8 Ⅱ・炭化物粒を含む。
  - 9 黒灰2.573/2 Ⅱ・ローム粒を含む。9'はロームブロック含む。
  - 10 黒灰2.574/2 Ⅱ・ローム粒を含む。しまりやや弱い。10'は混入物多い。
  - 11 黒灰1076/4 Ⅱの混入多い粘性土。ブロック状の混入でボソボソしている。
  - 12 黒灰1076/2 黒灰。Ⅱ・ローム粒・ロームブロック多い。固くしまっている。12'は掘り方理した部分でやや黒色味強い。
  - 13 ⅡP1体の層。黒褐色土。ローム粒を全体に少量含む。床面炭化りに面割を受けたが除去しなかったであろう。
  - 14 灰黄層1074/2 尾状溝土層埋没土。Ⅱ・ローム粒・ローム小ブロック等を含む。土坑内に本層近辺部分があり、14'として記した。
  - 15 黒灰1076/3 尾状溝下層土。Ⅱ・ローム粒を含む。15'にはロームブロックがやや多い。
  - 16 にぶい黄層1075/4 土坑と近接する部分付近にのみ見られる溝状部分。Ⅱの混入の多いローム土土体でしまり強い。
- ※ P 3は6層に近いがやや砂質の埋没土

0 1:30 1m

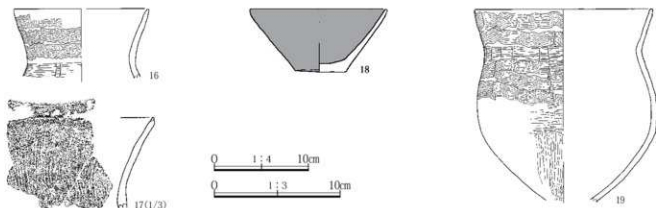


第58図 8号住居(2)

(4) 弥生時代後期の整穴住居



第59図 8号住居出土遺物(1)



第60図 8号住居出土遺物(2)

の平坦面があり、そこから長さ約60cmの範囲で地山を掘り抜いたトンネルを設け、トンネル部分を越えた後、ほぼ直線的に延びる溝である。溝部分は埋没土の観察よりトンネルの崩落した痕跡は見られず、当初から開口した施設のような。底面は地山傾斜に沿って東側へ低く若干傾斜し、溝東隅と10cm前後の比高差がある。トンネル部分は最も狭い部分で高さ45cmしかなく、大人が這って通過できるぎりぎりの規模である。底面に住居床面のような踏み固めは認められない。溝の軸方向はN-72°Wで住居西隅から東隅へ伸ばした対角線に平行するように開削されている。溝は調査時に17号土坑と名付けた後出土構へ達している。この土坑は12号住居尾状溝の終着点でもある。溝部分全体は確認できる範囲で長さ3.9m、幅70cm前後、深さ70cm前後である。

**遺物**：住居内では南東側で遺物の出土が多い。また尾状溝内からも遺物が出土している点特徴である。東隅付近床直上で壺1、甕3～5が出土し、南隅付近の壺2・甕6も床直上出土である。鉢8は東隅付近床直上出土破片とP16埋没土や住居埋没土出土破片が接合している。これらは本住居に確実に伴う遺物である。その他の土器と石器2点は埋没土中の出土である。14は鉄剣の茎部分で、南東壁下の床面より27cm浮いた状態の出土である。この住居は上面の攪乱が多いが、本品の出土は壁際であり、本住居に伴う可能性の高い遺物と考えたい。埋没土中からは15の鉄器も出土している。茎または釘のような破片で混入品と考える。

尾状溝内では住居側の東寄り出土が多い。土器4点を図示した。溝底面より甕16は7cm、台付甕19は18cm、鉢18は16cm浮いて出土した。図示に耐えない土器の中には溝底面から3cm前後の高さでの出土破片があったが、

大半は10cm以上浮いた状態であった。トンネル部分にわずかにかかる遺物もあるが、住居側からではなく、溝開口部から流れ込んだ遺物と考えられる。

**所見**：弥生時代後期中段階。

#### 9号住居(第61・62図 PL.10-7・8、65 遺物観察表334E)

調査区北東隅で西側部分のみ調査できた住居である。

**位置**：X=078~084、Y=-827~832グリッドにある。

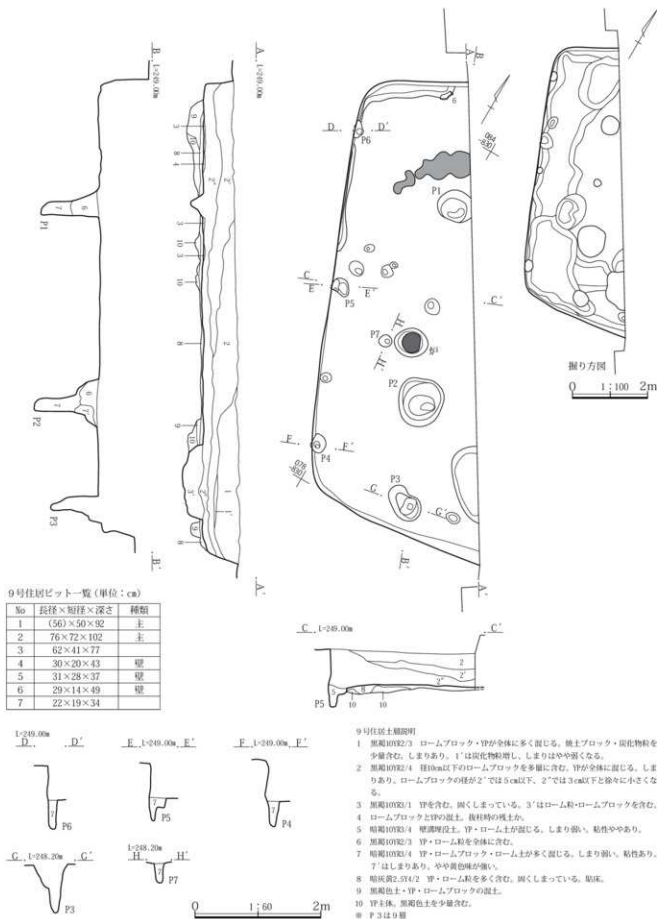
**規模形状**：西辺で6.6mを測るが、南壁を挟む両隅が鈍角に開いている。調査できた範囲のまま北・南辺が延びれば本遺跡で最も台形状に歪んだ長方形になる。

**埋没土・壁**：黒色土主体にレンズ状堆積した自然埋没と判断できる。壁は垂直に近い立ち上がりとなる部分が多いが、南壁では上方へ開くように傾斜している。壁高は最も深い西壁で63cmを測る。

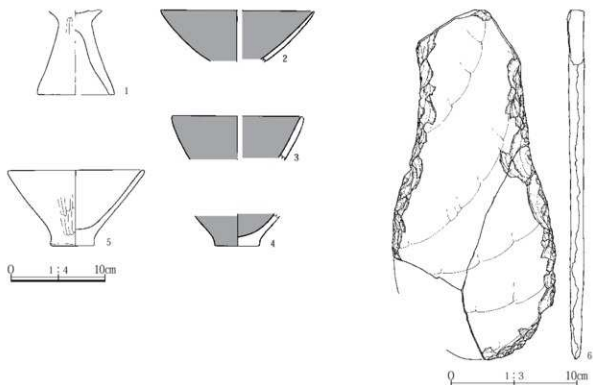
**方位**：N-25°W。 **面積**：残存(15.49)㎡

**床面**：比高差5cm前後の緩やかな起伏がある。調査できた範囲では全体の傾斜傾向は確認できない。P1の北側を囲むようにローム土主体の土が見られ、2号住居などに見られる状況と同じ、拔柱残土と想定されるものである。ローム土の混入の多い土を踏み固めた層厚2~7cmの貼床がほぼ全体で見られる。掘り方は住居中央付近ではごく浅く、壁際で深くなっている。

**ピット**：P1・2が主柱穴で、底面は若干細長くなっている。4主柱穴の住居になるはずである。P4~6が壁柱穴でほぼ等間隔に穿たれている。P3は貯蔵穴の可能性のある位置にあるが、断面の形状は柱穴的である。P7のような性格不明のピットがあり、その他に深さ3cm前後の不明瞭な窪みが多数見られたがピットとして扱わなかった。掘り方調査時にも不明瞭な窪みは観察できた。



第61図 9号住居



第62図 9号住居出土遺物

**か:** P 2 北西側にかが確認できる。径54×45cmで比較的小規模である。脇炬となる位置にあり、住居北側にもう1か所の主炬があるはずである。

**その他:** 重複遺構はないが、南西隅付近は10号住居尾状溝と40cmの距離まで近接している。不規則な壁溝が北西隅周辺に確認できる。幅25cm前後の北辺では深さ2cmしかなく、幅12cm前後の西辺では深さ7cm前後を測る。南寄りに住居内土坑があるが、断面観察より住居廃絶時に開口していたことが分かる。入口施設が想定される地点であり、本住居に後出する遺構の可能性もあろう。

**遺物:** 出土遺物は少なかった。特に壺・甕類の出土が乏しく台付甕1は台部のみで、他は鉢・蓋などであった。いずれも埋没土内の出土である。鉢3・4は同一個体の可能性がある。石器は石鎌6が北壁直下の床直上出土の本住居に確実に伴う遺物である。

**所見:** 弥生時代後期。

**10号住居** (第63～66図 PL.11-1～6, 65-66 遺物観察表334頁)

尾状溝と思われる施設を有す住居としては最も東側にあり、他の住居群からやや離れている。また、尾状溝が壁中央付近に繋がっている唯一例である。

**位置:** X = 062～070、Y = 827～833グリッドにある。

尾状溝の先端は078-831グリッドにある。

**規模形状:** 長軸8.2m、短軸5.7mの長方形を呈し、南東隅が鈍角に開くためやや平行四辺形気味に歪んでいる。

**埋没土・壁:** 黒褐色土主体にレンズ状堆積した自然埋没と判断できる。壁高は南・西側で50cmを測る。

**方位:** N-1° E。 **面積:** 41.70㎡

**床面:** 南側へ低く傾斜していて北壁直下と10cm前後の比高差がある。P 3 東側の壁際床直上にローム土が多量に見られる。掘り方は浅く、壁際で若干深くなっている。

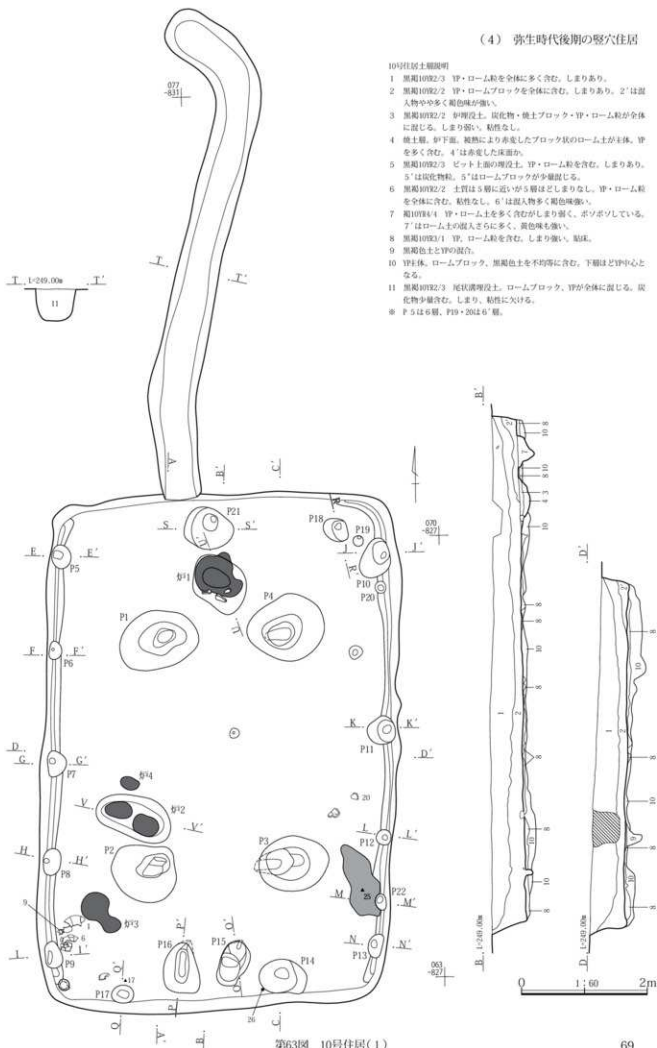
**ビット:** 4主柱穴(P 1～4)は開口部分がきわめて広く、P 3・4の下端が細長い。壁柱穴が11本と多いことが特徴である。西側の壁柱穴(P 5～9)は比較的規則的に並んでいるが、東側の壁柱穴(P 10～13・20・22)は変則的でP 6と対になるビットを欠いている。入口ビットP 15・16は掘り直しの痕跡があり、形状がやや異なっている。入口東脇に貯蔵穴と思われるP 14が壁に重なるように穿たれている。か中央のP 21は開口部が広く底部の狭い逆三角形の断面である。掘り方調査時に深さ5cm前後の窪みが不規則な配置で数基見つかっているが、ビットとして扱わなかった。

**か:** か1はP 1-P 4間の北壁寄りにある。上面の規模は91×72cm、深さ15cmを測る。住居中央寄りに枕石と思

(4) 弥生時代後期の竪穴住居

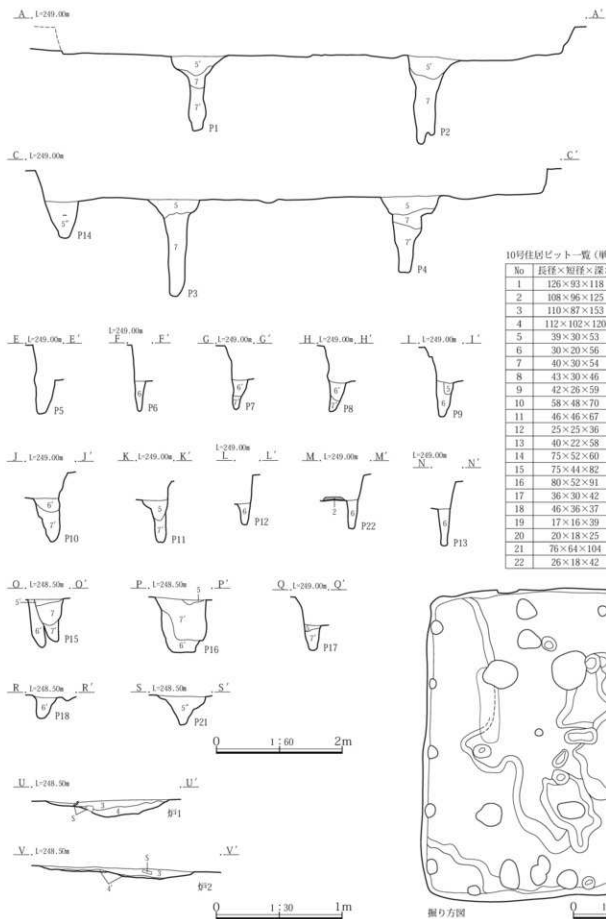
10号住居土層説明

- 1 黒層109B2/3 VP・ローム粒を全体に多く含む。しまりあり。
  - 2 黒層109B2/2 VP・ロームブロックを全体に含む。しまりあり。2'は混入物や多く褐色味が強い。
  - 3 黒層109B2/2 砂埋没土。炭化物・焼土ブロック・VP・ローム粒が全体に混じる。しまり強い。粘性なし。
  - 4 焼土層。砂下面。概然により赤変したブロック状のローム土が主体。VPを多く含む。4'は赤変した床面か。
  - 5 黒層109B2/3 ビット上面の埋没土。VP・ローム粒を含む。しまりあり。5'は炭化物粒。5''はロームブロックが少量混入する。
  - 6 黒層109B2/2 土質は3層に近いが5層ほどしまりなし。VP・ローム粒を全体に含む。粘性なし。6'は混入物多く褐色味強い。
  - 7 黒109B4 VP・ローム土を多く含むがしまり強く。ボソボソしている。7'はローム土の混入さらに多く。黄色味も強い。
  - 8 黒層109B3/1 VP・ローム粒を含む。しまり強い。粘性。
  - 9 黒層色土とVPの混合。
  - 10 VP主体。ロームブロック。黒層色土を不均等に含む。下層ほどVP中心となる。
  - 11 黒層109B2/3 尾状溝埋没土。ロームブロック、VPが全体に混じる。炭化物少量含む。しまり、粘性に欠ける。
- ※ P 5は6層、P19・20は6'層。



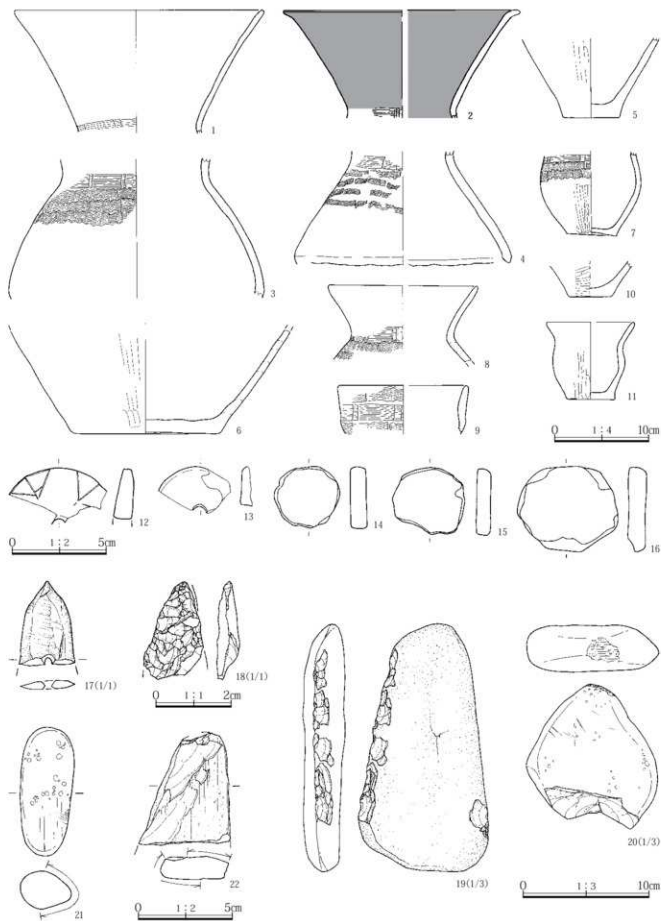
第63図 10号住居(1)

第二章 発掘調査の記録

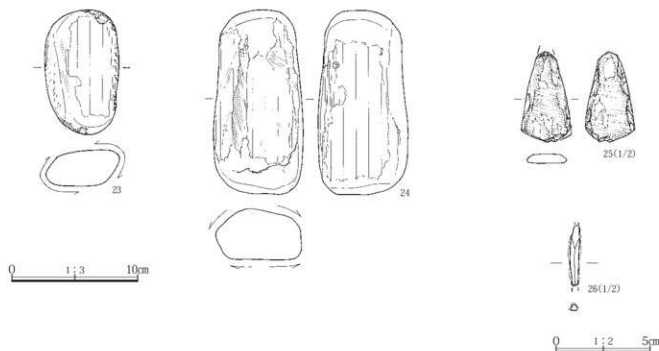


第64図 10号住居(2)





第65図 10号住居出土遺物(1)



第66図 10号住居出土遺物(2)

われる礫が見られるが、細かく破断してて据えられた礫の破片とは断定できない。P 2 周辺には 3 カ所の竪がある。竪 2 は北脇にあつて 2 個所の被熱部分に分かれるが、全体では 122×64cm の規模があり主竪である竪 1 より大きい。竪 3 と竪 4 は被熱変化した部分で掘り込みがなく、確実な竪ではない。竪 3 は双円形で長径 73cm、竪 4 は長径 30cm を測る。

**その他：**9号溝に先出している。幅 15cm 前後の壁溝が東西両長辺側に見られる。深さは東壁下で 8cm、西壁下で 3cm 前後を測る。

**尾状溝：**住居北壁中央やや西寄りから北側へ延びている。途中クランク状の弱い蛇行があり、北隅で強く屈曲する。中央付近の軸方向は N-9° E、北隅付近で N-47° W である。断面は U 字状でトンネル部分は存在しない。深さは 50cm 前後で最奥部までほぼ一様である。溝底面は地山傾斜に沿つて北側へ低く緩やかに傾斜し、住居際付近と 17cm の比高差がある。溝入口付近の住居内には竪奥のピットが近接している。もしこのピットに柱があれば、溝入口は一部が塞がれる状態になってしまう。

**遺物：**住居南側に偏つて遺物が出土している。甕類の出土が少ない。壺 1・6、および台付甕 9 が南西隅付近の床直上でまとまって出土した本住居に確実に伴う土器である。他の土器は埋没土中の出土であつた。ピット内の

破片が住居埋没土中の破片と接合する例も多く、壺 5・甕 7 が P 14 から、甕 3 が P 21 から出土した破片と住居埋没土出土破片が接合している。台付甕 9 は P 14・15 の 2 基のピットから出土する破片も接合している。7号住居同様、抜柱作業時の流れ込みが見られるものと考えたい。いずれも埋没土中であるが、土製紡輪片 12・13 と共に円形土板が 3 点 (14～16) 出土していることも本住居の特徴である。石器は磨製石鏃片 17 が南壁下西寄りの床直上で出土し、敲石 20 が東壁際の床上 5cm から、磨製石鏃 25 は東壁際南寄りのローム塊上より出土している。26 は南壁際の床直上から出土した不明鉄製品で、釘もしくは茎のような形状である。出土位置から混入品とは考えにくい。

**所見：**弥生時代後期古段階。調査段階では住居本体と尾状溝部分との重複があるか、特に新旧関係把握に留意して土層観察を実施した遺構であるが、明瞭な重複の痕跡は認められず、同時期に存在した施設と判断した。本住居も尾状溝を伴う住居として扱つたが、住居壁中央付近の裏から溝が始まるなど、尾状溝を持つ他の住居との相違点が多く、同一の施設ではない可能性もある。

11号住居(第67~69図 PL.11-7・8、12-1・2、66 遺物観察表335頁)

位置：X=062~070、Y=-880~886グリッドにある。

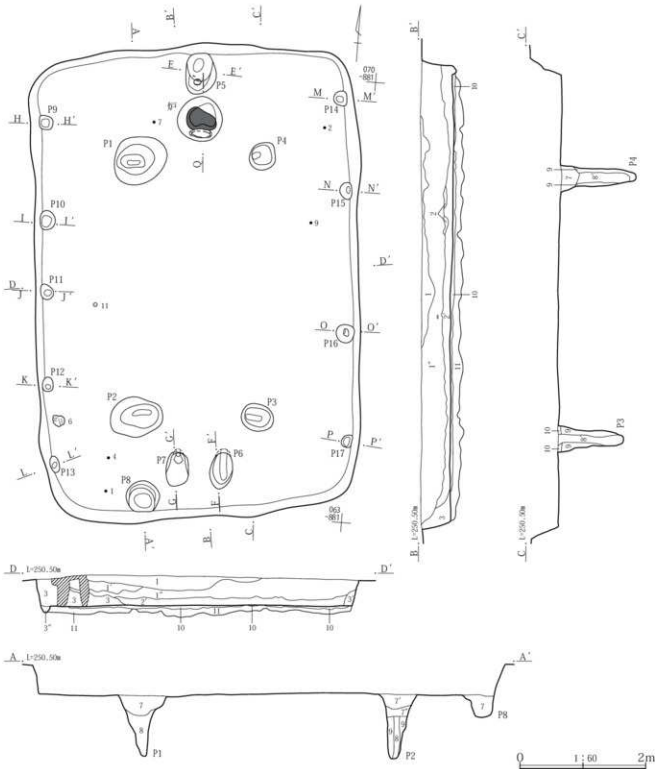
規模形状：長軸7.55m、短軸5.1mの比較的整った長方形を呈している。

埋没土・壁：黒色土主体の自然堆積と思われるが、中層

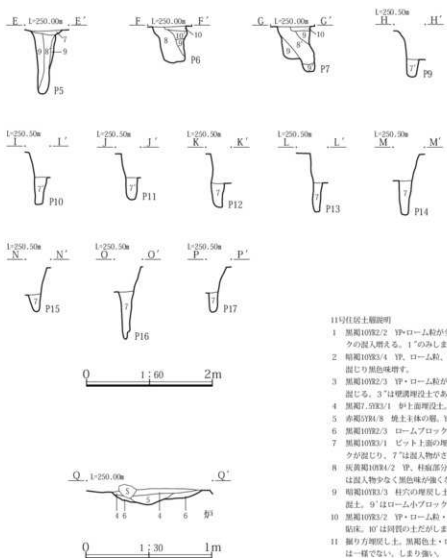
に炭化物粒の多いブロック状の埋没土が見られる。壁高は45cm前後である。

方位：N-5° W。面積：34.17㎡

床面：北側へ低くわずかに傾斜していて、南壁直下と5cm前後の比高差を生じている。ローム土混じりの黒褐色土を踏み固めた貼床が壁直下を除いて施されている。掘



第67図 11号住居(1)



11号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	80×76×99	土
2	83×62×99	土
3	50×42×105	土
4	48×41×122	土
5	67×46×101	炉奥
6	58×36×60	入口
7	52×35×74	入口
8	52×50×32	貯蔵
9	22×22×30	壇
10	30×24×53	壇
11	25×20×40	壇
12	23×18×42	壇
13	28×14×47	壇
14	25×24×59	壇
15	28×18×27	壇
16	30×30×80	壇
17	20×17×29	壇

11号住居土層説明

- 黒期100R2/2 VP・ローム粘が全体に混じる。しまりあり、1'以下ではローム小ブロックの混入増える。1'のみしまりやややく。
- 黒期100R3/4 VP・ローム粘、ローム土が全体に混じる。しまり強い。2'は炭化物粘混じり黒色味増す。
- 黒期100R2/3 VP・ローム粘が全体に混じる。しまりあり、3'にはローム小ブロック混じる。3'は明瞭埋没土であるが、3との区別は難しい。
- 黒期170R3/1 Ⅰが上面埋没土。VP・焼土粘を散見する。
- 赤期104/8 焼土主体の層。VPを少量含む。
- 黒期100R2/3 ロームブロックが多く混じる。炭化物を少量含む。
- 黒期100R3/1 ピット上面の埋没土。VPを少量含む。7'はローム粘・ローム小ブロックが混じり、7'は埋没土がさらに増え、やや黄色味を帯びる。
- 灰黄期103R4/2 VP・粘部分、ローム粘をやや多く含む。下層ほどしまり強い。8'は混入物少なく黒色味が強くなる。
- 黒期100R3/3 柱穴の埋没土。VP・ローム粘を多く含む黒褐色土・灰黄褐色土等の混入。9'はローム小ブロックの混入多い。
- 黒期100R3/2 VP・ローム粘・ローム小ブロックを不均等に含む。固くまとまっている。粘床。10'は同質の土だがしまり強い。
- 掘り方埋没土。黒褐色土・ロームブロック・ローム粘等の混入。場所によって土質は一律でない。しまり強い。

第68図 11号住居(2)

り方は深さ10cm前後の部分が多いが不規則で、壁直下では浅く、全体では住居西側が深くなる傾向がある。

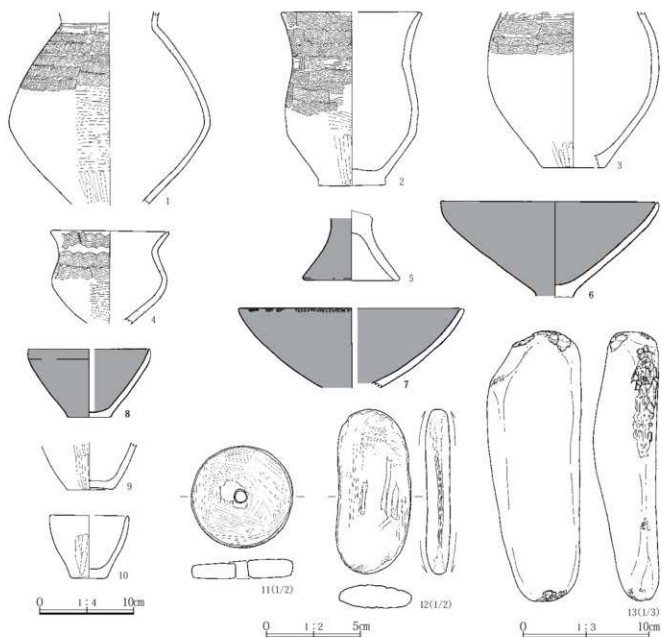
**ピット:** 4主柱穴(P1~4)が南北両壁側へ寄って住居中央が広いことが特徴である。断面上に柱痕が明瞭に確認できるものが多い。平面形状は下端では細長い、上端は特に東側のP3・4は円形に近い。西側に5本(P9~13)、東側に4本(P14~17)の壁柱穴が見られ、東壁中央に隙間が空いている。入口ピット(P6・7)は土層観察から梯子のような壁に立て掛ける施設であったことが確認できる。貯蔵穴と思われるP8は入口西側の壁に接した位置にある。炉奥ピットP5はⅡに近接し、上端で5cmしか間隔がない。P5両脇に深さ5cm前後の不透明な窪みがあったが、ピットとして扱わなかった。

**Ⅱ:** P1・P4間のやや北壁寄りにある。径71cmのほぼ円形を呈し、深さ13cmを測る。焼土の堆積がやや多い。住居中央側に枕石が据えられている。

**その他:** 壁溝は確認できない。

**遺物:** 住居中央を除いたほぼ全域に散在するようにして出土した土器10点と石製品3点を図示した。土器は散在する破片から接合復元したものが多く。南東隅付近にも遺物が多く壺1、台付甕4・高杯6が床直上から出土し、住居北寄りの甕2・高杯7や西壁下の完形石製紡輪11も床直上遺物で、これらは本住居に確実に伴う遺物である。鉢9は東壁下の床12cmの高さで、他も埋没土内の出土であった。

**所見:** 出土遺物より弥生時代後期新段階。



第69図 11号住居出土遺物

**12号住居**(第70・71図 PL. 9-7、12-3-6、66 遺物観察表335ED)

北東隅にトンネルを設け、尾状溝を持つ住居である。南側は調査区域外にかかり、完掘できていない。

**位置**：X=055~061、Y=-900~906グリッドにある。尾状溝が9068~905グリッドにある土坑状の施設まで続く。

**規模形状**：残存部分での短軸長5.4mで、長方形を呈すと想定できる。P6が東壁中央にある壁柱穴と仮定すれば長軸長は8m前後となる。

**埋設土・壁**：3層以下でローム粒・ロームブロックの混入が多く、人為的な埋め戻しの可能性のある埋設土であ

る。壁高は北・西壁で85cm前後を測る。

**方位**：N-14° W。 **面積**：残存(16.37) m<sup>2</sup>

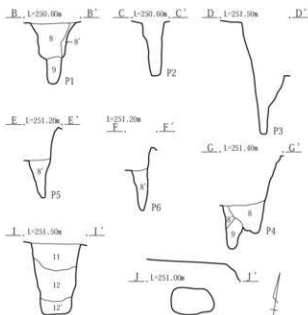
**床面**：ほぼ水平な床だが、壁隙が住居中央より2~3cm高くなっている。掘り方は不規則で北・西壁下で深くなる傾向がある。踏み固められた床面だが、貼床は確認できない。東・北壁下では掘り方掘り込みが壁直下より20cm前後内側から始まっている。一回り小型の先出する住居が存在し、現在の住居は拡張後の姿である可能性も考えられよう。

**ピット**：主柱穴の内2本(P1・2)と壁柱穴のうち3本(P3・5・6)が確認できる。主柱穴下端の平面形状は細長く、壁柱穴は底面が狭い。如奥ピットであるP4に

## 第二章 発掘調査の記録

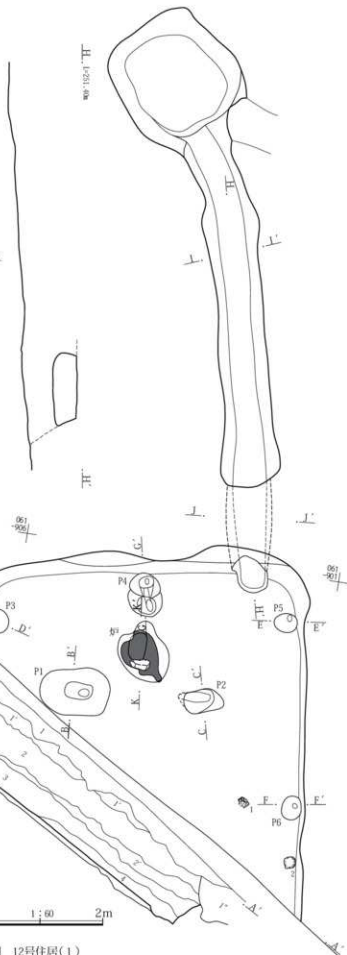
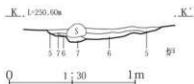
### 12号住居土層説明

- 1 灰黄緑色YR4/2 表土。As-を多く含む。しまり強く、柔らかい。1'はAs-A層の。1'は4号溝埋設土でAs-Aは最大。
  - 2 黒10R2/1 少量のYP・ローム小ブロックを含む。しまりやや強い。2'は説人物さらに少ない。やや褐色が強く出る。
  - 3 に近い黄緑10R4/3 YP・ローム粒・ロームブロックを含む。しまりやや強い。
  - 4 黒灰10R4/1 YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。しまり強く、固い。
  - 5 黒期7.5YR5/2 砂土面埋設土。植土・炭化物・YPを含む。
  - 6 明灰期7Y5/8 粘土主体の層。砂を全体に含む。
  - 7 明灰期10R3/4 砂掘り方埋設土。YP・ロームブロックを含む。
  - 8 黒期10R3/1 YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。8'は説人物や多い。褐色味を帯びる。
  - 9 明灰期10R3/4 黒期色土・ローム粒の混土。しまりやや固い。
  - 10 明灰期10R3/4 掘り方埋設土。ローム粒・ローム小ブロック・黒期色土の混土。上面は床面で踏み固められている。
  - 11 灰黄期10YR4/2 灰状黄土層埋設土。YP・ローム粒を含む。
  - 12 黒期10R3/1 灰状黄土層埋設土。YP・ローム粒・ローム小ブロックを含み、12'は褐色味や強い。
- ※ P 3は8層、P 2は8'層。

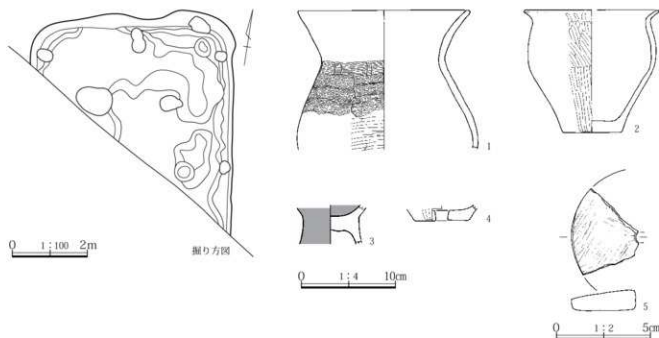


12号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	112×73×112	主
2	58×45×80	主
3	50×34×92	壁
4	70×52×88	砂土塊
5	36×30×62	壁
6	38×32×68	壁



第70図 12号住居(1)



第71図 12号住居(2)および出土遺物

は掘り直しの痕跡が認められる。

**如:** P 1・P 2間の北壁寄りにある。厚い焼土層があり、住居中央側に枕石が据えられている。長軸82cm、短軸72cmの不整形で、深さは15cmを測る。

**その他:** 4号溝に先出している。調査範囲に壁溝は見られない。

**尾状溝:** 住居北壁東隅から北側へ延びている。住居内の尾状溝始点部分には深さ5cm前後の窪みがあり、住居壁際から1.2mの長さの地山を掘り込んだトンネル部を経て、調査時に17号土坑と名付けた方形土坑に達している。この土坑は8号住居尾状溝の終点にもなっている。トンネル部分は高さ40cm・幅65cm前後で人間の通路であればきわめて狭い施設である。溝部分は全長6.75m、中央付近の幅0.7m、深さ0.52mを測る。底面は8号住居とは反対に北側へ低く傾斜して住居脇付近と20cmの比高差がある。軸方向はN-13°E、終点付近で屈曲しN-36°E前後になっている。土坑状施設は長軸2.2m、短軸1.8m、深さ120cmで軸方向は尾状溝北隅とほぼ同一である。底面は尾状溝底面より15cm前後深い。

**遺物:** 出土遺物は少なく、図示できたのは土器・石製品5点である。裏1・2が東寄りの床直上から出土した本住居に確実に伴う遺物である。石製紡輪5など、他は埋没土内の出土である。尾状溝出土の遺物はない。

**所見:** 出土遺物より弥生時代後期中段階。

#### 13号住居(第72・73図 PL.12-7・8、66 遺物観察表335頁)

西側は調査区域外にかかり、完掘できていない。

**位置:** X=041~051、Y=-888~895グリッドにある。

**規模形状:** 確認できる範囲で長軸11.4mの本遺跡では45号住居に次ぐ大型住居である。残存する二隅は直角に近く、整った長方形を呈すと思われる。

**埋没土・壁:** 混入物の少ない土とローム土混入の多い土が不均等に混じり、人為的な埋戻しを行った住居と考えたい。壁高は最も深い北壁で56cmを測る。

**方位:** N-24° W。 **面積:** 残存(25.51)㎡

**床面:** 南へ低く傾斜していて、北隅と10cm前後の比高差がある。P 2北側床直上に抜柱残土の可能性のあるローム土が多量に見られる。掘り方はAs-YF面まで掘り込み、特に東壁下で幅70cm前後の溝状の窪みが確認できる。黒色土主体の埋戻し土による層厚2~9cmの貼土を作っている。下層では粗掘り時残土のAs-YFが多量に見られる。

**ピット:** 調査範囲に主柱穴が2本(P 1・2)あり、どちらも断面に柱痕が確認できる。配置より6主柱穴となる可能性がある。P 1・P 2と等間隔に南東隅側にもう1本の主柱穴を想定すれば小規模なものとなり、P 1・P 2と同規模の柱穴を想定すれば壁際のピットとなろう。下端はP 1が細長い。P 3~P 6が壁柱穴でP 3-4間が短い。P 5断面に柱痕が確認できる。

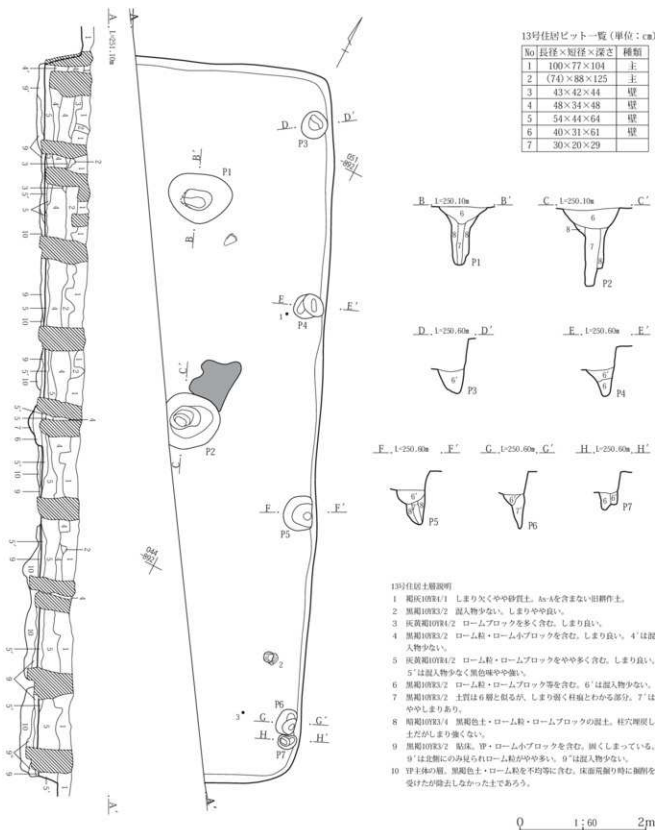
**その他:** 壁溝は調査範囲には見られない。如・入口ピツ

ト等が想定される地点も調査区域外である。

**遺物**：出土遺物は少なく、土器10点を図示した。壺1はP4 廊床上2cm、甕2は南東隅付近床上3cm・台付甕3

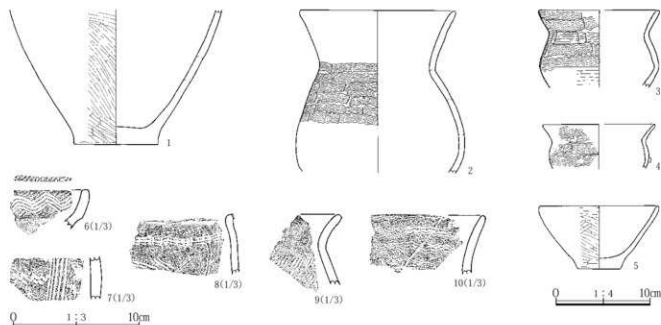
が床上5cmでこれら壁際の土器を本住居に確実に伴う遺物と考えたい。他は埋没土内出土の破片である。

**所見**：弥生時代後期中段階。



第72図 13号住居





第73図 13号住居出土遺物

**14号住居** (第74～77図 PL.13-1～7、67 遺物観察表336頁)

南東隅付近から尾状溝が伸び、調査時19号土坑と名付けた方形土坑状施設へ繋がる。また下面に先出する住居が存在する可能性がある。

**位置：**X=054～062、Y=875～880グリッドにある。19号土坑は050～875グリッドを中心とする。

**規模形状：**長軸長7.1m、短軸長4.9mの長方形で、南辺が北辺より30cm短く、台形状にやや歪んでいる。

**埋設土・壁：**不均等にローム土の多い埋設土が見られ、人為的に埋め戻された可能性がある。壁高は南・西辺で深く、73cm前後である。

**方位：**N-10° W。 **面積：**30.53㎡

**床面：**南へ低く傾斜していて、北隅と10cm前後の比高差がある。南壁際にローム状土が飛び散るようにして確認されている。黒褐色土を埋め戻して踏み固めた層厚1～8cmの貼床が壁直下を除いて施されている。掘り方は不規則で深く、中央付近に多数の掘削工具痕が見られる。

**ピット：**4主柱穴(P1～4)はいずれも上端規模が大きく、下端が住居短軸方向に長い長円形を呈している。壁柱穴(P10～15)が東西両壁際に3本ずつ見られる。入口ピット(P6・7)間のP9は掘り方調査時に確認できたP24と対になる先出する住居施設の可能性がある。

**知：**知1はP1・P4間のやや北壁寄りにある。95×78cmの不整形形で深さ12cmを測る。住居中央側に枕石が据えられている。知2はP1・P2間の柱筋上南寄りにあ

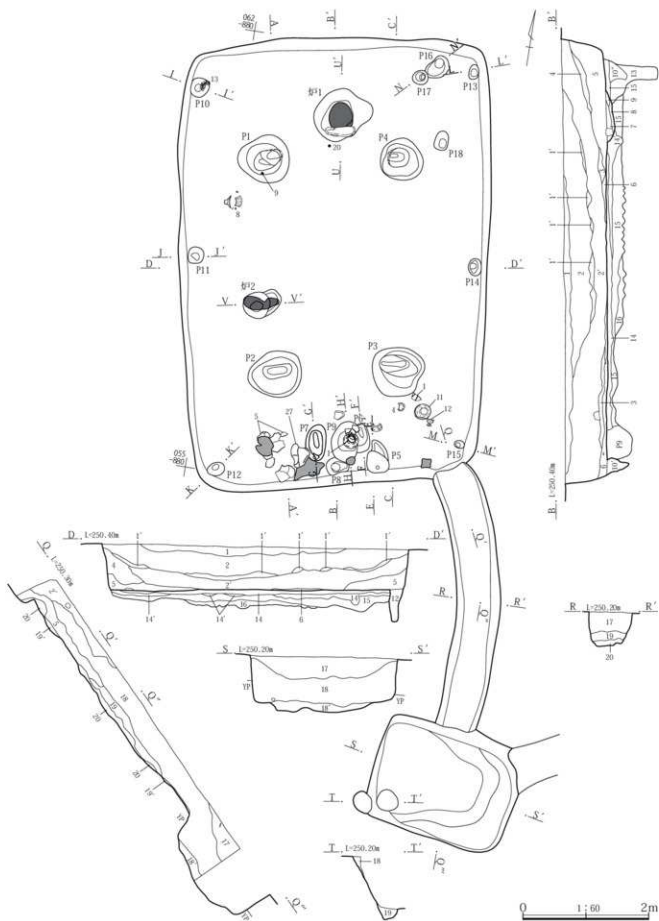
る。底面が2段になっており、掘り直しの可能性がある。全体の規模は62×40cm、深さ10cmを測る。

**尾状溝：**全長4.2mで住居南壁東隅から南側へ弧状に延びるため、軸方向は始点付近でN-3° E、終点付近でN-19° Wとなる。また、中央付近は幅70cm、深さ52cmを測る。下層付近はしまりが強い。住居側では床面より20cmほど高い壁途中から段差をもって溝が始まっている。終点部分は2.3m×1.8mの土坑状施設に繋がるが、この施設は15号住居も尾状溝終点として共有している。

**その他：**壁溝は見られない。

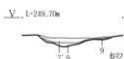
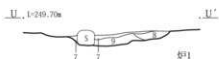
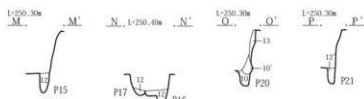
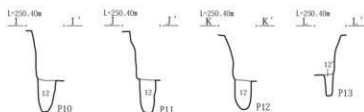
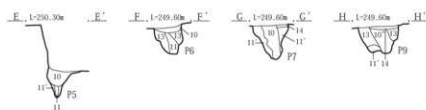
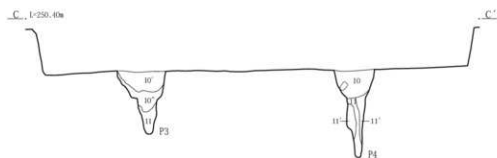
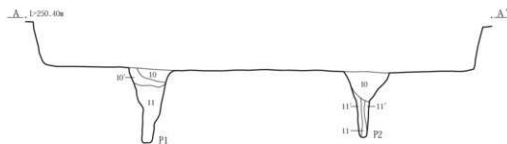
**遺物：**住居南壁下を中心に多量の遺物を出土し、土器23点と石器4点を図示した。P9上面床面レベルの壺1と南壁寄り床直上出土の甕11・台付甕12が本住居に確実に伴う遺物である。住居北側の床直上出土遺物はない。壺4はP3南脇床上22cm浮いた状態で、壺8・甕9・ミニチュア台付甕20は9号からP1周辺にかけての床面から12～19cm浮いた状態で、台付甕13は北西隅付近のP10上の床面から37cm浮いた状態で出土した。砥石27は南壁際の粘土に混じて床上4cmの高さで出土した。

**所見：**弥生時代後期古段階。尾状溝終点の土坑は15号住居尾状溝と共有している。住居は北・東両壁直下から一定区間を残して掘り方が始まることより、掘り方ラインが本住居拡張前の輪郭となる可能性がある。この場合主柱穴は後出住居にそのまま引き継がれたものと考えたい。住居規模からP9・24の2主柱穴建物は考えにくい。



第74図 14号住居(1)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



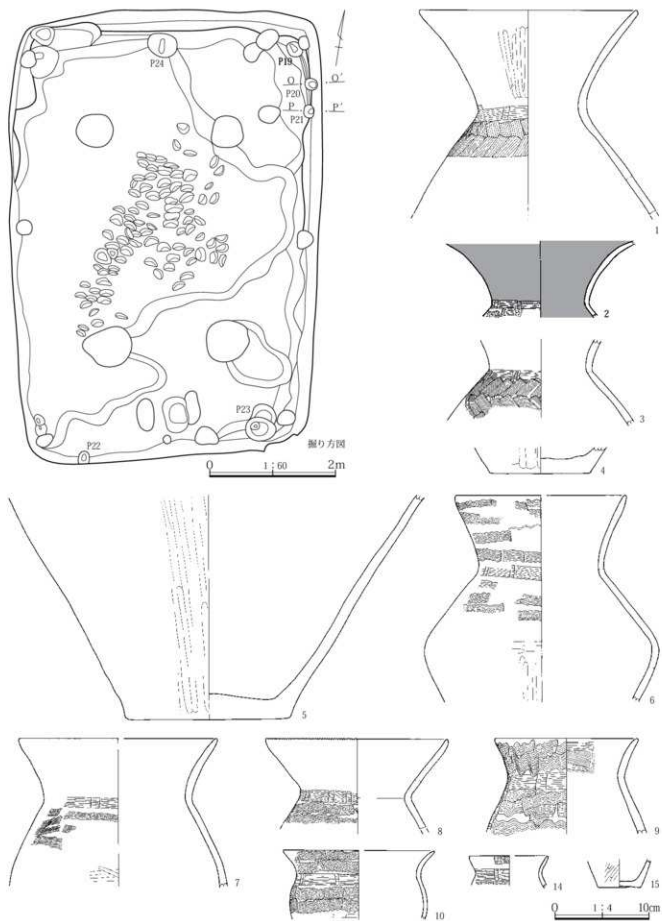
14号住居ピット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	82×75×117	土
2	86×75×105	土
3	82×80×100	土
4	68×68×140	土
5	50×36×45	貯蔵
6	46×20×46	入口
7	60×32×56	入口
8	36×26×30	
9	66×40×46	
10	30×30×45	壁
11	26×25×51	壁
12	28×22×43	壁
13	24×16×32	壁
14	30×20×52	壁
15	16×12×31	壁
16	(39)×29×46	
17	24×22×30	
18	31×21×29	
19	(26)×(20)×(31)	壁か
20	(21)×(18)×(28)	
21	(21)×(14)×(35)	
22	(23)×(18)×(14)	
23	(48)×(38)×(61)	
24	(48)×(38)×(92)	

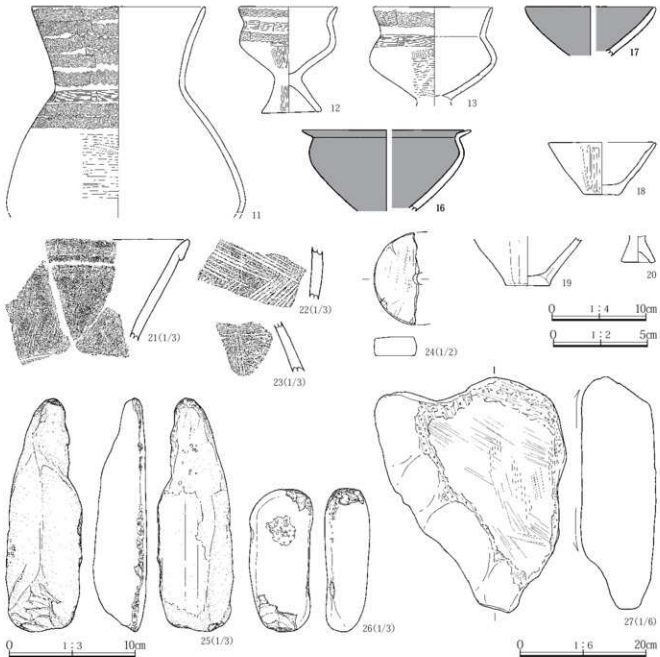
## 14号住居土層説明

- 1 黒期10P3/2 砂を少量含む。1'はローム粒を含む。
- 2 相次表2.5P4/2 砂・ローム粒をやや多く含む。2'は土質近似的な黒色色を帯びる。
- 3 黒期10P3/4 黒褐色土・黒褐色土の混生。砂を含む。
- 4 黒期10P3/2 砂・ローム粒を少量含む。
- 5 に二・黒期10P4/3 やや砂質。砂・ローム粒を含む。
- 6 黒期10P3/1 砂を少量含む。しまり強い。
- 7 黒期10P2/2 砂土層に砂土、ロームブロック・砂を全体に含む。粘土・炭化物が少量混入。しまり強い。粘りなし。1'はやや砂質。
- 8 相次表2.5P2/1 炭化物を多く含む。砂を含む。しまり強い。
- 9 黒期10P2/3 粘土化している部分が多い。砂・ローム粒・ロームブロックを多く含む。
- 10 黒期10P3/2 砂・ローム粒を少量含む。砂は混入物少ない。10'ではローム粒・ローム小ブロックがやや多い。
- 11 黒期10P3/2 土質は10層に同じ。しまり強い粘り部分。11'は粘り強固でローム粒・ローム小ブロックが混入。しまりやや強い。
- 12 相次表10P3/3 砂・ローム粒を全体に少量含む。しまり強い。12'は混入物や少ない。
- 13 長岡期10P4/2 ローム粒が多い。しまりやや強い。
- 14 黒期10P3/2 粘土。ローム粒を含む。粘り強くしまっている。14'も同様の土でローム小ブロックや少ない。しまり強い。
- 15 相次表10P3/4 掘り方厚戻し土。ローム粒・ローム小ブロックと黒褐色土の混生。
- 16 砂土層の底。黒褐色土・ローム粒を全体に少量含む。表面を掘削時に面層を受けた層が除去しなかった土である。
- 17 黒期2.5P3/2 土坑状施設土層埋没土。ローム粒・ローム小ブロックを含む。粘土層を混入する。
- 18 相次表2.5P4/2 土坑状施設下層埋没土。砂・ローム粒・ローム小ブロックをやや多く含む。18'は混入物も入る。
- 19 黒期2.5P3/2 ローム粒を少量含む。19'でしまり強い。
- 20 砂・ローム粒・黒褐色土の混生。

第75図 14号住居(2)



第76図 14号住居(3)および出土遺物(1)



第77図 14号住居出土遺物(2)

**15号住居**(第78～85図 PL.13-1、14-1～8、67～69 遺物観察表336頁)

焼失家屋で広い範囲に炭化材が見られる。南東隅付近に南側への張り出しがある。尾状溝が南西隅から西側へ伸び、土坑状施設へ繋がっている。壁溝が若干内側にある先出する遺構があり、拡張していることが分かる。拡張後の住居を15A号住居、先出する下面の住居を15B号住居として区別した。

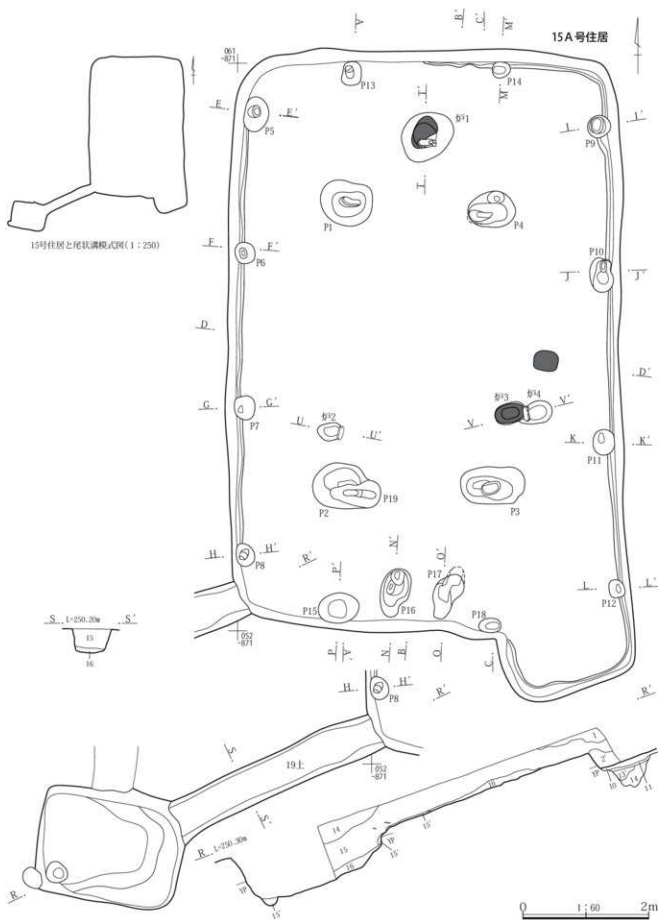
**位置**：X=051～061、Y=-864～871グリッドにある。尾状溝は050-875グリッドを中心とする位置にある土坑状施設へ繋がる。

**規模形状**：張り出しを除いた長軸長9.2m、短軸長6.2mで、比較的整った長方形を呈している。張り出し部は幅2.3mで、軸方向が住居より東側へ傾いている。張り出しのある東辺は西辺より80cm長い。

**埋没土・壁**：1層など不均等にローム土の多い埋没土が見られ、人為的に埋め戻された可能性がある。壁高は最も深い北辺で59cmを測る。掘り方は深い、先出するB住居床面が部分的に認められることより、B住居に伴う掘り方であることが分かる。 **方位**：N-1° E。

**面積**：A住居52.60㎡ 張り出し部込54.34㎡

**床面**：ほぼ水平な床で、短辺側の壁直下と張り出し部分



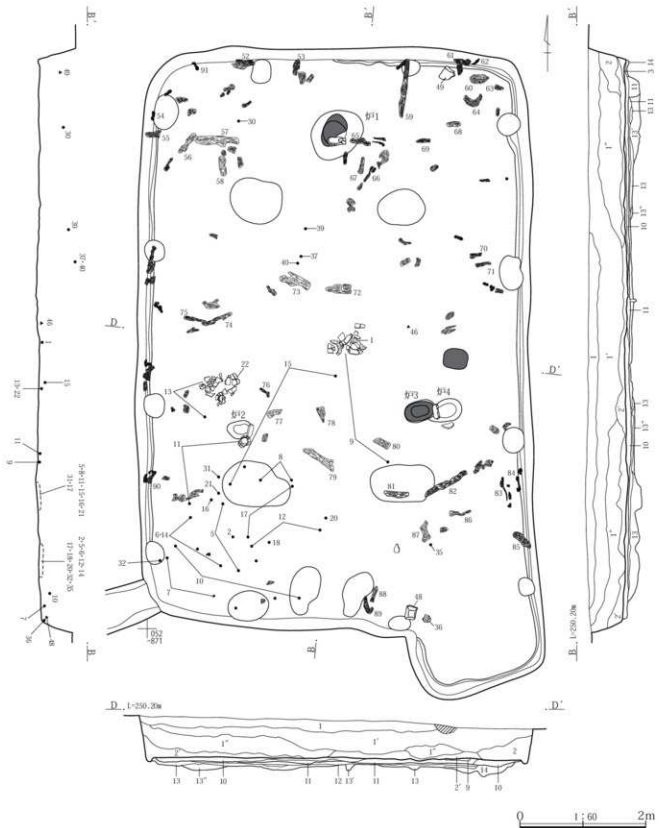
第78図 15号住居(1)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居

が3 cm前後高くなっている。

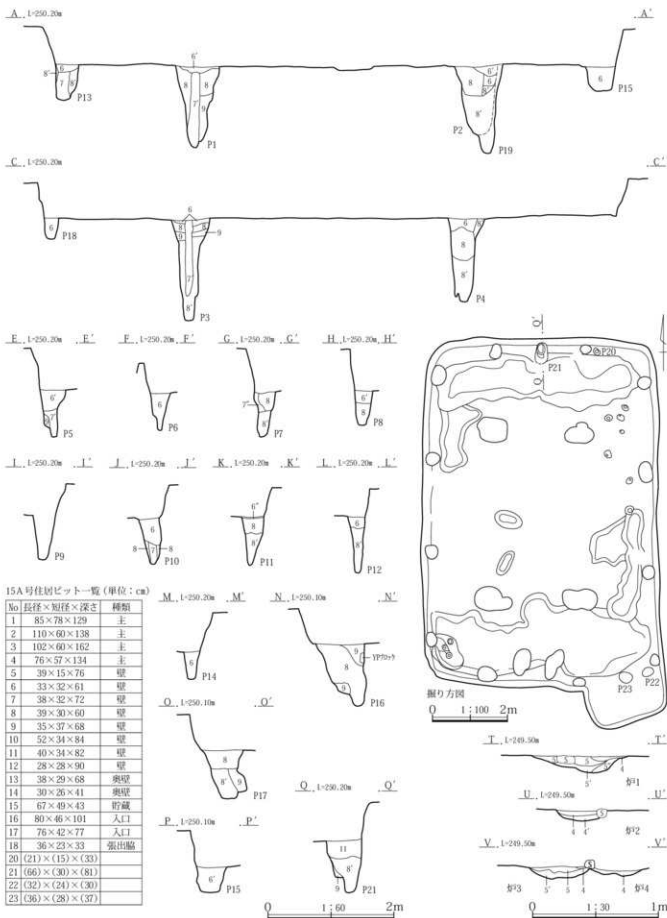
ピット：4 主柱穴(P 1～4)はいずれ東西方向に長く、  
下端ではその傾向がより顕著である。西辺に4本(P 5

～8)、東辺にも4本(P 9～12)の壁柱穴が対になるよ  
うに並んでいる。また、張り出し部の基部にもP12と対  
になるようにP18が見られる。P13・14も壁柱穴と思わ



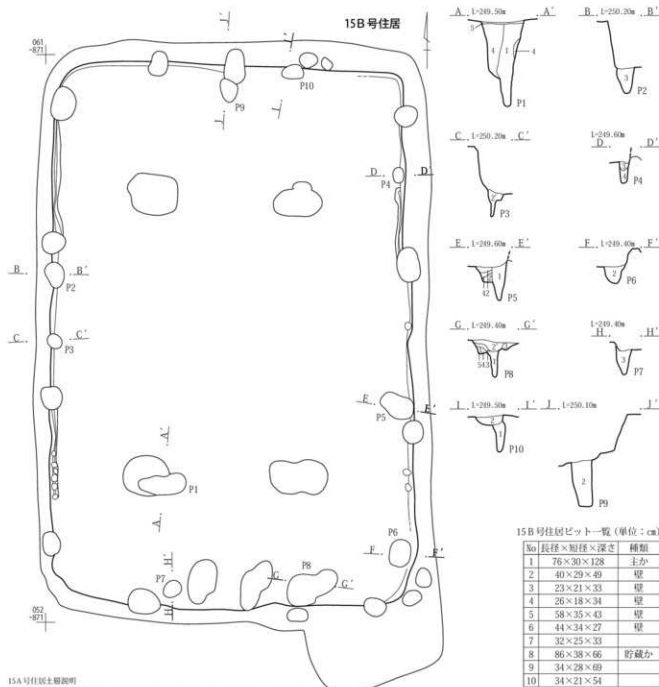
第79図 15号住居(2)

第二章 発掘調査の記録





## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



## 15A号住居土層説明

- 黒期10R3/2 掘入物の少ない土層埋没土。1'はローム粒やや多い。1''はロームブロックも散在する。
- 黒期10R3/1 ローム粒・炭化物を含み黒色味の中やや強い。2'は炭化物粒多くなる。他土も散見する。
- 黄期2.5R3/3 ローム上土体の硬質黄土層。黒褐色土を含む。
- 黒期7.5R2/2 中土層埋没土。炭化物・焼土粒・YP粒全体に散在する。しまりあり。4'は他の掘入物少ないが炭を含む明度高い。
- 赤期5R5/4 焼土が多く散在する。炭化物粒・ローム粒が全体に散在する。ややしまりあり。5''は炭が混じりややサラサラしている。5'''は焼物による赤変硬化部。
- 黒期10R3/2' ローム粒を含む。6'は炭化物粒少量含む。6''は炭化物粒多くなる。
- 黄期10R4/2 柱礎部分でしまり欠く。ローム粒・ローム小ブロックを含む。7'は炭化物粒を含む。黒色味をおびる。7''は7'に類似するが、木の根による腐乱の可能性がある。
- 赤期10R4/3 YP・ローム粒をやや多く含む。8'はしまりやや欠く。
- 黄期10R4/2' 土質は8に近い。黒褐色土をブロック状に含む。
- 黄期10R4/2 A住居の床面。ローム粒・ローム小ブロックを多く含む固くしまっている。上面は特に踏み固め顯著。
- 黒期10R3/1 B号住居の下層埋没土。掘入物少ない。しまり強い。
- 黄期10R4/2 B号住居床面。ローム粒・ローム小ブロックを含む。固くしまっている。

- 黒期10R3/1 B号住居削り方埋没土。ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。13'は黒色土の掘入多く。13''は甲の掘入多い。
- 黒期2.5R3/2 土坑状施設土層埋没土で14住17層に同じ。ローム粒・ローム小ブロックを含む。焼土粒を散見する。
- 黄期2.5R4/2 土坑状施設下層埋没土で14住18層に同じ。15A住居2層に対応するが、ローム土の掘入やや多く。黄色味をおびる。15'は掘入物割14住18'層に対応する。
- オレンジ層5Y4/3 ローム上土体の14住20層に対応する層。
- P 9は6層

## 15B号住居ピット土層説明

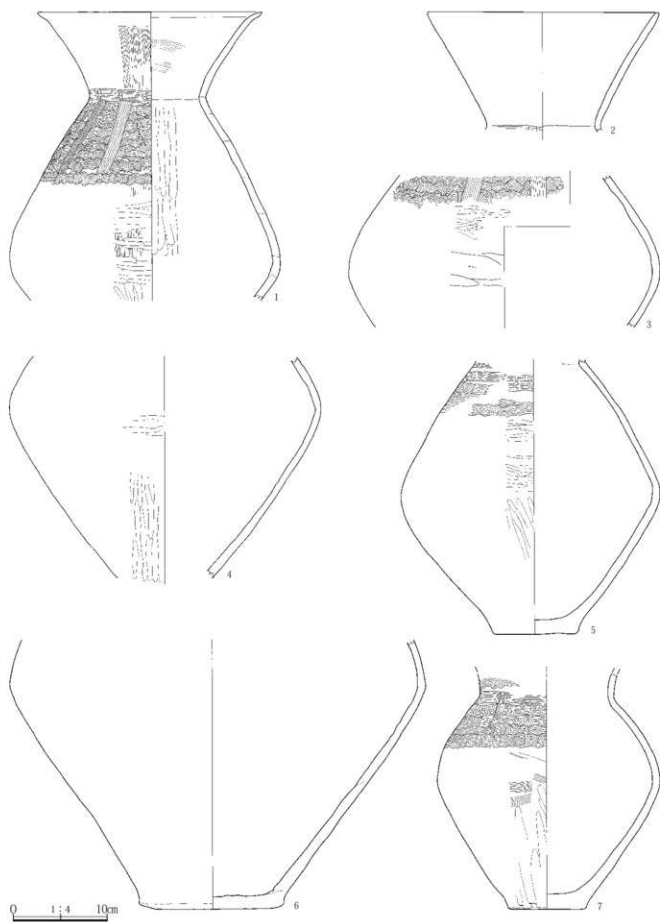
- 黒期10R3/2 しまり強い柱礎部分。ローム粒を含む。
- 黒期10R3/2 1に土質近いがしまりある層。ローム小ブロックを少量含む。2'は炭化物粒散在する。
- 黄期2.5R4/2 ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。
- 黄期10R3/2 黄色土に黒褐色土を小ブロック状に含む。
- A住居の床面。14層に対応。

## 15B号住居ピット一覧 (単位: cm)

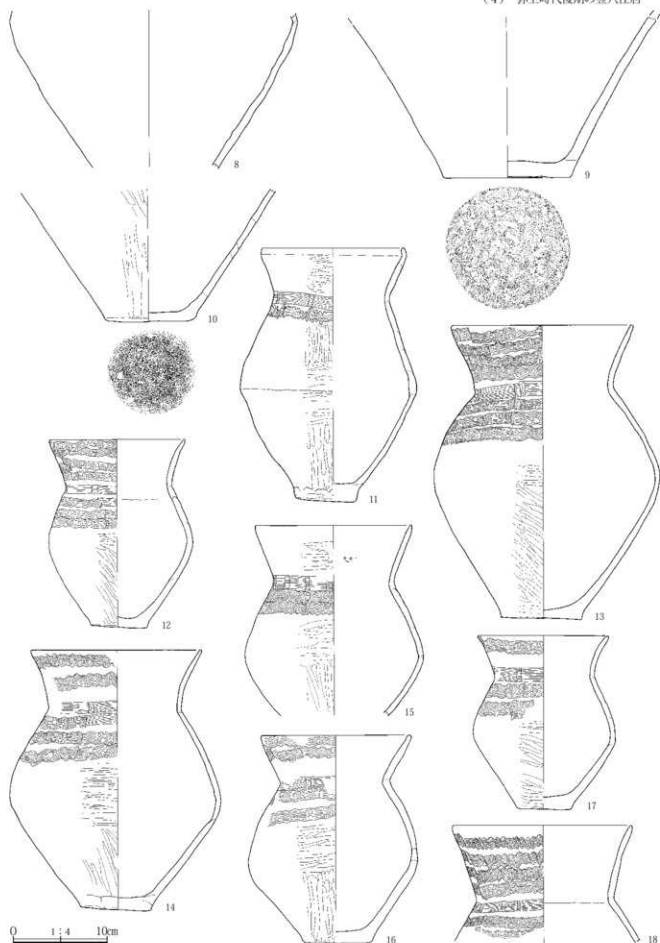
No	長さ×短径×深さ	種類
1	76×30×128	土か
2	40×29×49	壺
3	23×21×33	壺
4	26×18×34	壺
5	58×35×43	壺
6	44×34×27	壺
7	32×25×33	壺
8	86×38×66	貯蔵か
9	34×28×69	
10	34×21×54	

0 1:60 2m

第81図 15号住居(4)

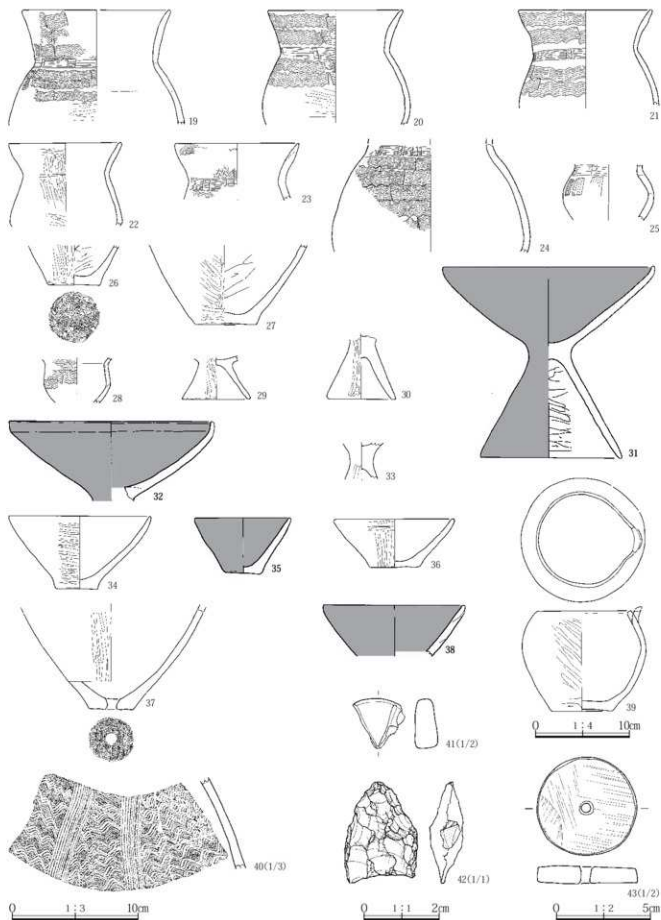


第82図 15号住居出土遺物(1)

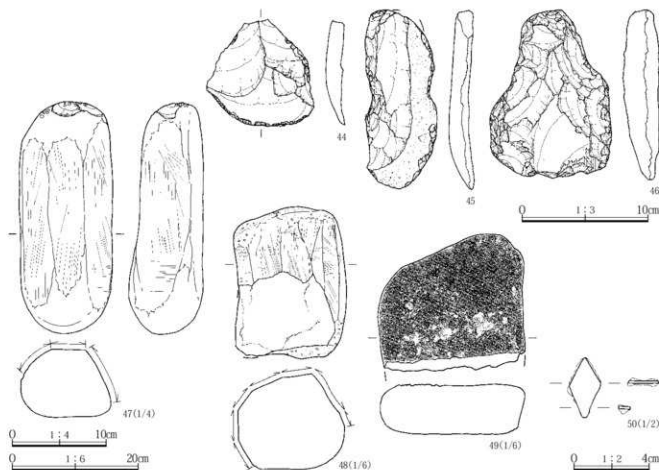


第83図 15号住居出土遺物(2)

第二章 発掘調査の記録



第84図 15号住居出土遺物(3)



第85図 15号住居出土遺物(4)

れるが、本遺跡で短辺側に壁柱穴が確認できる例は少ない。P16・17は入り口ピットで上面が南壁に向かって傾くように穿たれている。P15は配置より貯蔵穴である。掘り方調査時に張り出し部分を塞ぐような位置にあるP22・23を確認した。

**竪**：P1・P4・北壁下の中間地点に竪1がある。90×74cmの楕円形を呈し、深さ13cmを測る。P2北側に小規模な竪2がある。竪1・2はどちらも住居寄りに礎を据えている。P3の北側には竪3・竪4が重複し、両施設の中間部分に枕石を据えている。竪3はごく浅く、被熱した床面のような状態である。

**壁溝**：東西両壁下と張り出し部分に見られる。幅8～15cm、深さ2～8cmで規模は一様でない。

**尾状溝**：全長3.45mで住居西壁南隅から西側へ延びている。住居側では床面より25cmほど高い壁途中から段差をもって溝が始まっている。軸方向はN-64°Eで中央付近の幅60cm、深さ35cmを測る。溝は西側へ向かって低く弱い傾斜があり、始点と終点で10cmの比高差がある。終点は14号住居尾状溝と共有の土坑状施設北東隅へ繋が

る。溝終点付近の底面と土坑北東隅底面では20cm溝のほうが高い。埋没土観察からは住居と同時に溝が埋もれているようだ。底面付近に14号住居尾状溝底面に見られた硬化面は確認できない。

**その他**：炭化材は床直上に見られるものが多い。

**遺物**：南西側を中心に、住居のほぼ全域から多数の遺物を出土した。甕類に完形近くまで復元できたものが際立って多い。住居北側からは床直上出土の遺物はなく、14号住居と似た状況である。南西側には床直上に潰れるようにして散った遺物がきわめて多く、本遺跡の住居の中で最も集中して遺物が出土した一面である。壺2・6・8・10、甕5・11～18・20～22、高杯31・32などがこれに該当する。南東側床直上には鉢35・36、住居中央の床直上には壺1がありこれらが本住居に確実に伴う遺物である。住居中央付近の有孔鉢37・片口39、北西寄りの台付甕30は床から30cm以上浮いた状態だった。台付鉢28と前述の甕13が尾状溝出土破片と接合している。石器類は土器集中地点から離れて出土した。砥石48が南東寄り、石鎌46が住居中央の床直上、砥石49が北壁直下の床上24cm

の高さからの出土である。砥石47は炉3の枕石として使われていた。完形の石製紡輪43や鉄鎌と思われる50は埋没土中の出土である。

**所見**：弥生時代後期古段階。掘り方調査時に確認したP22・23は張出し部を塞ぐ位置にある。また、先出するB住居の外側にあたる。このピットは後出住居が張出し部を増設する前の施設と考えたい。尾状溝始点付近で多量に見られた遺物が溝内ではなく、炭化物も溝内にはきわめて少ない。断面では確認できないが、尾状溝入口付近に遮蔽物が存在した可能性がある。

#### 15B号住居(第818号)

A住居床面の内側に壁の立ち上がりや壁溝が確認された。張り出し部はB住居にはなかったことがわかる。

**位置・方位**：A住居と同じ。 **面積**：45.50㎡

**床面**：後出のA住居より3～5cm低い位置で部分的に硬化面として確認できた。貼床等は見られない。

**壁溝**：東壁北寄りと西壁の両隅寄りに部分的に確認できる。深さ2～3cmの不明瞭な施設である。

**ピット**：主柱穴は後出住居と同じ位置にあったと思われるが、P1は先出する柱穴と別個に確認できる。P2～6は壁柱穴と思われるが規則的な配置にはない。杭を打ち込んだような細い柱痕が見られる。P9は炉奥の位置になる。B住居の中では柱穴らしい規模の施設となる。

**その他**：遺物の出土はなかった。炉も確認できない。尾状溝の本住居段階での有無は確認できない。

#### 16号住居(第86～89号 PL.15-1～4, 69-70 遺物観察表338頁)

弥生時代後期の長軸南北方向の住居の中で、軸方向が最も大きく東側へ傾く遺構である。次に東側へ傾く26号住居が南東側11mの位置に並んでいる。焼失住居で住居のほぼ全域に炭化材が見られる。

**位置**：X=053～059、Y=-890～-895グリッドにある。

**規模形状**：長軸5.2m、北東側短軸4.1mの長方形だが、北東辺が南西辺より60cm長く台形状に歪んでいる。

**埋没土・壁**：近年の農耕による擾乱の影響が大きく、埋

没土は不明瞭部分があるが、人為的埋戻しを示す痕跡は確認できない。壁は全体がほぼ垂直に近い立ち上がりで、壁高は最も深い南西壁で53cmを測る。

**方位**：N-37° E。 **面積**：17.48㎡

**床面**：凹凸のある床である。東側へ低く傾斜していて、西壁下と10cm以上の比高差がある。ローム状土を踏み固めた層厚3cm前後の貼床が広範囲に施され、その下に不規則で深い掘り方が全域で見られる。住居中央と南側で深い部分が多く、深さ30cmを越えている。

**ピット**：主柱穴配置が明確でない。短辺両側の壁際に3本ずつ柱穴(P2～7)が並んでおり、これらが主柱穴になると考えたい。この6本の柱穴は、いずれも開口部が住居中央へ向かって傾いて穿たれている。P9は主柱穴として十分な深さがあるが、対になるピットがない。P8は貯蔵穴の可能性のある施設だが、長辺際に設けられる本遺跡では少ない例である。

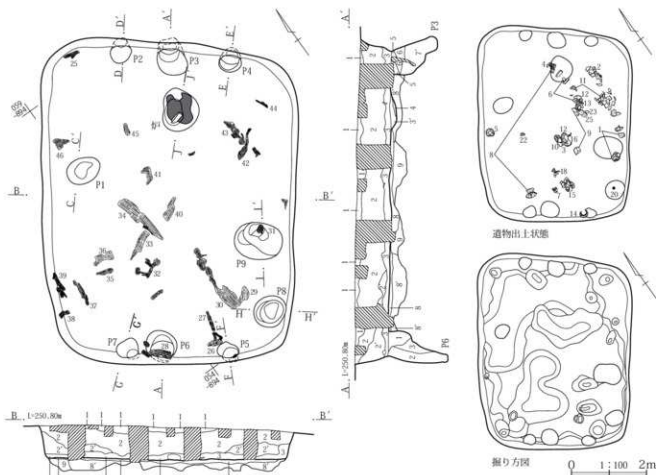
**炉**：北東辺寄りにある。径66×60cmの歪んだ円形を呈している。底面付近に焼土の堆積が多い。枕石に据えられていたと思われる礎が炉中央付近上層に見られ、原位置から動かされたようだ。

**その他**：壁溝や入口施設は確認できない。炭化材は床直上で出土したものが多く。

**遺物**：多量の遺物が住居のほぼ全域に散らばって出土した。特に壺類の多さ、大型土器の多さが際立っている。また、住居内の離れた位置にあった遺物が接合する例が多かった。壺4は丸壺、壺5は北西壁際、壺7は南寄り、壺14は南壁際のそれぞれ床直上遺物である。高杯20はP8内床下29cmの高さで出土した。壺2は東隅付近の床5cmの高さ、壺15と台付壺18は住居南寄り床3cmの高さの出土で、これらを本住居に確実に伴う遺物と考えたい。壺6・8・9は住居内の広い範囲に散っていた土器が接合したもので、床直上から床5cm前後の高さからの出土である。壺11も東寄りの床13cmの高さである。壺1は南東壁下周辺の床10～23cmの高さで出土した。図示できた石製品は紡輪片24のみで埋没土中の出土である。

**所見**：出土遺物より弥生時代後期中段階。

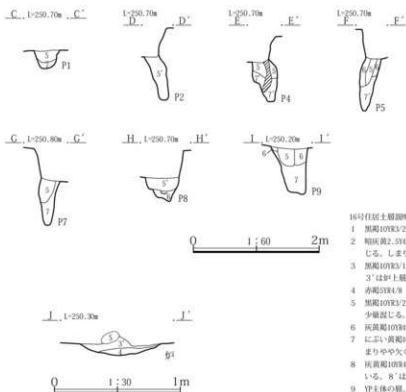
(4) 弥生時代後期の竪穴住居



遺物出土状態

掘り方図

0 1:100 2m



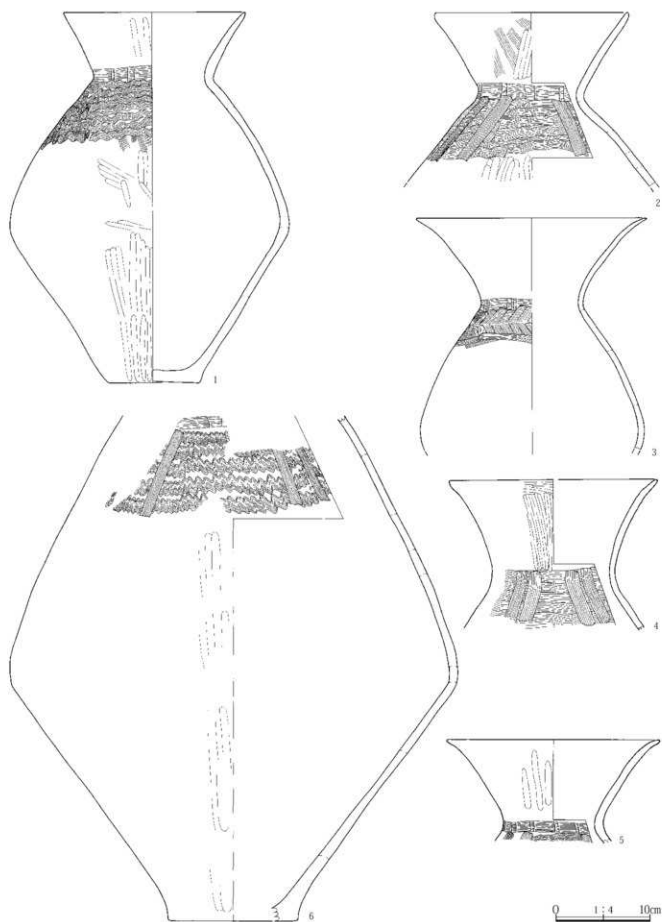
16号住居ピット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	54×40×32	
2	32×26×68	主(脇)壁
3	52×44×75	主壁
4	36×27×64	主(脇)壁
5	36×22×93	主(脇)壁
6	49×40×36	主壁
7	37×28×75	主(脇)壁
8	54×50×40	貯蔵か
9	76×59×82	

16号住居土層説明

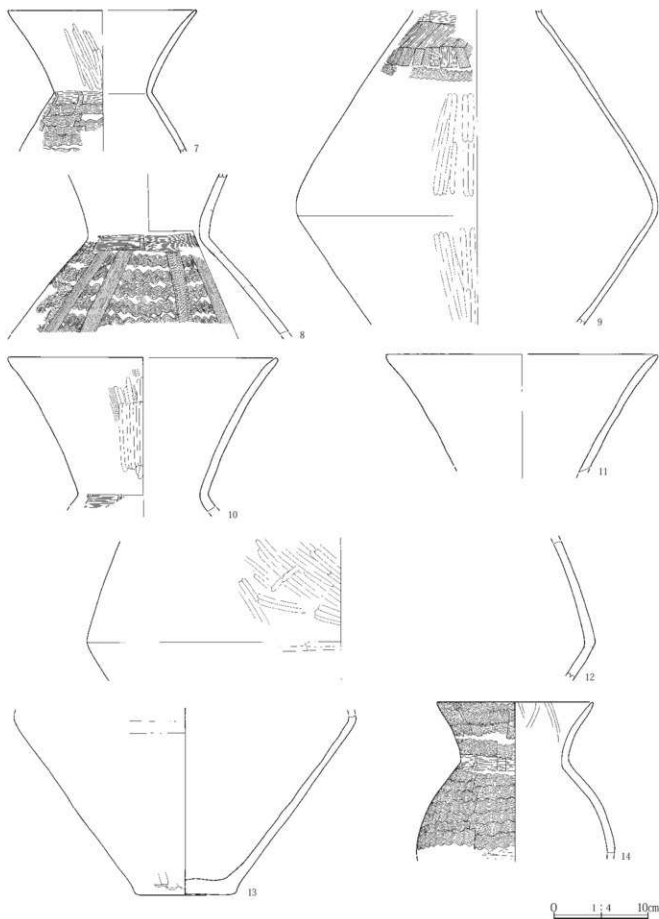
- 1 黒炭10YR3/2 YP・ローム粒を不均等に含む。
- 2 相沢黄2.5Y/2 YP・ローム粒・ローム小ブロックを全体に含む。2'は炭化物粒が散在し、しまりやや強い。
- 3 黒炭10YR3/1 炭化材の多くはこの層内より出土。ローム粒・炭を含む、しまり強い。3'は上部増設土だが、3と同質である。
- 4 赤黒3YR/4 砂下層の粘土。YPを全体に含む。
- 5 黒炭10YR3/2 ピットに最も多く見られる増設土。ロームを粒含む。5'は炭化物粒が少量散在する。
- 6 灰黒期10YR4/2 ピット中層多く見られ、しまりやや欠く。ローム粒をやや多く含む。
- 7 近い・黄黒10YR5/4 YP・ロームブロック・ローム粒・YP等を不均等に含む。7'はしまりやや欠く。
- 8 灰黒期10YR4/2 粘土、ローム粒・ローム小ブロック含む。跡のみ認められてしまっている。8'は同質の掘り方増設土。炭土散見する。
- 9 YP主体の層。ローム粒・ローム小ブロック・黒炭色土を不均等に含む、しまり弱く、ボツボツしている。

第86図 16号住居



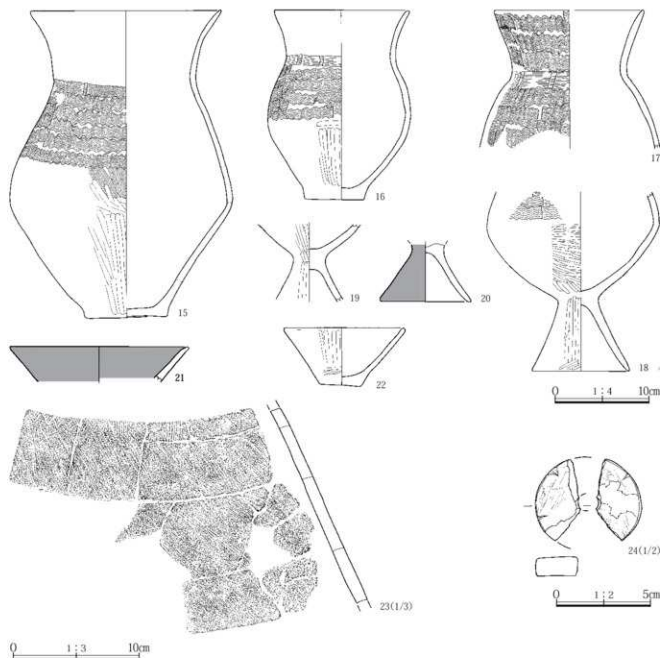
第87図 16号住居出土物(1)





第88図 16号住居出土遺物(2)

0 1:4 10cm



第89図 16号住居出土遺物(3)

17号住居(第90～92図 PL.15～5～8、71 遺物観察表339頁)

位置：X=063～067、Y=-870～876グリッドにある。

規模形状：北側長軸6.1m、東側短軸4.0mの長方形を呈すが、東辺が西辺より60cm長く台形状に歪んでいる。また、四隅の丸みも強いうえ長辺側は蛇行気味で、整美さに欠けている。

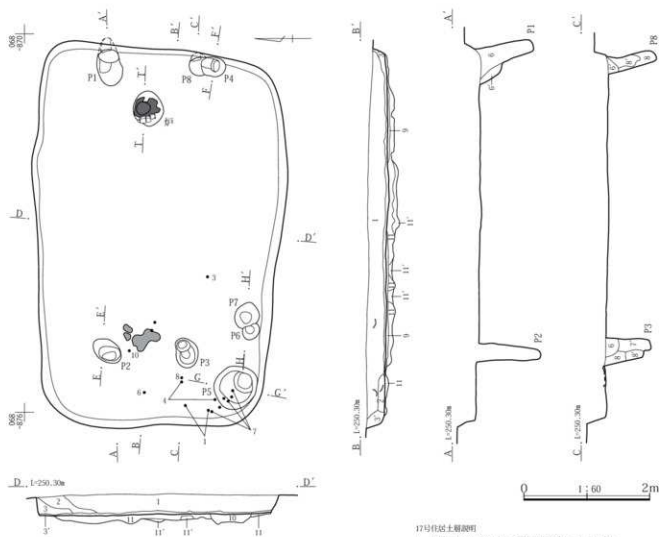
埋没土・壁：床面上に厚さ5cm前後の比較的平坦でしまりの強い層(3層)がある。上位の床面ではなさそうなので、埋没の早い段階で踏み込まれた面の可能性があろう。壁高は最も深い西辺で30cmの浅い住居である。

方位：N-88° E。 面積：20.15㎡

床面：住居中央付近が窪んでおり、東西の壁際から5cm前後低くなっている。ローム状土を踏み固めた層厚4cm前後の貼床が部分的に確認できる。P2とP3間の床面直上に粘質土が置かれていた。掘り方は住居中央付近が深くなっていて、その範囲が4.7×2.8mの長方形に近い形状を呈している。掘り方内には多数のピットがあり、先出する住居が存在する可能性がある。

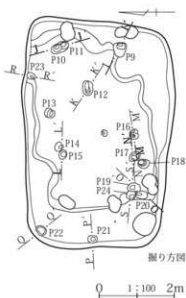
ピット：4主柱穴(P1～4)だが、東側の2本は東壁に接する変則的な配置にある。この2本は開口部が住居中央側へ向かって傾斜して穿たれている。掘り方調査時に確認したP9・10は長方形の掘り方の東隅にある。本住

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



17号住居ピット一覧 (単位: cm)

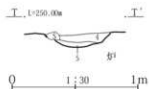
No	長径×短径×深さ	種類
1	59×36×93	主壁
2	50×34×104	主
3	50×33×74	主
4	40×30×87	
5	70×68×32	貯蔵
6	29×20×29	
7	40×(32)×29	
8	30×(20)×74	主壁
9	(39)×(34)×(60)	主壁(Ⅱ)か
10-11	(50)×(26)×(69)	主壁(Ⅱ)か
12	(40)×(27)×(40)	
13	(28)×(22)×(43)	
14	(22)×(21)×(32)	
15	(25)×(20)×(29)	
16	(26)×(22)×(44)	
17	(33)×(26)×(42)	
18	(30)×(24)×(36)	
19	(35)×(22)×(38)	
20	(31)×(20)×(40)	
21	(25)×(19)×(29)	壁か
22	(30)×(22)×(17)	壁か
23	(25)×(18)×(37)	壁か
24	(23)×(21)×(69)	主(Ⅱ)か

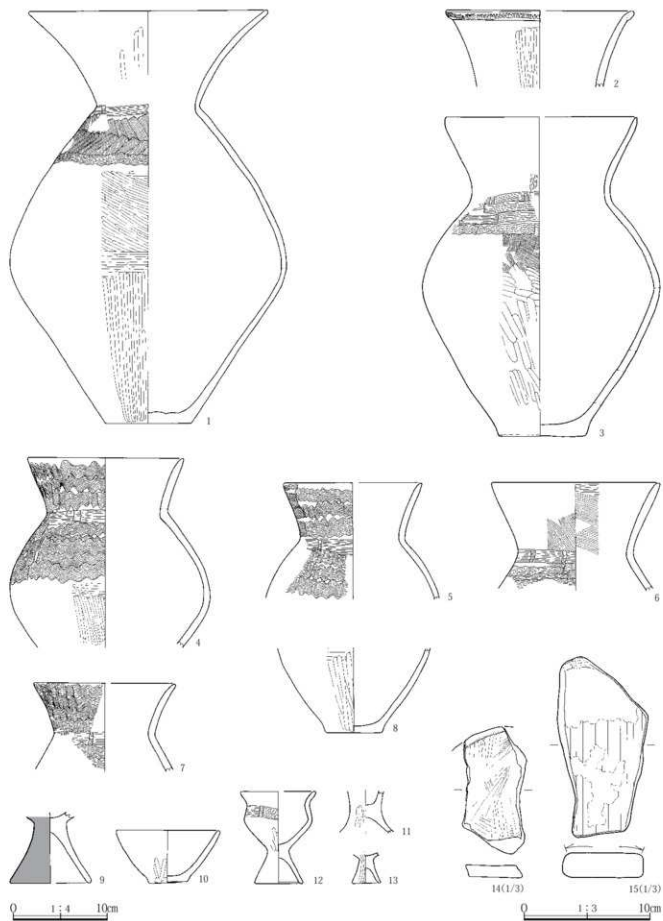


第90図 17号住居(1)

## 17号住居土解説明

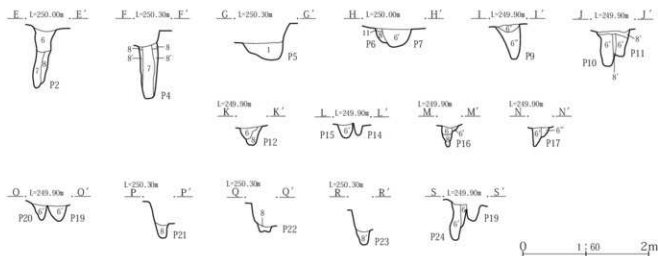
- 1 黒曜石P12 珪・ロームブロックを含む、しまり強い。
- 2 灰黄期H10M4/2 珪・ロームを含む。
- 3 黒曜石P3/1 少量の珪以外の混入物少ない層。3'は薄く平坦な二つの床面のような層でしまり強い。
- 4 黒曜石P13/3 砂土層で、土粒粗、珪粒をまばらに含む。
- 5 黒曜石S12/4 砂下面。粘土やローム土をブロック状に含む。
- 6 黒曜石P3/2 ビット土層埋没下に多く見られる混入物の少ない層。6'でローム粒少量含む。6''はローム粒や多くローム小ブロックも散見する。
- 7 黒曜石P13/3 ローム粒を含む、しまり強い層。柱脚。7'はローム粒の混入が明か灰色塊をおびる。
- 8 灰黄期H10M4/2 ローム粒・ローム小ブロックを含む、しまりやや強い層。8'はローム小ブロックの混入が多く灰色塊をおびる。
- 9 灰黄期H10M4/2 粘土。混入物少ない、珪粒認められしまり強い。
- 10 黒曜石H10M4/2 ローム粒・ロームブロックを含む、上面出ない。
- 11 黒曜石S14/2 珪・ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。11'は珪・ロームブロックの混入が多い。
- ※ P14は8層。





第91図 17号住居出土遺物

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



第92図 17号住居(2)

居東壁と東側主柱穴(P1・4)が作る配置と似た配置が方形掘り方東隅に見られる。また掘り方調査時には多数の小ピットを確認している。P21・22は西壁際に穿たれているが、他は掘り方内に集中している。このうちP9・10・24が深さ60cm以上あり、上面住居にあるP2の位置に先出するピットが重複していたと仮定すると、長方形の住居掘り方東西両壁際に先出する4主柱穴が配されていた可能性が生じる。

**か:** 東壁直下から約60cmの位置にあり、径56×48cmの楕円形を呈している。深さは12cmを測る。住居中央寄りに地山に食い込むようにして据えられた枕石が破砕で割れている。

**その他:** 弥生時代中期の38号住居に後出する。壁溝は見られない。南西隅壁際に径70×66cmの円形で深さ35cmの土坑状施設がある。貯蔵穴と思われるが、該期の他住居貯蔵穴と比べかなり規模が大きい。

**遺物:** 住居西側での出土遺物が多く、土器13点と石器2点を図示した。壺1と甕4は住居南西隅付近の床直上につぶれるようにして出土した破片が接合した。甕7は破片が南西隅から貯蔵穴内中層に流れ込むようにして出土した。中央南寄りの甕3・南西隅付近の壺8・西壁下の甕6・P2脇の鉢10も床直上の出土で、これらが本住居に確実に伴う遺物である。掘り方内の遺物はない。

**所見:** 弥生時代後期中段階。方形掘り方が先出住居であれば長軸4.9m、短軸3.2m、軸方向N-72°E前後の細長い住居になる。本住居の北東約30mの位置にある4号住居が近似した規模・軸方向の遺構である。

**18号住居** (第93～96図 PL.16-1～8, 71-72 遺物観察表339頁)  
北東隅から尾状溝が延びている。

**位置:** X=063～072、Y=-860～-866グリッドにある。尾状溝先端は077-856グリッドに位置している。

**規模形状:** 長軸8.3m、短軸6.5mの長方形で、北東・南西の両隅が鈍角のやや平行四辺形状に歪んでいる。

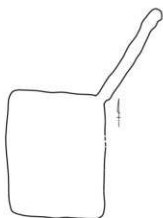
**埋没土・壁:** 全体にローム土の混入の多い埋没土で特に床直上にローム土主体の層が見られる。自然堆積的な埋没状態ではない。壁は全体に直線的な立ち上がりで、壁高は最も深い西壁で63cm、浅い東壁で20cm前後である。

**方位:** N-2° E。 **面積:** 49.87㎡

**床面:** 比高差3cm前後の緩やかな凹凸があるが、水平に近い床である。黒色土主体の埋戻し土を踏み固めた層厚2～5cmの貼床が見られる。掘り方は全体に浅めで、やや深くなる北西側でも15cm前後の深度である。

**壁溝:** 尾状溝付近と入口ピット付近を除いて巡っている。幅10cm前後、深さ4cm前後の小規模な溝である。

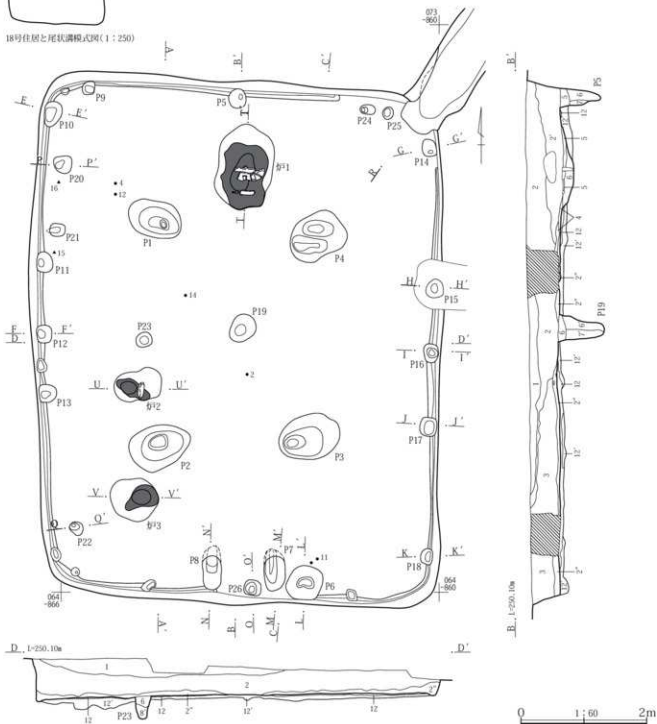
**ピット:** 4主柱穴(P1～4)は規則的な配置にある。各柱穴の平面形は東西に長い楕円形を呈すが、底面の形状は特に南側のP2・3で顕著な長円形になっていない。P4には掘り直しの痕跡がある。壁柱穴が西側に4本(P10～13)、東側に5本(P14～18)あり、北壁下のP5は炉奥と呼ぶ配置にあるが、南壁下のP26が対になる位置にある。P9・24・25など壁際にピットがあるが深さ20cm前後の不明瞭な施設で配置も不規則である。P7・8は入口ピットで、開口部が南壁に向かって傾いて穿たれている。入口脇には東側の壁に接してP6があり、貯蔵穴になるとと思われる。尾状溝入口西側にP24・25があ



18号住居と尾状溝模式図(1:250)

り、壁柱穴P14と対になれば尾状溝入口前あたかも鳥居のような配置になる。ただしP24・25は深さ20cm前後でP14の半分にも満たない。

か：P1・P4・北壁下の中間地点に径130×87cmの規模の大きな炉1が、P2北側に径75×44cmの炉2がある。どちらも住居中央側に枕石を据えている。P2南脇にも焼土の入る径75×69cmの窪みがあり、炉3とした。炉1は中央の割れ石の他に南側の本来枕石のある位置にも礎

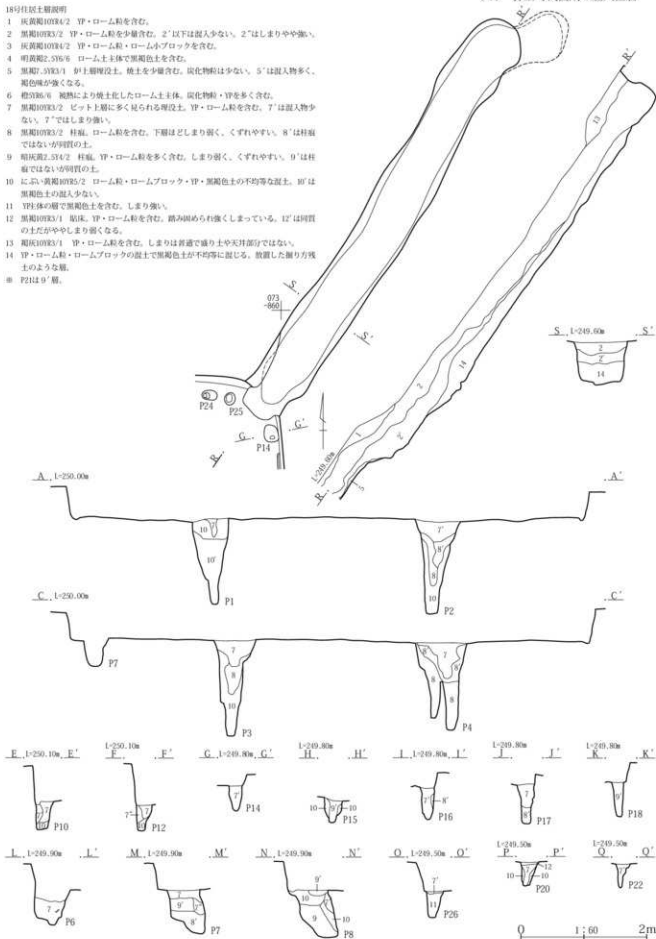


第93図 18号住居(1)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

## 18号住居土層説明

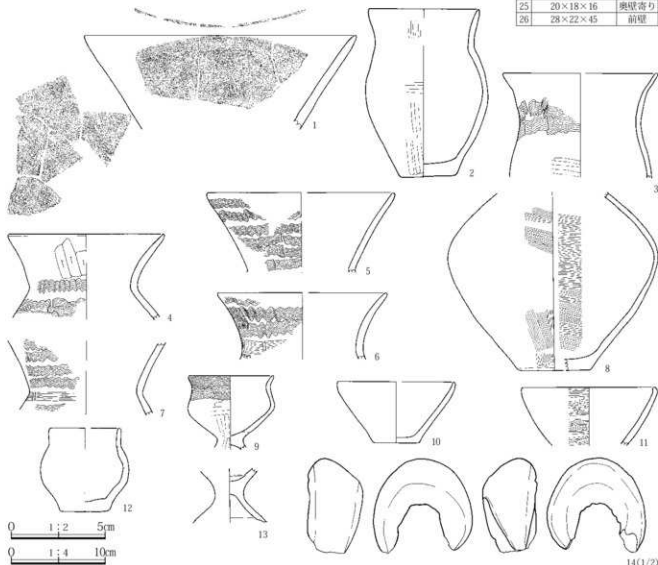
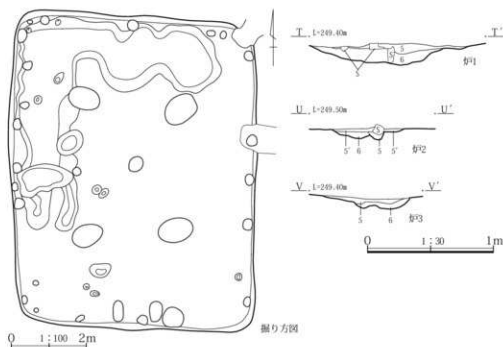
- 1 灰黄期1018/2 YP・ローム粒を含む。
- 2 黒期1018/3/2 YP・ローム粒を少量含む。2'以下は混入少ない。2''はしまりやや強い。
- 3 灰黄期1018/4/2 YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。
- 4 明灰期2.516/6 ローム土主体で黒期色土を含む。
- 5 黒期7.519/1 粘土層厚。粘土を少量含む。炭化物粒は少ない。5'は混入物多く、褐色味が強くなる。
- 6 砂318/6 焼熱により焼土化したローム土主体。炭化物粒・YPを多く含む。
- 7 黒期1018/3/2 ビット上層に多く見られる厚段土。YP・ローム粒を含む。7'は混入物少ない。7''ではしまり強い。
- 8 黒期1018/3/2 柱版。ローム粒を含む。下層ほどしまり弱く、くずれやすい。8'は柱版ではないが同質の土。
- 9 明灰期2.514/2 柱版。YP・ローム粒を多く含む。しまり弱く、くずれやすい。9'は柱版ではないが同質の土。
- 10 におい・黄期1018/5/2 ローム粒・ロームブロック・YP・黒期色土の不均等な混入。10'は黒期色土の混入少ない。
- 11 YP体の層で黒期色土を含む。しまり強い。
- 12 黒期1018/3/1 灰床。YP・ローム粒を含む。踏み固められ強くしまっている。12'は同質の土だがややしまり弱くなる。
- 13 期灰1018/3/1 YP・ローム粒を含む。しまりは普通で盛り土や天井部分ではない。
- 14 YP・ローム粒・ロームブロックの混入で黒期色土が不均等に混じる。放置した盛り方残土のような層。
- ※ P2は9'層。



第94図 18号住居(2)

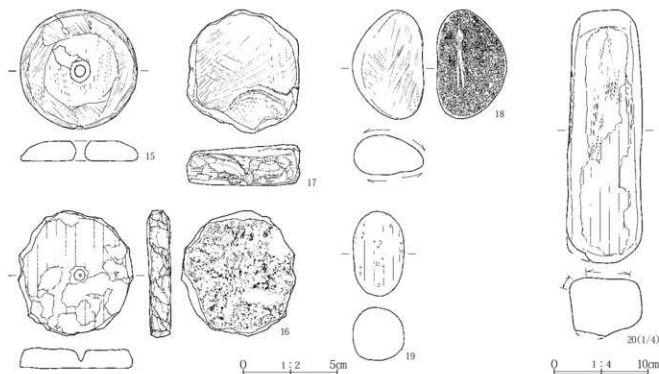
18号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	88×59×132	土
2	96×68×151	土
3	100×72×150	土
4	90×67×119	土
5	30×28×65	杵奥
6	54×34×56	貯蔵
7	54×34×96	入口
8	54×28×74	入口
9	20×20×30	
10	41×26×46	壁
11	33×24×51	壁
12	28×22×43	壁
13	28×28×39	壁
14	29×22×47	壁
15	30×30×38	壁
16	30×24×54	壁
17	30×27×64	壁
18	25×19×57	壁
19	48×39×68	奥壁
20	30×30×39	壁寄り
21	25×20×41	壁寄り
22	22×18×53	壁寄り
23	26×24×35	
24	24×14×22	奥壁寄り
25	20×18×16	奥壁寄り
26	28×22×45	前壁



第95図 18号住居(3)および出土遺物(1)





第96図 18号住居出土遺物(2)

が据えられているが、炉の規模に比して枕石としては貧弱な川原石である。

**尾状溝**：住居北東隅からほぼ直線的に延びる溝である。始点は住居床面より30cm前後深いが、住居内側の掘り込みはほとんどない。全長7.4m、中央付近の幅83cm、深さ53cmで軸方向はN-33°Eである。壁は全体が垂直に近い立ち上がりである。底面は波打つような凹凸があるが住居側が最も高く、全体では北東側へ向かって低く傾斜している。終点は東側へ屈曲して奥行80cm横穴状に掘り窪めた状態になっている。この部分でも底面は水平に近い。

**その他**：2号方形溝溝墓に先出する。尾状溝部分が弥生時代中期の19号住居に後出する。

**遺物**：土器類14点と石器6点を図示した。北西寄りの裏4・小型裏12と南壁下の鉢11が床直上で出土している。小型裏2は住居中央の出土だがやはり床直上遺物で、これらを本住居に確実に伴う遺物と考えたい。粘土塊14は床上5cmの高さだが、住居中央付近の出土である。本住居の特筆内容として石製品では紡輪が木製品と共に計3点出土することが挙げられるが、このうち15・16が西壁下北寄りの床直上出土遺物である。木製品と共に研磨具等が3点(18～20)出土していることも注目される。

**所見**：弥生時代後期新段階。

**20号住居**(第97・98図 PL.17-1~4, 72 遺物観察表340頁)

**位置**：X=062~068, Y=-847~853グリッドにある。

**規模形状**：長軸5.6m、短軸4.1mの長方形を呈す。

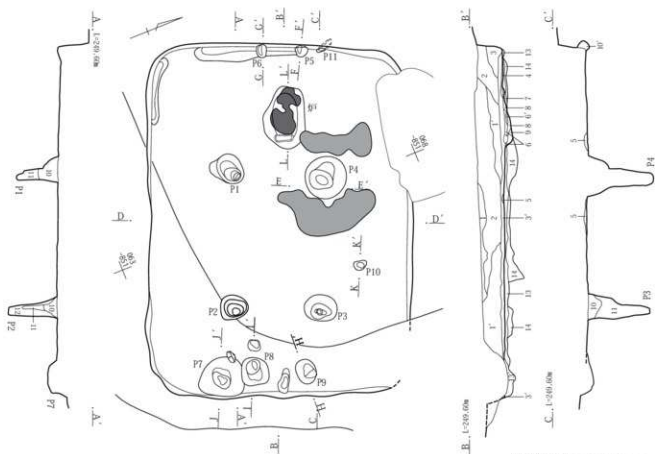
**埋没土・壁**：全体にローム土の混入が多い。また壁際から一気に堆積しており、人為的な埋戻しと考えたい。壁高は最も深い西辺で48cmを測る。

**方位**：N-66°W。 **面積**：(21.60)㎡

**床面**：比高差5cm前後の凹凸があるが、傾斜はない。P4を東西から挟むようにローム土主体の土が床直上に置かれている。調査時の所見では住居廃絶時の抜柱作業残土と想定している。不規則な掘り方があり、特に南・東壁直下に深さ30~40cmの帯状の窪みが見られる。床面は黒褐色土による層厚5cm前後の貼床を作るようだが、踏み固めはあまり強くない。

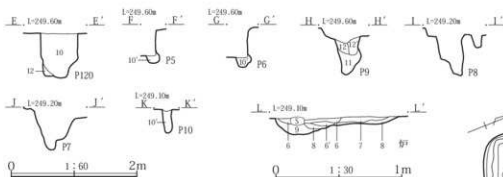
**壁溝**：西壁下南側と南壁下西隅に見られる。深さ2cm前後の不明确的な施設である。

**ピット**：主柱穴(P1~4)は東側に寄っていて、西側の炉周辺を広くしている。壁柱穴は短辺である西壁下に浅いP5・6がある。形状・配置から対になる施設であろう。P5北のP11は斜めに穿たれた深く細い施設で杭を打ち込んだ痕跡のような施設である。入口ピット(P8・9)は傾斜が弱い。P8の左(南)側に東壁に接して貯蔵穴と思われる入口脇ピットP7があるが、P8とは開口部分



20号住居ピット一覧 (単位: cm)

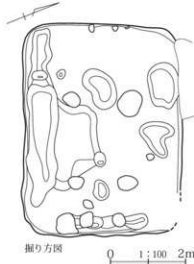
No	長径×短径×深さ	種類
1	50×36×68	土
2	44×40×79	土
3	52×40×100	土
4	68×66×107	土
5	20×16×11	伊奘
6	22×16×21	伊奘
7	70×65×48	貯蔵
8	42×42×59	入口
9	40×31×67	入口
10	20×16×37	
11	14×6×11	



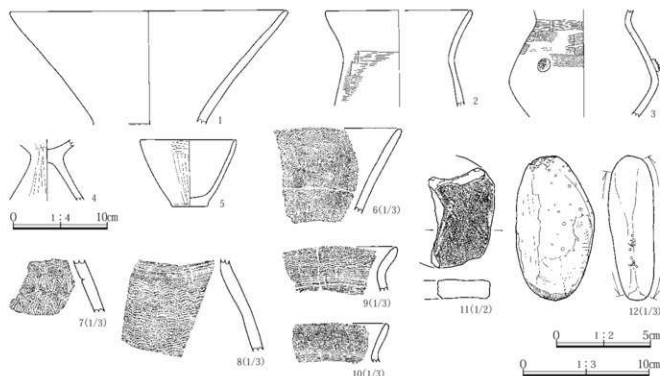
20号住居土層説明

- 黒曜石R3/2 伊・ローム粒を少量含む。1'でローム粒や多し。
- 灰青黒曜石R4/2 伊・ローム粒・ローム小ブロックをやや多く含む。
- 黒曜石R3/1 伊・ローム粒を少量含む。3'には直くしまつて固い部分もある。
- 黒曜石R2/4 珪化物を多量に含む。
- 伊・ローム粒主体の土。黒曜土を含む。復柱時に掘り返したか。
- 黒曜石R2/4 伊土面理段上。ロームブロック・伊を含む。6'には粘土粒を少量含む。
- 黒曜石R2/2 伊・ローム粒・粘土粒・珪化物を少量含む。
- 明水期SRS/6 粘土主体。ローム土の粗粒による硬化部分。

- 黒曜石SRS/1 ローム粒・灰や珪化物粒を含む。
- 黒曜石R2/3 伊・ローム小ブロックを合体に含む。10'は混入物少なし。
- 黒曜石R2/4 ロームブロックがやや多く混じる。腐れやすく、柱間もしくは柱間の間隙のある部分。
- 黒曜石R4/1 ロームブロック・珪酸化土・伊等の混土。12'はローム土の比率が高く、珪化物が多い。
- 黒曜石R3/2 伊・ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。腐れ認められ、しまっている。腐れか。13'は土質同じだがしまり強い。
- 伊・ローム粒・ローム小ブロック・黒曜土粒の混土。しまり強く、ボソボソしている。



第97図 20号住居



第98図 20号住居出土遺物

で重複している。

**如:** P 1・P 4・西壁下の中間地点にある。径100×66cmの楕円形を呈し、住居中央側隅に枕石を据えている。

**その他:** 2号方形周溝墓に先出する。

**遺物:** 出土遺物は少なく、小破片を接合した土器10点と石器2点を図示した。すべて埋没土内の出土である。

**所見:** 弥生時代後期新段階。

#### 21号住居(第99～101図 PL.17-5～8, 72 遺物観察表340頁)

北辺東隅から尾状溝が延びている。

**位置:** X = 052～060、Y = 857～862グリッドにある。尾状溝の先端は066～856グリッドの土坑状施設に繋がる。

**規模形状:** 長軸7.3m、短軸5.0mで各辺が直線的であり、比較的整った長方形を呈している。

**埋没土・壁:** 焼失家屋ではないが炭化物粒の混入が多い、黒色味の強い埋没土である。壁高は最も深い西壁で38cmである。尾状溝を持つ住居は全体に深い、本住居はそれら8軒の住居中、最も浅い。

**方位:** N-6° W。 **面積:** 33.06㎡

**床面:** 中央付近が低くなる傾向があり、壁際と6cm前後の比高差がある。ほぼ全域にローム土混じりの暗褐色土を踏み固めた層厚3cm前後の貼床を施している。掘り方

は住居中央付近が深く、20cm前後を測る。

**壁溝:** 西壁直下にのみ確認できる。幅5cm前後、深さ4cm前後の不明瞭な施設である。

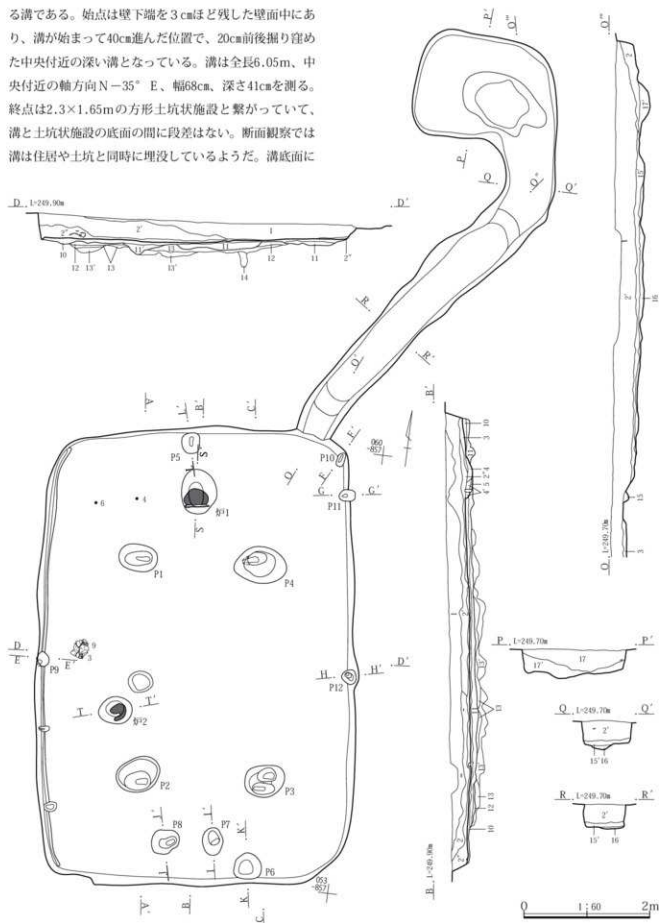
**ピット:** 主柱穴(P 1～4)は上面が東西に長い長円形で規模が大きく、底面は細長い。P 3に掘り直し痕が見られる。入口ピット(P 7・8)はやや西側に寄っている。傾斜のない浅い柱穴である。入口脇ピットP 6は入口の右(東)側の壁際にある。貯蔵穴とと考えられるが規模が小さい。壁柱穴は西側にP 9、東側にP 10～12があるが、変則的な配置である。いずれも壁に食い込むような位置に穿たれているがP 9以外は浅い。P 5は炉奥にあるピットで、北壁中央より西側へ寄った位置にある。掘り方調査時に確認したP 13は主柱穴と変わらない深度がある。P 14も掘り方調査時に確認したピットだが床面段階で見える窪みと重複しており、上面の床に伴う施設の可能性もあろう。その他壁際には深さ5cmに満たない不明瞭な窪みがあるが、ピットとして扱わなかった。

**如:** P 1・P 4・北壁下の中間地点に如1がある。70×56cmの楕円形を呈し、住居中央側に枕石を据えている。北壁中央よりやや西に寄って設けられているのは、尾状溝入口付近の広さを確保するためと考える。如2は53×42cmの不整円形で、P 2の北側やや西壁寄りにある。

**尾状溝:** 北壁東隅からやや蛇行するように北東側へ延び

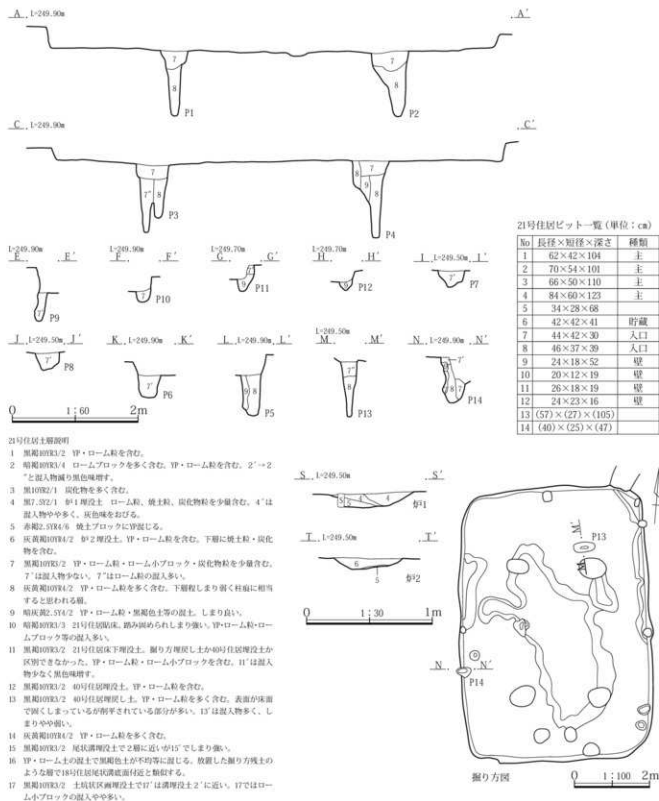
第II章 発掘調査の記録

る溝である。始点は壁下端を3cmほど残した壁面中であり、溝が始まって40cm進んだ位置で、20cm前後掘り穿めた中央付近の深い溝となっている。溝は全長6.05m、中央付近の軸方向N-35° E、幅68cm、深さ41cmを測る。終点は2.3×1.65mの方形土坑状施設と繋がっていて、溝と土坑状施設の底面の間に段差はない。断面観察では溝は住居や土坑と同時に埋没しているようだ。溝底面に



第99図 21号住居(1)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



## 21号住居土層説明

- 黒層10TR3/2 VP・ローム粉を含む。
- 黒層10TR3/4 ロームブロックを多く含む。VP・ローム粉を含む。2'→2''と混入物減り黒色味増す。
- 黒層10TR2/1 炭化物を多く含む。
- 黒層2.5TR1 砂1埋没土 ローム粉、焼土粒、炭化物物を少量含む。4'は混入物やや多く、灰色味をおびる。
- 赤層2.5TR4/6 焼土ブロックに埋没する。
- 灰黄層10TR4/2 砂2埋没土。VP・ローム粉を含む。下層に焼土粒・炭化物物を含む。
- 黒層10TR3/2 VP・ローム粉・ローム小ブロック・炭化物物を少量含む。7'は混入物少ない。7''はローム粉の混入多い。
- 灰黄層10TR4/2 VP・ローム粉を多く含む。下層程しまり弱く柱痕に相当すると思われる層。
- 赤灰層2.5TR2 VP・ローム粉・黒褐色土等の混入。しまり良い。
- 黒層10TR3/3 21号住居臥床。踏み固められしまり強い。VP・ローム粉・ロームブロック等の混入多い。
- 黒層10TR3/2 21号住居床下埋没土。覆り方埋没し土が40号住居埋没土が区別できなかった。VP・ローム粉・ローム小ブロックを含む。H'は混入物少なく黒色味増す。
- 黒層10TR3/2 40号住居埋没土。VP・ローム粉を含む。
- 黒層10TR3/2 40号住居埋没土。VP・ローム粉を多く含む。表面が床面で固くしまっているが削平されている部分が多い。I3'は混入物多く、しまりやや弱い。
- 灰黄層10TR4/2 VP・ローム粉を多く含む。
- 黒層10TR3/2 尾状溝埋没土で之類に近い(砂1)でしまり強い。
- VP・ローム土の混入で黒褐色土が不均等に混入。放棄した覆り方残土のような層で18号住居尾状溝底面付近と類似する。
- 黒層10TR3/2 土坑区画埋没土でI7'は溝埋没土2'に近い。I7'ではローム小ブロックの混入やや多い。

第100図 21号住居(2)

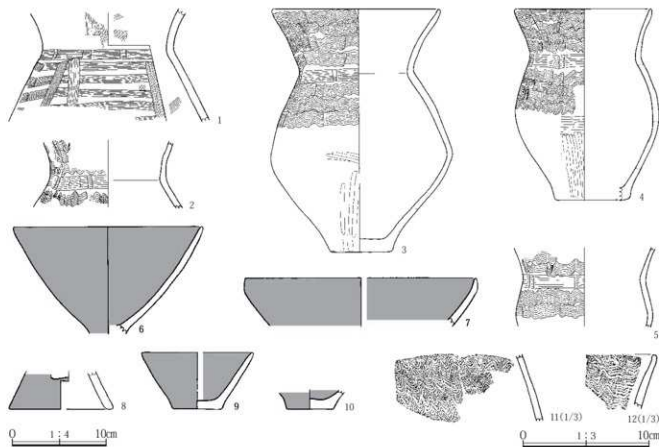
明瞭な踏み固めは確認できない。

**その他:** 掘り方調査時に先出する住居(40号住居)を確認している。9号溝に先出する。

**遺物:** 土器12点図示した。西壁直下の裏3と北西隅付近の裏4・高杯6はいずれも床直上の本住居に確実に伴う

土器である。裏5・12は尾状溝埋没土内の出土である。壺2と鉢9は南側に隣接する22号住居出土破片が接合している。

**所見:** 弥生時代後期中段階。



第101図 21号住居出土遺物

**22号住居** (第102~107図 PL.18-1~6, 72-73 遺物観察表340頁)

尾状溝が南東隅から東側へ延びて23号住居上に繋がるが、一部掘り下げ順を誤り、上端を失った部分がある。  
**位置**：X = 040~050、Y = 858~865グリッドにある。尾状溝先端は044-850グリッドにある。

**規模形状**：長軸が西側で9.6m、短軸が5.6mで、本遺跡中、最も細長いプランを呈した1軒である。東辺が西辺より0.8m短い台形状に歪んでいる。

**埋没土・壁**：黒色土主体の埋没土で人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は最も深い西壁で58cmを測る。

**方位**：N-9° W。 **面積**：51.02㎡

**床面**：南側へ低く傾斜していて、北側と12cm前後の比高差がある。黒色土主体の埋戻し土を踏み固めた層厚2cm前後の薄い貼床がほぼ全域に見られる。掘り方はあまり深くないが壁直下で深度を増す傾向がある。

**壁溝**：住居長辺両側に壁溝が見られる。西辺では両側部分まで延びるが、東辺は壁柱穴で止まっている。幅10~14cm、深さ4~6cmの比較的小規模な施設である。

**ピット**：4主柱穴(P1~3・5)は住居南辺の走向に沿って平行四辺形気味に歪んだ配置となっている。P1の

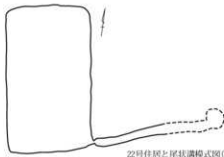
み掘り直しの痕跡があるが開口部が狭い。南側に位置するP2・3断面に明瞭な柱痕が見える。壁柱穴は長辺側に3本ずつ並び(西側P11~13・東側P14~16)、北辺両隅付近にもP17・18がある。いずれも深度のある良好な柱穴で、P12・15・16断面に柱痕が見える。入口ピット(P8・9)は開口部が南壁側を向く弱い傾斜のある柱穴で、P8の左(西)側の南壁に接して入口脇ピットP7がある。貯蔵穴と思われるが底面は平坦でない。如奥のP6は壁際からやや離れた位置に穿たれ、開口部が壁柱穴よりかなり大きく、深度は主柱穴に近い。

**如**：P1・P5・北壁下の中間地点に如1がある。規模は径65cmの円形で主如としては小規模である。P2の北側に如2がある。規模は50×46cmの歪んだ円形を呈す。両如とも住居中央寄りに枕石を据えている。掘り方調査時に如1南側30cmの地点にも焼土が確認でき、先出する如があったものと思われる。

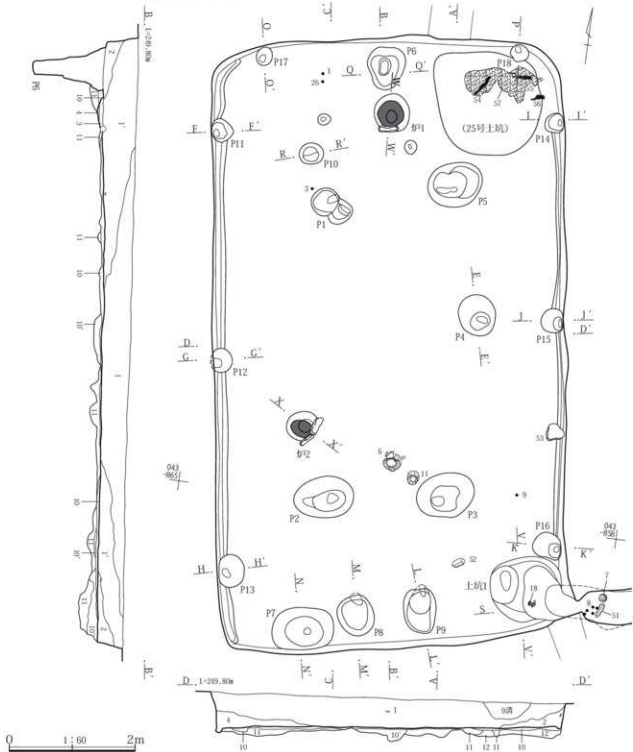
**尾状溝**：住居東壁南隅から東側へ、住居南辺から直線的に続くように延びている。住居側では床面より20cmほど低い窪み(土坑1：長軸1.1m、短軸1mの隅丸方形)から溝が始まっている。溝軸方向はN-72° Eで、中央付

(4) 弥生時代後期の竪穴住居

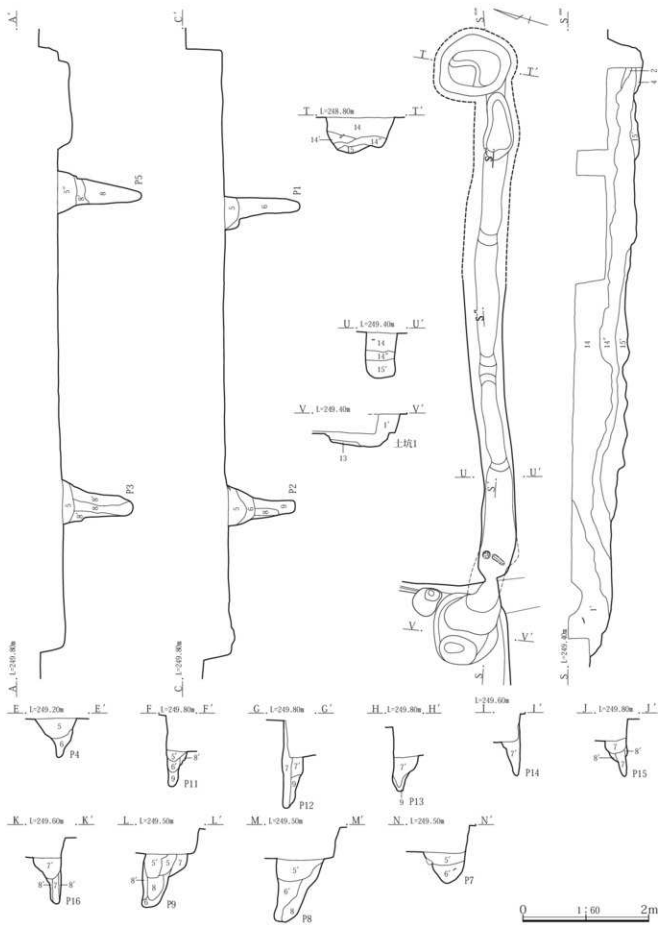
近の幅0.7m、深さ52cmを測る。溝底面は途中で細かな凹凸が多く、また、隣接する23号住居の埋没土上に開削され、底面付近ではローム土の多い土を敷いている可能性がある。終点は土坑状の窪みに達している。長軸1.3m、短軸1mの不整楕円形を呈すと思われる窪みだが、ローム土の多い底面付近以外は明確でない。土層断面観察が



22号住居と尾状溝模式図(1:250)



第102図 22号住居(1)



第103図 22号住居(2)



## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

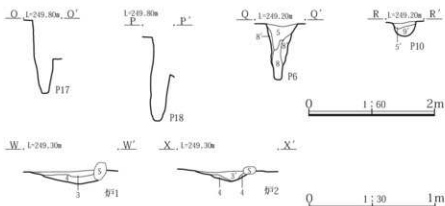
らは、住居埋没より先に溝の埋没が始まった可能性が指摘できる。なお、溝始点付近の壁がオーバーハング気味でトンネルが存在した疑いがあるが、土層断面に天井部崩落の痕跡は確認できない。

**その他**：9号溝に先出し、弥生時代後期の23号住居に後出している。北東隅の25号土坑が本住居に後出するようだが、住居プランに沿った掘り込みであり、本住居埋没前に掘削された可能性がある。炭化材がこの土坑部分にのみ見られる。

**遺物**：出土遺物は豊富で、土器類45点と石器8点を図示した。壺1・高杯26は北壁際、甕9は東壁際の床上3～4cmの遺物である。甕6・11はP3北西脇の床直上から

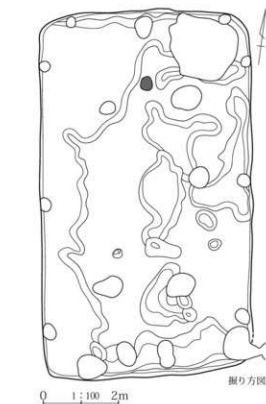
出土した。P2から鉢27、P7から甕17・台付甕19が出土した。尾状溝内の底面直上から甕7、土坑1底面直上から高杯18が出土している。これらを本住居に確実に伴う遺物と考えたい。土坑1からは他に高杯23・25が埋没土中から出土している。ピット内の出土土器も多く、壺40・43、甕10などピット出土破片が住居埋没土や土坑1埋没土の出土破片と接合し、7・10号住居同様に抜柱作業時にピット内へ破片が混入した痕跡のように見える。石器では南東隅寄りの砥石52と東壁直下の砥石53が床直上、尾状溝内の砥石51が底面直上の出土である。

**所見**：弥生時代後期中段階。尾状溝が弥生時代後期の住居と重複するのは本遺跡では唯一例である。



22号住居ピット一覧(単位:cm)

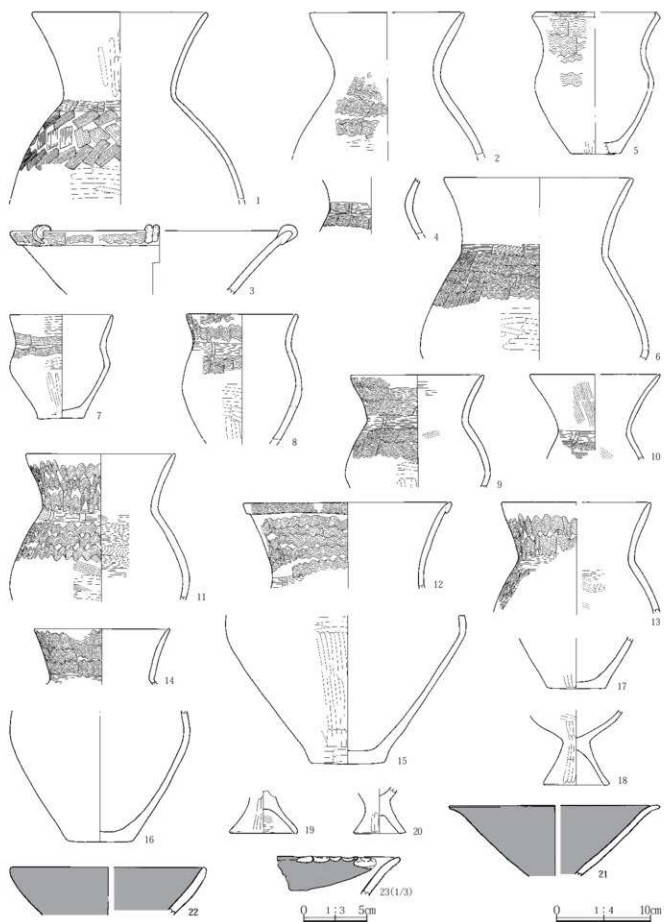
No	長径×短径×深さ	種別
1	68×36×119	土
2	94×65×109	土
3	93×70×114	土
4	67×58×66	土
5	88×72×136	土
6	66×57×112	貯蔵
7	98×67×57	入口
8	63×56×89	入口
9	70×52×86	壁
10	40×34×27	壁
11	38×38×58	壁
12	40×30×81	壁
13	52×40×62	壁
14	30×30×56	壁
15	38×36×60	炉臺
16	48×40×74	壁
17	30×24×59	壁
18	38×38×84	壁



## 22号住居土層説明

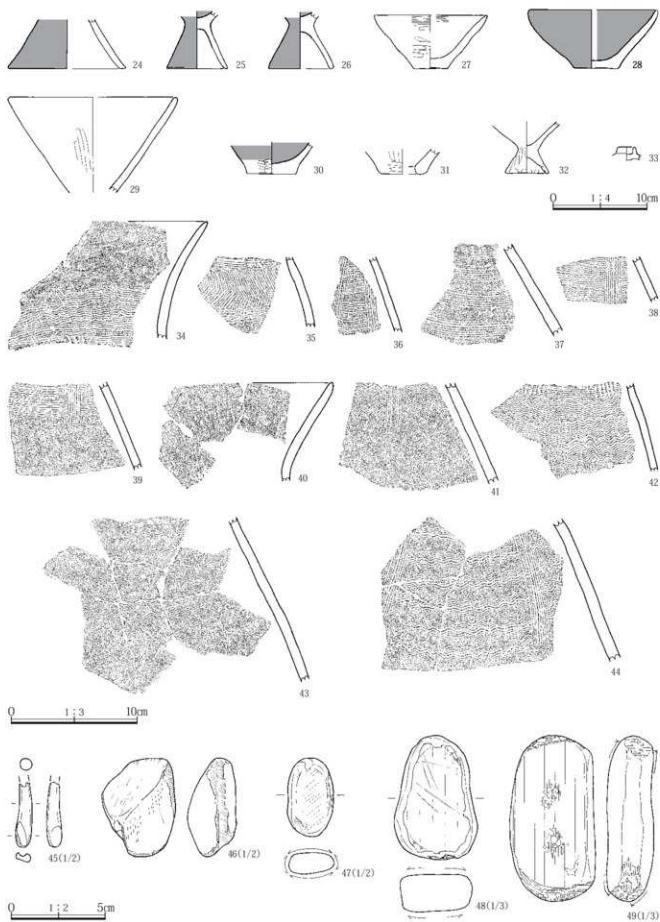
- 黒層 2.5/3/1 YP・ローム粒を少量含む。1'はローム粒や中層褐色味をむびる。
- 黒2.5/2/1 YP・ローム粒少なく黒色強い。(1～3は近似した土層である。)
- 黒層10/13/2 粘土・YPを不均等に含む。3'には炭化物粒を含む。
- 粘土主体の硬結による硬化面。YPを多く含む。
- 黒層10/13/2 ピット土層の埋没土。YP・ローム粒や中層褐色味を多く含む。5'には炭化物粒が混入する。
- 灰黄層10/13/2 YP・ローム粒を多く含む。しり餅く、柱間に相当するものを含む。6'の土質は6層と同じだがしり餅あり。
- 黒層2.5/3/2 YP・ローム粒を少量含む。しり餅く、まらかい。柱間に相当するものを含む。7'の土質は7層と同じだがしり餅あり。
- YP・ローム粒・ロームブロック・黒褐色土等を不均等に混入する。しり餅く柱間に相当するものを含む。8'の土質は8層と同じだがしり餅あり。
- 黄褐色2.5/5/4 ローム土主体。YP・黒褐色土を含む。9'はYPが多い。
- 黒層2.5/3/2 粘床。YP・ローム粒を含む。踏み固められている。10'は同質の土だが黒褐色強く、踏み固めはない。
- YP・ローム小ブロック・灰黄褐色土ブロックの混入。
- 粘土主体の硬結。黒褐色土粒を少量含む。
- 灰黄層10/13/2 土坑1下層埋没土。YP・ローム粒を多く含む。
- 噴出層2.5/1/2 尾状溝土層埋没土。YP・ローム粒を含む。炭化物を散見する。1'は土坑1埋没土内のみ見える層でローム土の混入多し、14'はYPの混入多し。
- 近い黒層2.5/6/4 ローム土主体でYPの混入が多い。15'では黒褐色土が不均等に混入する。

第104図 22号住居(3)

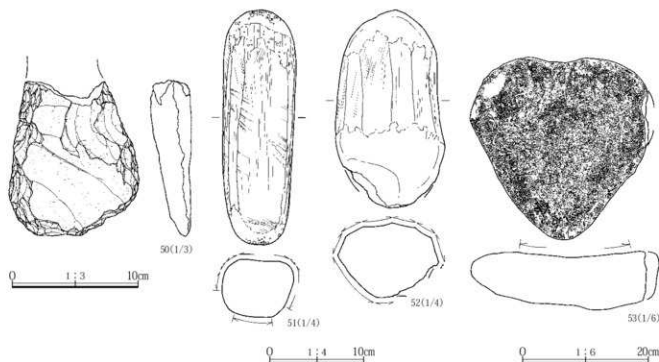


第105図 22号住居出土遺物(1)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居



第106図 22号住居出土遺物(2)



第107図 22号住居出土遺物(3)

**23号住居**(第108～111図 PL.18-7・8、19-1～5、74 遺物観察表342頁)

焼失住居で北側を中心に炭化材が出土する。

**位置**：X＝042～053、Y＝848～855グリッドにある。

**規模形状**：長軸10.9m、短軸7.0mの大型長方形住居で、南東隅が鈍角の台形状に歪んでいる。

**埋没土・壁**：黒色土とローム土混入土が不均等に堆積しており、人為的な埋戻しの可能性のある住居である。壁高は最も深い北・西辺で60cmを測る。

**方位**：N-3° W。 **面積**：71.83㎡

**床面**：南側へ低く傾斜していて、北壁下と20cm前後の比高差がある。黒色土を踏み固めた層厚1～4cmの薄い貼床が部分的に見られる。掘り方は全体に浅く、やや深い壁際でも15cm前後の深度である。掘り方内埋没土はAs-YPやローム土が主体で、住居粗掘り時の残土をそのまま踏み固めたような状態であった。

**壁溝**：南壁下を除いた各壁下に見られるが、不規則に途切れる。幅9～18cm、深さ2～6cmで形状は不定である。

**ピット**：4主柱穴(P1～4)は住居南辺の歪みに沿って平行四辺形気味に歪んだ配置である。また、南北両辺から2.5m前後離れており、住居内の南北両壁下に広い空間を作っている。各主柱穴は下端が東西方向に細長く、断面に柱痕が確認できる。住居中央にあるP5は主柱穴

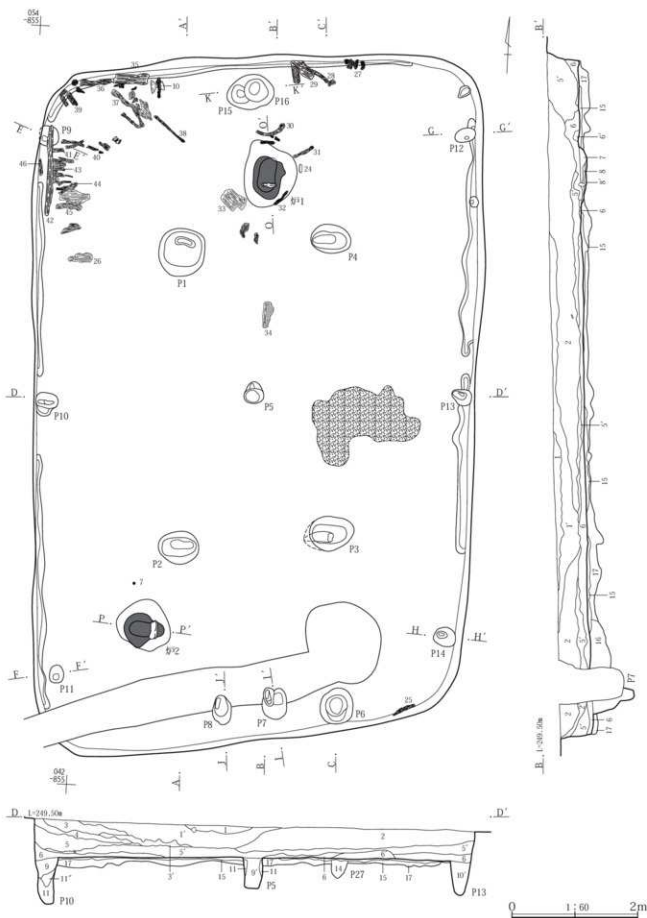
の対角線交点上に穿たれている。主柱穴に比べ平面は小規模だが、補助柱穴の可能性ある。壁柱穴は長辺両側に3本ずつ(西側P9～11・東側P12～14)並んでいていずれも深い。入口ピット(P7・8)は他住居の同じ施設に比べ壁側へ向かう傾斜が弱い。P7の右(東)側に貯蔵穴と思われる入口脇ピットP6があり、南壁と接している。炬燵のP15・16は1基の柱穴の掘り直しであろう。先出するP15上面に貼床が、後出するP16断面に柱痕が確認できる。

**炬**：P1・P4・北壁下の中間やや南寄りに炬1がある。径105×92cmの不整楕円形を呈している。炬2はP2の南側やや西寄りにあり、脇炬として珍しい配置となっている。両炬とも住居中央側に枕石を据えている。

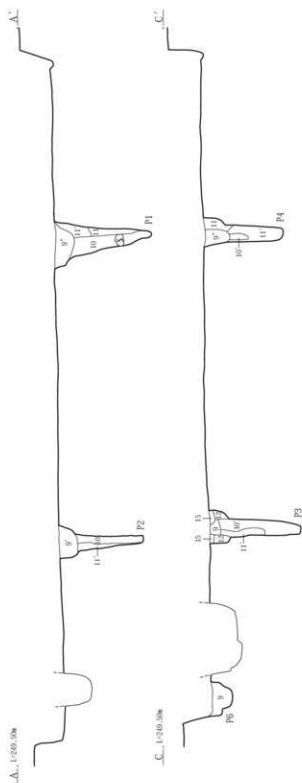
**その他**：22号住居尾状溝に先出する。

**遺物**：大型住居としては遺物はやや少なく、特に壺・甕類並びに床直上出土遺物が乏しかった。破片を中心に土器類18点と石器5点・鉄器1点を図示した。高杯10が北壁直下、床直上で出土した本住居に確実に伴う遺物である。台付甕7は炬2脇の出土だが、床面から8cm浮いた状態だった。片口9・土製紡輪片17・18や石鎌22なども埋没土中の出土である。炬1際の鉄斧24は側面中心に装着組痕が残る。本文306・309頁で観察・分析を加えた。

**所見**：弥生時代後期古段階。

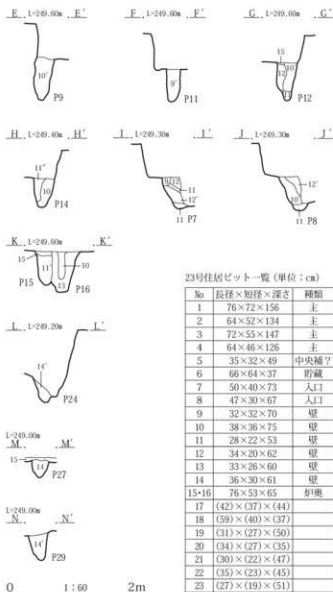


第108図 23号住居(1)



23号住居土層説明

- 1 黄灰2.31/1 VP・ローム粒を含む。やや砂質。1'はローム粒の混入やや多い。
- 2 黒褐色10YR3/2 VP・ローム粒を含む。炭化物をわずかに含む。2'では混入物少ないが黒色味は強い。
- 3 灰黄褐色10YR4/2 VP・ローム粒を多量に含む。3'ではロームブロックの混入が多い。
- 4 濃い黄褐色10YR5/3 弱粘性土。VPを少量含む。
- 5 灰黄褐色10YR4/2 VP・ローム粒・ローム小ブロックをまばらに含む。5'はローム粒の混入多し。炭化物も少量含む。
- 6 黒褐色10YR3/2 炭化物を多量に含む。VP・ローム粒・黄土もやや多い。6'は特に炭化物が集中して見られる。



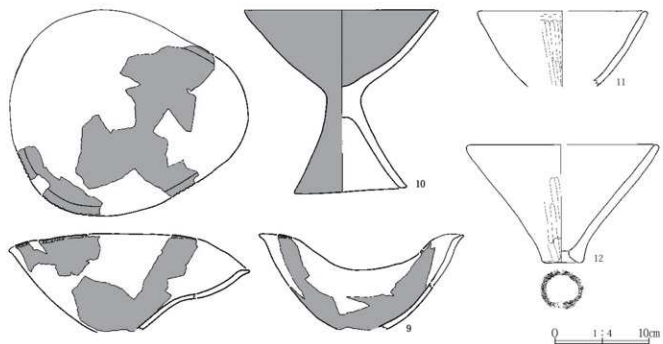
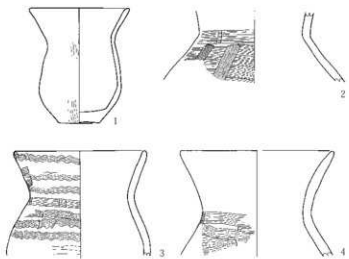
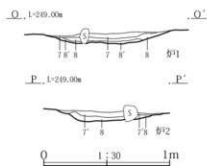
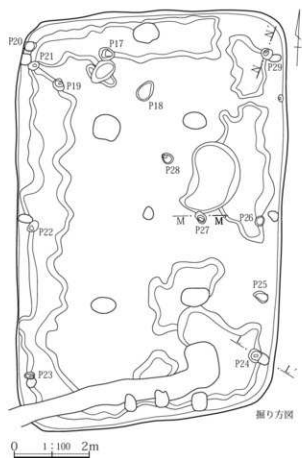
23号住居ピット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	76×72×156	主
2	64×52×134	主
3	72×55×147	主
4	64×46×126	主
5	35×32×49	中央柱?
6	66×64×37	貯蔵
7	50×40×73	入口
8	47×30×67	入口
9	32×32×70	壁
10	38×36×75	壁
11	28×22×53	壁
12	34×20×62	壁
13	33×26×60	壁
14	36×30×61	壁
15-16	76×53×65	炉奥
17	(42)×(37)×(44)	
18	(59)×(40)×(37)	
19	(31)×(27)×(50)	
20	(34)×(27)×(35)	
21	(30)×(22)×(47)	
22	(35)×(23)×(45)	
23	(27)×(19)×(51)	
24	(35)×(32)×(68)	
25	(38)×(25)×(60)	
26	(29)×(24)×(41)	
27	(33)×(22)×(50)	
28	(31)×(27)×(47)	
29	(31)×(29)×(48)	

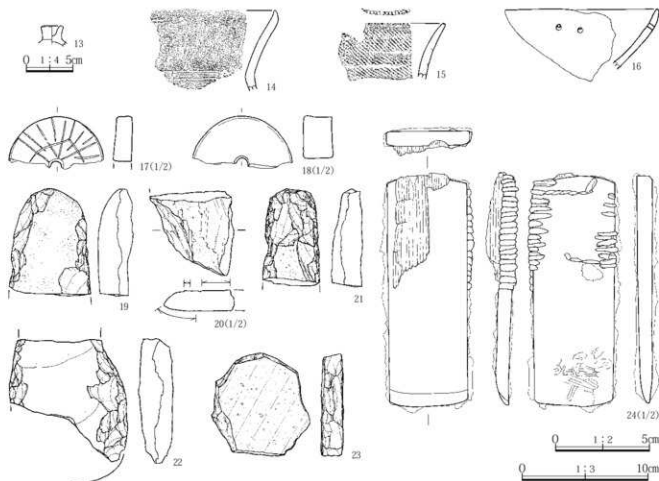
- 7 黒7.5Y2/1 弱土層埋土。黄土・炭化物を含む。7'はVPをやや多く含む黒色味強い。
- 8 赤褐色10YR4/8 黄土ブロックにVPが混じる。黒色土を少量含む。8'は焼けたVPと黒色土の混入で、ボソボソしている。
- 9 黒褐色10YR3/1 ピット上層埋没土。ローム粒を少量含む。9'はローム粒多し、ロームブロックの混入する場合あり。9''は炭化物が混入する。
- 10 黒褐色10YR3/2 柱礎。VP・ローム粒・ロームブロックを含む。下層積まり強い。10'は混入物多い。柱礎と断定できないがしまり強い。
- 11 濃い黄褐色10YR4/3 ローム土主体でロームブロックが混じる。11'は黒色土が混じる。11''はしまりやや強く。
- 12 灰黄褐色10YR5/2 VP・ローム粒・ロームブロックを含む。12'は黒色土を含む。しまり強い。
- 13 黒10YR4/6 ローム土主体でVP・黒褐色土等が混じる。粘性あり。
- 14 黒褐色10YR2/2 VP・ローム土等の混入物を含む。炭化物を少量含む場合あり。14'はしまりやや強い。
- 15 黒褐色10YR3/2 柱礎。踏み固められしまり強い。VP・ローム粒を多く含む。
- 16 ロームブロックと暗灰黄色土の混入。VPを含む。
- 17 VP・ローム粒を主体とし、ロームブロック・黒褐色土の混入。
- 18 P17・18・20・26は13層。P22は14層。

第109図 23号住居(2)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居



第110図 23号住居(3)および出土遺物(1)



第111図 23号住居出土遺物(2)

**25号住居**(第112図 PL.19-6-8、74・75 遺物観察表342頁)

調査区中央西寄りは横長の小型住居が多い一画で、本住居の東6mに29号住居、9mに30号住居など、長軸長3.8m以下の極小型とした住居が集中している。

**位置**：X=043~047、Y=-884~888グリッドにある。

**規模形状**：長軸3.4m、短軸2.8mの長方形小型住居である。

北辺が南辺より40cm短く、台形気味に歪んでいる。

**埋没土・壁**：ローム土の混入の多い埋没土が不均等に見られ、人為的な埋戻しが想定できる。壁高は最も深い東辺で49cmを測り、極小型住居の中では深度がある。

**方位**：N-62° E。 **面積**：7.94㎡

**床面**：細かな凹凸があるが、ほぼ水平な床である。黒色土を踏み固めた貼床が部分的に見られる。掘り方は壁際でやや深い。埋没土はAs-YP主体で、住居粗掘り時の残土をそのまま踏み固めたようだ。

**ピット**：P3・4は掘り方調査時に確認した施設であるが、上面に床らしい面は観察できず、2主柱穴と想定したい。P5も同様の壁際施設であるが対になるピットが

確認できなかった。南西隅の壁際にあるP2は底面が平坦で貯蔵穴と思われる。緑部を床面より8cm高い周堤状の幅広い高まりが囲っている。P1は底面が平坦だが浅く、住居内土坑的な施設と考えたいが、住居中央付近の配置には疑問点が多い。

**竈**：東側壁下から35cmの位置にある。軸長90cm前後の隅丸三角形を呈し、住居の規模に比べ大きさが際立つ。埋没土には焼土や灰が多量に含まれていた。

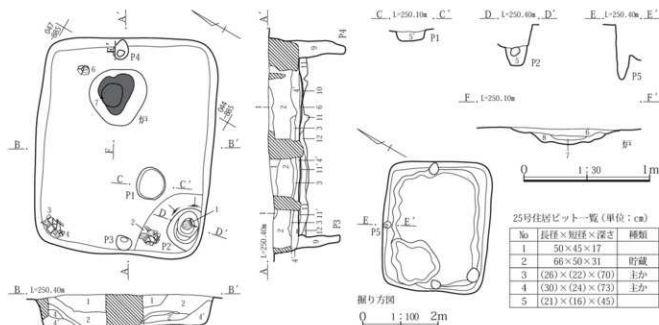
**その他**：壁溝は確認できない。38号土坑に後出する。

**遺物**：小型住居だが西壁下から出土する糞類が豊富だった。土器6点と石器2点を図示した。糞1はP2内床下15cmの高さにあった。糞2~4は西壁下の床直上から床上5cmの高さの出土、鉢6は北東隅床直上の出土でいずれも本住居に確実に伴う遺物である。また、鉢6はP2内出土破片が住居埋没土出土破片と接合している。如床直上出土の7は本遺跡唯一の石錘である。

**所見**：弥生時代後期。



(4) 弥生時代後期の竪穴住居

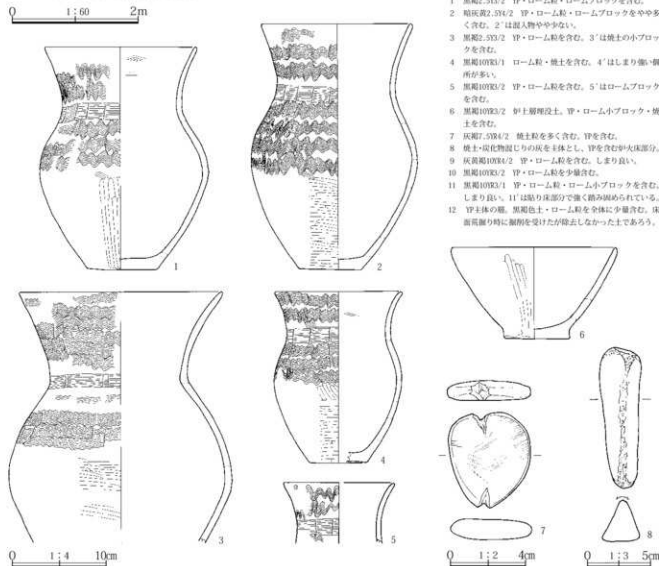


25号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長さ×短径×深さ	種類
1	50×45×17	
2	66×50×31	貯蔵
3	(26)×(22)×(70)	土か
4	(30)×(24)×(73)	土か
5	(21)×(16)×(45)	

25号住居土層説明

- 黒層2.533/2 YP・ローム粒・ロームブロックを含む。
- 暗灰層2.374/2 YP・ローム粒・ロームブロックをやや多く含む。2'は混入物やや少ない。
- 黒層2.533/2 YP・ローム粒を含む。3'は焼土の小ブロックを含む。
- 黒層103K1/1 ローム粒・焼土を含む。4'はしまり強・割所が多い。
- 黒層103K2/2 YP・ローム粒を含む。5'はロームブロックを含む。
- 黒層103K3/2 砂土層埋設土。砂・ローム小ブロック・焼土を含む。
- 灰層7.538/2 焼土粒を多く含む。砂を含む。
- 焼土・灰化物混じりの灰を主体とし、YPを含む砂灰床部分。
- 灰層期103K4/2 砂・ローム粒を含む。しまり強い。
- 黒層103K5/2 YP・ローム粒を少量含む。
- 黒層103K3/1 YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。しまり強い。11'は陥り床部分で強く踏み固められている。
- YP主体の層。黒褐色土・ローム粒を全体に少量含む。床面高麗り時に腐削を受けたが除去しなかった土であろう。



第112図 25号住居および出土遺物

**26号住居** (第113・114図 PL.20-1~4、75 遺物観察表343ED)

北西側にある16号住居と共に軸方向が大きく東へ傾いている。主軸が南側にあるのは本遺跡唯一の例である。

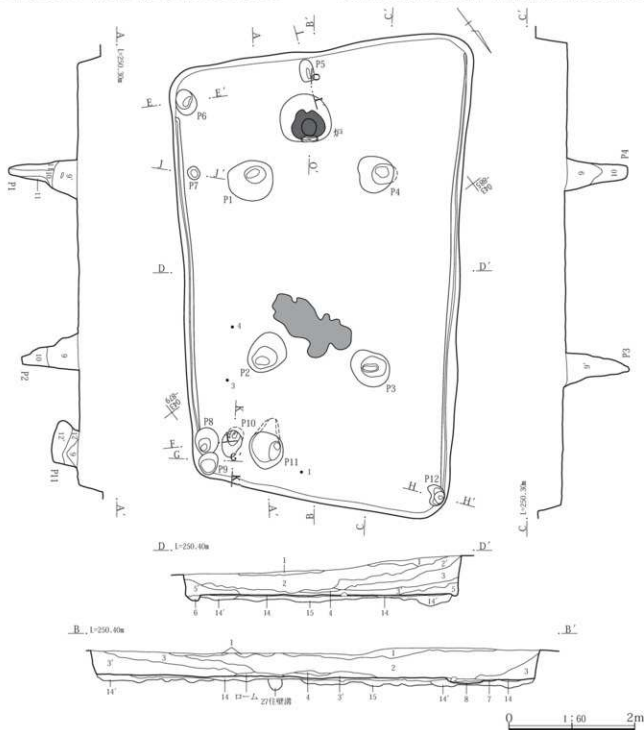
**位置**：X=038~046、Y=-878~-886グリッドにある。

**規模形状**：長軸は北東側で7.5m、短軸は4.4mを測る。22号住居と並び、本遺跡で最も細長い住居である。北西辺が南東辺より約1m長く、台形状を呈している。四隅の丸みが少なく、各辺は直線的で整美な形状である。

**埋没上・壁**：住居中央付近から埋没する部分があり、廃絶当初人為的な埋戻しがあったと考えたい。壁は垂直に近い立ち上がりで、壁高は最も深い北西辺で62cmを測る。

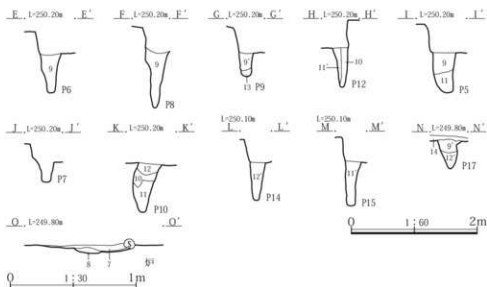
**方位**：N-47° E。 **面積**：29.06㎡

**床面**：南へ低く若干傾斜していて、北側と7cm前後の比高差がある。P1・2間の床直上にローム状土が多量に見られる。住居廃絶時の抜柱作業による廃土と推定できる。黒色土を踏み固めた薄い貼床がほぼ全域に見られる。



第113図 26号住居(1)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

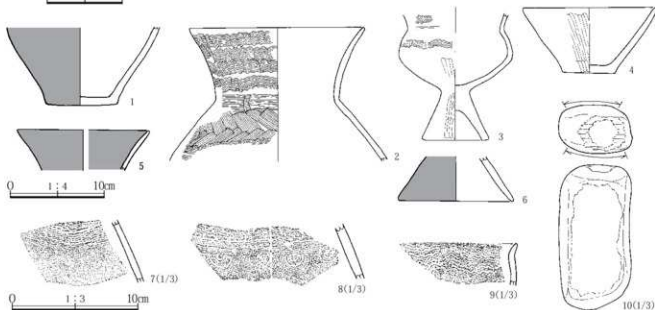


## 26号住居土層説明

- 黒層10YK3/1 YP・ローム粒を少量含む。
- 暗灰層2.5Y4/2 YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。2'はロームブロックをやや多く含む。
- 黒層10YK3/2 YP・ローム粒を含む。3'は混入物や少ない。しまり強い。
- 黄灰2.5Y4/1 やや砂質の埋没土。YP・ローム粒を含む。
- オリーブ層2.5Y4/3 YP・ローム粒を多く含む。5'は混入物少なく黒色ぬれや強くなる。
- 黒層10YK3/2 壁埋没土。YPを少量含む。しまり弱い。
- 黒層10YK2/3 が上層埋没土。黄土粒・YP・ローム粒・灰化物を全体に含む。しまりあり。粘性なし。
- 暗赤層5YR3/6 黄土・灰主体の層。YP・ロームブロックを少量含む。
- 黒層10YK3/2 ピット上面にYP・ローム粒を含む。9'はロームブロックが混じる。
- 黒層10YK3/2 土質は9層に近いが、しまり強く柱版と思われる層。YP・ローム粒を含む。
- YP・ローム粒・黒褐色土の混土。しまり強く柱版の可能性のある層。11'は土質同じだが、他層と同様の厚さの部分。
- 灰黄10YR4/1 ロームブロックをやや多く含む。YPを含む。12'はローム粒やロームブロックの混入多い。
- 暗赤層5YR3/4 YP・ローム粒・ローム小ブロックを全体に含む。
- 黒層10YK3/1 臥床。YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。踏み固められてしまっている。14'は土質同じだが、しまりや弱い。
- YP主体でローム粒・ロームブロック、黒褐色土の混土。しまり強い。
- \* P 7 は 9 層。P 13・16 は 13 層。

掘り方図

0 1:100 2m



第114図 26号住居(2)および出土遺物

掘り方は全体に浅く、下層はAs-YP主体の埋没土で住居粗掘り時の残土をそのまま埋戻している。

**壁溝**：長辺側の両壁下に見られるが、どちらも住居隅直前で途切れている。幅8cm前後、深さ3cm前後の小規模な施設である。

**ピット**：主柱穴(P1~4)はいずれも90cmを越える深度がある。台形状の住居釜みに沿ってP1~4間とP3~4間が広がっている。土層断面に柱痕が観察できるのはP1のみである。壁柱穴らしいP7は壁際から若干離れている。西隅以外の各隅壁直下にP6・9・12がある。入口ピットは傾斜する形状からP10・11を想定したいが、東側に大きく偏っているうえ規模も異なり、明確でない。炉奥の位置にP5があるが、他の壁際ピットと近似した規模である。掘り方調査時に確認できたピットのうち、P14・15は壁柱穴の位置にある。他にも掘り方面には深度のあるピットがあったが、先出住居を想定できるよう

な規則的配置は認められなかった。

**炉**：P1・P4・南西壁の中間にある。径86×80cmの円形を呈し、住居中央側の縁に枕石を据えている。炉上面は焼土や炭化物粒が多量に堆積していた。

**その他**：縄文時代前期27号住居と弥生時代中期28号住居に後出する。

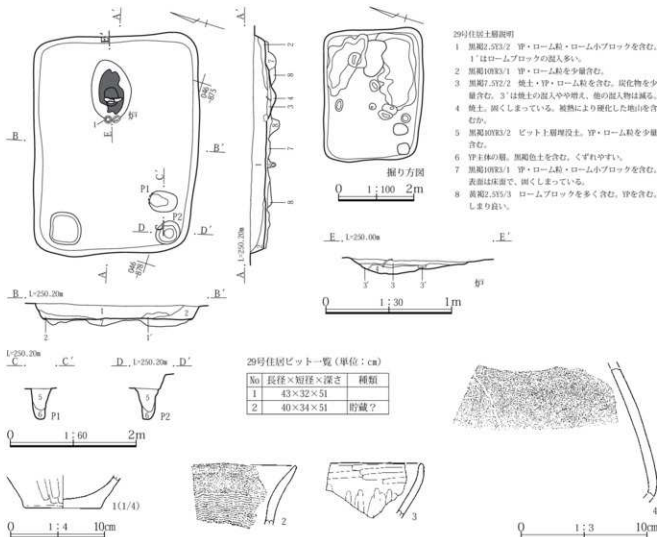
**遺物**：出土遺物は少なく、北東側に集中している。土器9点と石器1点を図示した。壺1・台付甕3・鉢4が壁寄り床直上出土の本住居に確実に伴う遺物である。P9内の壺7以外は住居埋没土中の出土である。

**所見**：出土遺物から弥生時代後期新段階の所産である。

**29号住居** (第115図 PL.20-5~8, 75 遺物観察表343頁)

**位置**：X=045~048, Y=-874~-878グリッドにある。

**規模形状**：長軸3.45m、短軸東側で2.65mの長方形を呈す極小型住居である。西辺が東辺より25cm短く、台形状



第115図 29号住居および出土遺物

にやや歪んでいる。

**埋没土・壁**：人為的埋戻しの痕跡は観察できない。浅い住居で壁高は最も深い北・西辺で29cmである。

**方位**：N-73° E。 **面積**：7.62㎡

**床面**：ほぼ水平だが、炉付近のみ他より2～3cm低くなっている。北西隅に深さ5cm前後の不明瞭な窪みがある。貼床は確認できない。掘り方は東側が深くなる傾向があった。深さ10cm前後のピット状の窪みも多く見られた。ロームブロック混じりの埋戻し土が踏み固められている。

**ピット**：柱穴と判断できる規則的な配置のピットはない。南西隅にあるP2が配置より貯蔵穴と考えられる。

**炉**：東寄りにある。径98×63cmの楕円形で、深さ14cmを測る。住居規模に比べ炉の大きさが際立っている。西脇に長径13cmの円礫が置かれているが、枕石としては小振りである。炉中央付近中層には燧燧部片が据えるように出土しているが、このような様子は枕石のない1号住居炉1にも見られた。

**その他**：壁溝は見られない。

**遺物**：出土遺物はきわめて少なく、破片4点を図示してきたのみである。壺1が炉西脇の礫と並んで床直上の高

さから出土した以外は埋没土内の遺物である。

**所見**：出土遺物は弥生時代後期古段階の所産である。

**30号住居**(第116・117図 PL.21-1・2、75 遺物観察表343頁)

**位置**：X=042～045、Y=-867～-870グリッドにある。

**規模形状**：長軸3.1m、短軸2.6mの長方形を呈す極小型の住居である。北片が南辺より30cm短く台形気味に歪んでいる。弥生時代後期の住居内では長軸長と短軸長の比が33・70号住居に次ぐ太形住居である。

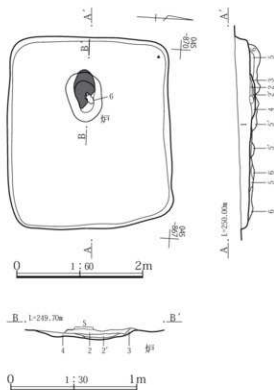
**埋没土・壁**：ほぼ単層で埋没経過は推測できない。浅い住居で壁高は最も深い西辺でも22cmである。

**方位**：N-86° E。 **面積**：6.86㎡

**床面**：住居中央付近が窪み、壁際から5～7cmの比高差がある。掘り方は浅く、ローム粒混じりの褐色土を踏み固めた、厚みが不揃いな貼床が部分的に見られる。

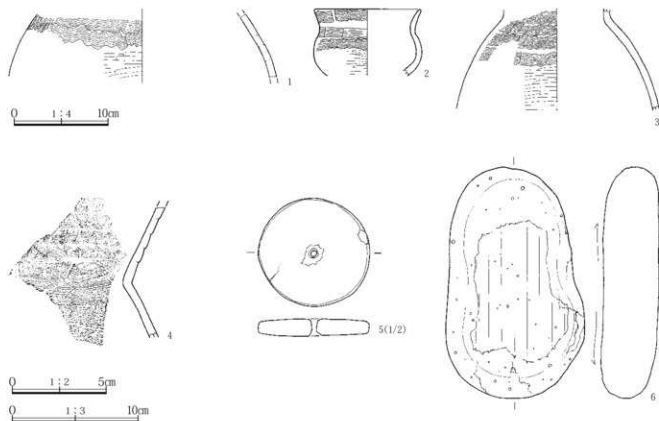
**ピット**：床面調査段階でピット類の確認はなかった。掘り方調査で深さ10cm未満の不明瞭な窪みを確認したが、主柱穴や入口ピットを想定できる施設はなかった。

**炉**：西寄りにあり、他の極小型住居である25・29号住居と異なっている。径82×52cmの楕円形を呈し、深さ7cmを測る。中央上面に枕石の位置から動かされた可能性の



30号住居土層説明

- 1 黒層10R3/2 炉・ローム粒・ローム小ブロックを少量含む。ややしまり強い。
- 2 黒層10R2/2 焼土ブロック・ローム粒・炉を全体に含む。炭化物粒散在。しまりあり。形性なし。2'は炭人物少ない。
- 3 灰層7.5R4/2 焼土ブロック・焼土粒を多く含む。炭化物粒は散在。
- 4 黒層10R2/3 焼土・炭化物・灰を少量含む。
- 5 褐色10R4/1 貼床。炉・ローム粒を含む。固くしまっている。5'はロームブロックを含む。黄色味をおびる。しまり強い。
- 6 黄灰色土・ロームブロックの混入。炉を少量含む。しまりあり。



第117図 30号住居出土遺物

ある平坦な礫が置かれている。

**その他**：壁溝・貯蔵穴等の施設は確認できない。

**遺物**：土器4点と石器2点を図示した。土器はすべて埋没土内の出土で完形近くに復元できたものがなかった。石製品では砥石6が坑内の出土で杖石だった可能性がある。完形の石製紡輪5が埋没土内より出土している。

**所見**：出土遺物から弥生時代後期中段階。

**31号住居**(第118・119図 PL.21-3-6、75 遺物観察表343FD)

**位置**：X=051~057、Y=-842~-848グリッドにある。

**規模形状**：長軸5.9m、短軸4.3mの長方形で、北東・南西両隅が鈍角に開く平行四辺形を呈している。

**埋没土・壁**：底面直上に平坦でしまりのある層(6層)が見られる。如や柱穴を覆っていることからこの層が住居の生活面に伴う床面でないことは確認できるが、住居廃絶間際に何等かの作業によって踏み固められた二次的床面の可能性があろう。壁高は全体で50cm以上、最も深い西辺で57cmを測る。

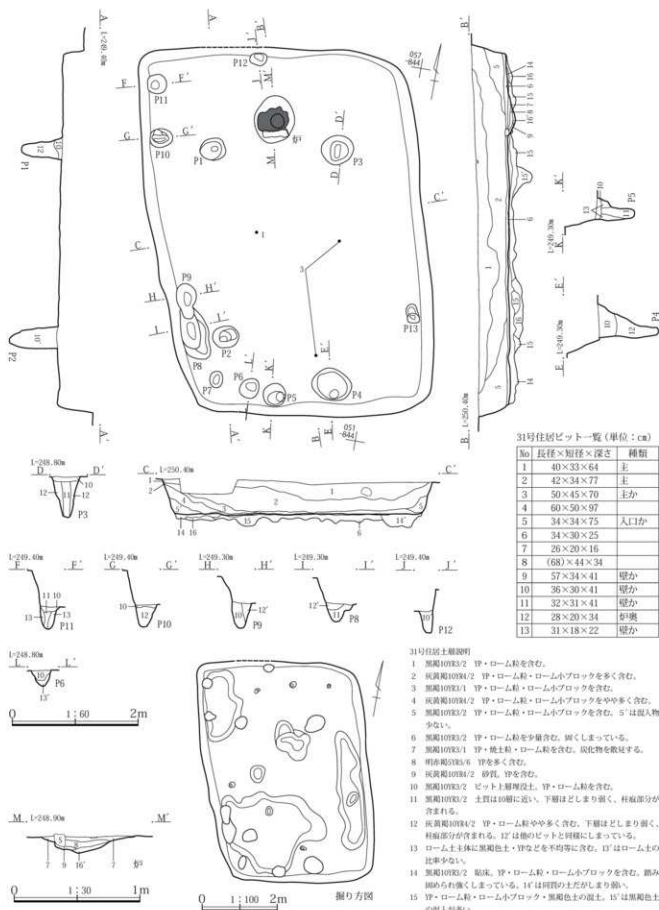
**方位**：N-14° W。 **面積**：21.25㎡

**床面**：南側へ低く緩やかに傾斜し、北側と6cm前後の比高差がある。掘り方は東西両壁下に帯状に長い部分があ

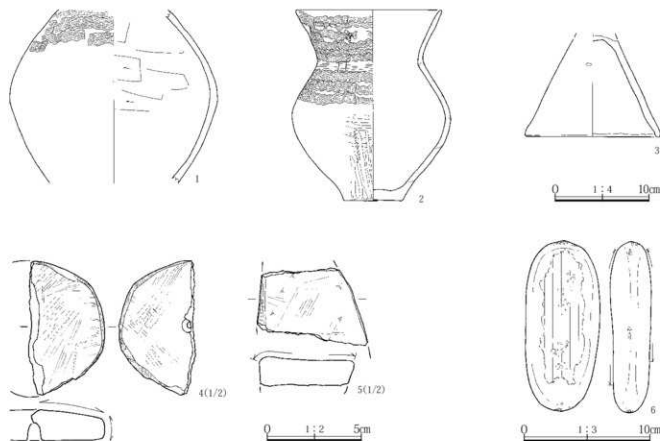
るが規則性はなく、深度は20cm未満である。ローム土混じりの黒色土を強く踏み固めた貼床がほぼ全域に見られる。貼り床の厚さは一律でなく、南・西両壁下で厚いが住居中央付近ではごく薄い。

**ピット**：P1・2は4主柱穴配置の西側2本の位置にあり、規模も主柱穴として遜色なく、P3には断面に柱痕が確認できる。主柱穴と思われるP2は住居の歪みに逆行するように、南西側の西壁に寄っている。長方形を形成する4主柱穴配置のうち南東側にあるはずの柱穴が見えない。南壁下のP4は本住居のピット中最も深く、傾斜も入口ピットとは逆方向で開口部が住居中央にある。ただしP4・5は入口ピットの配置に近い壁際に並んでいる。深度に注目すればP4が台形に歪む変則配置の4主柱穴となる可能性もあり、どちらかに断定する根拠を持ってなかった。西側には壁柱穴の可能性のある3本のピット(P9~11)があるが規則的配置ではない。南壁に接するP5は断面に柱痕が確認できる。如奥のP12は北壁中央より西に偏っている。全体に東壁下に隙間が目立つ配置となっている。

**如**：P1・P3間のやや北寄りにある。径75×64cmの楕円形で、深さ13cmを測る。南側に杖石を据えている。



第1188図 31号住居



第119図 31号住居出土遺物

**その他**：弥生時代後期の33号住居に後出する。壁溝は見えない。

**遺物**：土器3点と石器3点を図示した。壺1と高杯3が住居中央付近だがほぼ床直上から出土しており、本住居に確実に伴う遺物と考えたい。埋没土出土だが穿孔中に割れたと思われる石製紡輪未製品4が目される。

**所見**：弥生時代後期新段階。

**33号住居** (第120図 PL.21-7・8、76 遺物観察表344頁)

南東隅が後出する31号住居に切れ、全容を把握できていない。

**位置**：X=056～059、Y=-844～-847グリッドにある。

**規模形状**：軸長3.1m前後の正方形に近い形状で、弥生時代の住居では本遺跡内の唯一例である。西壁両隅の丸みが高く、不整である。

**埋没土・壁**：埋没土に人為的埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は残存する三辺とも40cm前後である。

**方位**：N-21° E。面積：残存(8.27)㎡

**床面**：北側へ低く若干傾斜しており、南隅と3cm前後の比高差がある。ローム土混じりの黒色土を踏み固めた層

厚7cm前後の貼床が見られる。掘り方埋没土も貼床構築土に類似している。

**ピット**：床面で柱穴は確認できない。掘り方調査時に北西隅付近で床面からの深さ40cmのP1を確認したが、対になるピットがなく柱穴になるか不明である。

**竈**：住居中央と北壁の中間付近にある。径75×51cm、深さ11cmの楕円形プラン内に2箇所、径35cmほどの範囲に焼土堆積が見られるが、北側の焼土が後出する。

**その他**：弥生時代後期の31号住居に先出する。壁溝・貯蔵穴等は見られない。貼床下から長径113cm、短径102cmの平面楕円形、深さ105cmの床下土坑を調査した。貼床には先出する施設で、人為的な埋戻しを行っている。底面が狭く不整であるが、掘り方埋戻し土には後出するようで、本住居に伴う施設と考えたい。

**遺物**：土器3点と石器1点を図示した。土器はいずれも破片であるが台付甕3と砥石4が南寄り床直上出土、甕2が西側に散乱する床直上出土破片が接合した資料である。

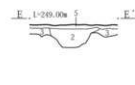
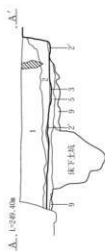
**所見**：住居の形状に本遺跡該期の類例がないが、出土遺物より弥生時代後期で矛盾はない。



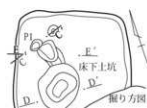
#### (4) 弥生時代後期の竪穴住居

33号住居土層説明

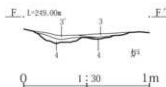
- 1 黒層10YR3/2 YP・ローム粒・ローム小ブロックやや多く含む。炭化物粒を少量含む。しまり良い。
- 2 黒層10YR3/1 YP・ローム粒を少量含む。しまり良い。2'はやや黒褐色をおびる。
- 3 黒層10YR3/2 が上面埋没土。YP・ローム粒・焼土粒を含む。炭化物が多く混じる。3'は焼土ブロックを含む。しまりあり。
- 4 赤層10YR4/9 砂の夾層部分。焼土ブロックにIP粒・黒褐色土等が混じる。
- 5 黒層10YR3/2 陥床。YP・ローム粒・ローム小ブロックを不均等に含む。上面は踏み固められ、しまっている。
- 6 黒層10YR3/3 床下土坑上積埋没土。YP・ローム粒を含む。6'はローム粒多い。ローム小ブロックも混じる。
- 7 におい・黒層10YR4/3 ローム土主体。YP・黒褐色土を含む。
- 8 黒層10YR4/1 粘質土。YP・ローム粒を含む。
- 9 黒層10YR2/3 掘り方埋没した。陥床部分と土質は似ている。YP・ローム粒全体を含む。しまり強い。



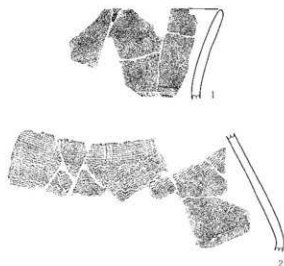
0 1:60 2m



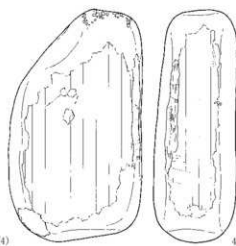
0 1:100 2m



0 1:30 1m

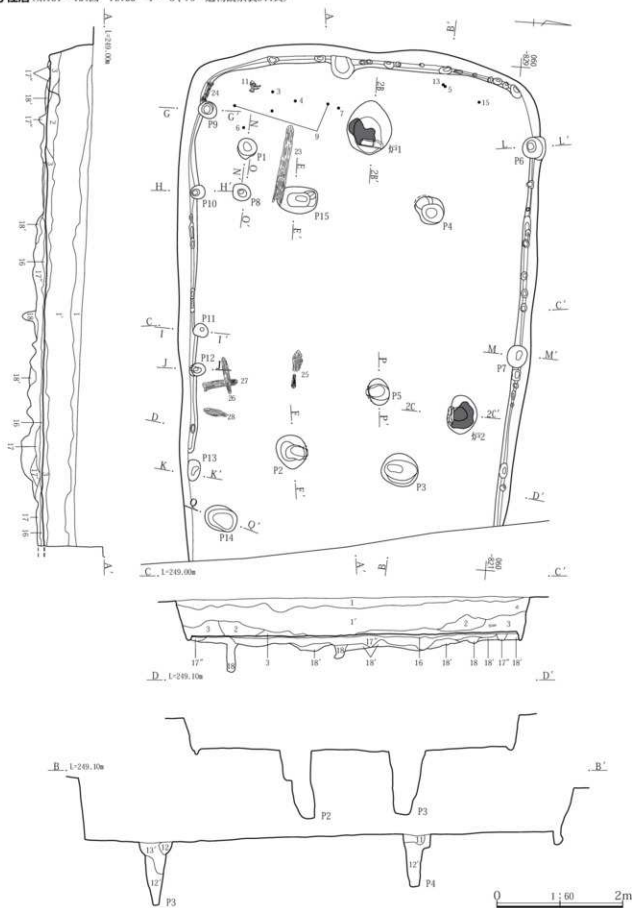


0 1:4 10cm



0 1:3 10cm

第120図 33号住居および出土遺物



第121図 35号住居(1)

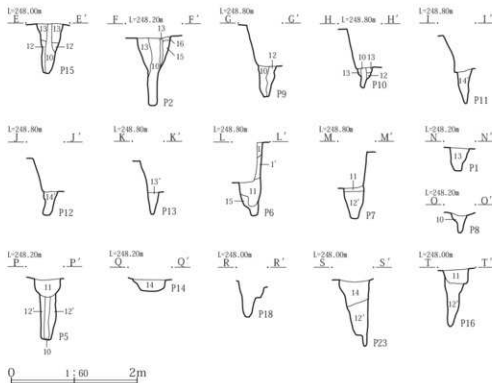
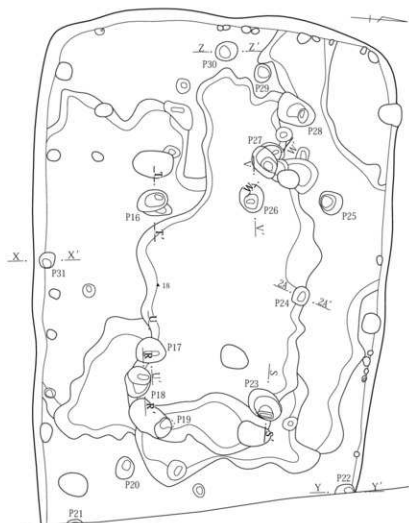
## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

35号住居土層説明

- 1 黒期10Y3/1 YP・ローム粒を少量含む。1'はローム粒や多い。
- 2 灰黒期10Y4/2 YP・ローム粒をやや多く含む。
- 3 黒期10Y2/1 炭化物・炭化材の小片を含む。YP・ローム粒少量含む。
- 4 黒期10Y3/2 砂層位上。ローム粒・炭化物・焼土粒等を含む。
- 5 黒期2.Y3/2 焼土粒をやや多く含む。YP・ローム粒・炭化物を含む。5'は焼土の混入増す。
- 6 黒期10Y2/3 焼土粒を全体に多く含む。YP・ローム粒・炭化物が混入する。
- 7 黒期2.Y3/1 YP・炭化物を含む。焼土を含まない。砂の外層。
- 8 赤期3YR4/8 焼土ブロックにYP・炭化物粒が混入。焼土は焼熱硬化が顕著。
- 9 暗期10Y3/4 YPを含む。炭化物・焼土を含まない。
- 10 黒期2.Y3/1 柱痕。YP・ローム粒・炭化物を含む。下層ほどしり強く、柔らかい。
- 11 黒期2.Y3/1 YP・ローム粒等を含む。しりややある。11'はローム粒の混入多く、ロームブロックを含むものあり。11''はロームブロックの混入多い。
- 12 YP・ローム粒・黒期色土の混入。12'は下層でしりや欠く。
- 13 暗灰黄2.0Y4/2 YP・ローム粒をやや多く含む。13'はしりや強い。
- 14 暗期10Y3/3 ロームブロック・YPが全体に混入。しりやあり。14'は砂粒。14''はしりやや弱い。
- 15 赤・黄褐色10Y7/4 ローム土主体。YP・暗期色土を不均等に含む。
- 16 暗期10Y3/3 灰土。YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。踏み固められてしまっている。
- 17 黒期10Y3/2 YP・ローム粒・ローム小ブロックを含む。17'は炭化物粒を含む。17''にも少量見られる。
- 18 YP・ローム粒・ロームブロック・黒期色土の混入でしりやあり。18'はYPが多い。

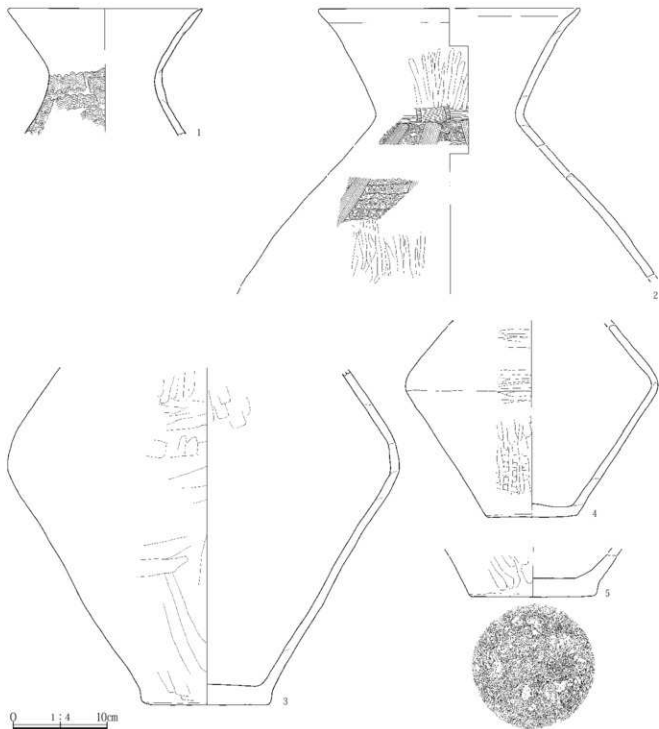
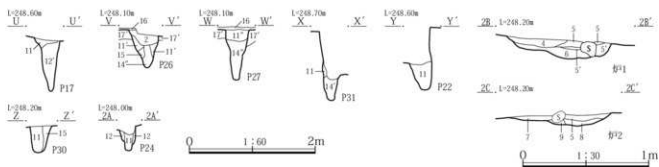
35号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	34×30×39	
2	53×47×109	主
3	59×54×102	主
4	48×42×84	主
5	43×32×100	
6	38×34×55	壁
7	36×31×48	壁
8	28×28×43	
9	30×26×51	壁
10	33×32×34	壁
11	24×24×37	壁
12	26×20×37	壁
13	34×20×38	壁
14	54×40×20	
15	(64)×(43)×(110)	主
16	(50)×(34)×(120)	主(古)
17	(46)×(40)×(100)	主(古)
18	(38)×(26)×(78)	主(古)
19	(38)×(22)×(67)	
20	(35)×(28)×(41)	
21	×-×(20)	
22	×-×(43)	
23	(59)×(43)×(126)	主(古)
24	(30)×(25)×(55)	
25	(38)×(36)×(50)	
26	(44)×(38)×(76)	主(古)
27	(46)×(38)×(81)	
28	(62)×(41)×(40)	
29	(28)×(26)×(30)	
30	(37)×(30)×(43)	
31	(28)×(25)×(49)	



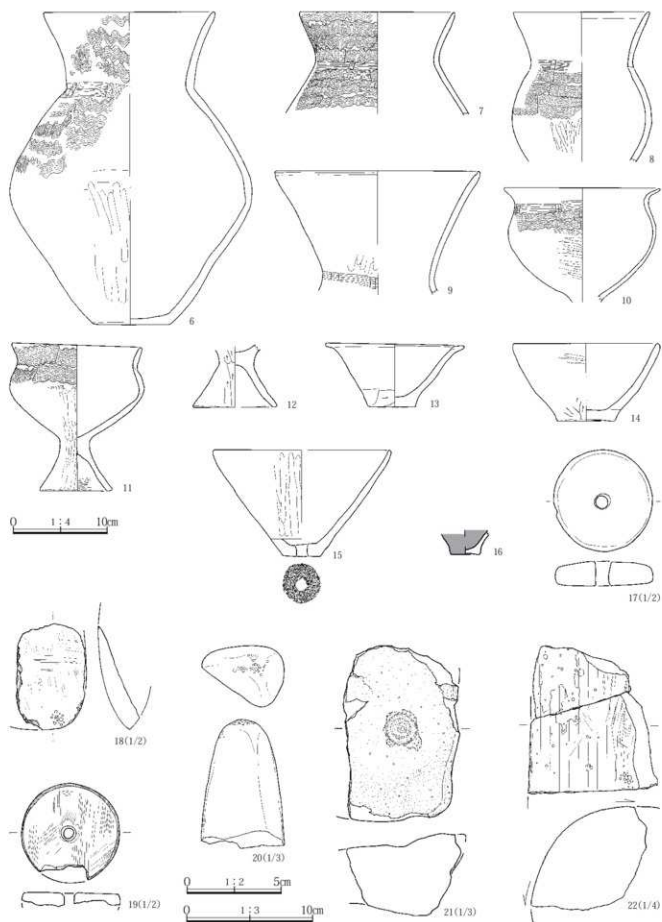
第122図 35号住居(2)

第二章 発掘調査の記録



第123図 35号住居(3)および出土遺物(1)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居



第124図 35号住居出土遺物(2)

東隅は調査区境にかりり掘られていない。焼失住居で炭化材が南側中心に見られる。

**位置**：X=054～060、Y=-820～-829グリッドにある。

**規模形状**：長軸8.2m以上、短軸5.7mで東西に長軸方向のある住居では本遺跡最大規模になる。東辺が西辺より40cm以上短くなりそうで台形状に歪むと思われる。

**埋没土・壁**：炭化材混じりの層が床上に水平に近い堆積をしている。壁高は最も深い西辺で66cmを測る。

**方位**：N-88° E。 **面積**：残存(39.81)㎡

**床面**：東側へ低く傾斜していて、西壁直下から12～16cmの比高差がある。暗褐色土を踏み固めた薄い貼床がほぼ全域に見られる。掘り方は不規則だが、住居中央付近がやや深くなる傾向がある。

**壁溝**：調査できた範囲では幅10cm前後の壁溝が南辺東隅と北西隅を除いて巡っている。深さ3cm前後の浅い部分が多いが、部分的に6～9cmの深い所がある。壁溝内の広い範囲に溝底からの深さ2～8cm(3cm前後が主体)の微細なピットが多数見られる。

**ピット**：4主柱穴のうち南西側にあるP15は掘り方調査時に確認した施設だが、配置から床面レベルの施設と判断した。P15・2～4の主柱穴となる。壁柱穴は南辺にのP9・11と北辺のP6・7が規模・配置から対になる施設と考えるが、P10・12・13など単独の壁柱穴も多い。掘り方調査時に確認したP16・26は床面レベルの西側主柱穴配置内側に並んでおり、先出する主柱穴と思われる。これと対になる東側柱穴が明確でないが、P17・18・23などが主柱穴を構成すると思われる。深さからP17・23が主柱穴的だが、配置はかかなり逸れてしまう。上面住居より小型の住居が存在した可能性があるが、掘り方からその痕跡を推定することはできなかった。

**か**：P15・P4・北壁下の中間にか1がある。径86×71cmの楕円形を呈し、深さ19cmを測る。東側に幅太の枕石を据えている。か2はP3の北西側で、北壁に近接した位置にある。径61×48cmの楕円形を呈し、深さは13cmを測る。か1より小振りな枕石を南側に据えている。

**遺物**：出土遺物は豊富で土器類17点と石器5点を図示した。か1のある西壁直下で集中して出土している甕7・9・台付甕11・鉢13が床直上出土の本住居に確実に伴う遺物である。壁下から70cm前後離れた壺4、甕6は床面から7cm以内の高さ、壁下から30cm前後離れた壺5・有

孔鉢15は10cm以上高いことから、住居埋没の早い段階で西壁側から混入した遺物と考えたい。石器は砥石20がP3内、磨製石斧18が掘り方内から出土している。なお、壺2～4・甕6・7は南側にある43号住居出土破片が接合しており、弥生時代に多量の土砂移動が行われたことが想定される。

**所見**：出土遺物から弥生時代後期古段階。

#### 40号住居(第125図 PL.22-6・7)

弥生時代後期の21号住居床下にそっくり含まれていた住居で、同住居の掘り方調査時に確認した。

**位置**：X=053～058、Y=-857～-861グリッドにある。

**規模形状**：確認できた範囲は掘り方プランの可能性があり住居本体の規模は明瞭ではないが、長軸3.5m、短軸2.55mの長方形を呈す。東辺が西辺よりやや短く、四隅の丸みが強くて形状は整っていない。

**埋没土・壁**：21号住居の掘り方埋没土と区別ができず、確実に本住居の埋没土と想定できる土層の観察がない。壁も掘り方の立ち上がり部分しか認められない。

**方位**：N-19° W。 **面積**：推定(14.91)㎡

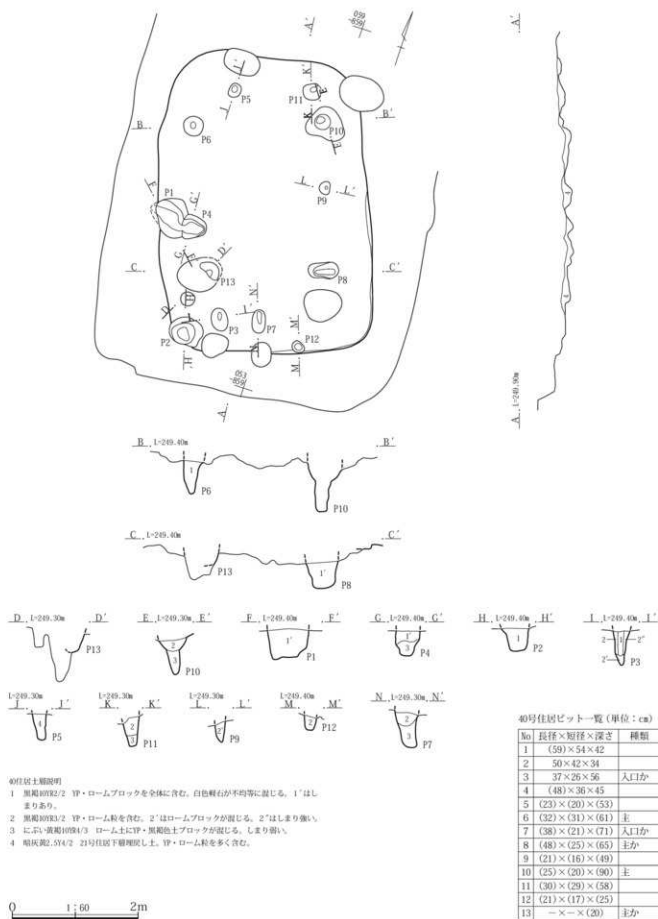
**床面**：南東隅付近の一部で部分的に確認できるようだが、明瞭ではない。後出する21号住居の掘り方が本住居の埋没土をきらい、掘り窪めた可能性がある。

**ピット**：21号住居床下段階の確認だが、P6・13・8・10による4主柱穴と考えたい。P3・7は後出する21号住居の入口ピット北側に並ぶような位置にあるが、同住居南辺には沿っておらず、本住居に伴う入り口ピットとなる可能性が高い。P3土層断面には柱痕が明瞭である。他のピットは確実に本住居に伴うと確認する根拠を持たないが、21号住居確認面では把握できなかった施設である。

**その他**：か・壁溝等は確認できていない。図示に耐える遺物の出土もない。

**所見**：住居形状から弥生時代後期と思われる。後出する21号住居は軸方向が異なり、本住居の建て替えとは考えにくい。

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



## 40号住居説明

- 1 前期109R2/2 YP・ルームブロックを全体に含む。白色軽石が不均等に散じる。1'はしりあり。
- 2 前期109R3/2 YP・ルーム枠を含む。2'はルームブロックが散じる。2''はしり強い。
- 3 にこい・黄期109R4/3 ルーム土にYP・黒褐色土ブロックが散じる。しり強い。
- 4 順反黄2.5Y4/2 2号住居下層埋戻し土。YP・ルーム枠を多く含む。

第125図 40号住居

41号住居(第126図 PL.22-8)

大半を後出する31号住居に切られ不明瞭である。柱穴や $\#$ が確認できず、竪穴住居と確定できない。

**位置:** 確認できる範囲はX=053~056、Y=-847~-849グリッド内にある。

**規模形状:** 残存する長辺2.8m、短辺1.2m部分が確認できる。北辺が後出する31号住居北辺と合致しており、同住居の張出施設となることも想定し検討したが、埋没土が大きく異なり、別遺構であることには問題なさそうである。西辺南側の湾曲が大きく、かなり歪んでいて方形プランになるか確実でない。

**埋没土・壁:** 炭化物粒・焼土等の混入がなく、埋没土から住居を想定することはできない。人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。壁高は最も深い西辺で26cmを測る。

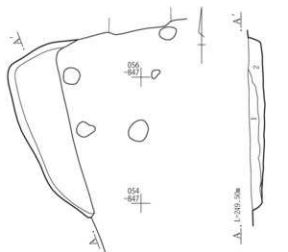
**方位:** N-23° W。

**床面:** ローム掘り込み面をそのまま床面としている。中央付近が窪む皿底状の床面で、壁際と6cm前後の比高差がある。貼床・掘り方は観察できない。

**その他:** 柱穴・ $\#$ ・壁溝等の施設は一切確認できない。

**遺物:** 図示に耐える遺物はなかった。弥生時代中期と思われる小破片が2片出土している。

**所見:** 時期を明確にする資料が得られていない。出土した弥生時代中期の破片は周辺の弥生時代後期住居からも出土しており、時期決定の資料となりえない。本住居のような小型住居は本遺跡の弥生時代中期にはなく、再葬墓より大型である。弥生時代後期の遺構と考えたい。



41号住居土層説明

- 1 前期のR3/3 ロームブロック・P・白色軽石を全体に多く含む。
- 2 前期のR2/3 ロームブロック・Pを多く含む、白色軽石が少量混入する。

0 1:60 2m

第126図 41号住居

42号住居(第127・128図 PL.23-1~4 遺物観察表345頁)

調査区北側の中央付近にあり尾状溝を伴う2軒の住居(21・22号住居)に先出する。残存状態は悪い。弥生時代後期の長軸長6mを超える中型以上の住居間重複はこれが唯一例である。焼土住居と思われる南西隅付近に細かな炭化材がまとまって出土している。東壁は残存しないが部分的に観察できる掘り方の痕跡から東辺や南東隅を想定した。

**位置:** 想定した範囲を含めると、X=049~056、Y=-859~-864グリッドにある。

**規模形状:** 長軸6.1m以上、短軸4.6mの長方形を呈すと思われる。残存範囲では隅の丸みの少ない整った形状となる。

**埋没土・壁:** 炭化物粒の混じる黒褐色土の単層で、確認できる範囲では人為的な埋戻しの痕跡は見られない。浅い

住居で壁高は最も深い西辺でも13cmである。

**方位:** N-8° E。 面積:(推定復元)26.60㎡

**床面:** 東側へ低く傾斜しており、P3周辺では北西隅付近から10~15cmの比高差がある。踏み固めはあまり強くない。浅い掘り方が全体にあるが貼床は観察できない。

**ピット:** 深さ70cm前後のピットが東西に3本ずつあり、6主柱穴(P1~6)となりそうである。中央に位置するP5・6がやや外側に逸れて配されている。

**か:** 住居中央やや西寄りに確認できる。残存部分で70×68cm、深さ18cmの円形に近い $\#$ である。焼土の混入は多く底面の被熱による赤変も明瞭である。南側に枕石と思われる礫が見られるが、 $\#$ の規模に対し小振りである。弥生時代後期住居の中で中央付近に $\#$ が確認できるのは本住居のみである。

**その他:** 9号溝および弥生時代後期の21・22号住居に先

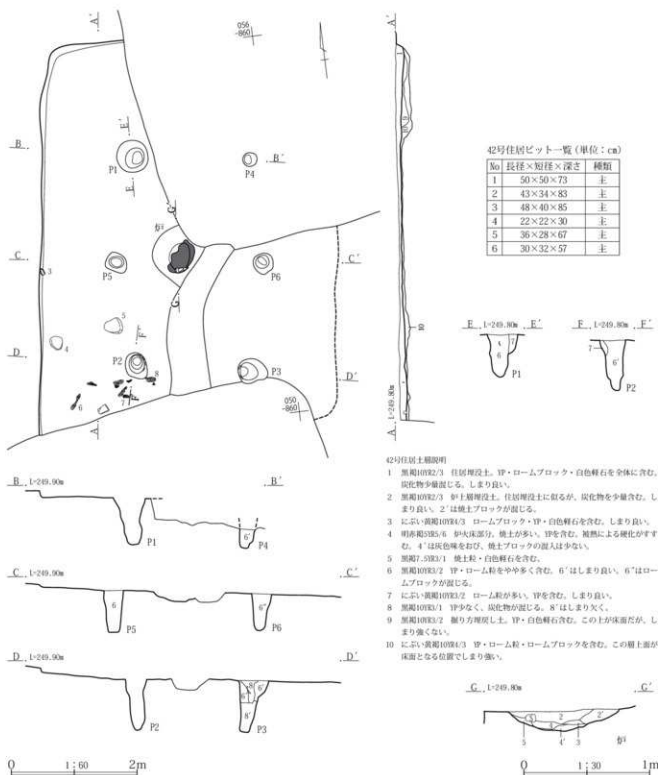


## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

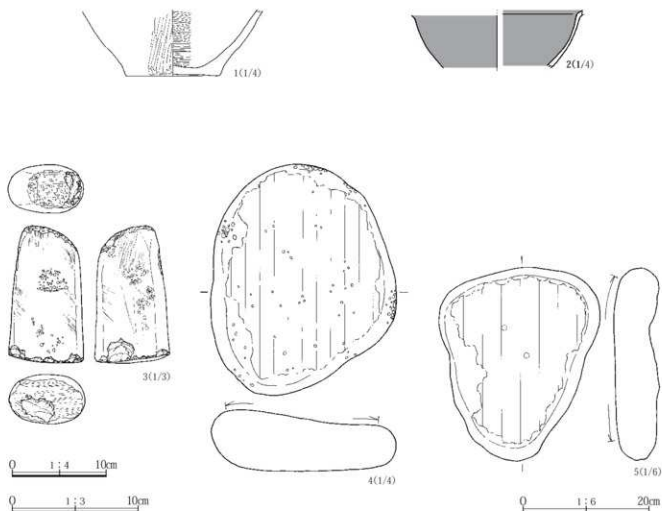
出する。壁溝・貯蔵穴・入口ピット等は確認できない。

**遺物**：土器2点は埋没土内の遺物だが、石器類が床直上から出土している。叢石3は西壁中央の壁に密着して、石皿4は西壁直下南寄り、台石5はP2とP5の間に据えられるようにして出土した。

**所見**：時期決定の遺物に乏しく、住居中央付近のP4の位置より弥生時代中期も想定した住居であるが、長軸長が短軸長の1.4倍を越す細長い長方形を呈す住居に弥生中期の住居はなく、埋没土内出土土器より弥生時代後期の住居と考えた。



第127図 42号住居



第128図 42号住居出土遺物

**43号住居** (第129～132図 PL.23-5～8,24-1・2,76・77 遺物観察表345頁)

焼失住居で炭化材が北西側を中心に見られる。

**位置**：X＝044～051、Y＝-828～-834グリッドにある。

**規模形状**：長軸7.5m、短軸5.4mの長方形を呈す。北東・南西隅がやや鈍角で、平行四辺形気味に若干歪んでいる。長辺側は外側に向かって膨らんでいる。

**埋設土・壁**：床面上に炭化物の混入の多い層が水平に近い堆積を見ている。またがを覆うようにローム土主体の層があり、下層では人為的埋戻しの痕跡が確認できる。壁は上方へ向かって開き気味となる部分が多い。壁高は最も深い北辺で56cmを測る。

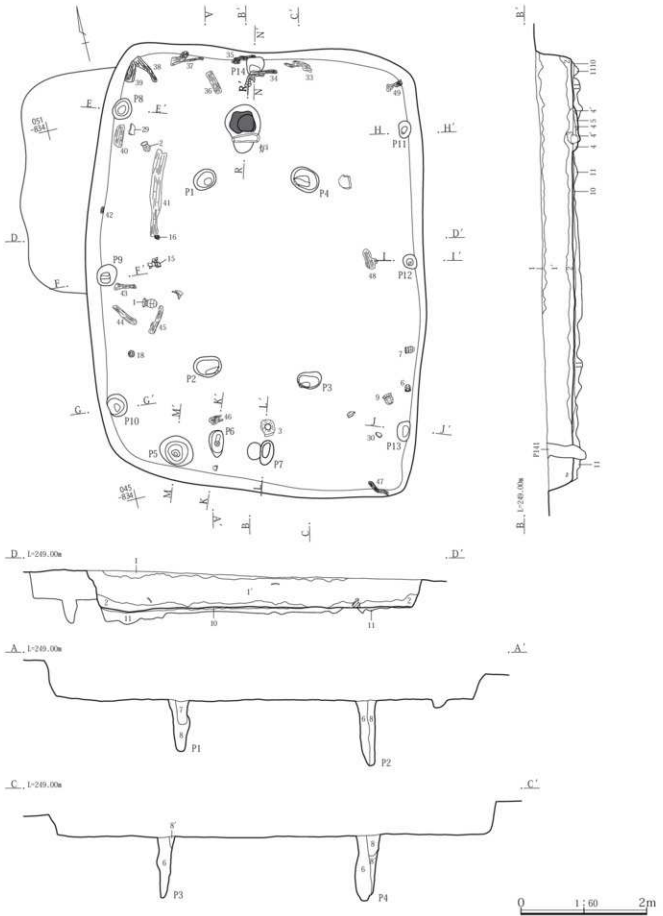
**方位**：N-18° E。 **面積**：31.77㎡

**床面**：南北両壁際が高く中央で窪み、10cm前後の比高差がある。炭化物粒混じりの暗褐色土を踏み固めた貼床をほぼ全面に施している。掘り方の窪みは不規則で、住居西側に顕著である。

**ピット**：4主柱穴(P 1～4)は住居西側に若干寄っている。比較的開口部が狭いが深いことが特徴で、P 1以外の下端形状がやや長円形気味になっている。壁柱穴は西側3本(P 8～10)と東側3本(P 11～13)が規則的に並ぶ。入口ピットP 6・7は主柱穴以上に西側に逸れ、住居長軸に沿って南北に長い。壁側へ向かって開口せず、まっすぐに立ち上がっている。入口脇ピットP 5は狭い南西隅寄りにある。底面がやや不整で、あまり貯蔵穴らしくない。が奥のP 14は北壁に食い込むようにして穿たれている。主柱穴配置に沿ってやや西側にある。

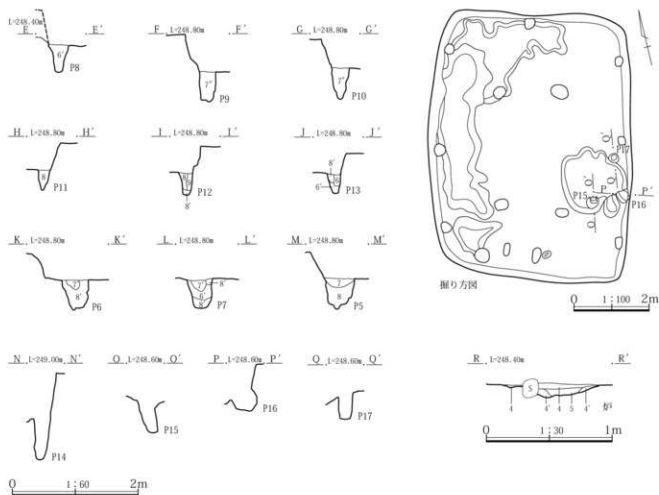
**が**：P 1・P 4・北壁の中間でやや西側に逸れた位置にある。径78×56cmの不整楕円形を呈し、深さ10cmを測る。南側に幅太の枕石を地山を削って据えている。

**その他**：弥生時代後期と思われる50号住居に後出する。本遺跡最大規模の45号住居とも北東隅付近で接している、同時存在はありえない。壁溝は見えない。



第129図 43号住居(1)

## 第2章 発掘調査の記録



43号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	38×30×80	土
2	44×33×106	土
3	40×26×101	土
4	48×35×103	土
5	56×47×52	貯蔵
6	42×24×44	土
7	40×22×44	土
8	33×27×42	壁
9	34×32×39	壁
10	36×30×49	壁
11	28×19×31	壁
12	26×23×39	壁
13	32×22×30	壁
14	(28)×(28)×(78)	
15	(32)×(30)×(69)	
16	(34)×(27)×(28)	
17	(26)×(24)×(45)	

### 43号住居土層説明

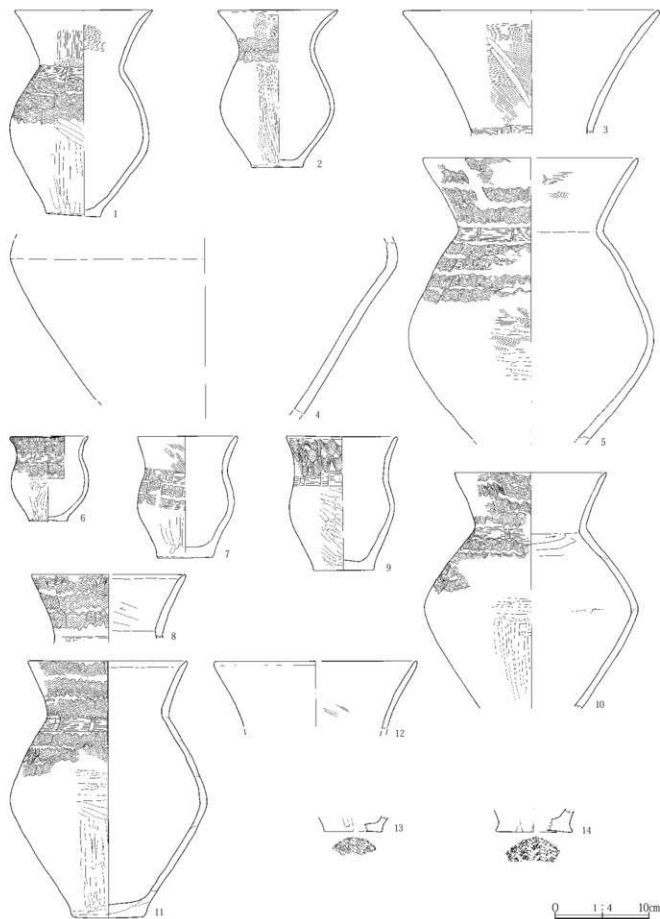
- 1 黒褐色10YR2/3 ヲ・ローム粒等の混入少ない。1'はヲ・ローム粒の混入は普通で、炭化物・焼土を散見する。
  - 2 黒褐色10YR3/2 炭化物を多量に含む。
  - 3 灰褐色10YR6/2 ヲ・ローム粒・焼土を含む。炭化物は少ない。伊土面付近に見られ、他住居にあるローム土層のブロックとは異なる。
  - 4 黒褐色7.5Y/2 焼土・炭化物・ヲ・ローム粒等を含む。4'はロームブロックが散在し、焼土・炭化物等は少ない。
  - 5 赤褐色8R4/8 中砂地帯で粘土や砂多量、白色軽石を少し含む。
  - 6 黒褐色10YR3/1 しまり強い中砂部分。ヲ・ローム粒・炭化物粒等を含む。6'は比較的しまり強い。炭化物粒は少ない。
  - 7 黒褐色10YR3/2 ヲ・ローム粒を含む。土質は6層に近いがしまり良い。7'は炭化物を含む。7''はロームブロックを含む。
  - 8 に近い黒褐色10YR3/3 ローム土の混入多い。黒褐色土ブロックを含む。8'はローム土の比率下がり、灰色味をおびる。
  - 9 黒褐色10YR4/1 柱間部分。ヲ・ローム粒・炭化物粒を含む。
  - 10 暗褐色10YR3/4 粘土。ヲ・ロームブロックを含む。白色軽石・炭化物が少し混じる。固くしまっている。
  - 11 に近い黒褐色10YR4/3 ヲ・ロームブロック・暗褐色土の混入。炭化物・白色軽石・焼土粒が少混入する。
- ※ P15は6'層、P16は7層、P17は8'層。

第130図 43号住居(2)

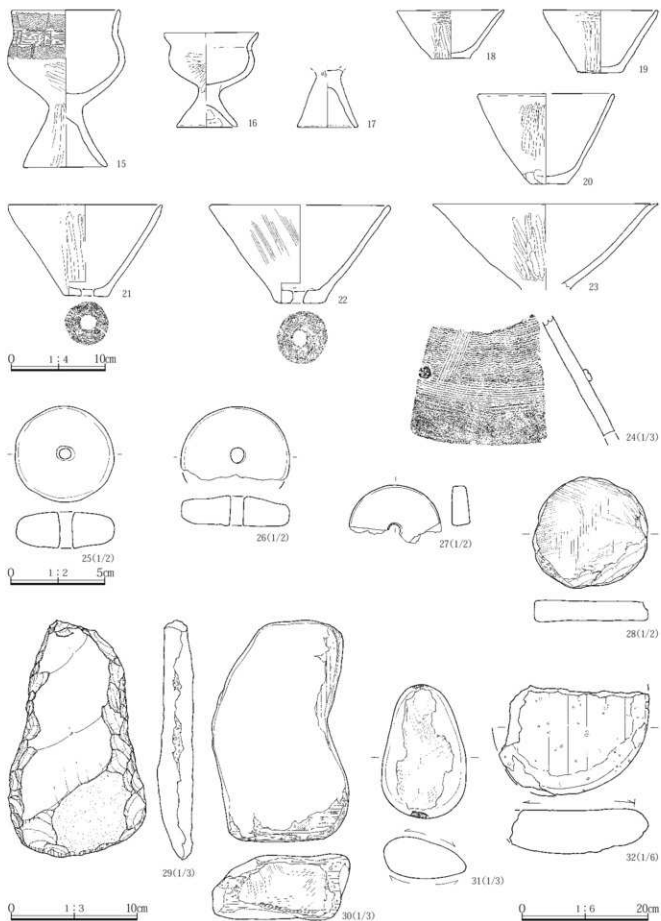
**遺物:** 多量の土器が壁寄り中心に出土し、土器・土製品27点と石器5点を図示した。完形に近い遺物の多いことが本住居の特徴である。東壁直下南寄りの小甕6、小型甕7・9、西壁直下の壺1、台付甕15・16、鉢18が床直上で出土する本住居に確実に伴う遺物である。北西隅寄

りの壺2、石鉢29は床面から18cm前後、入口ピット際の壺3は13cm浮いた状態だった。土製紡輪25～27と石製紡輪未製品28が共存することが注目されるが、すべて埋没土内の出土である。

**所見:** 出土遺物から弥生時代後期中段階。



第131図 43号住居出土遺物(1)



第132図 43号住居出土遺物(2)

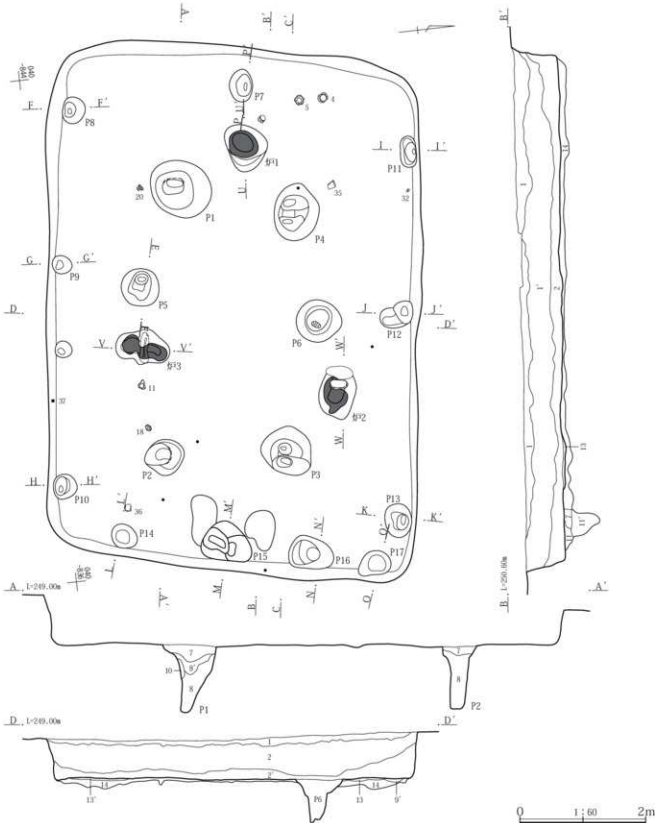
44号住居(第133~136図 PL.24-3~6, 77 遺物観察表346頁)

位置: X=039~046, Y=-835~-844グリッドにある。

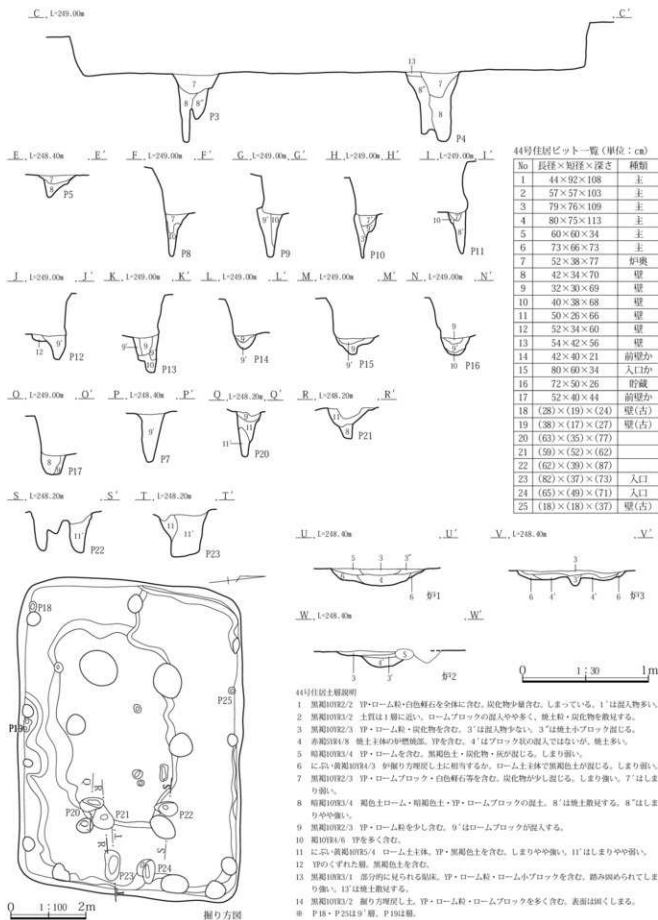
規模形状: 長軸8.3m, 短軸5.9mの長方形を呈す。北西・南東隅が鈍角に開き、平行四辺形状に歪んでいる。

埋没土・壁: 黒色土主体の埋没土で、自然堆積のようだ。壁の形状は一律でないが、上方で開き気味となる部分が多い。壁高は最も深い北辺で75cmを測る。

方位: N-83° W。 面積: 44.37㎡



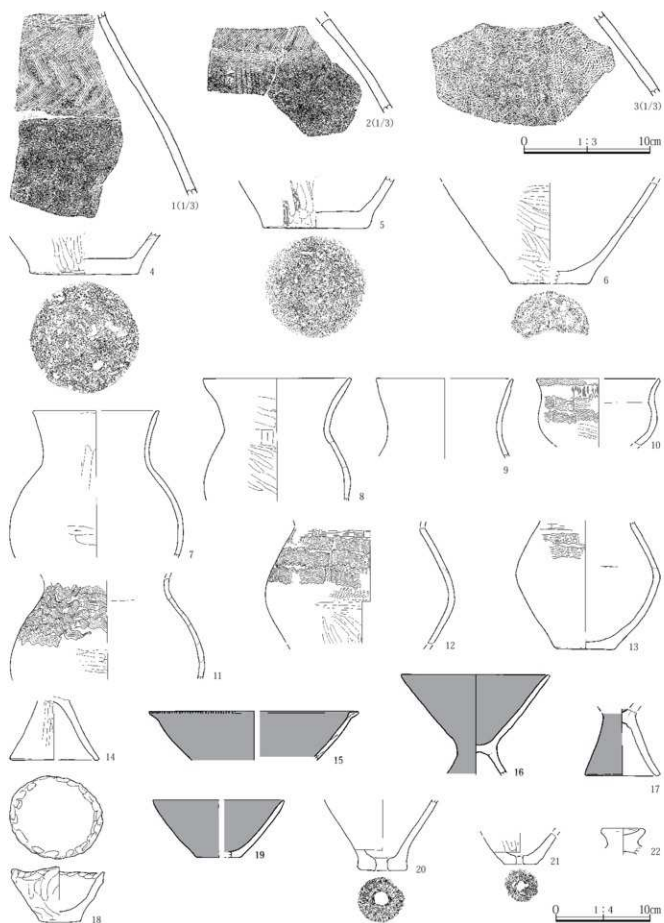
第133図 44号住居(1)



第134図 44号住居(2)

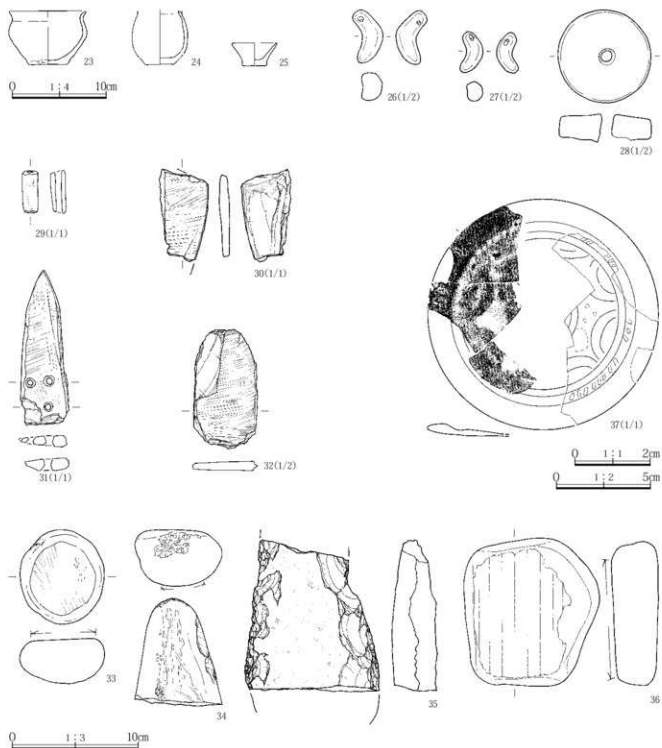


(4) 弥生時代後期の竪穴住居



第135図 44号住居出土遺物(1)

第二章 発掘調査の記録



第136図 44号住居出土遺物(2)

**床面：**波打つような凹凸があり、10cm前後の比高差を生じている。黒色土を強く踏み固めた貼床が部分的に見られる。掘り方は中央を高く残し、壁際を掘り下げる傾向が明瞭である。

**ピット：**6 支柱穴のような配置だが、中央に位置する P 5 は浅く、4 支柱穴(P 1～4)配置を基本にすると考えたい。東壁の傾きに逆行して P 3 が西寄りにあるため、

支柱穴の配置が北側の狭い台形状になっている。壁柱穴は南側に 3 本(P 8～10)、北側にも 3 本(P 11～13)並ぶが、中央の柱穴(P 9・P 12)が西側へ偏っている。入口ピットに P 15 を想定し、P 16 は入口脇ピットと考えたい。2 本対になる入口ピットにならないが、掘り方調査時に確認したピット(P 23・24)は配置から先出する入口ピットのな施設であろう。床面図(第133図)には薄線で

輪郭を記した。床下調査では先出する東側主柱穴(P20~22)や壁柱穴(P18・19・25)も確認されている。

**竪穴:** P1・P4・西壁中間より東側へ寄った位置に竪穴1がある。径74×66cmの不整楕円形を呈し、枕石が置かれていない。竪穴2はP3の北西にある。枕石を住居中央側でない西側の西側に据えた珍しい例である。竪穴3はP2の西側にある。全体の規模は径88×65cmで主柱より大きい。楕円形状を呈し焼土の分布も2箇所に分かれており、2基の竪穴が重複したのと思われる。

**その他:** 43・46号住居に近接している。同時存在は不可能であろう。壁溝は見えない。

**遺物:** 土器・土製品28点と石器・石製品8点・銅製品1点を図示した。土器の出土量は多いが、完形近くまで復元できたもの、床直上で出土したものは少ない。西壁下北寄りから壺底部2点が並ぶようにして出土した。5が床直上、4が床上5cmの高さである。P1内出土の甕8と共に本住居に確実に伴う遺物と考えたい。鉢18は床上3cmの高さでの出土だが、竪穴3東側の住居中央に近い位置の出土である。甕11が床上8cm、有孔鉢20が床上17cmと浮いた状態だった。ミニチュア土器3点23~25や土製勾玉2点26・27の他、完形の土製紡輪28等、埋没土内からの特殊遺物の出土がやや多かった。石器のうち石製品未製品32・石鎌35が床直上の出土である。土製品同様石製品にも管玉29が見られる。銅鏡破片37がやや散乱した状態で出土している。床面より30cm以上高い西壁際の出土である。他に弥生時代中期土器破片の混入もきわめて多い。

**所見:** 出土遺物より弥生時代後期新段階。埋没土内から銅鏡をはじめとする特殊遺物が出土している。住居廃絶後の祭祀、または祭祀遺物の廃棄が想定される遺構である。周辺に特殊な遺構は確認できない。本遺跡最大規模の45号住居と尾状溝のある住居中最南部にある22号住居の中間付近に位置することが立地上の特徴である。なお、銅鏡37については、本文320頁に説明を加えた。

**45号住居**(第137~147図 PL.24-7・8、25-1~6、78~82遺物観察表347頁)

調査区東側にあり、調査範囲を可能な限り広げて掘り

進めた長軸・短軸とも本遺跡最大規模の住居である。東側北寄りの壁はごく一部で上端が完掘できていないが、床面は全容を確認できた。

**位置:** X=038~051、Y=-818~-828グリッドの南東側へ低い緩やかな傾斜面にある。

**規模形状:** 長軸12.05m、短軸8.7mの長方形で、北辺が南辺より20cm広くやや歪んでいる。

**埋没土・壁:** 埋没土は地山傾斜の下側にあたる南側からの流れ込みが顕著である。住居規模に相応した深さではなく、壁高は最も深い北・西辺で65cm前後で大型住居の平均的な深度である。

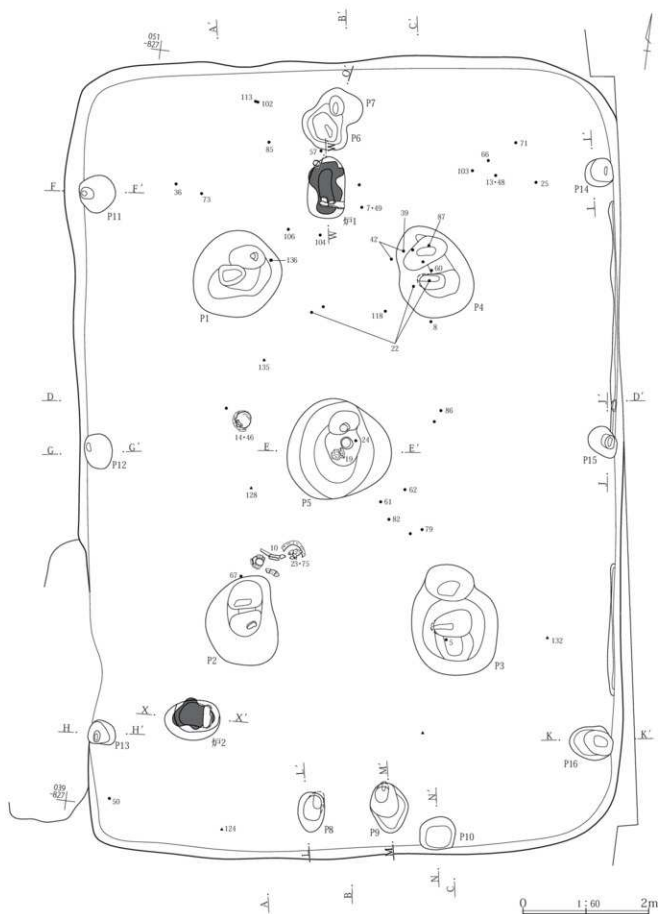
**方位:** N-8° W。 **面積:** 101.95㎡

**床面:** 傾斜はほとんどないが、比高差10cm前後の緩やかな凹凸がある。黒色土による貼床を施しているが踏み固めはあまり強くない。掘り方は中央を高く残し、壁際を掘り下げる傾向がある。特に各辺とも壁直下より20~60cm内側に掘り方の上端が見られる。掘り方底面はAs-YP層内にあり、多量の軽石を除去未了のままローム土とともに掘削土を埋戻し踏み固めている。

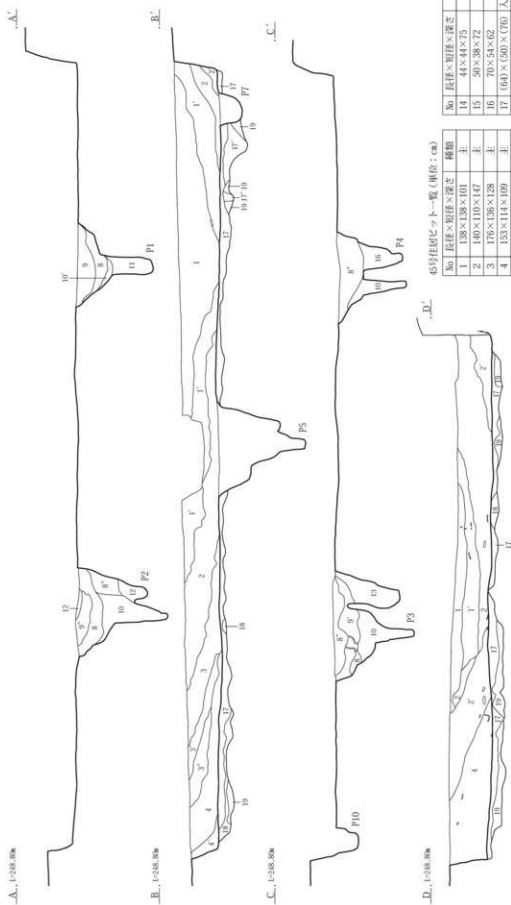
**壁溝:** 東壁下では両隅を除いて幅8cm前後、深さ4~7cmの小規模な溝が見られる。途中で途切れる部分もあり、不明瞭である。

**ピット:** 4主柱穴(P1~4)、東西3本ずつの壁柱穴(P11~16)、2本の入口ピット(P8・9)と東側にある入口脇ピットP10など、典型的なピット配置が見られる住居である。4主柱穴の中央に主柱穴と同規模のP5があるのは本遺跡では唯一例となる。大型住居大屋根を支える補助柱穴であろうか。主柱穴は規模が大きく、下端は東西に長い。いずれも建て替え痕跡が残っている。掘り方調査時に、先出する3対の入口ピット状施設(P17・20、P18・21、P19・22)を確認している。

**竪穴:** P1・P4間の北寄りに竪穴1があり、南側に枕石を据えている。径98×60cmの楕円形を呈し、深さ16cmを測る。竪穴2はP2の南側西寄りにあり、東側に枕石を据えている。径88×68cmの楕円形を呈し、深さ15cmを測る。主柱・脇柱の規模が近似している。住居の大きさに相応しない標準的な竪穴の規模であり、これ以外の竪穴の痕跡は掘り方調査でも確認できなかった。



第137図 45号住居(1)



45号住居ピット一概(単位: cm)

No.	長さ×距径×深さ	種別
14	44×44×75	壁
15	50×38×72	壁
16	70×54×62	壁
17	(64)×(50)×(70)	入口(H)
18	(80)×(56)×(101)	入口(H)
19	(90)×(28)×(55)	入口(H)
20	(20)×—×(39)	入口(H)
21	(80)×(75)×(110)	入口(H)
22	(52)×(34)×(43)	入口(H)
23	(41)×(28)×(61)	
24	(25)×(25)×(58)	
25	(32)×(31)×(71)	
26	(44)×(30)×(54)	

No.	長さ×距径×深さ	種別
1	138×138×101	主
2	140×110×147	主
3	176×136×128	主
4	153×114×109	主
5	166×100×137	礎
6	80×54×88	貯蔵
7	—×—×83	
8	64×44×97	入口
9	68×56×91	入口
10	56×52×42	貯蔵
11	58×58×52	壁
12	54×44×71	壁
13	44×38×59	壁

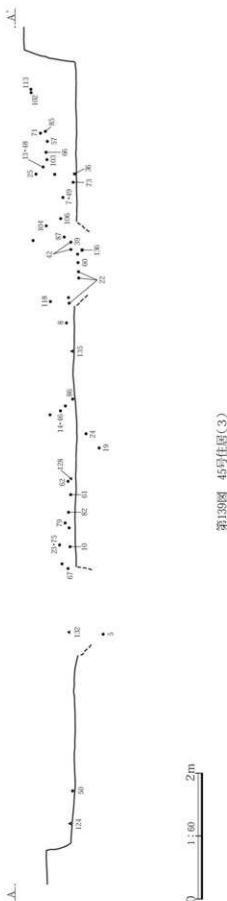
0 1:60 2m

**その他：**主柱穴の位置をそのままに、入口ピットの作り替えの痕跡が顕著である。43号土坑と重複する。重複住居はないが43・47・48号住居は同時存在が難しい位置に近接している。

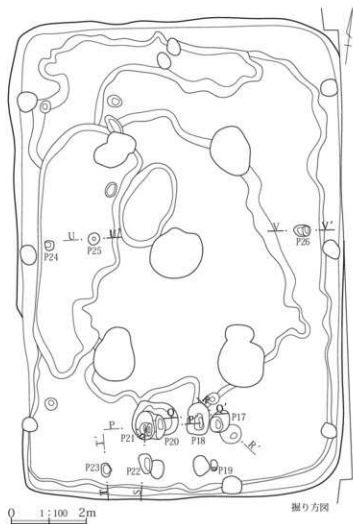
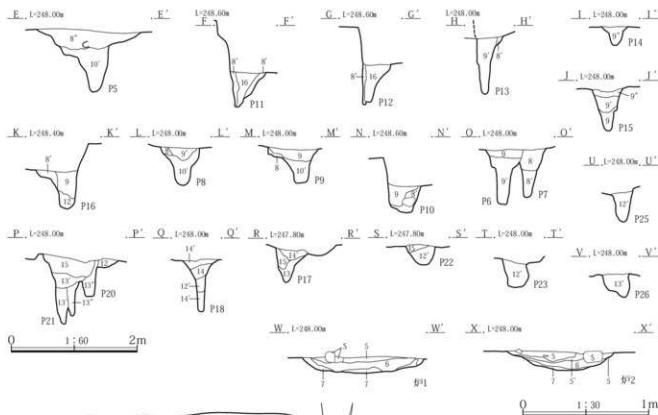
**遺物：**広い住居内の全域に広がるように膨大な量の遺物を出土しているが、完形近くまで復元できたものは多くない。土器・土製品119点と石器・石製品16点・鉄器1点を図示した。柱穴中から糞類の出土がありP3内床下32cmから壺5、P5内床下27cmの糞19、同床下14cmの糞24が当たる。床直上出土遺物では南西隅壁直下の小型糞50・北西隅寄りの糞36と少ない。糞22はP4内床下3cm前後の破片と周辺の床上7cmの高さの破片が接合したもので、住居廃絶後の柱穴の窪みに破片が散ったような出土状態である。それ以外は北側から流れ込むような状態で、北壁直下の蓋102・土製紡輪113は床上48cmの高さ、北東隅の壺13、糞25・48、高坏66・台付糞71、ミニチュア土器103および北辺寄りの台付糞57・鉢85は床上30cm以上の高さで出土した。住居中央付近では床上3～15cmの高さでの出土遺物が多く、壺10・14、糞23・46、台付糞61・62、高坏82・鉢86等が当たる。石器には磨製石斧124・砥石135等床直上出土遺物がある。鉄鎌136はP1内東縁部床下6cmの出土である。

埋没土内出土のミニチュア土器は103～110の8点あり、匙111・112、土製勾玉118・119などの特殊遺物が見られる。土製円板116・117と共に中央に穿孔途中の土製円板115が出土している。石鎌121・122は縄文時代の遺物であるが、本住居には前記鉄鎌と磨製石鎌120が出土しており、多様な鎌が混在していることが疑問であり、住居内遺物として掲載した。

**所見：**出土遺物より弥生時代後期新段階。入口ピットの作り替えや掘り方上端の位置より、本住居に先出する若干小型の住居から最終段階へ拡張を行っていると思われる。特に入口ピットの作り替えは3回以上行っている。先出住居は下端でも長軸11.7mの規模があり、当初から本遺跡内で最大規模の住居であった。西側8mに隣接する44号住居同様、埋没土からの特殊遺物の出土がきわめて多く、住居廃絶後の祭祀、または祭祀遺物の一括廃棄が想定される遺構である。



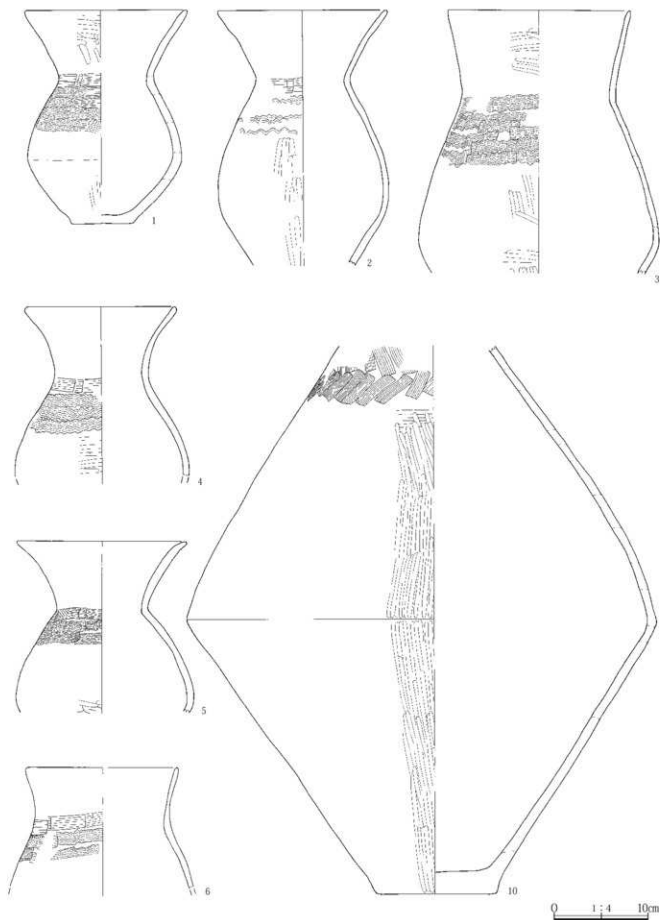
## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



## 45号住居土層説明

- 1 黒周10922/2 YP・ローム粒・白色軽石を全体に含む。1'は炭化物が混じる。
- 2 黒周10922/2 径3cm以上のロームブロックを多く含む。白色軽石・炭化物が混じる。2'は白色軽石少なく、炭化物は見られない。
- 3 黒周10922/2 YPを多く含む。硬塊状のローム土が混じる。しまっている。3'はロームブロックが径5-10cmの粗も大きい。3''はローム土の混入が減る。
- 4 黒周10922/3 YP・ロームブロックを含む。炭化物・焼土粒が少量混じる。4'は混入物少なく、黒色味増す。
- 5 黒周色10931/1 砂土層埋没土。ローム粒・YP・焼土・炭化物を含む。5'は黒周色土ブロックを含む。炭化物が強い。
- 6 赤周518/8 砂礫層部で焼土主体。YP・黒周色土を含む。
- 7 黒周10922/3 ローム粒・炭・焼土粒・炭化物を含む。ボソボソしている。しまりやや弱い。
- 8 灰周黒10934/2 ロームブロック・ローム粒等の混入物多い。8'は土質同じだが混入物少なく、ロームブロックを含まない。8''には焼土や炭化物を含む。
- 9 黒周10932/2 YP・ロームブロック・ローム粒をやや多く含む。しまり強い。9'は混入物やや少ない。9''はごく少ない。
- 10 YP・ローム粒・炭周黒色土の混入。しまり強くボソボソしている。粗ねやすい。柱廻り10'は土質同じだがしまりやや強い。
- 11 主に黒周10925/3 P1のみで見られる層で柱廻り。YP・ローム粒・黒周色土粒を多く含む。しまり強い。
- 12 褐色ローム主体10934/4の塊状土。12'はしまり強い。
- 13 黒周10932/2 YP・ローム粒・ローム小ブロック・炭化物を多く含む。P4では柱廻り13'以降では炭化物見られない。しまり強い。13''は特にしまり強い。
- 14 黒周10932/2 しまり強い層。YP・ローム粒・ロームブロックをやや多く含む。14'は混入物少ない。
- 15 黒周10922/2 土質は14'層に近いが。しまりやや強い。
- 16 灰周黒10931/2 YP・ローム粒を多く含む。下層ほどしまり強い。柱廻りと思われる。
- 17 黒周10933/1 陥土と思われる。YP・ローム粒・ロームブロックを含む。固くしまっている。17'は土質同じだがしまりやや弱い。
- 18 ロームブロック主体の層。黒周色土・YPを含む。
- 19 YP土層の層。黒周色土・ローム粒を含む。
- ※ P19は13層、P24は12'層。

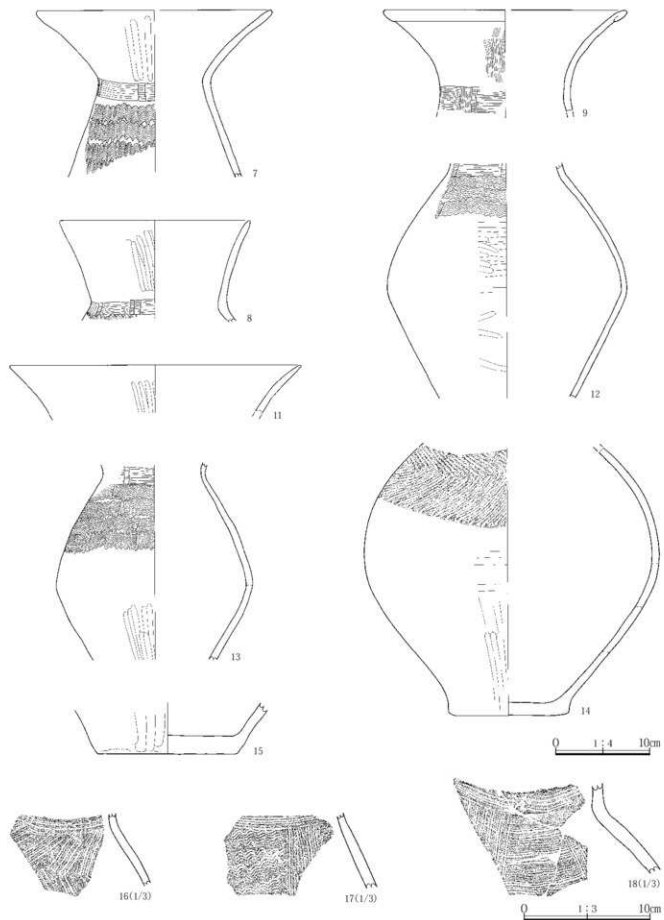
第140図 45号住居(4)



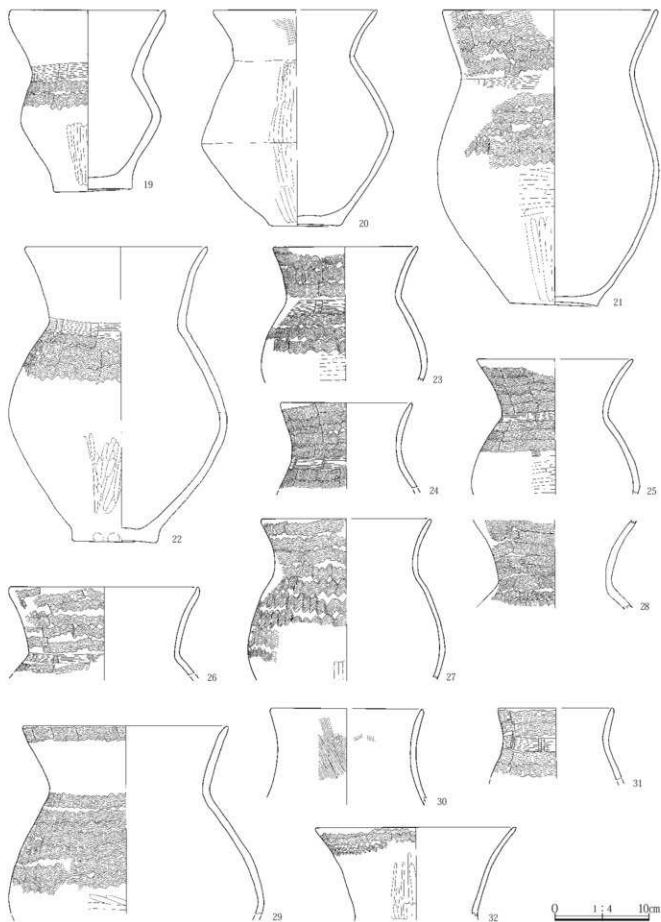
第141図 45号住居出土遺物(1)



(4) 弥生時代後期の整穴住居

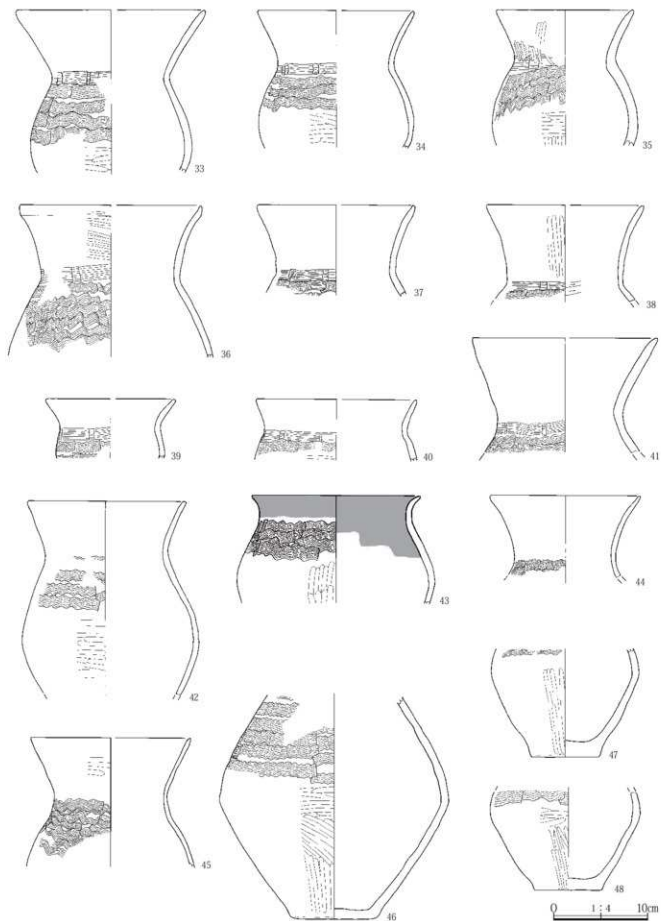


第142図 45号住居出土遺物(2)

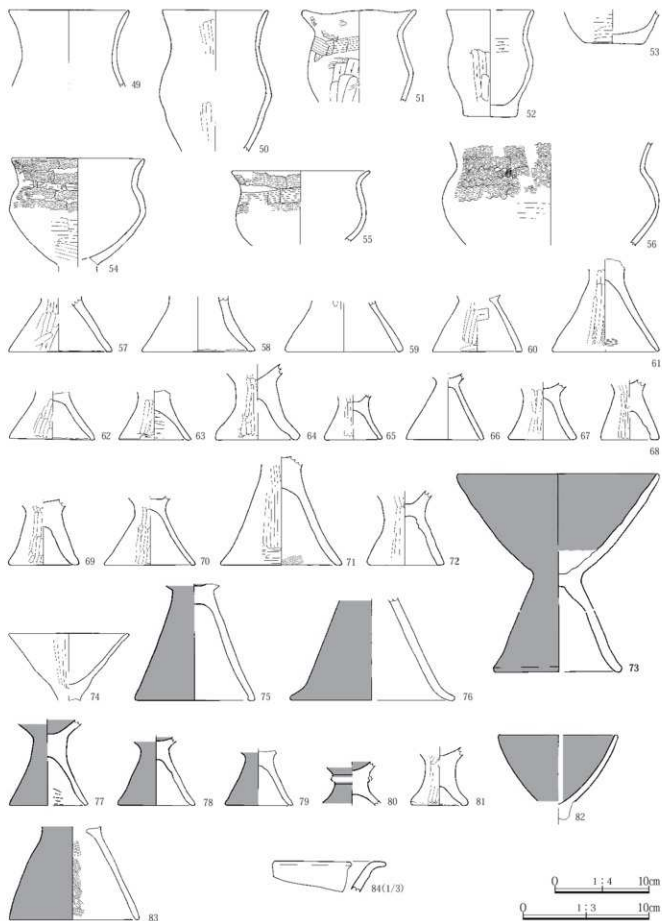


第143図 45号住居出土遺物(3)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居

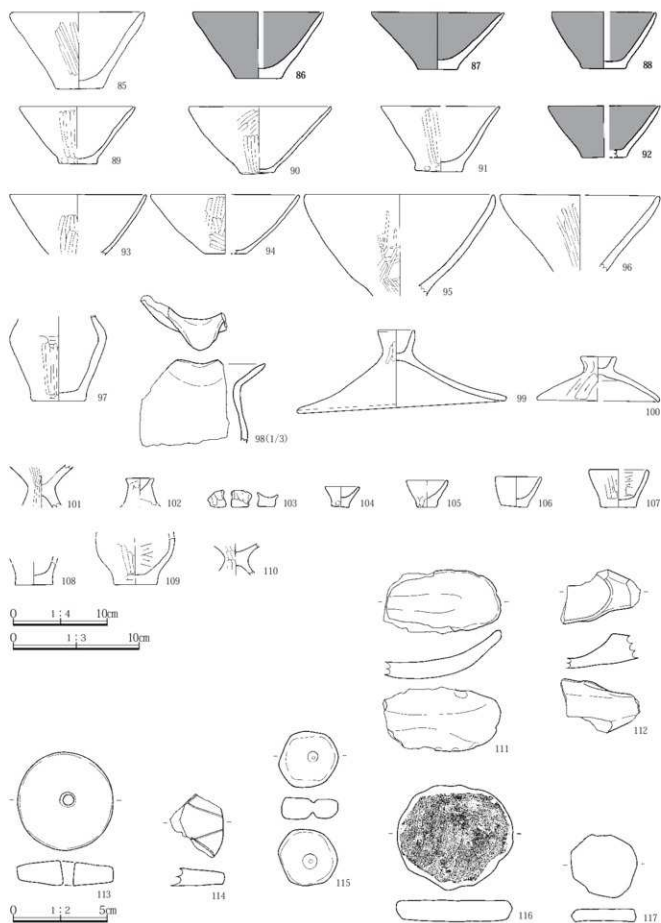


第144图 45号住居出土遺物(4)



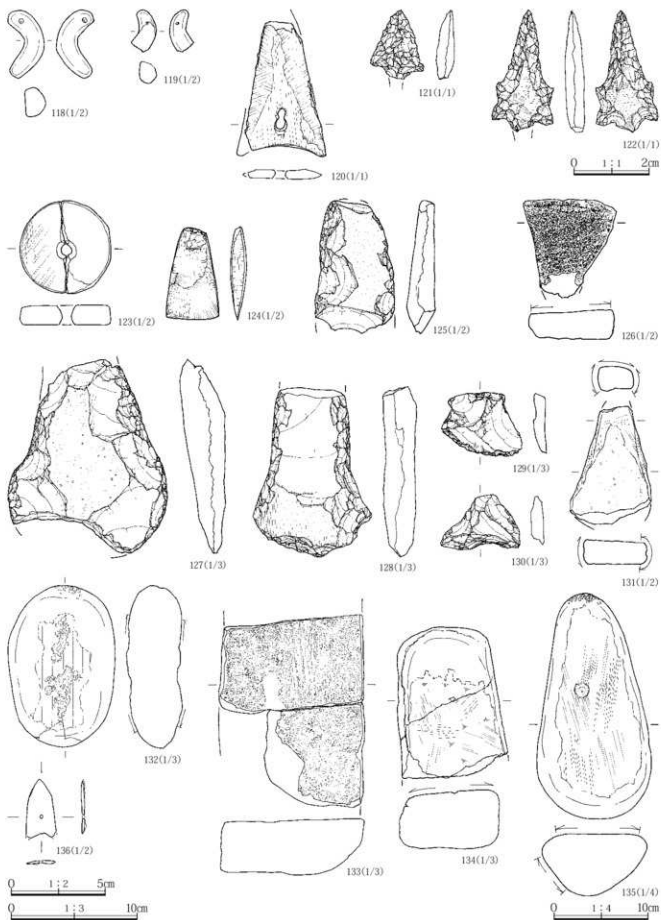
第145図 45号住居出土遺物(5)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居



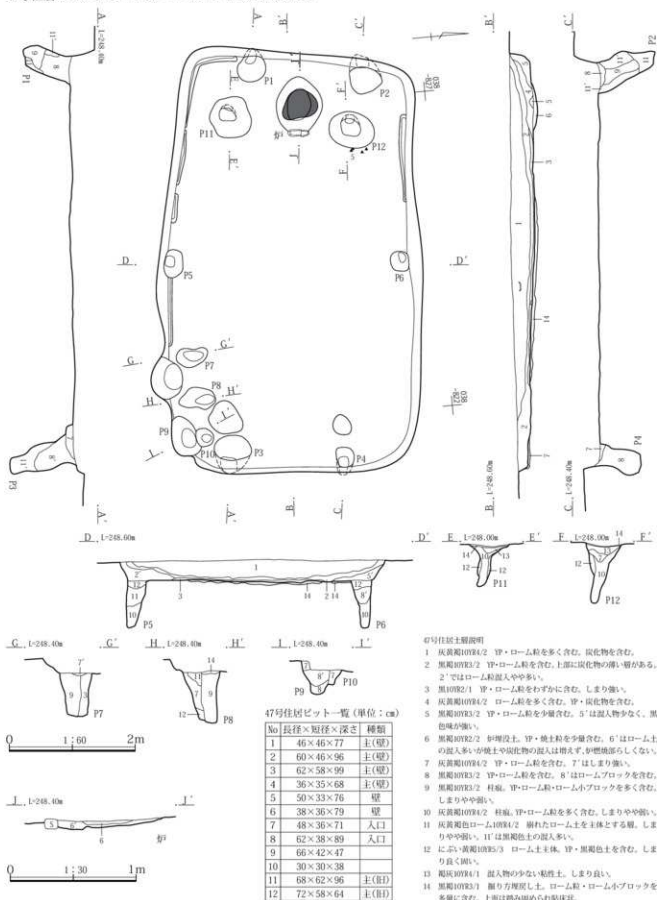
第146図 45号住居出土遺物(6)

第二章 発掘調査の記録

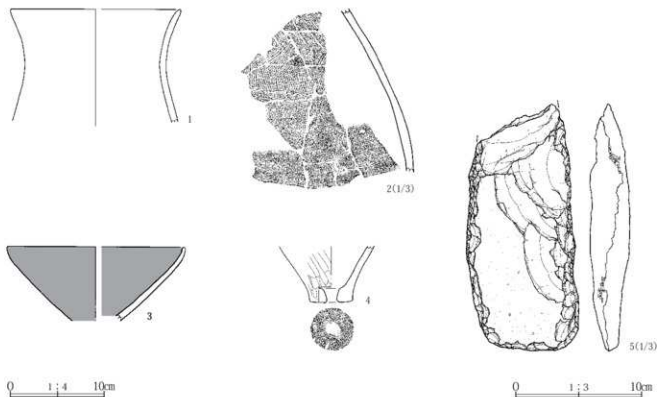


第147図 45号住居出土遺物(7)

47号住居(第148・149図 PL.25-7・8、82 遺物観察表350FD)



第148図 47号住居



第149図 47号住居出土遺物

位置：X=033～037、Y=-821～-827グリッドにある。本遺跡最大規模の45号住居南側に隣接し、双方の間隔は最短60cmで同時存在は不可能な位置にある。

**規模形状**：長軸66.5m、短軸4.2mの細長い長方形を呈す。南辺がやや歪んでいる。

**埋設土・壁**：上面から炭化物粒の混入がやや多い。住居中央床直上に人為的に埋戻したような黒褐色土(3層)の堆積がある。壁高は最も深い北辺・西辺で35cmを測る。

**方位**：N-83° W。 **面積**：22.86㎡

**床面**：やや凹凸のある床面で、住居中央付近がやや窪み、壁際から5cm前後の比高差がある。貼床は柱穴などごく一部に見られる。住居掘り時の窪み程度の浅い掘り方があり、ローム土混じりの黒色土を踏み固めている。

**壁溝**：幅3～8cmの浅く狭い壁溝が南壁下と北壁下西寄りに部分的に見られる。特に南壁下は途切れる部分が多く、不明瞭な施設である。

**ピット**：P1～4は壁際にある規則的配置のピットで主柱穴を想定したい。いずれも上面が住居内側へ向かうように傾斜して掘り込まれている。このため住居中央に広

い空間が確保されている。P11・12は掘り方調査時に確認したピットで、上面に貼床が認められるP1・2に先出する主柱穴である。本住居の下から確認された61号住居に伴うと考えた2基のピット(164図：61住P4・6)は配置からP11・P12と対になる可能性があるので、薄線で輪郭を示した。長辺側中央付近の壁柱穴P5・6が対になっている。南辺東隅にあるP7・8は入口ピットのように2本対になっている。深さのある、ほぼ垂直の柱痕が観察できる。このピット南側の壁面にある窪みは、床面からの深さ5cmの別遺構と思われる。

**か**：西壁際にある。深さ5cmの浅いもので径94×65cmの楕円形を呈す。東側に据えた枕石が被熱で割れている。

**その他**：61号住居に後出する。

**遺物**：出土遺物は少なく、図示できたのは土器4点と石器1点で、土器は全て埋設土中出土破片である。P12東脇床直上に石器・割片等がまとめて出土したが、その中に石鏃5が含まれる。他に弥生時代中期の土器片混入がやや多い。

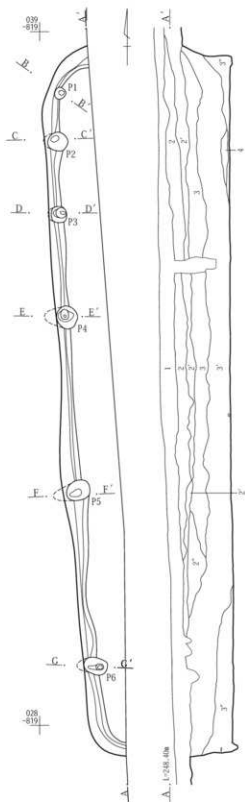
**所見**：出土遺物から弥生時代後期古段階である。



## 48号住居(第150図 PL.26-1・2)

調査範囲の最も東側にある住居で、大半は調査区域外にあり、西壁付近のみ調査できた。

位置：X=027~038、Y=-817~-818グリッドにある。



**規模形状**：長軸長は11.2m以上となる。北西側に隣接する本遺跡最大の45号住居に次ぎ、調査区西隅にある13号住居に匹敵する規模である。

**埋没土・壁**：わずかな調査範囲だが、4層のような自然堆積としては不自然な埋没土が見られる。壁は垂直に近い立ち上がりで、壁高は63cmを測る。

**方位**：N-4° W。

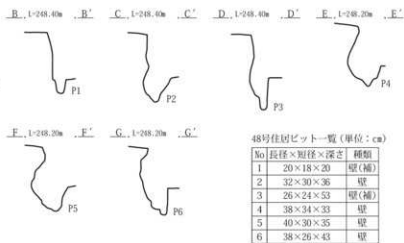
**床面**：南側へ低く傾斜するようで、北隅と5cmの比高差がある。調査範囲内には掘り方は確認できない。

**壁溝**：調査できた範囲内には全体に廻っている。幅10cm前後、深さ2~7cmを測る。

**ピット**：6本の壁柱穴が見られた。P2・4~6がほぼ均等に並び、他の2本は不規則な配置にある。ほとんどのピットが壁側に食い込むような掘り込みがあるが、底面に見える柱痕は垂直に近く穿たれている。壁部分は崩落か抜柱痕であると考えたい。

**その他**：炉・主柱穴・入口ピット等ほとんどの施設は調査区域外となる。北側の45号住居とは90cmの間隔で、同時存在は難しい。図示に耐える遺物の出土はなかった。

**所見**：時期決定できる遺物の出土はないが、住居規模や残存部分の形状より弥生時代後期の住居である。



## 48号住居土層説明

- 表土。
- 黒10/R2/1 YP・ローム粒を含む。白色軽石が多く混じる。2'は掘入物少なく、2'は3'の掘入物多い。
- 黒10/R2/2 YP・ロームブロックを含む。白色軽石・炭化物を少量含む。3'はロームブロックの混入が多い。3'は黒色味が強い。
- 黒10/R4/4 YP・黒褐色土が少し混じる。
- 黒10/R2/1 ピット埋没土。YP・ローム粒が多い。5'はローム小ブロックが混じる。
- P1・3~6は5'層、P2は5'層。

0 1:60 2m

50号住居(第151・152図 PL.26-3・4、82 遺物観察表351ED)

後出する43号住居に東側を大きく削られ残存状態はきわめて悪い。しかし43号住居の掘り方調査時に確認した窪みが本住居の北側掘り方延長部分に合致していた。本住居掘り方図には43号住居掘り方の一部を合成して示した。がや主柱穴が確認できず、住居とする確実な根拠が一部欠けている。

**位置**：X=048~051、Y=-832~-834グリッドにある。

**規模形状**：43号住居で確認した掘り方が本住居に伴うものであれば、長軸4.2m以上、短軸の3.6m前後の長方形が想定できる。

**埋設土・壁**：壁高は北辺・西辺で48cmを測る。

**方位**：N-12° E。(南北方向を長軸とした場合)

**床面**：調査できた範囲では住居中央側が若干低く傾斜するようで、壁際と3cm前後の比高差がある。厚さ1~3cmの薄いが踏み固めの強い貼床がある。掘り方は住居中

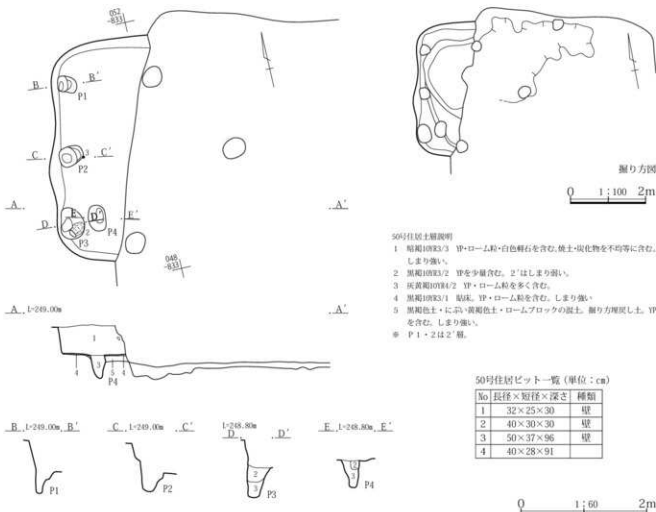
央から北側へ向かって階段状に深くなり、床面から最大30cmの深度がある。

**ピット**：西壁際に3本のピットが並び、壁柱穴になる。この柱穴と対になる東側の施設は掘り方調査でも確認できない。また、主柱穴に相当しそうな配置・規模のあるピットも不明である。

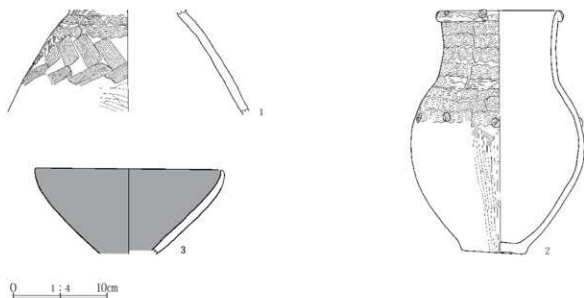
**その他**：壁溝は見られない。また、がの痕跡も調査範囲には観察できないので、ががあれば東側壁下となる。

**遺物**：土器3点を図示した。完形の甕2はP3の上層床下13cmの深さで、高環3はP2輪の床上3cmの高さで出土した本住居に確実に伴う遺物である。壺1は埋没土内の多数の破片から復元したもので43号住居出土片とも接合した。弥生時代中期の土器片混入がやや多い。

**所見**：遺物より弥生時代後期古段階の遺構であろう。西壁が長軸側の壁となる住居であっても、本遺跡では極小型住居として類例のある規模である。



第151図 50号住居



第152図 50号住居出土遺物

**55号住居** (第153・154図 PL.26-5~8, 82・83 遺物観察表351ED)

東辺北側に張り出し部を設ける住居である。本遺跡では他に15号住居に見られる。

**位置**：X=019~024、Y=-828~-836グリッドにある。

**規模形状**：張り出し部を除いた長軸6.4m、短軸4.9mを測る。南辺の両隅が鈍角気味に開いており、台形状に歪んでいる。張り出し部は南北幅2.0m、長さは南側で1.2mの規模がある。

**埋没土・壁**：焼土や炭化物粒の混入がほぼ全域に見られる。北側から一気に埋没した部分があり、人為的な埋戻しの可能性がある。壁高は最も深い北辺で49cmを測る。

**方位**：N-80° W。 **面積**：28.26㎡ (張り出し部除く) 30.24㎡ (張り出し部含む)

**床面**：地山の傾斜に沿って東側へ低く傾斜しており、東西両壁下で10cm前後の比高差がある。黒褐色土を踏み固めた薄い貼床を施している。掘り方には規則性がなく、住居西側や南北壁下に掘り残したような高まりがある。張り出し部との境に段差はなく、当初から張り出し部を作っていたと思われる。下層の埋没土はAs-YPを主体とし、掘り方掘削残土をそのまま踏み固めたようだ。

**ピット**：4主柱穴(P1~4)は住居南側にやや寄っている。また、短い南壁に沿うように、P1~2間が狭い台形状に歪んだ配置になっている。平面形状はP2・3が南北に細長く、特にP3の下端は著しく細長くなってい

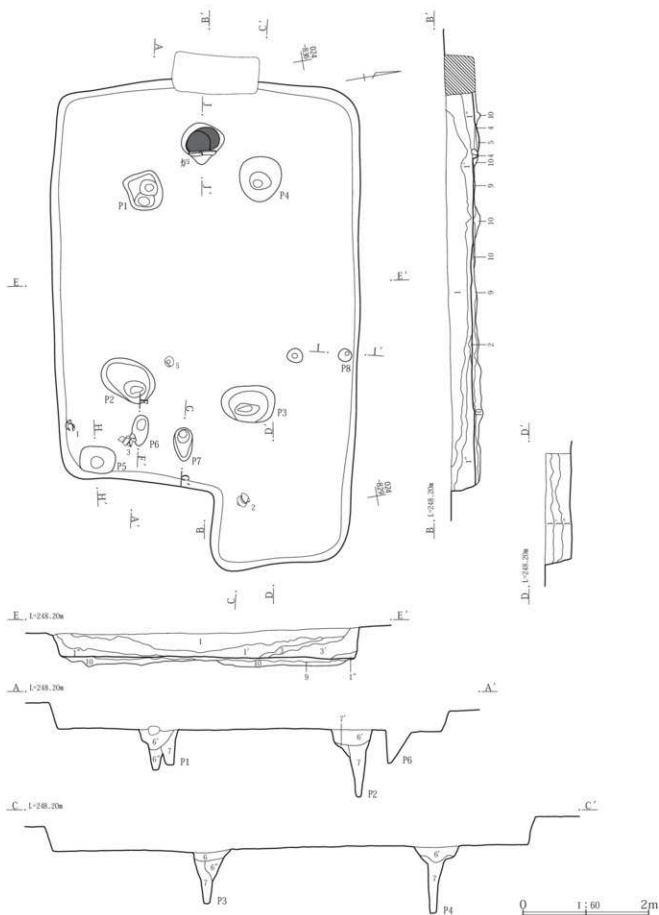
る。反面P4は円形に近く、主柱穴は一樣ではない。入口ピット(P6・7)は張り出し部を避けるように南側へ偏った配置である。両ピットとも東壁に梯子を掛けたように開口部が壁側に傾斜している。入口脇ピットP5は入口左(南)側にあり、壁に接する貯蔵穴の配置にある。P8は壁柱穴で、杭の打設痕状である。P8南側50cmに深さ5cmの不明瞭な窪みがある。

**炉**：P1・P4間の西寄りにある。径70×66cmの不整形円形を呈し、深さ9cmを測る。東側に細長い杖石を掘り方に喰い込むように据えている。炉奥ピットは見られない。掘り方調査時に炉南西側に床面から深さ20cmの不明瞭な落ち込みを確認しているが、南側へ偏り過ぎていて炉奥ピットではない。

**その他**：壁溝は見られない。

**遺物**：出土遺物は住居東側に偏っている。土器5点・石器2点を図示した。台付壺2、甕3、鉢5はいずれも床直上の出土である。壺1は床面から4cm浮いた状態だが、南東隅壁直下の出土位置から推して前記遺物と共に本住居に確実に伴う遺物と考えたい。石器では6は石材や薄さから紡輪素材の可能性がある。

**所見**：出土遺物より弥生時代後期の住居である。掘り方は北辺西側と南辺東側にほとんど掘削されていない部分がある。軸方向が若干開き気味の、本住居に先出する(拡張前の)住居掘り方となる可能性がある。

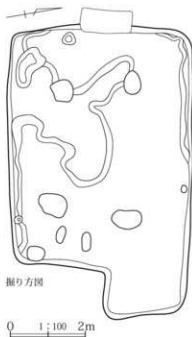
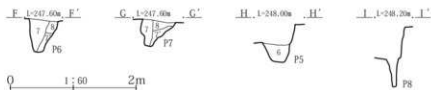


第153図 55号住居(1)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

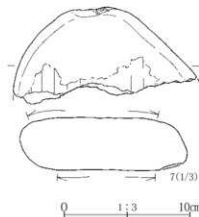
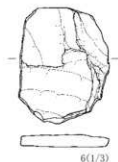
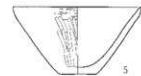
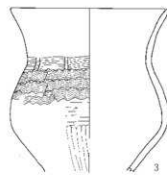
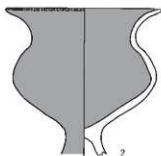
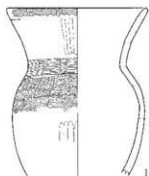
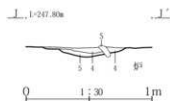
55号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	62×55×66	主
2	90×60×98	主
3	84×58×89	主
4	72×63×106	主
5	55×52×41	貯蔵
6	49×25×78	入口
7	53×30×42	入口
8	20×20×46	



## 55号住居土層説明

- 1 前期10R2-2 YF・ローム小ブロックを全体に含む。白色軽石が土層に多く混じる。炭化物をわずかに含む。1'はロームブロック層が薄大。1''は堆土層が少量混じる。
- 2 前期10R2-2 YF・ローム土・ロームブロックが多く混じる。
- 3 前期10R2-2 1''に近似する層で、炭化物が多く混じる。3'はYFの混入が多い。
- 4 前期10R2-3 中埋没土。ローム粒・炭化物・焼土ブロックを含む。
- 5 赤褐色10R4-3 砂火床部分。焼土主体。YFを多く含む。
- 6 前期10R2-3 YF・ロームブロックを含む。6'は炭化物が少量混じる。6''はロームブロックの混入多い。
- 7 に近い黄褐色10R6-3 ブロック状のローム土主体。しまり強い。7'は物にしまり強い。
- 8 前期10R3-3 YF・ロームブロックを多く含む。しまり強い。
- 9 前期10R3-2 粘土。YFを多く含む。ローム粒・ロームブロックを含む。頭み固められ。しまり強い。
- 10 YF主体の層。炭化物・ローム小ブロック等を含む。
- P 8は6層。



第154図 55号住居(2)および出土遺物

**56号住居** (第155・156図 PL.27-1~3, 83 遺物観察表351印)

**位置** : X=999~006, Y=-838~-845グリッドにある。

調査区南側の、南へ向かって低い傾斜面にある。

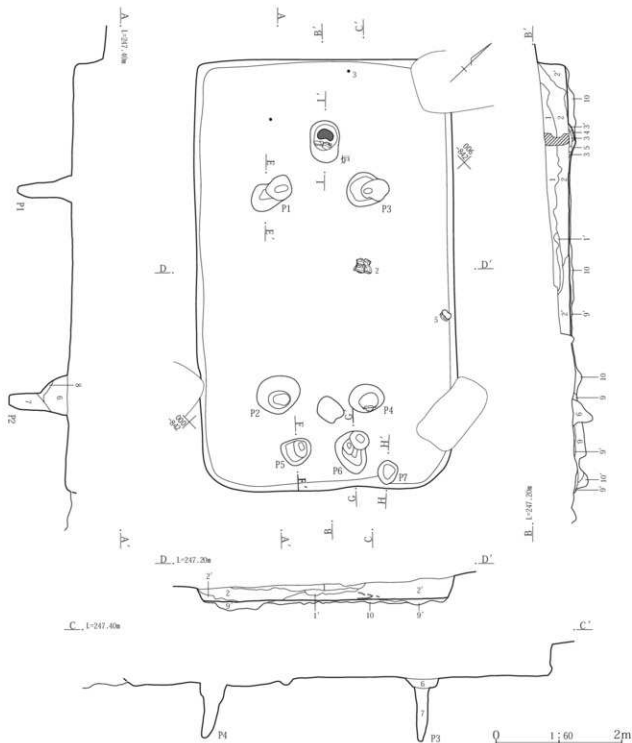
**規模形状** : 長軸6.8m、短軸4.1mの細長い長方形で、南東側両隅は丸みが強く、丸みの少ない北西側隅と形状が異なっている。各辺は直線の形で整美である。

**埋没土・壁** : 全体に炭化物粒を含む。自然堆積としては

やや不自然な埋没状況である。壁高は最も深い北西辺で35cm、浅い南東辺では2~9cmである。

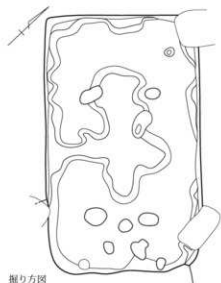
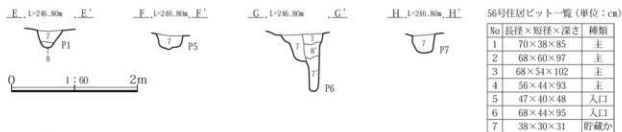
**方位** : N-47° W。 **面積** : 復元(25.57)㎡

**床面** : 南東方向へ低く傾斜していて、北西壁下と20cmの比高差がある。南東側では一部後出する59号住居に削られている。貼床が部分的に施されている。掘り方は壁際で深く、中央付近に掘り残しのような高まりがある。



第155図 56号住居(1)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居

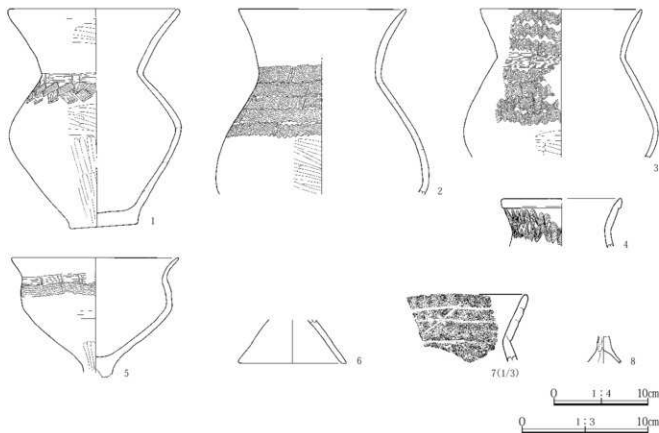


掘り方図

0 1:100 2m

## 56号住居土層説明

- 1 黒層10YR2/3 YP・ローム小ブロックを全体に混じる。炭化物・白色軽石少し混じる。1'はロームブロックがさらに小さい。
- 2 黒層10YR3/3 ロームブロックはこの層で最大となり、量も多い。炭化物が少量混じる。2'はロームブロックが再び小さくなる。
- 3 黒層10YR3/3 YP・ローム粒を含む。炭化物を散見する。3'は混入物少ない。黒色味増す。
- 4 赤層10YR4/6 砂礫層部で粘土主体。穿を多く含む。
- 5 赤層10YR2/7 砂下層。粘土多い。灰・炭化物を含む。
- 6 灰黄層10YR4/2 YP・ローム粒を含む。黒層色土を少量含む。
- 7 黒層10YR3/2 YP・ローム粒を多く含む。7'はロームブロックを含む。
- 8 明黄層10YR6/6 崩れたようなローム土主体。黒層色土を不均等に含む。8'は黒層色度の混入多い。しまりやや強い。
- 9 黒層10YR3/2 YP・掘り方層上土。ローム粒を少量含む。9'はしまり強い。築込部分と想定する。
- 10 灰黄層10YR4/2 YP・ローム粒・黒層色土の混土。表面は黒層色土が多い。しまりやや強い。10'はYPが多い。しまり弱い。



第156図 56号住居(2)および出土遺物

**ピット**：4主柱穴(P1~4)は南東側へ若干偏り、炉のある北西側が広い。北西側の2柱穴には掘り直しの痕跡がある。細い短軸方向を3等分するように主柱穴を配置しており、P1-3間とP2-4間はかなり狭い。P5・6は入口ピットと思われ平面は主柱穴に近い規模があるが、P5は深度に乏しい。P6のみ掘り直しをするようだ。入口脇のP7は右(北東)側壁際にあるが、貯蔵穴と考えるには小規模である。

**炉**：P1・P3間のやや北西寄りにある。径66×46cmの楕円形を呈し、深さ9cmを測る。焼土は炉北西側の深い部分に偏り範囲は狭い。枕石は炉中央付近にあり、被熱により割れている。

**その他**：古墳時代前期の59号住居に先出する。壁溝は確認できない。

**遺物**：土器8点を図示した。裏2は住居中央、裏3は北西辺の壁直下のそれぞれ床直上で出土した。台付裏5は北東辺壁直下の出土だが、P3内出土破片が接合している。これらは本住居に確実に伴う遺物である。壺1は埋没土出土破片が接合し、完形近くまで復元できた。

**所見**：出土遺物や住居形態から弥生時代後期新段階の住居である。本住居同様に長軸北西方向の8号住居が本住居の75m北西方向にあり、この間にやはり長軸北西方向の73・76号住居が配置されている。住居古地に対する制約の存在した可能性がある。

#### 57号住居(第157~160図 PL.Z-4~6, 83-84 遺物観察表351頁)

後出する53号住居に東辺南側を削られるが全容は推測できる。弥生時代後期住居の長軸南北方向の大型住居では最も南側で、同様の他住居から離れた位置にある。

**位置**：X=000~009、Y=-829~-835グリッドにある。

**規模形状**：長軸8.4m、短軸5.2mの長方形で、北東・南西両隅が鋭角のため、平行四辺形気味に歪んでいる。

**埋没土・壁**：南側ではローム土の混入の多い土で、北側の黒褐色土は別遺構が最後に埋もれた土か区別できなかった。壁高は最も深い北辺で60cmを測る。

**方位**：N-2°W。 **面積**：復元(40.96)㎡

**床面**：凹凸が多いが全体では南側へ低く傾斜していて、北側と10cm前後の比高差がある。黄色味の強い埋め戻し土を踏み固めた薄い貼床がほぼ全域で見られる。掘り方は北側が浅く粗掘り時の窪みを埋め戻す程度で、南側は

やや深い場所がある。この部分の埋戻し土は下側でAs-YP主体で、粗掘り時残土をそのまま踏み固めている。

**ピット**：4主柱穴(P1~4)は平面規模が小さく、住居内の他のピットとあまり変わらない。P1・3には断面に柱痕が明確に残り、P1・4の下端は東西方向に長い。壁柱穴は西側(P11~13)、東側(P14・18・20)で規則的な配置にある。掘り方調査時に確認したP16・19は先出する壁柱穴のようだ。入口ピットは壁際にある4本(P6~9)のピットが該当する。形状からP7・8とP6・9がそれぞれ対になるようで、P9のみ上面が南壁に向かうように斜めに穿たれている。また、P9は上面が強く踏み固められており、住居廃絶時には埋没していた可能性もある。炉奥のP10は杭の打設痕のように細く、北壁から離れた位置に穿たれている。

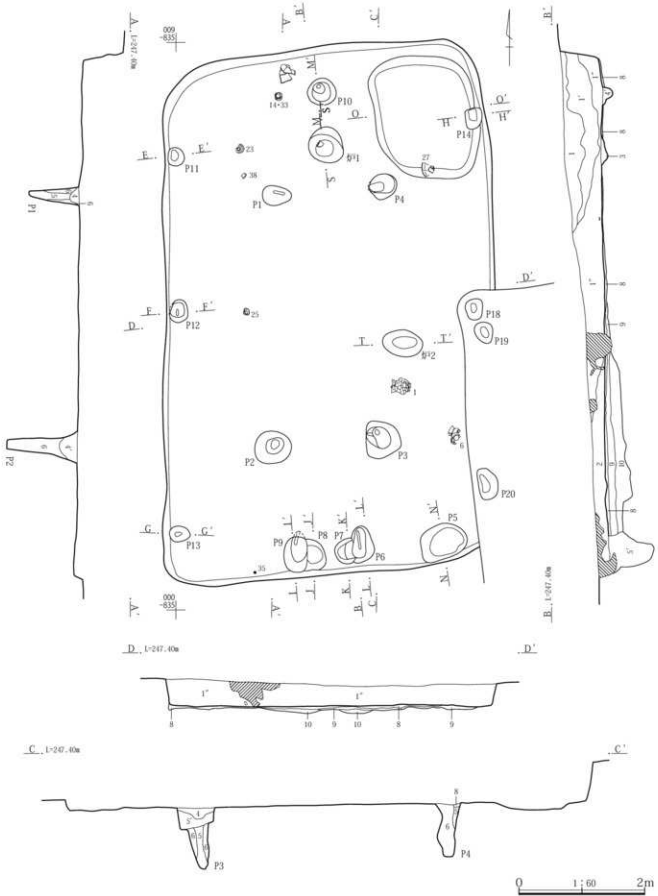
**炉**：炉1はP1・4・10のほぼ中間にある。径60×56cmの不整形円で深さは6cmを測る。炉2はP3の北側にある。径64×42cmの楕円形で深さは9cmで主炉と差のない規模である。どちらも枕石がなく、被熱痕や焼土の堆積も少ない。

**その他**：古墳時代後期の53号住居に先出する。壁溝は見られない。北西隅に壁に沿って長軸195cm、短軸160cm、床面からの深さ21cmの平坦な窪みがあり、調査時には住居内土坑として扱い、報告でもそれを踏襲した。しかし、B断面には北西壁に沿って床面近くまで掘り返したような痕跡が観察される。この土坑はその際の窪みの可能性もあろう。住居壁は壊されておらず、住居埋没途中での掘り返しのように見える。

**遺物**：出土遺物は多く、住居全域に散在する土器・土製品35点と石器3点を図示した。壺1、甕6が東壁下南寄り、鉢25は西壁下、甕14、匙33は北壁下、土製勾玉35が南壁直下の床直上出土で本住居に確実に伴う遺物である。有孔鉢27は床面レベルだが住居内土坑縁部付近の出土である。北壁寄りの遺物はやや浮いた状態のものがあり、鉢23は床上14cm、磨製石斧38は床上11cmの高さであった。本住居では前述の土製勾玉や匙など床直上出土品に加え、匙34、ミニチュア土器31・32の特殊遺物が埋没土内で出土している。

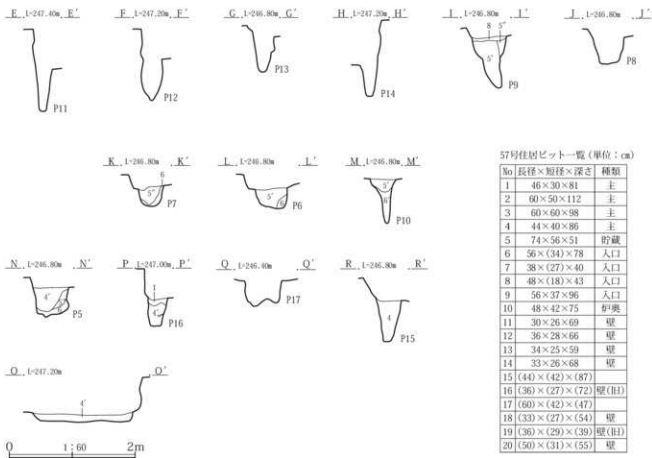
**所見**：入口ピットの作り替えが確認できる。上面の状態からP6・9が先出すると考えたい。住居形態・出土遺物から弥生時代後期中段階。





第157図 57号住居(1)

第2章 発掘調査の記録

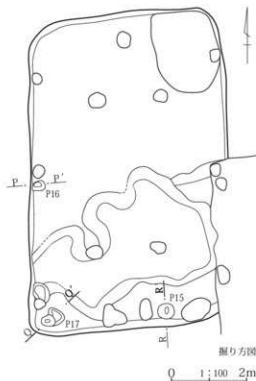
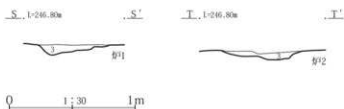


57号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	46×30×81	土
2	60×50×112	土
3	60×60×98	土
4	44×40×86	土
5	74×56×51	貯蔵
6	56×(34)×78	入口
7	38×(27)×40	入口
8	48×(18)×43	入口
9	56×37×96	入口
10	48×42×75	伊奥
11	30×26×69	壁
12	36×28×66	壁
13	34×25×59	壁
14	33×26×68	壁
15	(44)×(42)×(87)	
16	(36)×(27)×(72)	壁(柱)
17	(60)×(42)×(47)	
18	(33)×(27)×(54)	壁
19	(36)×(29)×(39)	壁(柱)
20	(50)×(31)×(55)	壁

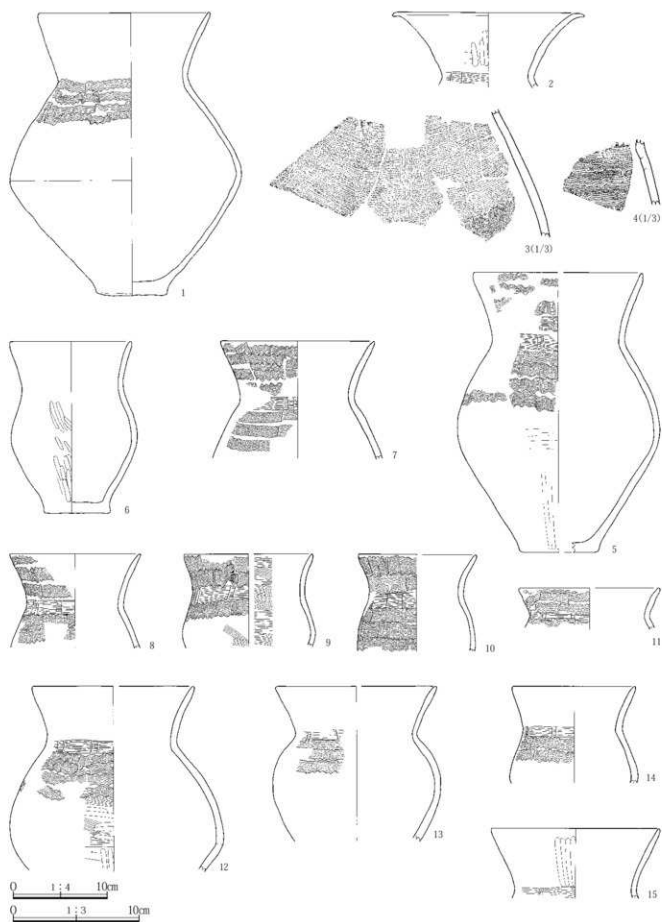
57号住居土層説明

- 黒層10B3/1 YP・ローム粒を少量含む。下層に炭化物を多く含む。1'は焼土を含む。1'は焼土を少量含む。
- にぶい黄層10B4/3 YP・ローム粒を多く含む。
- 黒層10B2/2 2箇所のかに共通する埋没土。YP・ロームブロックを含む。加埋没土としては炭化物・焼土少ない。しまり強い。
- 黒層10B2/2 YP・ローム粒・炭化物を少し含む。4'にはロームブロックが少量混じる。
- 黒層10B3/4 柱層。YP・ローム小ブロックを含む。下層ほどしまり強い。5'・5'はローム土の混入がやや多い。5'はしまりやや弱い。5'はしまり普通である。
- にぶい黄層10B4/3 ローム土土体。YP・相褐色土が混じる。6'はしまりやや弱い。
- 黒層10B4/6 相褐色土・YPを含む。しまり強い。
- にぶい黄層10B5/4 柱層。YP・ローム粒・相褐色土を含む。踏み固められ。しまり強い。
- 黒層10B3/2 振り方埋没土。YP・ローム粒・ローム小ブロックを多く含む。
- YP土体の層。ロームブロック・相褐色土粒を含む。
- P11・14は7層。P12・13は5'層。P17は5'層。

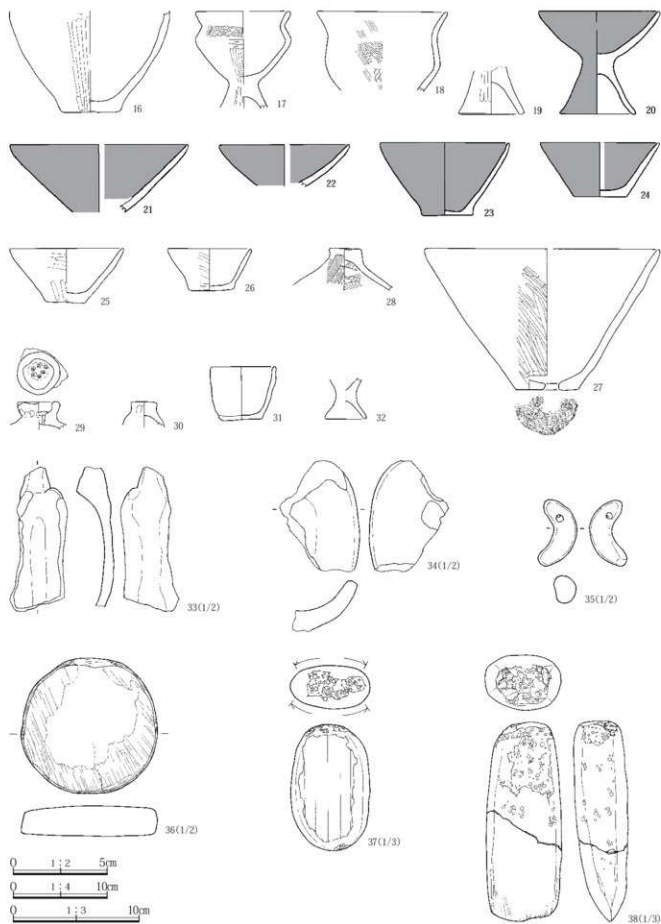


第158図 57号住居(2)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居

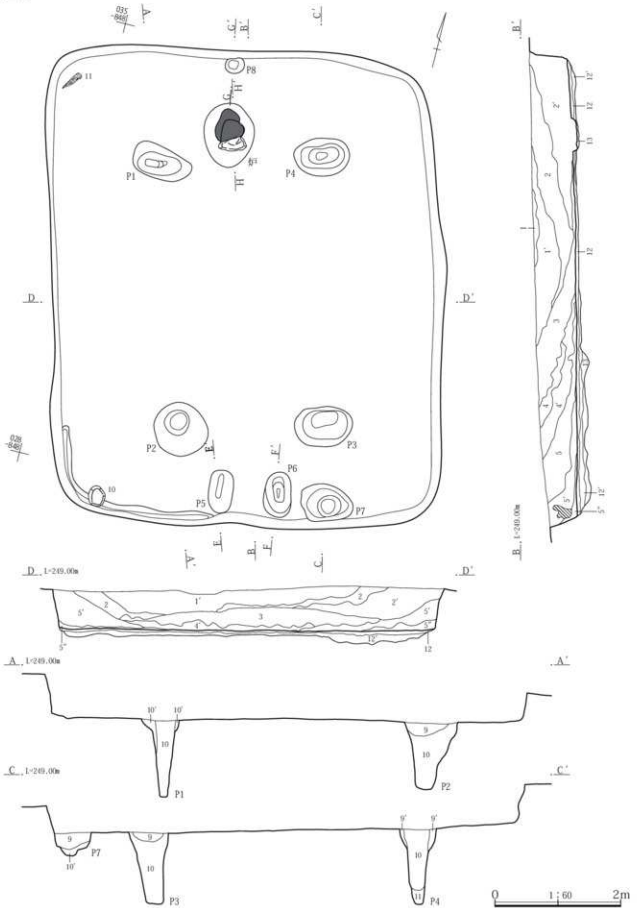


第159図 57号住居出土遺物(1)



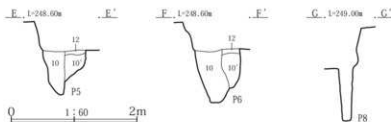
第160図 57号住居出土遺物(2)

60号住居(第161~163図 Pl. 27-5・6、28-1・2、84 遺物観察表352頁)



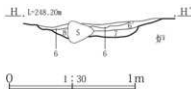
第161図 60号住居(1)

## 第2章 発掘調査の記録



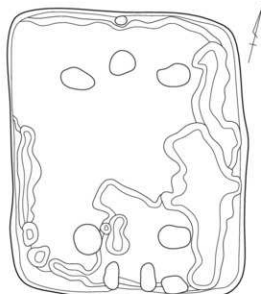
### 60号住居土層説明

- 黒層H0R2/3 VP・ローム粒を含む。白色軽石を少量含む。しまり良い。1'はロームブロックが混じる。
- 黒層H0R2/3 VP・ロームブロックを多量に含む。白色軽石・炭化物が混じる。しまり良い。2'はやや褐色味をおびる。
- 黒10R4/4 ローム上主体。VP・黒褐色土が混じる。しまり良い。
- 黒層H0R2/3 VP・ロームブロックを少量含む。しまり良い。4'はロームブロックが小粒。黒色味をおびる。
- 黒層H0R3/3 VP・ロームブロックを含む。白色軽石が混じる。しまり良い。5'はVPを多く含む。ざらざらしている。5'は炭化物が混じり黒色味をおびる。
- 黒層H0R2/3 伊埋没土。VP・ロームブロックを含む。炭化物・焼土粒がわずかに混じる。6'は焼土ブロック・炭化物を多量に含む。
- 赤層H0R4/6 床床部分で焼熟したロームブロックを主体とする。
- にぶい黄層H0R5/4 柱石下にある伊埋り方。VP・ローム粒を含む。
- 黒層H0R2/3 VP・ロームブロックを含む。炭化物が少量混じる。しまりあり。9'には炭化物を含まない。
- 黒層H0R2/3 柱床。VP・ロームブロックを含む。しまり強い。10'はロームブロックの混入多い。ややしまり強い。
- にぶい黄層H0R4/3 ローム上主体。VPが混じる。しまり強い。
- 黒層H0R2/2 胎床。VP・ロームブロックを含む。踏み固められ。しまり強い。12'は埋り方埋没土で黒褐色土を含む。
- 黒10R4/6 ロームブロック・VPを主体とする。黒褐色土が少量混じる。しまり強い。
- P 8は10層に近い。



60号住居ピット一覧(単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	92×50×123	主
2	85×82×107	主
3	92×63×118	主
4	90×60×122	主
5	70×40×72	入口
6	72×40×86	入口
7	84×56×51	貯蔵か
8	32×24×86	伊奥



第162図 60号住居(2)

**位置:** X = 027 ~ 035, Y = -841 ~ -848 グリッドにある。

**規模形状:** 長軸7.6m、短軸6.2mで弥生後期の住居の中で縦横比が1.25以下の太形住居7軒は小型の住居主体であるが、唯一長軸長6mを越える規模の住居である。北東隅・南西隅がやや鈍角に開いており、平行四辺形気味に歪み、南・北辺には内側へ湾曲するような弱い歪みがある。

**埋没土・壁:** 壁際から短期間に埋もれたようで、埋没土に差が大きい。人為的な埋戻しが想定される。壁高は最も深い西辺で71cmを測る。

**方位:** N-16° W。 **面積:** 42.24㎡

**床面:** 地山の傾斜に沿って南側へ低く傾斜しており、北壁際と13cm前後の比高差がある。黒褐色土を踏み固めた貼床がほぼ全域に見られる。掘り方は不規則で、深い部分は東側・南側に集中している。南北両辺直下では壁下端と掘り方上端の間に15cm前後の間隙があり、両方向へわずかがだが拡張した痕跡と考えたい。

**壁溝:** 南西隅付近のみで確認できる。深さ3cmほどの不

明瞭な施設である。

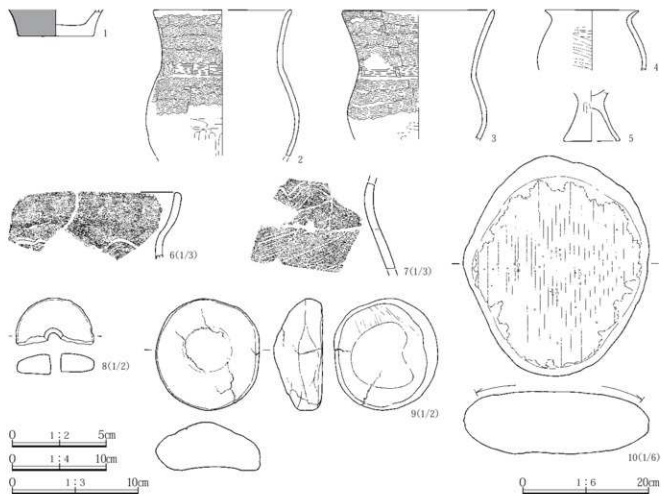
**ピット:** 4主柱穴(P1~4)は住居平面形とは異なり南北に細長い配置になっている。南側の柱穴は上端が壁から南壁から1m前後しか離れていない。P2を除いて平面は東西に細長い形状を呈している。入口ピットP5・6は壁際にあり、南北に細長い平面形状だが、柱痕は壁際に寄っていて傾斜も少ない。入口脇ピットP7は右(東)側にあり、貯蔵穴と考えるには底面の平坦さを欠く。伊奥のP8も壁際にあるが、深さが際立っている。

**か:** P1・P4間のやや北寄りにある。径102×80cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。南側に比較的大きな枕石が据えられている。被熱痕や焼土の堆積が顕著である。

**その他:** 弥生時代中期の67号住居に後出する。

**遺物:** 土器・土製品8点と石製品2点を図示した。土器は埋没土内出土破片が接合したもののだが、完形近くまで復元できた資料はない。砥石10が南西隅壁直下床直上に据えられるようにして出土した。

**所見:** 時期決定できる資料を持たないが、出土遺物と住



第163図 60号住居出土遺物

居形より弥生時代後期古段階である。南北両辺が拡張されているなら、壁際のP7・8は拡張後の施設となる。

#### 61号住居(第164図 PL.28-3, 85 遺物観察表353頁)

47号住居中にそっくり含まれていて、同住居床下調査で確認できた住居である。

**位置**：X=033~037、Y=-821~-825グリッドにある。

**規模形状**：長軸4.2m、短軸3.3mの長方形を呈す。

**埋設上・壁**：黒褐色土の単層で人為的な埋戻しの痕跡は確認できない。47号住居床面からの壁高は12cm前後だが、地山上面からの深さは40cm前後になる。

**方位**：N-85° W。 **面積**：11.58㎡

**床面**：凹凸があり明確ではないが、全体では北側へ低く傾斜する傾向がある。中央付近に貼床が施された可能性がある。掘り方は壁際がやや深くなっている。

**ピット**：東西両壁際の中央付近にP1・P5がある。双方とも開口部を住居中央側に向けて若干傾斜している。2支柱穴の配置であろう。P4は南東隅付近の壁際にあ

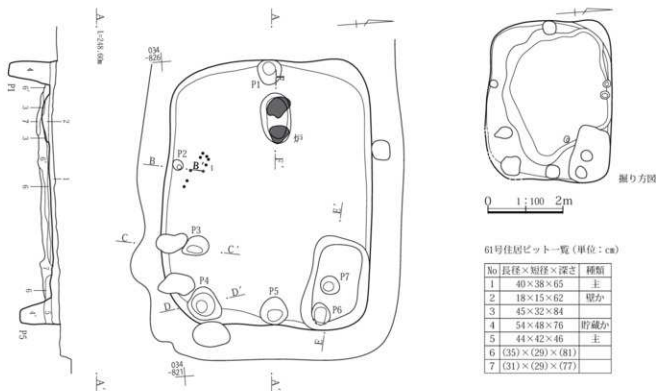
るが、支柱穴以上の深さがあり貯蔵穴とは考えにくい。ピット中で最も深いP3と共に性格不明の施設である。壁柱穴の位置にあるP2は深さに比べ上面が著しくが狭く、杭を打ち込んだ痕と思われる。

**缸**：P1の東側にあり、径80×48cmの長円形を呈し、深さ8cmを測る。上端はP1から15cmしか離れていない。枕石は見られない。被熱痕は東西両隅側に離れて顕著な地点が見られる。

**その他**：壁溝は見えない。南東隅に住居内土坑がある。上端148×96cm、床面からの深さ58cmを測る底面が平坦で規模の大きな施設だが、上面に顕著な踏み固め層はなく、住居廃絶時に開口していたと推測される。この土坑内のピット(P6・7)は後出する47号住居に伴う施設と思われる。

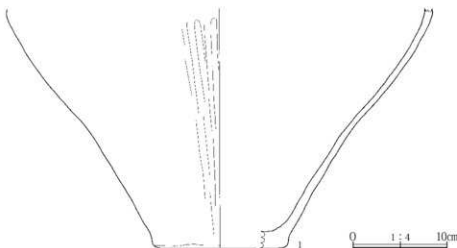
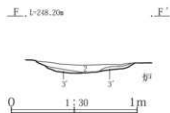
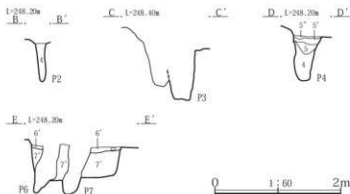
**遺物**：出土遺物は少ないが、南壁下床直上に散在していた壺1が図示できた。

**所見**：缸の位置と出土遺物より弥生時代後期。



61号住居土層説明

- 1 黒層01R3/1 住居埋没土。Y・ローム粒を含む。しまり強い。
- 2 黒層01R2/2 砂・上層埋没土。Y・ローム粒・粘土を含む。炭化物が少し散じる。
- 3 におい・赤褐色01R/4 砂・大床部分で埋土・土体。炭化物が散じる。
- 4 黒層01R3/2 Y・ロームブロックが多く散じる。しまり弱く、崩れやすい。4'は土質同様だが褐色味をおびる。
- 5 黒層01R3/2 Y・ロームブロックを含む。しまりやや強い。5'は炭化物少ない。
- 6 黒層01R3/1 床面直下。Y・ローム粒・ロームブロックを含む。踏み固められ、しまり強い。6'は6層ほどしまり強くない。
- 7 Y・ローム土・黒褐色土の混成土。7'はローム土の比率が高い。
- ※ P3は4層に近い。



第164図 61号住居および出土遺物



**63号住居** (第165～168図 PL.28-4～6, 85 遺物観察表353頁)

**位置** : X=018～026, Y=-840～-845グリッドにある。

**規模形状** : 長軸7.8m、短軸5.5mの長方形を呈す。南辺は弧状に膨らみ中央付近が住居内側へ湾曲しているが、他の3辺はほぼ直線的な壁である。

**埋設土・壁** : 人為的埋戻しの跡のような不自然な堆積部分があり、下層(4～7層)では特に顕著である。壁高は最も深い北辺で74cmを測る。

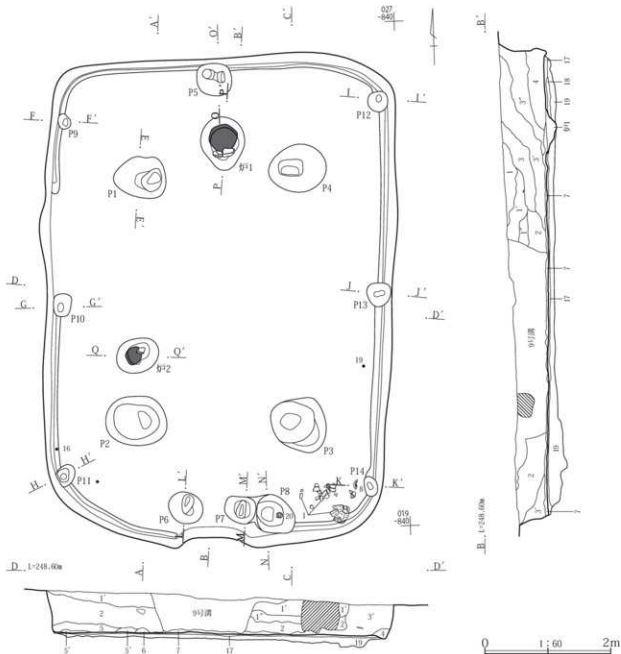
**方位** : N-3° E。 **面積** : 38.04㎡

**床面** : 南側へ低く若干傾斜しており、北壁直下から7cm前後の比高差がある。貼床と思われる踏み固められた薄

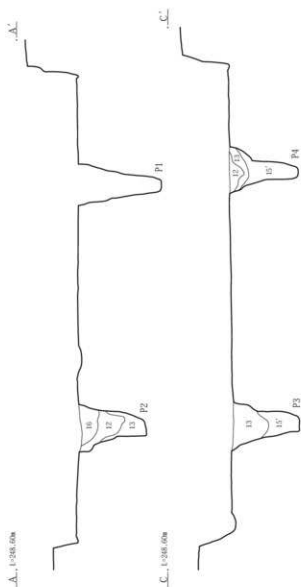
い層が全体に見られる。この層下には先出する床面となる可能性のある踏み固め面がある。掘り方は壁直下を除いた壁際をやや深く掘り下げている。

**壁溝** : 北西隅周辺や南壁下中央付近など、所々で途切れている。幅12cm前後、深さ6cm前後である。

**ピット** : 4主柱穴は規則的な配置にあり、規模が大きい。下端が細長いのはP4のみである。壁柱穴も西側3本(P9～11)、東側3本(P12～14)が規則的な配置にある。入り口ピット(P6・7)は壁の間近にあり、P6断面には南壁に建て架けたように傾く柱痕が観察できる。P8の入口脇ピットは入口右(東)側にありP7と上面で重複

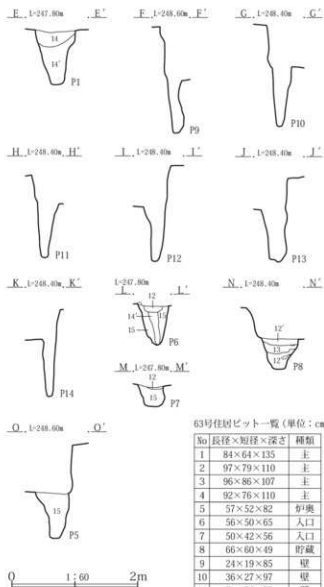
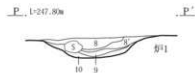


第165図 63号住居(1)



63号住居土層図

- 1 黒期109K1/1 YP・ローム粒を少量含む。1'はローム粒の混入やや多い。1''は2層土をブロック状に含む。
- 2 におい・黄期109B4/3 YP・ローム粒・ロームブロックの混入やや多い。黒色土がブロック状に混入する。
- 3 黒期109K1/1 YP・ローム粒を少量含む。3'→3''とローム粒の混入が増える。
- 4 におい・黄期109B3/3 YP・ローム粒を非常に多く含む。
- 5 黒期109K1/4 ローム粒・ロームブロックを含む。YPは少ない。5'は焼土・炭化物を多く含む。
- 6 浅黄期109B4/4 ロームブロック。
- 7 黒期109K1/2 YPを数見する。床面上高く広がる層でしまり強い。二次的な床面の可能性。
- 8 黒期109K1/3 砂1上面増設土。YPを多く含む。ロームブロック・炭化物が混じる。8'はローム粒が混じる。
- 9 赤期109A1/6 砂1大床で焼土・土。YPを多く含む。



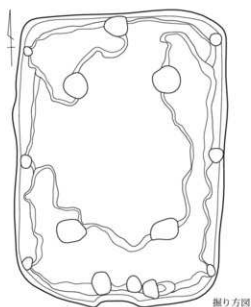
63号住居ピット一覧 (単位: cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	84×64×135	主
2	97×79×110	主
3	96×86×107	主
4	92×76×110	主
5	57×52×82	砂塊
6	56×50×65	入口
7	50×42×56	入口
8	66×60×49	貯蔵
9	24×19×85	壁
10	36×27×97	壁
11	31×26×85	壁
12	32×32×87	壁
13	40×39×83	壁
14	32×20×88	壁

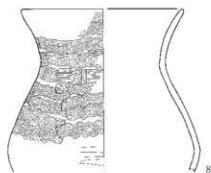
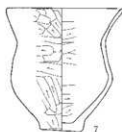
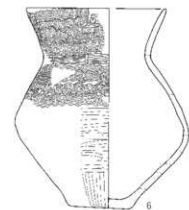
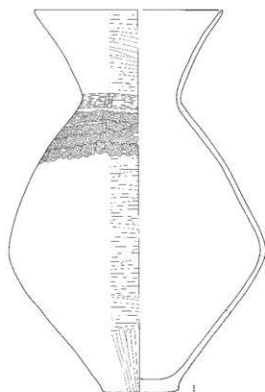
- 10 黒期109K1/2 YP・焼土・炭化物を含む。10'表面には薄い焼土層があり。砂2大床にあたる。
- 11 におい・黄期109B4/3 YP・ロームブロックを含む。炭化物・焼土が少し混じる。しまり強い。
- 12 黒期109K1/2 ローム粒を含む。12'は焼土を数見する。
- 13 浅黄期109B4/2 ローム粒・ロームブロックをややく含む。
- 14 黒期109K1/3 YP・ロームブロックを含む。炭化物が少し混じる。しまりやや弱い。14'はさらにしまり強い・前面部分。ロームブロックの混入多い。
- 15 黒期109K1/4 YP・ローム粒を多く含む。ロームブロックを含む。15'はしまり弱い。
- 16 黒期焼土とローム粒の混入。YPを多く含む。
- 17 黒期109K1/3 YP・ローム粒を多く含む。踏み固められたしまり強い・床下にあたる層。
- 18 明黄期109B6/6 ローム土上で粘床に相当すると思われる。黒期土を含む。しまり強い。
- 19 黒期109K1/2 YP・ローム粒・ロームブロックを多く含む。表面は固くしまっていて先行する床面の可能性。



第166図 63号住居(2)

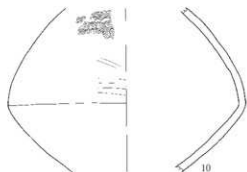
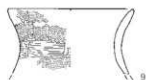


0 1:100 2m

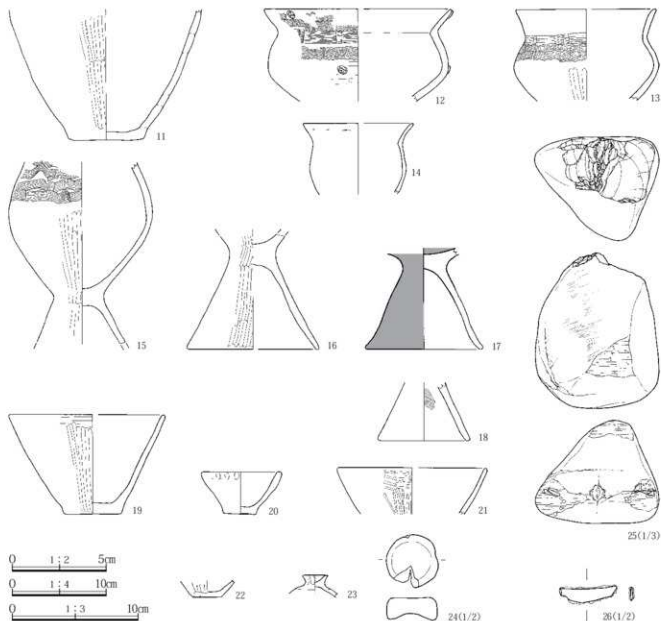


0 1:4 10cm

0 1:3 10cm



第167図 63号住居(3)および出土遺物(1)



第168図 63号住居出土遺物(2)

している。竪奥のP5は北壁に接しており、掘り直しの痕跡が底面に残る。

**か：** 竪1はP1・P4間のやや北寄りにある。径86×70cmの不整楕円形を呈し、深さ18cmを測る。南側に据えた枕石が被熱により割れている。竪2はP2北側にある。径70×54cmの楕円形を呈し、深さは10cmである。東側上層に礎があるが、枕石には小さ過ぎる。

**その他：** 9号溝が住居中央を斜めに横切り、断面に大きく残っている。

**遺物：** 出土遺物は比較的多く、土器・土製品24点と石器1点・鉄器1点を図示した。ミニチュア20がP8内の床面下10cmの深さで出土した。壺1と甕8が南東隅壁直下、

高杯16が西壁直下南隅、鉢19が東壁直下のそれぞれ床面上から出土する本住居に確実に伴う遺物である。26は刀子のような埋没土出土鉄器破片であるが、本住居に伴うか不明瞭である。

**所見：** 住居形態や遺物より弥生時代後期中段階。南壁は入口ピット付近が住居中央側へ向かって内湾するが、梯子が架かる入口部分を除いて壁を拡張するとこのような形状になると考えたい。床下では南壁下やや内側に直線的な掘り方輪郭が確認されており、当初の南壁が直線的であったことが推測される。北辺も拡張してあれば、P5は拡張後に穿たれたことになる。

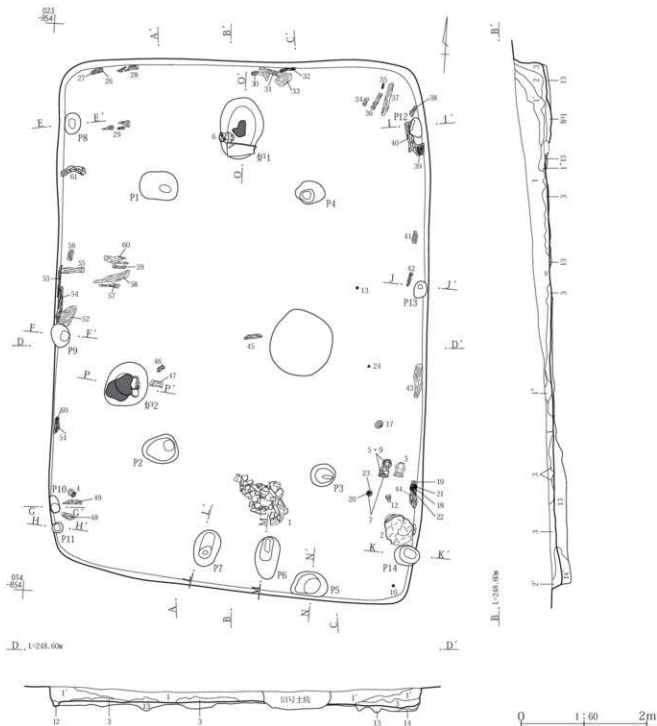
66号住居(第169~172図 PL.28-7・8、29-1・2、86・87

遺物観察表353頁)

焼失住居でほぼ全域に炭化材が見られる。

位置：X=014~022、Y=-847~-853グリッドにある。

規模形状：長軸は東側で8.6m、短軸5.9mで南西隅が鈍角に開く台形状に歪んだ長方形を呈す。西辺は東辺より



66号住居土層説明

- 1 灰黒層10P4/2 YP・ローム粒・ロームブロックを含む。炭化物を少量含む。1'はローム粒の混入がやや多い。1''はローム粒・焼土粒を多く含む黄色味をおびる。
- 2 黒7.30R1/3 YP・ローム粒を散見する。2'は炭化物・焼土粒を散見する。黄色味をおびる。
- 3 黒7.30R1.7/1 炭化物を多量に含む。焼土の混入もやや多い。
- 4 黒層7.5YR3/2 粘土層増設土。焼土・炭化物を少量含む。
- 5 黒層10R3/3 焼土・YPを含む。
- 6 明赤層5R5/8 炉2火床。焼土上層。YPを含む。
- 7 黒層10R3/2 YPをやや多く含む。7'はしり強い。
- 8 明黒層10R7/6 ローム上層。YPを多く含む。黒褐色土をまばらに含む。しり強い。
- 9 におい・黒層10R5/4 YP・黒褐色土小ブロックを少量含む。9'はしり強い。
- 10 黒層7.5YR3/1 柱礎。焼土・炭化物を多く含む。YP・ローム粒を含む。10'はしり特に強い。灰色味が強い。
- 11 YP・ローム粒・黒褐色土粒の混土。上部はしり強い。
- ※ P9~11は7層。P12・14は9層。

第169図 66号住居(1)

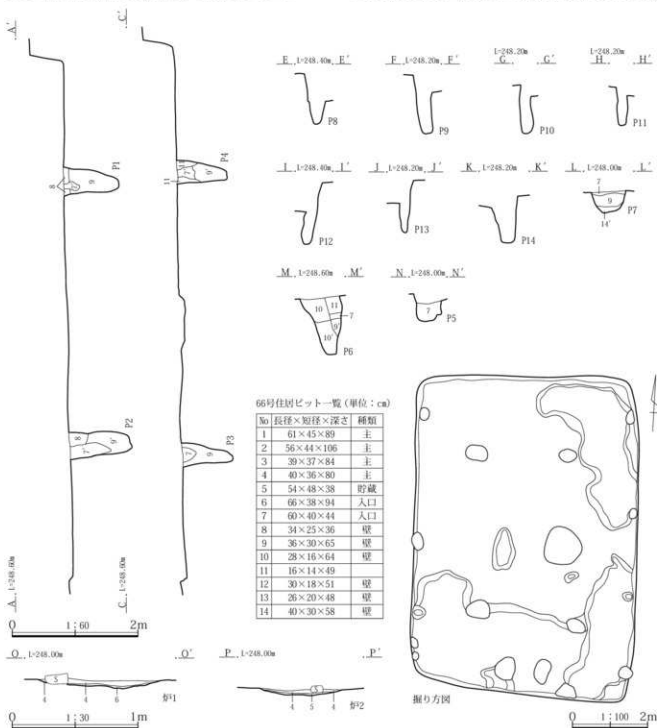
80cm短い。各辺は直線的で各隅の丸みが少なく、比較的整った形状である。

**埋没土・壁**：全体に炭化物粒の混入が見られる。壁高は最も深い北辺で51cm、最も浅い南辺で8cmを測る。

**方位**：N-4° W。 **面積**：46.66㎡

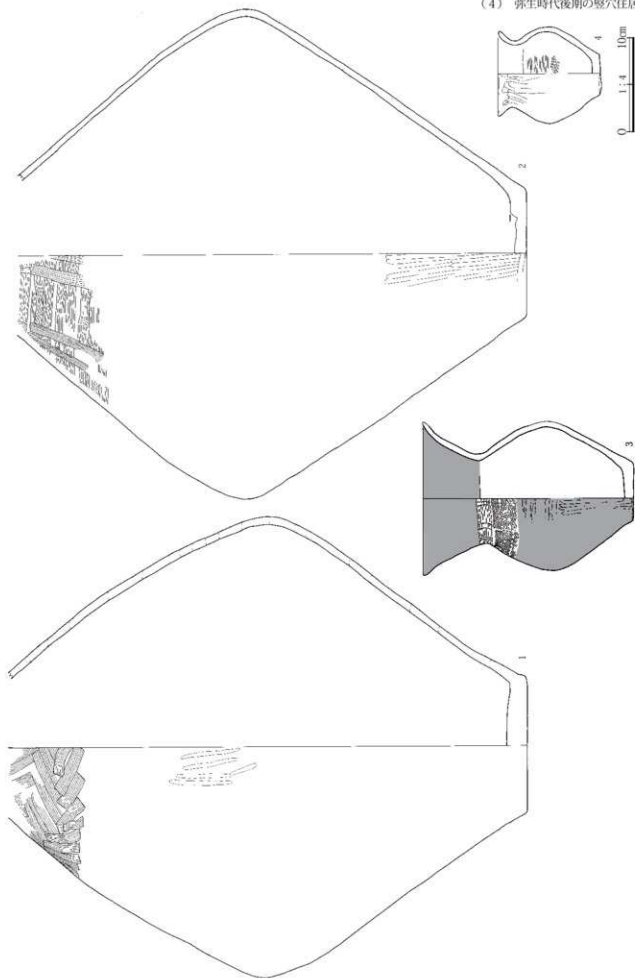
**床面**：緩やかな凹凸があり、全体は南側へ低く傾斜していて、北壁直下と20cm近い比高差がある。貼床は見られない。掘り方は南側と東壁下でやや深くなっている。

**ピット**：4 主柱穴(P 1～4)は西側に偏り、住居平面の歪みに沿ってP 3が南側に逸れている。東西両壁下に3本ずつ壁柱穴(P 8～10、12～14)があるが、P 13は北側に偏り、P 9・14は壁上端まで削り込むように穿たれている。P 11はP 10近くにあり、埋没土も近似している。細長い入口ピット(P 6・7)は住居軸線に沿わず、南壁の垂直方向に合致した配置にある。梯子を据えた施設としては深さが大きく異なる。貯蔵穴と思われる入口脇



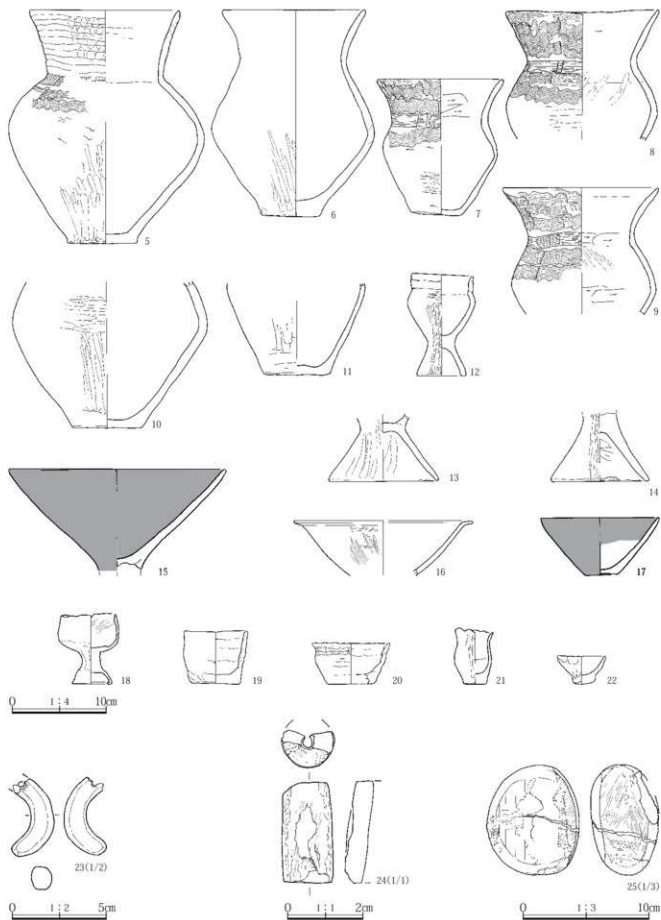
第170図 66号住居(2)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居



第171図 66号住居出土遺物(1)

第二章 発掘調査の記録



第172図 66号住居出土遺物(2)



ピットP5は入口右(東)側にあり、壁に接している。

**炉:** 炉1はP1・P4・北壁間の中央にある。径100×69cmの楕円形を呈し、深さ7cmを測る。南側に平坦な割り石を枕石に据えている。炉2はP2の北西側にある。径79×65cmの不整楕円形を呈し、副炉としては規模が大きく、焼土範囲は炉1よりも広い。東側に小振りな枕石を据えている。

**その他:** 53号土坑に先出する。壁溝は見られない。

**遺物:** 東壁下を中心に多量の土器が出土し、土器・土製品23点と石製品2点を図示した。口縁部を欠く大型の壺2点が特筆される。1は入口ピット正面、2は東壁直下南隅でどちらも床直上の出土である。東壁直下南隅は他の床直上出土遺物も多く、小型壺3、甕5・7、小型台付甕12、鉢17の完形品その他、甕9・10がある。特にミニチュア土器18・19・21・22がまとめて出土したり、手捏ね土器20と土製勾玉23が一緒に出土するのは本道跡の他住居には見られない。他に西壁直下南寄りの短頸壺4と炉1脇の甕6も床直上出土遺物である。台付甕13と管玉24は東壁中央下の床上10cm前後の出土遺物となる。

**所見:** 住居形態や出土遺物から弥生時代後期中段階の住居である。大型壺やミニチュア土器の一括出土が目される。壺1は入口を塞ぐように出土しており、これらの特殊遺物が祭祀に使われた遺物であるなら住居廃絶時の行為が想定される。

#### 69号住居(第173図 PL.29-3~6, 87 遺物観察表354頁)

柱穴等の施設が確認できない遺構であるが、炉があることから住居とした。

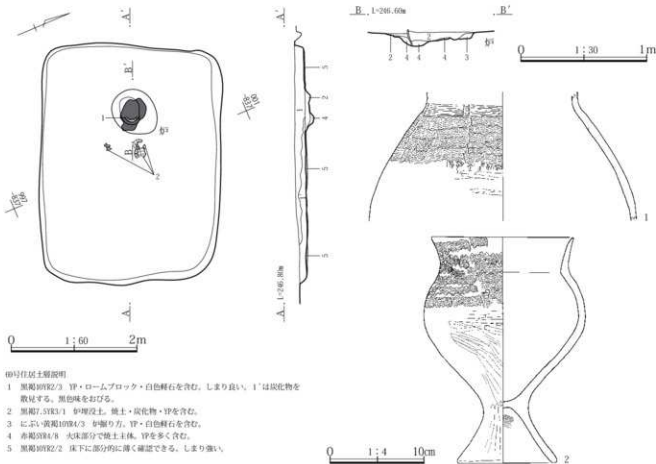
**位置:** X=997~000 Y=-834~-839グリッドにある。

**規模形状:** 長軸3.8m、短軸2.85mの長方形を呈し、北東隅がやや鈍角気味に開く台形状に歪んでいる。北辺は南辺より30cm短い。

**埋没土・壁:** 単層に近い黒褐色土で人為的な戻しの痕跡は見えない。壁高は最も深い北・西辺で11cmしかない。

**方位:** N-63° W。 **面積:** 9.43㎡

**床面:** 地山傾斜に沿って南側へ低く傾斜し、西壁際と8cm前後の比高差がある。掘り方は住居掘り下げ時の窪みを埋めるような小規模なものである。



#### 69号住居土器説明

- 1 黒陶1092/2 Y・ルームブロック・白色輝石を含む。しまり良い。1'は炭化物を散見する。黒色釉をおびる。
- 2 黒陶1518/1 砂埋没土。焼土・炭化物・Yを含む。
- 3 白土・炭埋没1094/3 を掘り方。Y・白色輝石を含む。
- 4 赤陶1084/8 大床部分で焼土土塊。Yを多く含む。
- 5 黒陶1092/2 床下に部分的に薄く確認できる。しまり強い。

第173図 69号住居および出土遺物

**か:** 住居中央西寄りにある。径82×66cmの楕円形を呈すが、上端長軸方向が住居軸方向から大きく逸れている。東側に枕石の替わりに土器片を据えている。

**その他:** 壁溝、柱穴等の施設は見られない。

**遺物:** 壺1は軒内に枕石替わりに据えた破片である。台付甕2は軒東側の破片が完形で接合できた。双方とも本住居に確実に伴う遺物である。

**所見:** 出土遺物より弥生時代新段階。

**70号住居** (第174-175図 H.29-7・8,30-1・2,87 遺物観察表54頁)  
北西隅付近は54号住居西辺と重なって不明瞭である。

**位置:** X=993~997, Y=-825~-830グリッドにある。

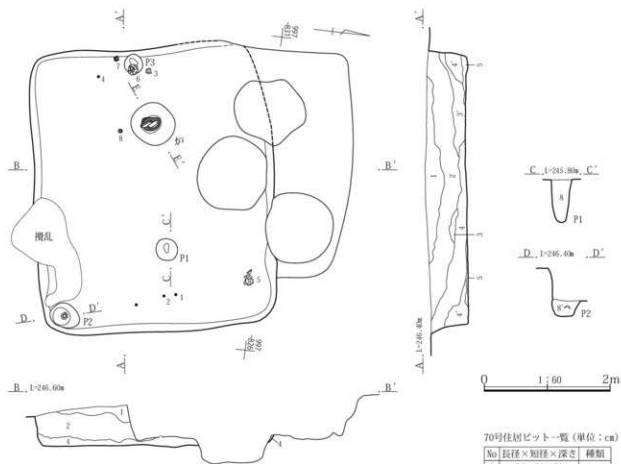
**規模形状:** 長軸4.45m、短軸3.8mで60号住居と並んで弥生時代後期の住居の中では最も縦横比の小さい長方形を呈している。各隅の丸みの少ない整った形状である。

**埋没土・壁:** 中層以上に焼土や炭化物粒が混じる。底面付近にはブロック状の堆積層も見られ、人為的埋戻しの可能性がある。壁高は最も深い東辺で66cmを測る。

**方位:** N-80° E. **面積:** 15.07㎡

**床面:** 凹凸の大きな床で8cm前後の比高差があり、住居中央付近が低くなる傾向がある。掘り方は見られない。

**ビット:** P1・P3が対になる2主柱穴の住居になる可

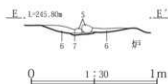


70号住居土曜説明

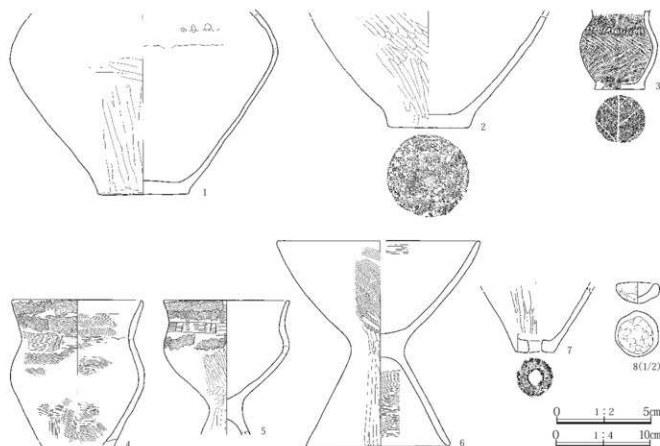
- 黒期101R2/3 YP・ローム粒・白色輝石を含む。
- ふい・黄期101R4/3 YP・ローム粒・黒期土を含む。焼土を散見する。
- 黒期101R3/4 YP・ロームブロックを含む。3'に炭化物が少量混じる。
- 黒期101R2/3 YP・ロームブロックを含む。ローム土が混じる。4'は炭化物が少ない。
- 黒期101R2/2 YP・ローム粒を少し含む。しまり強い。
- 黒期101R2/3 少埋没上。ローム粒を含む。炭化物が少量混じる。
- 赤期53R1/6 大床部分で焼土主体。YP・黒期土を含む。
- 黒期101R2/3 ふい・黄期色ローム・YP・ロームブロックが混じる。しまり強い。8'は炭化物が少量混じる。

70号住居ビット一覧(単位:cm)

No	長径×短径×深さ	種類
1	34×34×81	
2	50×38×26	貯蔵か
3	31×29×12	



第174図 70号住居



第175図 70号住居出土遺物

能性もあるが、P3は西壁中央から大きく南側へ逸れ、深さが浅い。南東隅のP2は貯蔵穴の可能性もある。

**か:** 住居中央と西壁の中間にある。径70×68cmの円形を呈す。炉中央にある礫は杖石が落ちたものであろう。

**その他:** 古墳時代後期の54号住居に先出する。壁溝は見られない。

**遺物:** 小型住居としては遺物が多く、土器8点を図示した。特に床直上出土遺物が豊富だった。小甕3・甕4・高杯6が西壁直下、壺1・甕2は東壁下で2点一緒に崩れるように、台付甕5は北東隅付近で出土し、これらは全て床直上出土遺物である。有孔鉢7は床上8cmの高さだが西壁直下の遺物で、これらを本住居に確実に伴う遺物と考えたい。ミニチュア土器8のみが脇床上33cmの高さに浮いた状態の遺物である。

**所見:** 出土遺物より弥生時代後期中段階。

**73号住居** (第176・177図 PL.30-3・4, 88 遺物観察表355頁)

**位置:** X=002~010, Y=-849~-857グリッドにある。軸方向が北西側に揃って弧状に並ぶ56・78号住居中間付近のやや南側にある。

**規模形状:** 長軸8.1m、短軸5.9mの長方形を呈す。各辺は直線的で各隅の丸みは少なく、整った形状である。

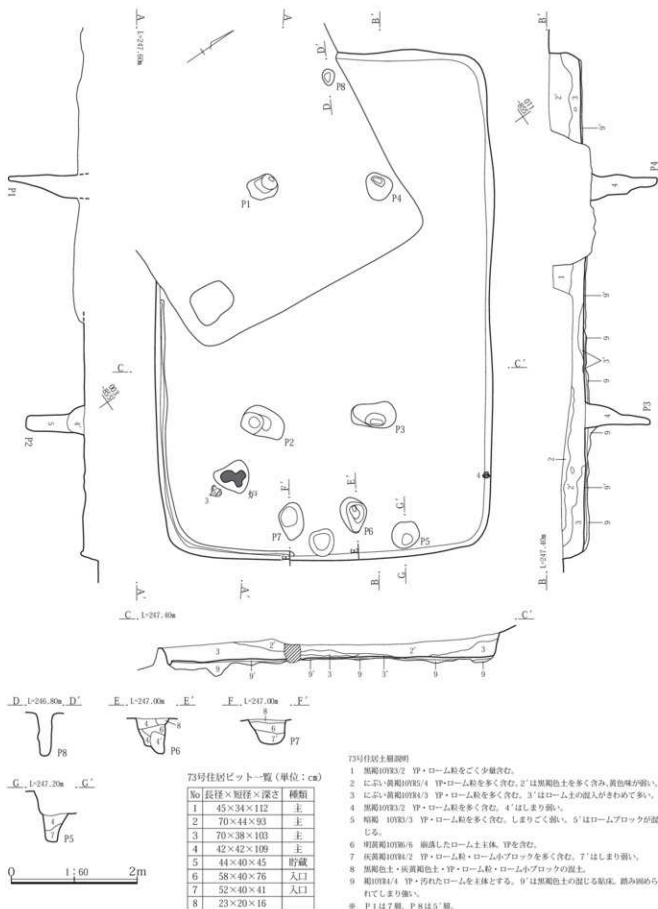
**埋没土・壁:** 全体にローム土の混入が多い。壁高は最も深い北西辺で48cmを測る。

**方位:** N-56° W。 **面積:** (復元)39.74㎡

**床面:** 地山傾斜に沿って南側へ低く傾斜していて北隅付近と15cm以上の比高差がある。中央付近にローム土主体の層(3'層)があり、主柱穴抜柱時掘削土の可能性もある。ほぼ全体に浅い貼床が見られ、南西壁下で帯状にやや深い部分がある。

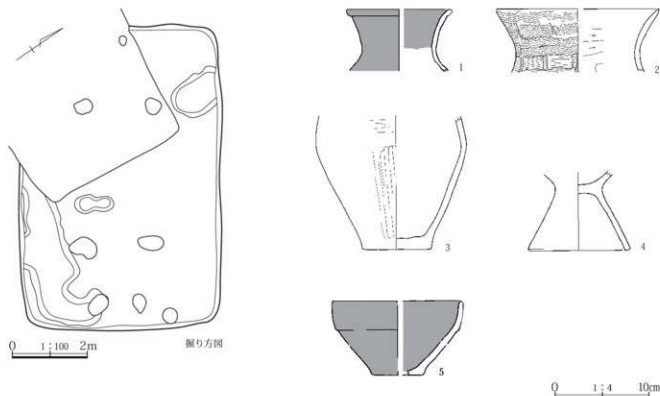
**壁溝:** 南西辺と南東辺の南側に深さ2~6cmの不明瞭な壁溝が見られる。壁柱穴は見られない。

**ピット:** 4主柱穴(P1~4)はやや南西側に偏っている。4本とも深さに比べ細く、抜柱痕跡は確認できない。P2・3上端が住居短軸方向に沿って細長い平面形だが、P2の下端は丸い。入口ピット(P6・7)は南東壁からやや離れた位置にある。柱痕は観察できないが、南東側の壁面が梯子を住居壁に建て掛けるのに適した緩やかな傾斜となっている。入口脇ピットP5は入口の右(北東)側壁直下にある。底面が狭く深いため、貯蔵穴より柱穴



第176図 73号住居(1)

## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



第177図 73号住居(2)および出土遺物

的な形状に見える。ピットとして扱わなかったが南東壁下中央に床面からの深さ9cmの不明落込みがある。

**か:** P 2と南隅の中間付近に径56×44cmの不整形を呈した被熱痕が見られる。床面からの深さは4cmほどで枕石も据えられていないが、炉と思われる。北西壁下に炉奥ピットP 8が北西壁下にあり、P 1・P 4間の北西側に主炉が存在していたはずだ。

**その他:** 古墳時代前期の72号住居に先出する。

**遺物:** 土器5点を図示した。完形近くまで復元できた土器はない。甕3は炉南脇床直上から、台付甕4は床から19cm浮いた状態だが、北東壁に接して出土しており、双方とも本住居に確実に伴う遺物と考えたい。

**所見:** 出土遺物・住居形状から弥生時代後期古段階の住居である。

**76号住居**(第178～181図 PL.30-5～8, 88-89 遺物観察表355FD)

**位置:** X=017～024, Y=-857～-864グリッドにある。後期古墳が想定される10号溝の区画内にある。

**規模形状:** 長軸6.8、南側短軸4.95mの長方形を呈す。各辺は直線的だが、推定北辺が南辺より20cmほど短く、西辺も東辺より短い歪んだ形状になる可能性がある。

**埋没土・壁:** 焼失住居ではないが埋没土内に炭化物粒の

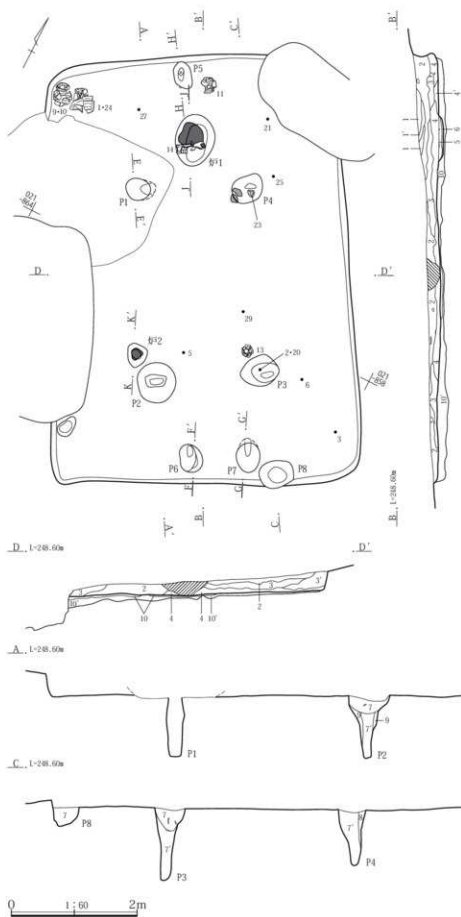
混入が多かった。下層では住居中央付近から埋没している部分が多く、人為的埋戻しが想定できる。壁高は最も深い北辺で33cmを測る。

**方位:** N-29° E。 **面積:** 復元(30.33)㎡

**床面:** 西側へ低く傾斜しており、東壁直下と10cm前後の比高差がある。明確な貼床はないが、部分的に硬化面が見られる。掘り方は不整で東側が浅い。特に東辺南半部の壁直下と掘り方上端の間に10cm前後の幅があり、この部分で拡張を行った可能性がある。

**ピット:** 4 主柱穴(P 1～4)はやや南側へ寄ってて炉のある北側床面を広くしている。各主柱穴平面は円形に近いが、P 2・3の下端は細長い。入口ピット(P 6・7)はわずかに東へ寄っている。P 6 断面図がピット中央から逸れて図示できていないが、P 7と形状は類似し、梯子を住居壁に立て掛けた施設であろう。貯蔵穴と思われる入口脇ピットP 8は狭い右(東)側にあり、南東壁の上端まで掘り込むように穿たれている。

**か:** 炉1はP 1・4・5のほぼ中間にある。径82×62cmの楕円形を呈し南側に枕石を立てるように据えている。P 2の北西側に接するように炉2がある。径38×32cmの不整形できわめて小規模である。2基の炉とも床面からの深さ8cmを測る。

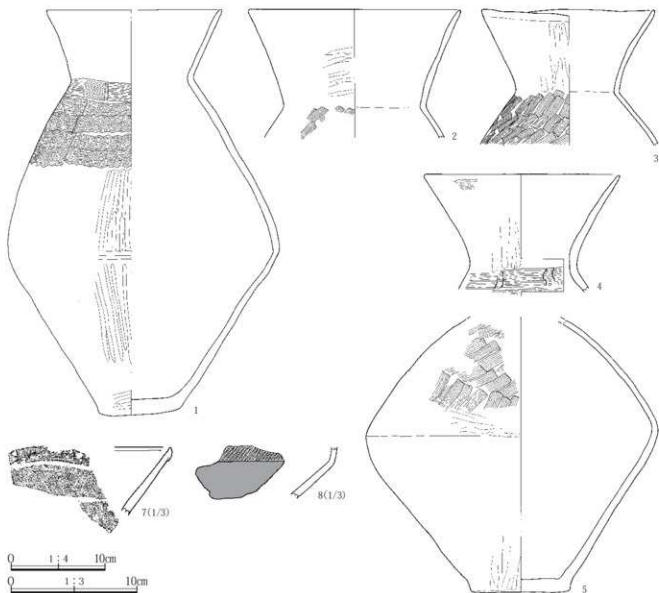
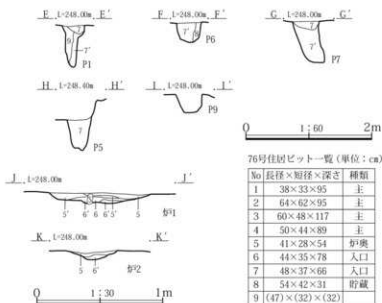
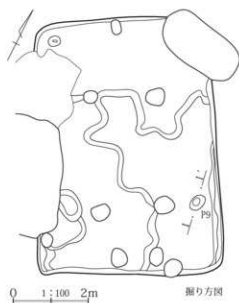


76号住居土層説明

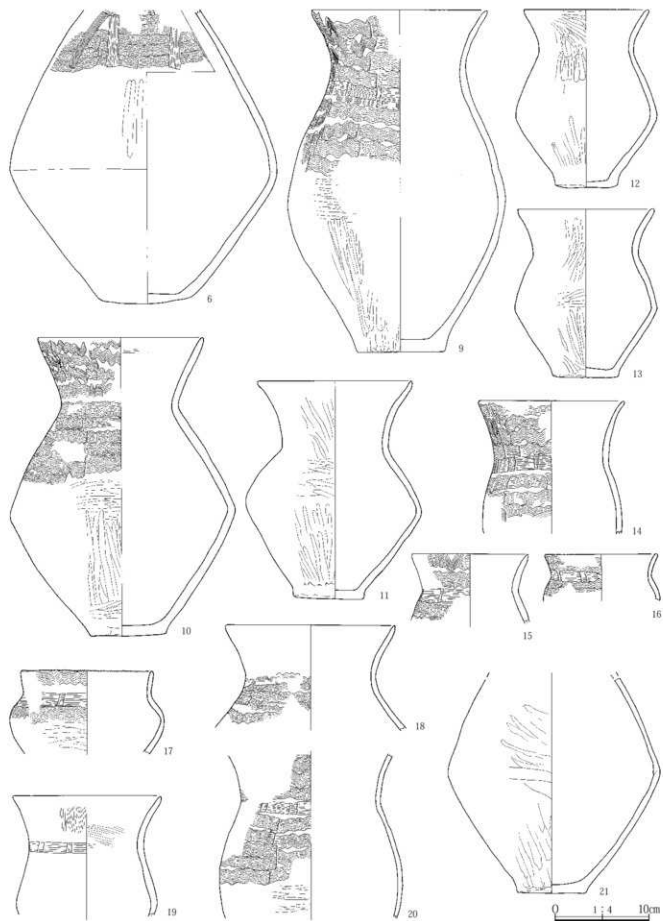
- 1 灰黄褐色10R4/2 YP・ローム砂を含む。1'は炭化物を多量に含む。壁土も少量混じる。
  - 2 暗褐色10R3/3 YP・ローム砂・ロームブロックを含む。炭化物を不均等に、やや多量に含む。
  - 3 灰黄褐色10R4/2 ロームブロックを多く含む。YP・ローム砂・炭化物を含む。3'はローム砂以外の混入物少ない。
  - 4 黒褐色10R3/2 YP・ローム砂・ローム小ブロックを含む。部分的に固くしめる。4'は炭化物を含む。
  - 5 黒褐色10R2/3 砂土層埋没土。YP・ローム砂・焼土粒・炭化物が少量混じる。5'は焼土の混入がやや多い。
  - 6 赤褐色5R4/8 火床で焼土主体。YPを少し含む。6'はブロック状の焼土・炭化物・灰等の混入。
  - 7 暗褐色10R3/3 YP・ロームブロックを少し含む。炭化物・白色軽石を散見する。7'はしまり弱く、柱脚と認められる。
  - 8 暗褐色10R3/3にYP・ロームブロック・濃い黄褐色ロームが混じる。しまりやや強い。
  - 9 ロームブロックにYP・暗褐色土が混じる。しまりやや強い。
  - 10 暗褐色10R3/4 振り方埋没土。YP・ロームブロック・黒褐色土が混じる。表面は部分的に踏み固められてしまり強い。10'はロームブロックが多い。
- ※ P 9 は 7' 層。

第178図 76号住居(1)

(4) 弥生時代後期の竪穴住居



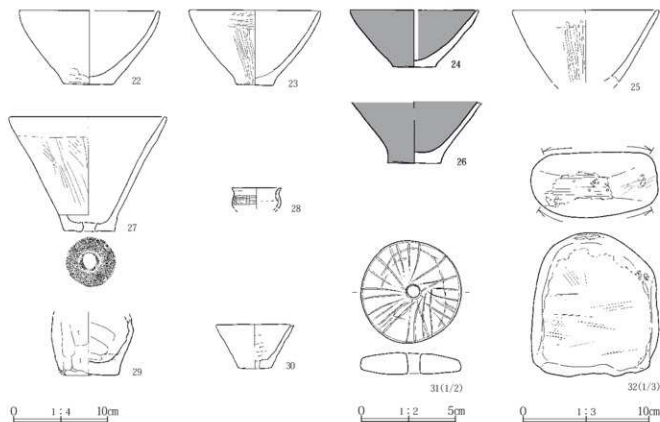
第179図 76号住居(2)および出土物(1)



第180図 76号住居出土遺物(2)



## (4) 弥生時代後期の竪穴住居



第181図 76号住居出土遺物(3)

**その他**：66号土坑と重複し、68号土坑には先出する。壁溝は見られない。

**遺物**：住居内のほぼ全域から比較的多くの遺物を出土し、土器・土製品31点と石器1点を図示した。西隅付近の床直上では壺1、甕9・10、鉢24が折り重なるように出土している。甕14は炉1杖石直上にあった。甕21・鉢25も床直上出土である。壺2・甕20はP3内床下35cmの深さ、鉢23はP4内床下25cmの深さの出土である。東隅付近の壺3・6と北壁下の有孔鉢27は床上5cm前後の高さで壁付近の出土であり、前述遺物と併せこれらを本住居に確実に伴う遺物と考えたい。住居中心付近の壺5は床上8cm、甕13は6cm、ミニチュア土器29は15cm床面から浮いた状態だった。残りのミニチュア土器28・30と完形の土製紡輪31はいずれも埋没土内の出土である。

**所見**：住居形状や出土遺物より弥生時代後期古段階の住居である。

**81号住居** (第182図 PL.31-1・2)

床直上に被熱面があり炉を想定して住居とした。本遺跡の中で最も小規模な住居である。南東隅は重複する58号土坑に削られ全容を把握できていない。

**位置**：X=989~992、Y=-824~-826グリッドにある。弥生時代の竪穴住居であれば本遺跡中、最も南側に位置している。

**規模形状**：東側長軸2.6m、短軸1.95mで西辺が東辺より70cm前後短くなる台形を呈すようだ。

**埋没土・壁**：地山傾斜の低い南側から埋もれている。壁高は最も深い北・東辺で34cmを測る。

**方位**：N-11° W。 **面積**：復元(4.08)m<sup>2</sup>

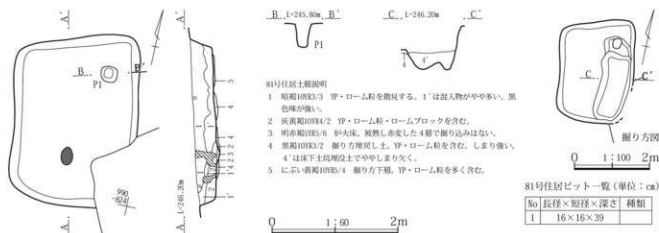
**床面**：北壁下がやや高く、全体では住居中央付近がやや低くなる傾向がある。東壁下へのみや深い方形掘り方が見られ、床下土坑の可能性もある。

**ヒット**：P1は北東隅付近に1基のみ確認できた性格不明の施設である。主柱穴に相当する施設は確認できない。

**炉**：南壁から55cmの西側へ寄った位置に径29×18cmの南北に長い楕円形の赤変硬化した被熱範囲があり、炉を想定した。床面を抉るように被熱部分の厚みが観察できるが、掘り込みがあったわけではない。

**その他**：弥生時代後期58号土坑に先出する。主柱穴や壁溝等の施設は確認できない。図示に耐える遺物の出土はない。

**所見**：時期決定できる遺物を伴わない。重複より弥生時



第182図 81号住居

代後期以前である。時期の明確な本遺跡の小型住居は弥生時代後期のため、この項で扱った。

82号住居(第183図 PL.31-3・4)

81号住居同様、被熱面を仮と想定し住居とした。同住居と近似した規模の小型住居である。調査区西側の傾斜面にあって、残存状態は良くない。

位置: X=027~030、Y=-873~-877グリッドにある。

規模形状: 長軸3.1m、短軸2.5mで、各辺は胴張り気味でやや丸みのある長方形を呈す。

埋没土・壁: 単層の埋没土で埋没過程は不明瞭である。壁高は最も深い北辺で77cm、削平が進み浅い南辺で4cmを測る。北辺でも上端は10cm以上削平されており、本遺

跡の小型住居としては最も深度に富む。

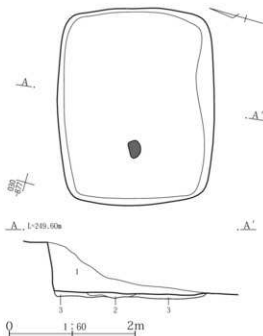
方位: N-73° E。 面積: 6.05㎡

床面: 傾斜面の住居としては床面は水平に近い。西側へ低く傾斜していて東壁直下と5cm前後の比高差がある。As-YP面を少し掘り込むような粗掘りを行い、掘り方内の埋没土はその時の残土を主体としている。

仮: 西壁から65cmの床面に長軸17cm、短軸9cmの東西に長い楕円形の被熱による赤変硬化面があり、仮を想定した。床面からの産みはほとんどない。

その他: 柱穴・壁溝等の施設は確認できない。古墳周堀を想定した10号溝に先出すると思われる。図示に耐える遺物の出土はない。

所見: 時期決定できる遺物を伴わない。時期の明確な本



第183図 82号住居